

第44回

# 南北海道考古学情報交換会

発表資料集



令和5年12月2日（土）～3日（日）  
於 福島町福祉センター



第Ⅰ部

情報交換 1

館崎遺跡から学ぶ  
道南の縄文時代前期～中期



# 館崎遺跡の集落構造と変遷過程

福井淳一 ((公財) 北海道埋蔵文化財センター)

## はじめに

平成の福島町館崎遺跡発掘調査は東日本大震災の前後であった。報告書刊行はその後5年を要した。私は、館崎遺跡発掘調査1年目は夏頃まで森町石倉1遺跡の報告書刊行と兼務、2年目の発掘終了後は北本市押上1遺跡の発掘調査に入り、3年目の発掘調査には関わっていない。発掘調査の過程では、盛土層の堆積のほか、多くの遺構調査を担当した。整理では、動植物遺存体、骨角器、各種分析のほか、押上1遺跡の整理本格化前までは石器の一次整理も担当した。報告では、遺構、骨角器、動物遺存体、分析結果をまとめた。以下は、報告書での記述（土器以外）のダイジェスト版である。レイアウト上の表現変更のほかは報告書のままだが、大きく内容を変更した部分は赤字で示すこととした。

## I 調査の概要

### 1 調査要項

事業名 北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査

委託者 独立行政法人鉄道建設・運輸施設設備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局

遺跡名 館崎遺跡

北海道教育委員会搭載番号 B-03-2

所在地 松前郡福島町字館崎 337-11 ほか

調査面積 2,171 m<sup>2</sup>

調査期間 平成 21 年度 平成 21 (2009) 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日

(発掘調査 5 月 7 日～11 月 27 日)

平成 22 年度 平成 22 (2010) 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日

(発掘調査 4 月 12 日～8 月 19 日)

平成 23 年度 平成 23 (2011) 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日

(発掘調査 5 月 9 日～8 月 31 日)

平成 24 年度 平成 24 (2012) 年 4 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日 (整理作業)

平成 25 年度 平成 25 (2013) 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日 (整理作業)

平成 26 年度 平成 26 (2014) 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日 (整理作業)

平成 27 年度 平成 27 (2015) 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 (整理作業)

平成 28 年度 平成 28 (2016) 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日 (整理作業)

### 2 調査担当者・報告担当業務 (直接調査・報告担当者のみ記載、右は報告での担当)

第1調査課長 遠藤 香澄 (発掘担当者・平成 21～24 年度)

第1調査課長 中山 昭大 (発掘担当者・平成 26～27 年度) : 写真

中山 昭大 (発掘担当者・平成 21～25 年度) : 写真

影浦 覚 (発掘担当者・平成 21～28 年度) : 土器

福井 淳一 (発掘担当者・平成 21～28 年度) : 遺構、骨角器、動物遺存体、分析

柳瀬 由佳 (発掘担当者・平成 22～27 年度) : 石器

立田 理 (発掘担当者・平成 21 年度)

吉田裕史洋 (平成 21・22 年度)

### 3 調査の経過

平成 21 年度は、4 月 23 日・24 日に建設機械による表土除去作業を実施。調査杭を打設したのち、5 月 7 日から作業員 42 名体制で調査を開始した。

建設機械による表土除去と、調査前の表面清掃で、調査区のほぼ全域において盛土遺構の広がりが確認され、さらに、盛土の長軸と短軸に設定して掘削したトレントによって、盛土内に堅穴住居跡をはじめとする多数の遺構が存在することや、土器・石器を中心とした多量の遺物が出土することなど刻々と明らかになっていった。このことから、6 月末段階の進捗状況をもとにして、7 月に北海道教育委員会と鉄道建設・運輸施設整備支援機構を交えて計画変更の協議を行い、当初単年度調査で完了する予定であった調査期間を、翌年の 8 月末まで延長することが決定された。この時、調査区外の工事用地内にも一部盛土遺構の広がっていることが確認されていたため、調査予定面積も当初の 1,690 m<sup>2</sup>から 1,733 m<sup>2</sup>へと変更がなされた。

次年度まで調査期間が延長されることになったものの、まったく予断を許さない状況であったため、調査終了予定日も当初の 10 月 31 日から 11 月 27 日へと約 1 か月延長した。平成 21 年度の終了面積は 839 m<sup>2</sup>である。

平成 22 年度は、工期の予定により機構側から 8 月末までの調査終了を要請されていたこともあって、4 月 12 日より作業員 67 名体制で調査を開始した。調査が進捗し、盛土遺構が下部になるにつれて、堅穴住居跡や土坑がいくつも重なり合った状態で現れた。調査終盤では調査範囲のほぼ全域において同時併行的に遺構実測作業が展開する状況となった。幸い、晴天日が多かったため順調に進捗し、8 月 19 日に現地発掘調査を終了した。**(この年は、比較的暑い年であった)**

平成 23 年度は、新たに、周回道路の敷設に伴う発掘調査が行われることになった。2009・10 年度の調査範囲の西側 338 m<sup>2</sup>（A 地区）と北側 100 m<sup>2</sup>（B 地区）の計 438 m<sup>2</sup>が調査対象である。5 月 12 日より作業員 32 名体制で調査を開始、8 月 29 日に現地発掘調査を終了した。構内道路敷設という工事の性格から、発掘調査は工事による影響が想定される深さまでとなつた。このため特に盛土堆積が薄い北側の B 地区については遺構検出層まで調査して終了面とした。また、西側の A 地区についても既に設置された防護柵の倒壊を防ぐため、法面を設ける形で一部の遺物包含層を残した状態で養生、調査終了後には埋戻しによる回復措置をおこなっている。

3 年合計の調査面積は 2,171 m<sup>2</sup>となった。

一次整理は、2009 年度から現地調査と並行して進めていたが、発掘終了後は江別市の北海道埋蔵文化財センターにおいて調査員常駐体制で継続、平成 24 年度から 28 年度にかけて報告書作成業務を行つた。

### 4 調査結果の概要

調査で得られた遺構・遺物の件数については一覧表にした（表 I-1 ~ 4）。調査結果の概要について年度別で以下に記載する。

#### （1）平成 21 年度の調査結果

表土と擾乱層を除去して、盛土遺構上面を検出。全体清掃し、測量するところから調査に入った。当初の調査範囲 1,690 m<sup>2</sup>のほぼ全域に盛土遺構が良好な状態で残っていることが明らかとなつた。盛土の高まりの長軸に沿う形で 1 本、さらにそれに直交する形で 2 本、1 m 幅のメイントレンチを設定、土層を確認しながら掘り下げていった。掘削は、安全面を考慮して一部を拡幅して進めた。結果、盛土はもっとも厚いところで 2 m 近くの堆積があることが判明した。また円筒土器段階の盛土遺構は形成された時期によりその色調、包含物や内容が異なり、大きく 4 つに分けられることも明らかとな

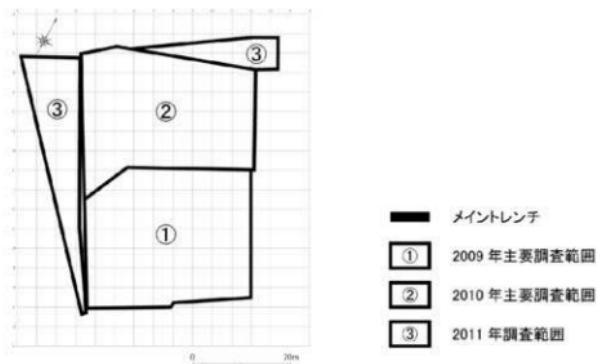
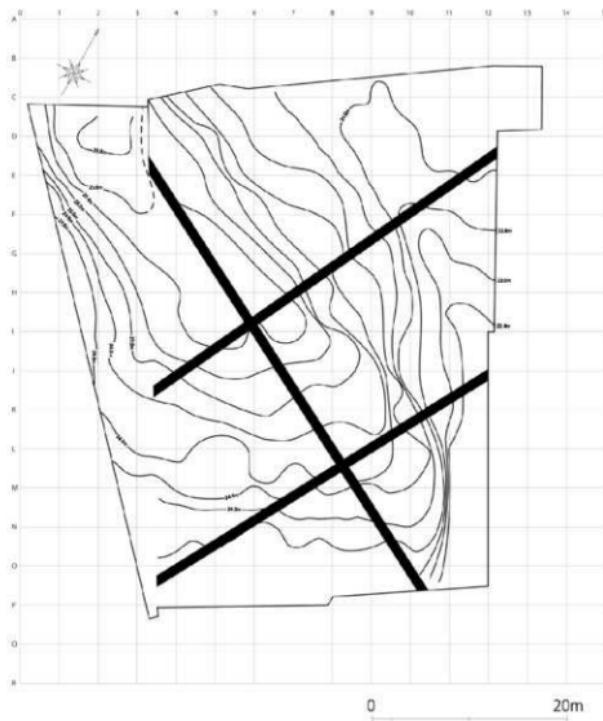


図 I-2 調査区の区分と表土直下の地形

った。下層から順に、黄褐色土主体のP盛土（調査時の「掘り上げ土」）、暗褐色土主体のA盛土（調査時の「m 3 層」におおむね相当）、明褐色土と黒色土の数次の互層からなるB盛土（調査時の「m 2」（3）～（9）におおむね相当）、明褐色土主体のC盛土（調査時の「m 2」（2）層及び「m 2」上層・下層におおむね相当）である。これらの盛土遺構は、昭和 48 年度の第一次調査では「土器集積層」、「再堆積層」、昭和 59 年度の第二次調査では「土器塚」と表現されており、A 盛土およびB 盛土は、当時の地表面、即ちIII-3 層とした黒色土上面に盛土したものである。また、盛土遺構堆積前に竪穴住居跡の凹みを埋積するようにも盛土していることが確認された。さらに東西 2 本が土手状に並ぶ円筒土器期の盛土の内側に、暗褐色土を主体とする縄文時代後期前葉の盛土が堆積していることも明らかになった（D 盛土）。

盛土の下部までトレンチを掘り下げ、土層面を清掃したところ、主にC 盛土層中に多数の竪穴住居跡や土坑が構築されていることが明らかになった。盛土層を 5 cmずつ掘り下げながら、任意にサブトレンチを入れて、竪穴住居等の検出に努めた。トレンチによって広がりを確認した後は、切り合いに注意しながら掘り広げるという方法を探った。

竪穴住居等の確認とは別に、盛土内からは夥しい量の遺物が出土した。とりわけ土器、それも個体の形状を保ったものが多く目についた。個体の形状を維持しているものについては、個体土器番号を付した上で、位置情報の記録と出土状況の写真を撮影し、取り上げていくことにした。この個体土器の取上げ記録は、2011 年度まで継続し、館崎遺跡における盛土の形成過程を推考する上での重要な情報となった。

竪穴住居跡等の遺構調査と盛土遺構の調査を同時並行して、調査区の南側から調査を進め、調査期間も 11 月末まで延長したが、終了範囲はおおむね I ライン以南の 839 m<sup>2</sup>にとどまった。

調査終了に際しては、次年度調査範囲の上部全面をブルーシートで覆い、さらに終了範囲との境に、土嚢を積み上げて、保全のための養生を行った。

## （2）平成 22 年度の調査結果

期限として鉄道運輸機構側から示された 8 月末までに調査が終了するよう、4 月から現地調査を開始した。調査範囲はおおむね I ラインより北の調査区である。

平成 21 年度・22 年度、二か年の調査で、盛土遺構のほか、竪穴住居跡 50 軒、土坑墓 6 基、土坑 113 基、T ピット 1 基、小ピット 369 基、集石 27 か所、焼土 118 か所、フレイク集中 48 か所、配石列 3 条、杭列 2 条、道路跡 1 条などが確認された。以下時期の細分ごとに概説する。

①縄文時代早期末葉：土坑が 6 基確認された（TP-61・97 など）。

②縄文時代前前期葉：竪穴住居の長軸を北東－南西方向にもつように構築される。P 盛土を周囲に敷きつめる（厚さ 20 cmほど）。その後、A 盛土が堆積する。その後の居住域や道路跡部分の黒色土を削平したとみられる。

③縄文時代前前期葉～中期前葉：竪穴住居の長軸を 90 度変更して、北西－南東方向になるように構築される。B 盛土が形成され、道路－土坑域－居住域－盛土遺構という構成で、道路跡を中心に線対称になるように遺構構築範囲が規制されるようになったと考えられる。

居住域は、B 盛土と道路跡に挟まれた細長い空間に繰り返し住居が構築されている。繰り返し同地点で住居が構築された結果、V 層黄褐色土を掘り込んだ床面だけが検出できた住居、埋められた住居の上部に貼床して構築された住居などが確認された。

プラスコ状土坑は、道路跡を挟んで両側に構築されたとみられる。繰り返された住居の掘削、盛土により、土坑の重複、削平という現象も観察された。

人骨が、フラスコ状土坑 2 基、長椭円形の土坑 3 基、堅穴住居跡 2 軒の床面から 1 体ずつ合計 7 体分検出された。別に、円形の大型土坑から 8 体分の頭蓋骨を含む人骨も確認されている。

また、A・B 盛土下位の黒色土上面からは 2 条の杭列が確認された。杭列の並びから判断すると各盛土の崩落を防ぐための土留めとして打ち込まれた可能性が考えられる。

道路跡は、盛土間の中央部を貫くように、黄褐色土を掘り込んだ帶状の浅いへこみとして確認された。道路面は、踏み固めによる斑状堆積がみられ、硬化していた。遺物はほとんど含まれず、周辺の状況と著しく異なっていた。検出した道路面それ自体はおそらく後期前葉の生活面と思われるが、道路の両脇に円筒土器文化期の墓が検出されていることなどから、円筒土器段階においても既に通路的な機能を有していたことが想定される。

④繩文時代後期前葉：道路跡周辺の円筒土器段階の盛土の上位に盛土遺構が残されていた（D 盛土）。道の両端に緑色凝灰岩による配石列が設けられていた。土坑は 21 基検出され、住居跡は 2 軒（TH-7・16）が確認された。

### （3）平成 23 年度の調査結果

周回道路の敷設工事に伴い新たに 438 m<sup>2</sup> が調査範囲として追加された。過年度の調査範囲の西側 338 m<sup>2</sup>（A 地区）と北側 100 m<sup>2</sup>（B 地区）である。道路敷設という工事上の理由から、掘削深度は工事掘削面のレベルまでにとどめてほしいとの要請が鉄道運輸機構の側からあった。このため盛土堆積が薄い B 地区については主に遺構検出面までの調査となった。また、A 地区も一部遺物包含層を残した状態で養生、埋め戻しをしている。

新たに確認された遺構は、堅穴住居跡 3 軒、土坑 2 基、集石 2 か所、焼土 27 か所、フレイク集中 8 か所である。上述の遺構数は、トレーナー調査で確実に遺構と判断されたものの件数である。

A 地区は西盛土の主体部から沢地形に向けての傾斜部にあたる。土坑 2 基、集石 2 か所、焼土 15 か所、フレイク集中 8 か所を確認、調査した。ほか平成 21 年度に一部調査した TH-54 と TP-15 の残りについても調査した。TH-14 の続きについては、過年度の調査範囲との境界部分が幅 1 m ほど失われていたことと、既に設置されていた外周フェンスを維持するため一定のクリアランスを確保するという制約から、調査できていない。

前述のとおり、調査開始段階で 2009・10 年度調査区との境界線（3 ライン付近）が幅 1 m ほどにわたって崩落し、失われていた。この崩落壁を清掃し、A 地区を南北に貫くメインセクションとした。その結果、F～I ラインにおいて、長さ 10 m 以上にも及ぶ大きな土層の落ち込みが現れた。2009・10 年度調査区の西壁においてはまったく見られなかつものであったが、過年度の調査では盛土内にたくさんの堅穴住居が構築されていたため、この落ち込みについても住居跡を想定して、調査を進めた。その後、盛土上面を全体に 10 cm ほど掘削した段階で、表面清掃を行ったところ、上面観の平面形としても暗褐色の大きな落ち込みが 3 つ重なり合うようにして現れ、同時にメインセクションと直交するよう東西方向に設けたトレーナーにおいても覆土状の堆積が確認された。複数の遺物集中層が入り込んで、土器を主体としたおびただしい数の遺物が出土している状況も、過年度に検出した堅穴住居跡におけるあり方と類似していた。そこで 3 軒の大型堅穴住居跡の重なり合いと想定し、TH-57・58・63 を付した。しかしながら、複数のトレーナーを掘削したものの土層面で明確に遺構の重複関係を確認することはできなかった。土が軟らかく、壁や床と認識できるところがなかっただけではなく、炉や柱穴も確認されなかつた。そのため、TH-57・58・63 は堅穴住居跡ではなく、周囲が土手状に盛土され、沢に向かって開口した凹み地形に対して、新たに盛土が行われるようになり、数次の集中的な廃棄行為がなされたものと推測された。この段階で、出土遺物の相当数に注記等の作業が進んで

おり、また、遺構扱いの取上げで調査区未記載のものも多々あったことから、遺物台帳上は、TH-57・58・63の表記を維持することとした。以下の報告においては、TH-57・58・63は盛土遺構の一部として扱う。

B地区では主に遺構検出面までの調査となった。遺構は竪穴住居跡1軒、焼土11か所である。ほかに住居の可能性があるもの11軒、土坑の可能性があるもの17基の平面形を確認している。縄文時代中期の道路跡の続きや配石列3の続きもあり、過去2年の調査結果から予想されるとおりの遺構密度であったといえる。調査した竪穴住居跡は縄文時代後期前半のものである。掘り込みは浅く不明瞭だが炉を持ち、北東北系の赤彩壺型土器が出土している。調査段階で竪穴住居跡と認めたTH-60・65に関しては、A地区のTH-57・58・63同様に、遺物台帳上は遺構表記を維持し、盛土遺構の一部の扱いをしている。

B地区東側の調査区外においては、工事によって東盛土の一部が消失(100m<sup>3</sup>強)していた。法面に東盛土・竪穴住居跡2軒の断面が現れていたことから、この部分の写真撮影と図化作業を行った。

平成23年度の調査では大きな成果が2つ挙げられる。1つは、3か年の調査範囲の北西角にあたるC～Eラインの0～2区にかけての一角で、下位から上位まで非常に安定的な盛土堆積が観察されたこと。ここでは円筒土器下層式から上層式まで層位的な前後関係が確認された。このエリアでは竪穴住居が構築されなかつたため、盛土の堆積状況が乱されずに残されたと考えられる。もう一つはTH-57・58・63と称して調査した盛土遺構における遺物集中層での土器出土状況である。個体の形状を保った状態で、夥しい数の土器が出土したが、円筒下層d式と円筒上層a式が、同一面で同時に廃棄されたとしか考えられないような状況で現れた。過年度に調査した住居跡の覆土中における遺物集中層でも、型式違いの土器が多少混在するような状況はあったが、このような出土状況はなかった。よく観察すると、新しい方の土器よりも古い方の土器の方が、磨滅や傷等、明らかに状態の悪い傾向が窺われた。

これは、出土土器のうち新しい型式の土器の人々が、盛土を掘削して住居や土坑を構築した際に掘り出された古い土器を廃棄し、それと同時に自分たちが使用している土器の破損品も廃棄したためと考えられた。土器集中層の間に間層が入ることから、ある程度のまとまった量が廃棄された段階で、上に土を盛って埋めたのであろう。

(影浦)

表 I-1 遺構数一覧

	早期後葉 前期後葉	前期後葉 前期未葉	前期未葉 中期初葉	前期未葉 中期前葉	中期初葉 中期前葉	中期前葉 中期前葉	中期中葉 中期中葉	中期前葉 中期中葉	後期前葉 中期中葉	後期前葉 中期中葉	後期前葉 中期中葉	近代	不明	総計	
盛土遺構		4		2		3		1							10
竪穴住居跡		1	12	8	1	1	6	2	7	6	3	1	3		2 53
土坑	6 1	3 34 1	3 10	11	3 10	1	1	1	1	21					13 119
TBット															1 1
焼土		35	1 19 9	2 2 15	16	3	13	2							1 118
無石		4	2 4		11	2	2								2 27
フレイク集中		33	12		3										48
小ビット	5	242 1 38	1	2 7 20	1										51 369
理設土器		1													1
核剝	29	28													57
配石列							1	2							3
道路跡							1								1
防空壕跡													5		5
監査跡													1		1
合計	6 1 1 3 148	1 282 35 56	21 9 30	1 46 15 21	41 2	6 85	813								

表 I-2 土器・土製品出土点数一覧

分類	盛土 遺構	I - 埋没等	自然 堆積層	豎穴 住居跡	土坑	Tピット	小ピット	焼土	集石	ブレイク 集中	杭列	配石列	埋設土器	整縫跡	遺構計	総計	
土器	I a	2		107											107	109	
	I a?	2													0	2	
	I b	159		4	30	1									31	194	
	I b-3?	1			3										3	4	
	I b-4	412	43	161	111	15									126	742	
	I b-4?	1													0	1	
	I I a	12	1		1										1	14	
	I I b	216906	18285	2707	92390	7624	1	76	843	241	775	4	14	41	498	102507338403	
	I I b?	14													0	14	
	I I b ~ II a	465	36		19			1							20	523	
	II a	321330	38219	1651	31265	5192	8	49	1076	483	153		1007		1169	40404401604	
	II b	244	47	1	151	11									1	163	455
	IV a	83548	65926	1280	11144	3043		140	122	19	11		3093		8826	24169174853	
	IV a?	4	1	1	2										2	8	
	IV b	12	7												0	15	
	V	1	2	13											6	22	
	V a	53	20												0	73	
	遺		1												0	1	
	不明	176	24		124	5		96							1	226	422
土器	集計	623342	120614	5818	135346	15892	9	265	2143	743	939	4	4115	41	8301	16778791757	
その他	陶磁器	3	46	4	3										7	10	33
土製品	土偶	30	5		1										1	36	
	土製品	11	6		0										0	17	
	土製品?	4			1										1	5	
	擦り切り土製品	85	4		1										1	90	
	土玉	2													0	2	
	耳鉤	5	1												0	6	
	錐形土製品	2	2		1										1	5	
	環状土製品	1													0	1	
	円板状土製品	161	21	4	94	9									103	289	
	円板状土製品?	1													0	1	
	三角状土製品	4													0	4	
土製品	麻糬	306	39	4	98	8	0	0	0	0	0	0	0	0	107	456	
	焼成粘土地	227	76	2	158	3	1		2	1			1	1	168	473	
	焼成粘土地?	16	1		1				2						3	22	
	総計	623893	120730	5824	135604	15904	10	285	2147	744	939	4	4116	41	8301	18807591852	

表 I-3 骨角器出土点数一覧

	盛土遺 構ほか	豎穴住 居跡	土坑	焼土	遺構計	総計
鈴頭	29	4	1		5	34
釣針	39	2	1	1	4	43
刺突具	48	5	1	2	8	56
骨錐	3					3
骨箒	3					3
骨針	22	2		3	5	27
剥離具	1					1
髪針	1					1
管玉		1	1	2		2
垂飾	1					1
器種不明	18	6	1		7	25
鯨骨製品	5	7	2		9	14
未成品	31	2			2	33
残片	43	7	3	1	11	54
総計	244	36	9	8	53	297

表 I-4 石器・石製品出土点数一覧

分類	縦土溝 網(ほか)	堅穴住 居跡	土坑	TBヒット	柱穴状 小ピット	横土	集石	フレイク 集中	杭穴	配石列	堅塙	遺構計	総計	
剥片石器														
石削	899	371	16			6	1	6		1	5	406	1305	
石墻またはナイフ	372	146	5			1		4		1	5	167	484	
ナイフ	6												6	
石鏃	311	144	10			2	1	4		1	2	164	475	
つまみ付きナイフ	551	265	20			1		2		2	2	293	844	
筒状石器	221	111	7					1		3		122	343	
スクレイパー	4795	1929	130			6	14	8	33	9	26	2155	6950	
両面刃整石器	612	227	21			3	3	35		4	3	296	908	
楔形石器	68	14	2					2		2	2	20	88	
剥片石器片		5						3			8	8		
竹フレイク	9040	3892	269			9	30	14	125	11	83	4433	13473	
石核	3019	1011	78			5	9	7	112	1	9	18	1250	4269
フレイク	121819	84425	3676	1	142	7373	349	155515	1	332	337	252151	373970	
縦石器														
石斧	320	151	17			1	3		3		2	3	180	500
たんき石	1232	644	82			4	5	19		1	15	32	802	2034
すり石	519	161	18			1		11			12	8	211	730
扁平打製石器	1287	558	54			3	5	3		8	12	643	1940	
北海道式石冠	329	136	10			4	2	6			11	7	176	505
石鏃	42	12										12	54	
標器	6	2										1	3	9
石刀	11	8										8	19	
砥石	132	47	11								1	3	62	194
白石石器	405	192	30			2	2	6		34	15	281	686	
石製品														
石塊	3	1										1	4	
段状牙跡	35	20	1				1					22	37	
骨物	7	3	1									4	11	
玉	4	3										3	7	
三角形石製品	1	1										1	2	3
三面石器	3	1										1	4	
円筒形石器	2											2	2	
円筒状石製品	13	5										6	19	
異形石器	26	6										6	32	
石試様石器	9											9		
側面有磨石器	9	2										1	3	12
(左)長板状石製品	12	3										3	15	
石棒	8	10	4									1	15	23
縫制櫛	6	5										6	10	
石製品	27	8	1			1		2				12	39	
刮石製品	49	47	3					1				51	100	
加工用のある糠	130	28	5			1		6	1	4	45	175		
黒石	81	34	4			1		1	1		41	122		
更わり石	15	4					1					5	20	
アスフルト付磨礪	2											2	2	
球状櫛	5	2										2	7	
有孔櫛	250	95	12				2			7	2	118	368	
斜石櫛	31	27	41			1						69	100	
スコリ櫛	15	5	7									12	27	
合註藻櫛	2	2										2	4	
顎料原材?	2	1										1	3	
マンガン?櫛	3											3		
縦	13303	10252	705	1	32	354	1110	40		2664	390	15548	28851	
小縦										43656		43656	43656	
その他													4	
赤色顔料		4											3	
青色顔料		1											1	
总计	160011	105018	5240	2	207	7813	45200	155898	3	3131	961	323473	483484	
近代遺物													14	
鉄片		13	1										3	
破片		3											3	
瓦		3											3	
一錢アルミ質		1											1	
計		20	1										21	

## II 遺跡の位置と環境

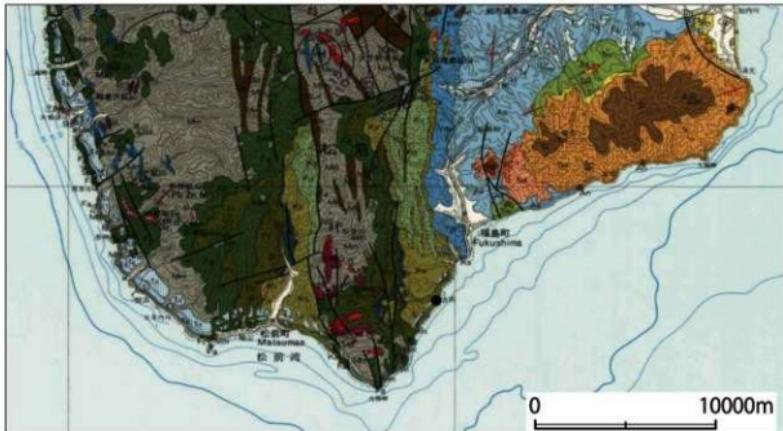
### 1 遺跡の位置と地質・地形

遺跡は、北海道最南端・白神岬から北東約6 kmの地点に位置する。立地は、標高約24mの海岸段丘上。この海岸段丘は、北側が吉岡川に開析され、海岸線に沿って舌状となるが、舌の根元を区切るよう無名の沢が開析している。また、段丘面と吉岡川の間には丘陵部が縁取るように延びる。館崎遺跡は、ちょうど無名の沢を境に、東側に遭されたものとみられる。段丘上は、図II-2の空中写真を見ると、昭和40年代までは自家消費用の畑地として利用されていた。それが、青函トンネル建設に伴って、各種施設が置かれ、その後施設が撤去された部分は、トンネルメモリアルパークや空き地となって現在に至っている。それでも、調査地点は一貫して畑地に利用されてきたことがわかる。

館崎遺跡の所在する福島町は、津軽海峡沿岸にあり、北海道最南部に位置する。西は松前町、北西は上ノ国町、北東は知内町にそれぞれ隣接している。津軽海峡側では、南西部に白神岬、東部に矢越岬があり、両岬によって、松前町、知内町と画されている。内陸部では、大千軒岳を頂点に、前千軒岳、袴腰岳、百軒岳、檜倉岳、七ツ岳、燈明岳など700~1000mの山地となっている。比較的雨量が多く、なかでも山地の千軒地区は、「雨の千軒」と地元では言われている。

津軽海峡を挟んだところには、竜飛岬がある。白神岬と竜飛岬は、19.2 kmと津軽海峡の中で最も距離が近い。調査地点周辺でも、晴れた日の夕方であれば、対岸の建物まではっきり見えるような距離感である。また、下北半島もよく見え、仏が浦に夕日が当たって、オレンジ色に輝く様を望むことができた。空気が澄んでいると、岩木山、さらには八甲田山まで望めるため、山あてには事欠かない。本州との距離の近さから、日本有数の渡り鳥の中継地となる。実際、秋になると次々に鳥類の群れが通過していき、種が分かつたものではイワツバメが調査区周辺に集結したこともあった。

地質環境を概観すると、遺跡周辺である福島町南部では新第三紀中新世に堆積した疊岩・砂岩・泥岩・頁岩層からなっている (Fa・Fr・Yo・Ks・Kv・Oa・Ym・As・Tm)。そして、遺跡より西側



図II-1 遺跡の位置と周辺の地質

(地質調査所昭和59年発行 1:200,000 地質図 函館及び渡島大島の一部に加筆した)

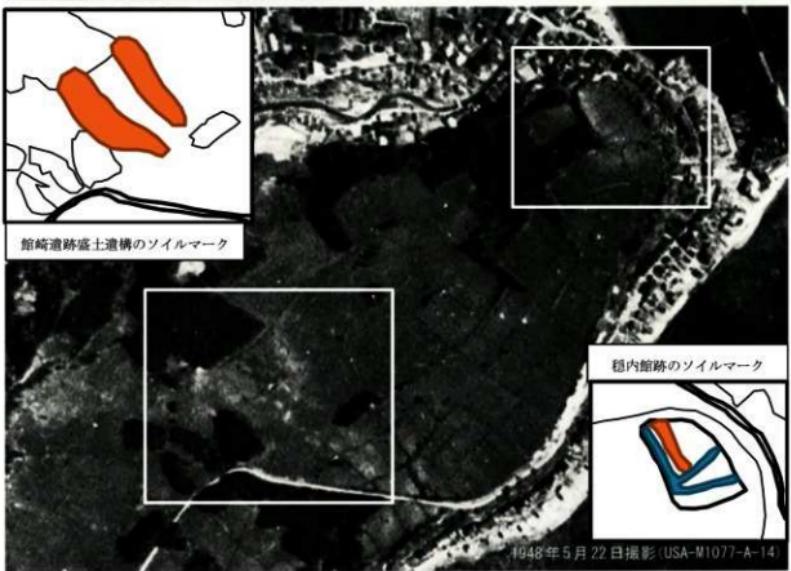
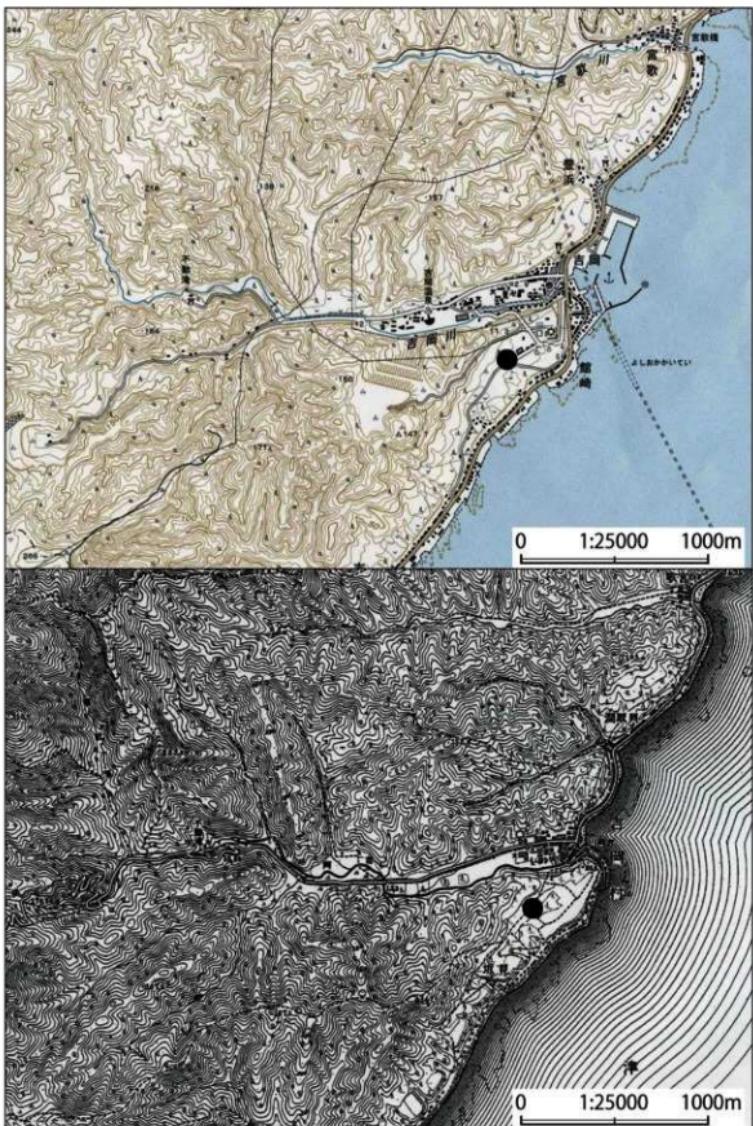


図 II-2 (1) 館崎遺跡・穂内館跡周辺の空中写真の変遷





(国土地理院 上：平成 18 年 下：昭和 22 年発行 1 : 25,000 地形図 渡島吉岡に加筆した)

には中生代に堆積した松前層群 (Is・Mb・Mm) と、白亜紀にそこへ嵌入した深成岩類 (G・Md・Sp) がみられる。一方、福島町東部では、知内火山岩類が新第三紀鮮新世に堆積している (Sl・Sa・Sd)。この地質の違いが、地形の違いとなって表れている。

福島町域の山地以外の地形は、福島川流域の市街地が広がる中央部、白符から松浦までの南部、松浦から白神岬までの最南部、塙釜から矢越岬までの東部、知内川流域の北部に区分できる。

東部には、知内火山岩類が分布するため、山地が直接海に接しているが、小河川脇や海岸に沿って一部にごく小規模な段丘がある。そして、小河川が開析した谷に現在の集落がある。

また最南部には、火山岩・火碎岩からなる新第三紀中新世福山層、そして主に粘板岩からなる松前層群が分布するため、こちらも山地が直接海に接している。ただし、こちらに集落は存在しない。

中央部では、主に軟質の泥岩からなる新第三紀中新世の木古内層・厚沢部層が分布するため、福島川が広がりのある沖積平野を形成している。福島川の両岸には、海岸段丘より一段低い段丘がみられ、福島市街が広がっている。

一方、南部では、主に泥岩や砂岩、凝灰岩の互層からなる新第三紀中新世訓縫層が分布し、海岸段丘が発達している。また、中規模河川によって開析された沖積地も存在する。現在の集落はいくつかある沖積地に形成されるが、さらに海岸に沿った低位の海岸段丘にも存在する。館崎遺跡が存在する地域がこの環境で、高位の海岸段丘上は、各家の自家消費用の畠地となっている。高位の海岸段丘の奥行きは、最も広い地点である館崎で 270 m 程、白符で 200 m 程のほかは、130 m 程と非常に狭い。

遺跡の北側を東流する吉岡川は、流路延長 5 km 以下と短く、河口から 2 km ほど上流には不動瀬がある。河原に、玄武岩がみられたが、館崎遺跡では礫石器の素材に利用している。この玄武岩は、碎石や生コンクリート用骨材として現在も採掘されている。ほかに、耐火粘土・油母貞岩も分布している。耐火粘土は、白色～灰色を呈する厚さ 4 ~ 6 m の粘土層が露出している部分があり、良質な部分ではカオリיןを主成分鉱物にしているという。

海岸は、河川の河口では砾浜ないし砂浜であるが、館崎前浜はじめ松浦～浦和では平磯、それ以外は主に岩礁となっている。ただし、平磯はかなりが埋め立てられている。

## 2 周辺の遺跡

### (1) 館崎遺跡の過去の調査と穂内館跡

館崎遺跡は、福島町教育委員会により、過去複数回の調査がなされている。段丘突出部の基部周辺は A 地点、段丘突出部中央は B 地点、段丘突出部北側の一画は C 地点とされた。なお、旧報告では「TATEZAKI」とされたが、地名としては「たてざき」であるので、本報告ではそのようにした。

A 地点は、昭和 48 年と昭和 59 年に今調査区の北東側に隣接する部分が調査された。縄文時代前期末葉～中期中葉の盛土遺構（東盛土）が検出されているが、昭和 48 年では「再堆積層・埋め戻し層・土器集積址」とされ、昭和 59 年では「土器塚」とされた。なお、1948 年の空中写真には、盛土遺構のソイルマークがみえる（図 II-2 (1) 下）。また、堅穴住居跡は縄文時代中期のもの 1 軒、縄文時代後期前葉のもの 2 軒があり、縄文時代後期前葉の土坑 18 基も検出されている。B 地点は、昭和 59 年に調査された。縄文時代後期前葉の堅穴住居跡 1 軒が検出されている。C 地点は、昭和 60 年に調査された。縄文時代後期前葉の堅穴住居跡 2 軒、土坑 5 基が検出されている。また、後述の穂内館跡に関連するかもしれない溝 4 本、柱穴が確認された。

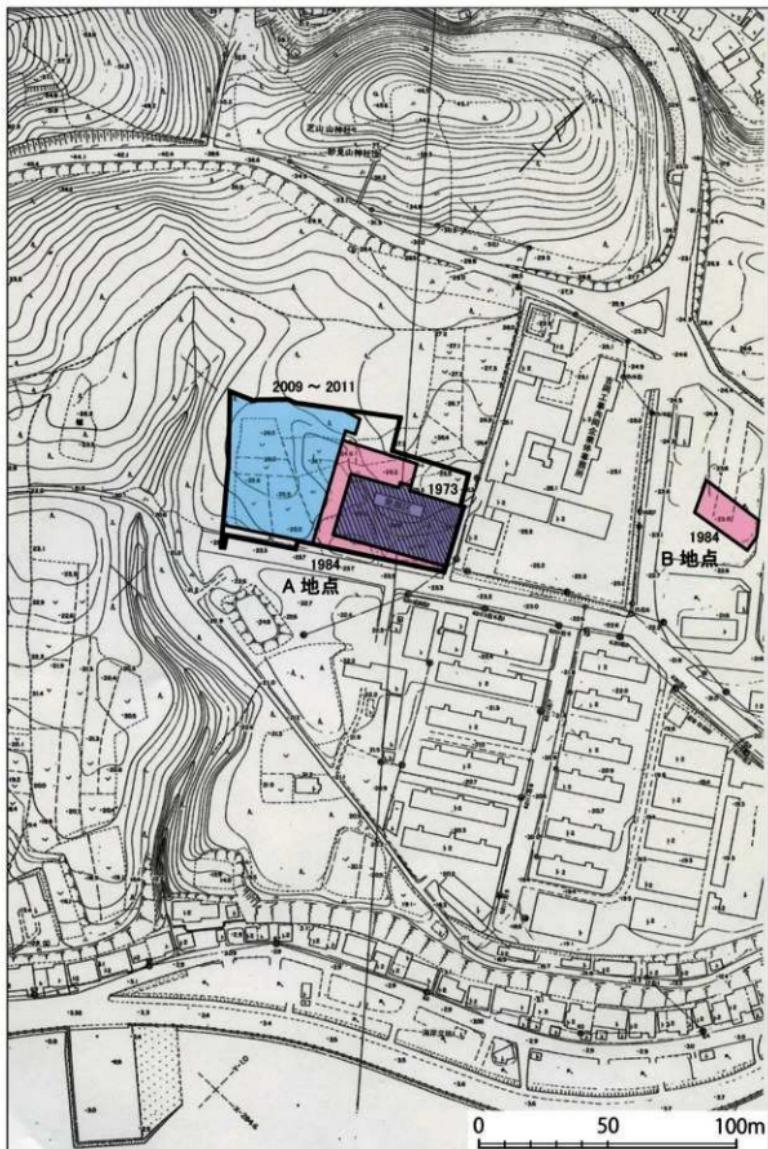


図 II-4 調査区周辺の地形と調査範囲  
(福島町教育委員会(1975)第2図に加筆した)

海岸段丘突出部東端は中世の穏内館跡とされた。1948年の空中写真には土星？のソイルマークがみえる。また1970年の空中写真には、国道改良工事により南から掘削が始まった状況がみられる。穏内館跡の本体部分は昭和46年に調査され、中世の壕が確認されたが、現在は、完全に削平されている。遺物としては、青磁、陶器、須恵器、土師器・鉄製品が出土した。また貝層が僅かに残っており、クボガイ、エゾアワビ、ヒメエゾボラ、フサカサゴ科、鰐脚類などが同定されている。ほかに縄文時代中期～後期の土器片も採集されている。昭和61年には館崎遺跡C地点の東に隣接した地点も調査された。中世の遺構としては、溝1本、柱穴11本、大形土坑1基、墓2基が検出された。遺物は、青磁、擂鉢、数珠、木棺、釘があった。ほかに縄文時代後期前葉の堅穴住居跡2軒、土坑5基が検出され、土器・石器が出土した。

これまでの調査成果を総合すると、館崎の海岸段丘突出部では縄文時代後期前葉および中世の遺構群が散在しており、縄文時代前期～中期の遺構群は館崎遺跡A地点に集中したことが推定される。

## (2) 先史時代の館崎周辺

福島町では、33か所の遺跡が登載されている。海岸段丘が分布する白符から松浦に至る福島町南部で多く確認され、中央部、東部、さらに北部の知内川流域では確認されている遺跡数は少ない。時期別では、縄文時代早期1か所、前期10か所、中期19か所、後期11か所、晩期4か所、統縄文時代2か所、擦文時代8か所、中世2か所、アイヌ文化期1か所が確認されている。しかし、調査が行われたのは、上述の館崎遺跡と穏内館跡のほかは、豊浜遺跡と吉岡遺跡に限られている。

豊浜遺跡は、豊浜地区の海岸段丘上に立地し、標高20m前後のA地区、標高25m前後のB地区が調査された。A地区では、擦文文化後期の堅穴住居跡1軒、土坑1基、縄文時代前期後葉（円筒土器下層c式）の斜面盛土遺構（捨て場）、縄文時代後期前葉（トリサキ式）の盛土遺構・配石遺構、堅穴住居跡2軒、土坑7基が検出された。B地区では、縄文時代前期末葉（円筒土器下層d式）の堅穴住居跡1軒、縄文時代中期後葉（見晴町式）の堅穴住居跡1軒、堅穴状ピット2基、詳細不明の土坑1基が検出された。

吉岡遺跡は、吉岡地区の海岸段丘上に立地し、標高21m前後のA地区、標高20m前後のB地区が調査された。A地区では、縄文時代後期初頭（天祐寺式）の堅穴住居跡1軒、詳細不明の土坑、近世の一字一石経塚が検出された。包含層からは、縄文時代中期、後期前葉、晚期中葉、擦文文化前期の土器のほか、石器が出土している。また、この遺跡付近には、幕末期に台場があったとされる。

未調査遺跡で採集された資料の詳細は、福島町教育委員会（1986）に既に報告されている。その一つである吉野遺跡は、館崎遺跡の立地する段丘の南西側の延長にある。登載範囲に複数の小沢を挟むため、いくつかの遺跡に区分される可能性があるが、擦文土器、土師器、須恵器、円筒土器下層式が採集されている。また、鉄滓が採集されたことから製鉄遺構の存在が推定された。

吉野遺跡と館崎遺跡の間では、館崎2遺跡が確認されている。円筒土器は採集されず、縄文時代後期と擦文文化期の土器が得られている。

蝦夷館山チャシ跡は、蝦夷館山と呼ばれてきたもので、標高147mほどある。山頂が平坦な富士山様の山容となっている。福島町唯一のアイヌ文化期の遺跡とされている。

なお、館古遺跡は、福島町教育委員会（1975）によれば、昭和13年の土取り、昭和39年の宅地造成によって、全く調査の手が及ぶことなく壊滅したとされる。かなりの遺物が残された遺跡だったらしく、円筒土器下層d式、上層式、榎林式、ノダップII式、涌元式などの土器が採集されている。また、昭和13年の工事の際に目撃された土器出土状況からすると、廃絶された堅穴住居跡に多数の土器が廃棄された状態が数か所みられたようで、あるいは、館崎遺跡並みの遺跡であった可能性も考え

られる。

このように福島町域の遺跡の内容は不明なものが多いが、少なくとも館崎遺跡周辺の吉岡地区では、縄文時代早期以降、あまり広くはない海岸段丘上に集落を設け、周辺の環境を利用していたと考えられる。そして、周辺環境への負荷が高まつた段階で、沢を挟んで近接する海岸段丘上へ移動するという生活を送っていたものとみられる。このような状況は、擦文文化期まで継続したと考えられる。

### (3) 中・近世の館崎周辺

中世になり、和人が「進出」して来た後は、現在の市街地が存在する段丘崖下の低位段丘に集落を営み、段丘上は館や神社、畠地として利用されたものとみられる。このころは、ヲンナイという地名であった。この地名は、アイヌ語で、川尻が塞がる川とされる。その当て字として、穂内の字を用いたとみられる。長禄元（1457）年に津軽海峡沿岸から上ノ国にかけて点在した和人の館が、コシャマインらに「襲われた」とする記事が、『新羅之記録』・『福山秘府』にあり、穂内館が記録に現れる。穂内館の館主は、蔵土甲斐守季直とされ、詳しい出自は不明であるものの、安藤氏の武将であった可能性が考えられている。蔵土氏は、天文年間（1532～54）、二世の兵庫之介季成に繼がれるが、その後中絶する。しかし娘が、蠣崎氏三代義広の夫人となり、その息子は蠣崎氏四代季広となっている。

穂内は、寛永年間（1624～45）には「よしおか」と改称されており、以後の地図には吉岡と書かれようくなっている。吉岡八幡神社の沿革によると、その前身である館神神社の創建が寛永2年（1625）で、吉岡八幡神社が翌3年（1626）である。戸数も30軒ばかりはあり、この頃には村としての構成がまとまったとみられている。

その後、寛文6年（1666）年に円空が巡録したとされ、吉野には円空仏（來迎觀世音菩薩像）が残されている。この頃の戸数を記したものとして、『津軽一統志』があるが、吉岡村は50軒ほど、福島村が120軒ほどある。松前より東では亀田の200軒を除き、別格の戸数を誇っていたことが分かる。

文化4（1807）年に、幕府直轄の松前奉行が置かれると、吉岡村沖之口番所が設置され、松前に着くことができなかった船舶を正式に受け入れる様になった。また、松前復領後の天保15（1844）年までに沿岸警備のための吉岡砲台も設けられている。この頃の戸数は120軒とされる。

なお、福島町域には砂金地が存在したため、知内川上流や松浦川上流には採取痕跡が残るものとみられる。特に知内川上流には砂金掘りに従事した集落や番所もあったとされる。  
(福井)

### (4) 福島町埋蔵文化財調査報告書一覧

千代肇・清水和男・石川政治・永田富智・宮下正司 1972『穂内館：北海道中世館跡調査報告書』福島町教育委員会

佐藤忠雄・清水和男・山田忍 1975『館崎：青函トンネル工事吉岡基地拡張に伴う北海道松前郡福島町字吉岡館跡遺跡発掘調査報告書』福島町教育委員会

佐藤忠雄・佐藤訓敏・清水和男・瀬川秀良・秦光男・棟方明陽・佐藤芳子・山口昇一 1985『館崎遺跡：円筒土器文化における「土器塚」の調査』福島町教育委員会

佐藤忠雄・佐藤芳子・川内谷修・山田悟郎 1986『館崎遺跡：続』福島町教育委員会

佐藤忠雄・千代肇・佐藤芳子・鈴木正語・川内谷修 1986『穂内館遺跡』福島町教育委員会

久保泰 1997『福島町吉岡遺跡：木村地先予防治山事業に関する埋蔵文化財発掘調査報告書』福島町教育委員会

山田央 2003『豊浜遺跡：豊浜地区急傾斜工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』福島町教育委員会

小柳リラ子・盛川哲・阿部大孝・山田悟郎・新美倫子 2004『豊浜遺跡：豊浜地区急傾斜工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』福島町教育委員会

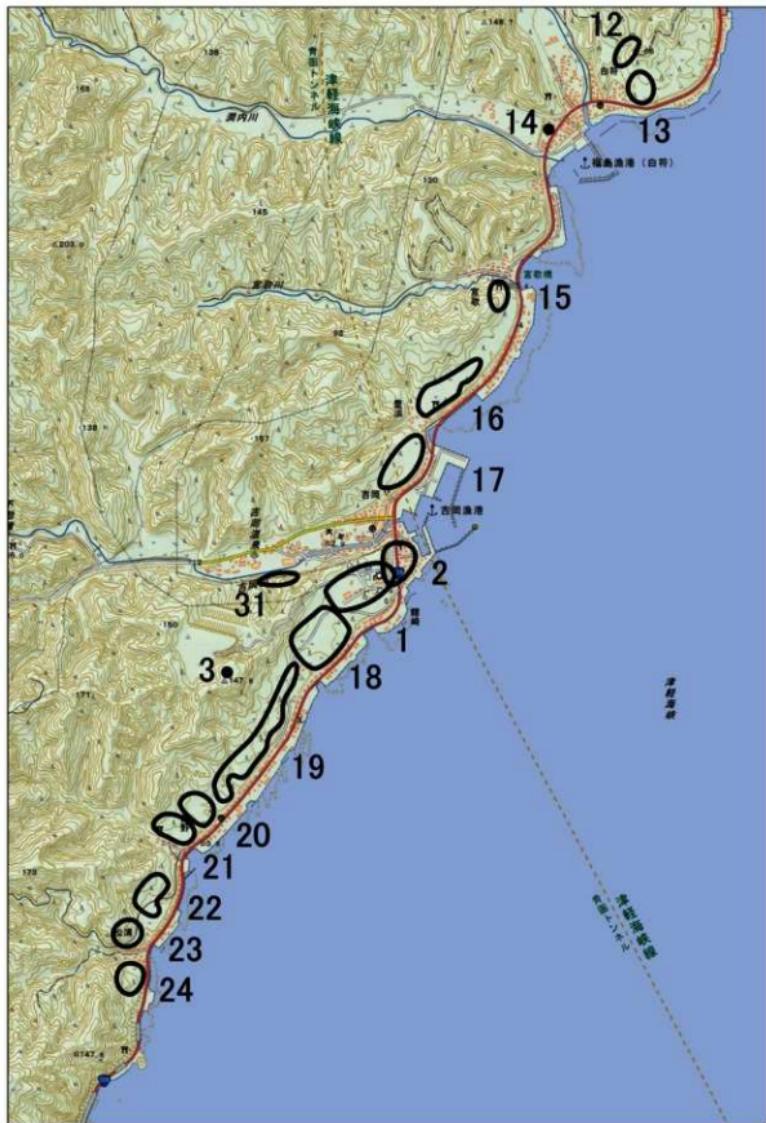


図 II-5 福島町域南部の遺跡

(国土地理院平成 28 年調製 電子地形図 25000 に加筆した)



図 II-6 福島町域の遺跡  
(国土地理院平成 27 年調製 電子地形図 20 万 国館に加筆した)

表II-1 福島町域の遺跡

no.	登載番号	名 称	種 别	所 在 地	時 代	立 地	標 高	出 土 物
1	B.03.002	鶴崎遺跡	遺物包含地	福島町字鶴崎337-1~6・11・453-1~8、456-4・461-1~3、709	縄文(前期・中期・後期・晚期)	海岸段丘上、東北方向(海に向かって)緩やかな傾斜。	19~26 m	土器、土器品、石器、抜耳耳飾、岩偶、骨角器
2	B.03.001	橋内館	城壁跡	福島町字鶴崎370-381-2	縄文・擦文・中世	吉岡川河口右岸、津軽海峡に突出したようにある海岸段丘	20 m	土器、青磁、陶器、土師器、須恵器、石器、銅製品
3	B.03.003	蝦夷館山 チヤシ山	チヤシ山	福島町字吉野513-1-2	アイヌ	津軽海峡を見下ろす山頂。	47 m	
4	B.03.004	樺倉川右岸 遺跡	遺物包含地	福島町福島720-1-2.725-1-2	縄文(中期)、縄文(後期)	樺倉川河岸段丘上	10 m	
5	B.03.005	鶴古道跡	遺物包含地	福島町福島721-54-58-60~73-79~86.802.803.804.805	縄文(前期・中期・後期・晚期)	福島川右岸 台地先端部。	10 m	土器
6	B.03.006	稚西郡遺跡	遺物包含地	福島町鶴古点不明	不明	福島川左岸底地奥	10 m	
7	B.03.007	綱配古道跡	遺物包含地	福島町字平野535-2-3.473.474.480.481-1	縄文(中期)	知内川左岸台地	100m	土器
8	B.03.008	瀬辺川遺跡	遺物包含地	福島町字千野78.679-1	縄文(中期・後期)	福島川右岸山腹 南西斜面。	120m	土器
9	B.03.009	岩部川左岸 遺跡	遺物包含地	福島町字岩部161~163.164~1-2.165~1-2.166~1-2.167~1-2.168~1-2.170~173.184.185	縄文(中期)	岩部川左岸 南向緩斜面。	30~40 m	土器
10	B.03.010	日出小学校 遺跡	遺物包含地	福島町字日出185	縄文(中期)	津軽海峡に面した段丘上。	50 m	土器
11	B.03.011	浦和小学校 遺跡	遺物包含地	福島町浦塙319~323.329-1-2	縄文(中期・後期)、擦文	津軽海峡に面した段丘上 線状墓 板塙川右岸	40 m	土器
12	B.03.012	坊主沢遺跡	遺物包含地	福島町字白符94.95.109~116.116~1-117~120	縄文(前期)	坊主沢沿いの段丘面。	20~30 m	
13	B.03.013	白符遺跡	遺物包含地	福島町字白符26-1~4.28.50.51-1-2.52.53-1-2.54-1-2.55-1-2.56.57-1-2.58~65.67-1-2.68~72.84.85.86-1-2.87-1-2	縄文(前期)	津軽海峡に面した台地 上緩斜面	10~20 m	土器
14	B.03.014	白符保育所 遺跡	遺物包含地	福島町字白符556.565-1-2-3.566.567	縄文(中期)	周内川左岸 畜糞台地先端。	5 m	土器
15	B.03.015	宮吹遺跡	遺物包含地	福島町字宮吹259.260.263	縄文(中期)	畜糞台地先端 斜面	20~40 m	
16	B.03.016	豊浜遺跡	集落跡	福島町字宮吹163ほか字豊浜150ほか	縄文(前期・後期)、擦文	台地上平坦部、緩斜面	20~30 m	土器、石器、土器品、石器品、銅製品、骨角器
17	B.03.017	吉岡遺跡	遺物包含地	福島町字吉岡350~365.366-1-2.367.369~374.375-1-3.76.377.378~382.391.400.405.406.407-1-2.408~414.414.1.415~417.417-1.418.419.419~1.420.420-1.421~426.432.433	縄文(中期・後期・晚期)、擦文	台地上平坦部、緩斜面	20~30 m	土器、石器、礫石
18	B.03.018	鶴崎2遺跡	遺物包含地	福島町字鶴崎194-195.207.208.211-1~3.212.213-1.214~221.223.226.227-1-2.228~2.236.240~242.244.245.248~263.265~2.270.272~275.278~291.292~1-2.293.294.294~1.295.296.298.299.307.464~473.474~1-2.475~477	縄文(後期)、擦文	台地上 平坦・緩斜面	20~30 m	
19	B.03.019	吉野遺跡	遺物包含地	福島町字吉野482~487.488~2-6.491.492.字吉野265~286.288~306.307~1-2.308.311~313.315~1-2~5~7~11~13~19~21~29~31~39~41~48~50~52.316~1~6.317~1-2.318.319.337~1-2.338.340	縄文(前期・中期・後期)、擦文	台地上平坦・緩斜面(海岸段丘)	20~30 m	土器、須恵器、鐵斧
20	B.03.020	吉野墓地遺跡	遺物包含地	福島町吉野233.254~258	縄文(前半期)、擦文	台地上 平坦・緩斜面	20~30 m	
21	B.03.021	礼拝遺跡	遺物包含地	福島町字吉野215~218.220~229.237~241	縄文(中期)、擦文・中世	台地上 平坦・緩斜面	20~30 m	土器、須恵器
22	B.03.022	兵具沢遺跡	遺物包含地	福島町字松浦119.120.126~134.136.137.141	縄文(中期)	台地上 平坦・緩斜面	20~30 m	
23	B.03.023	松浦遺跡	遺物包含地	福島町字松浦25.33.55~58.94.95-1-2.96~99.100-1-2	縄文、続縄文	台地上 平坦・緩斜面	20~30 m	土器
24	B.03.024	折戸沢遺跡	遺物包含地	福島町字松浦15~324.325~1~3.327.334~339	縄文(前期・中期)	台地上 平坦・緩斜面	20~30 m	
25	B.03.025	松倉遺跡	遺物包含地	福島町字千野36	縄文(前期・中期)	知内川左岸の段丘先端部。	30 m	
26	B.03.026	二郎沢遺跡	遺物包含地	福島町字千野639~1-2-4-5-6	縄文(中期・後期)	二郎沢岸沿いの狭い平坦面。	70 m	
27	B.03.027	福島川右岸 遺跡	遺物包含地	福島町字福島201~204	縄文	福島川右岸	30 m	
28	B.03.028	赤川奥沢遺跡	遺物包含地	福島町字月崎142~347	縄文(後期)	白川左岸の山裾及びその前面平坦地	10 m	
29	B.03.029	福島大神宮 遺跡	遺物包含地	福島町字福島239~240	縄文(中期)	田尻川河沿い台地(現在山崩地で埋まっている)	30 m	
30	B.03.030	日向遺跡	遺物包含地	福島町字日向178~384.386~388	擦文	台地上。平坦な緩斜面	10~20 m	
31	B.03.031	吉岡変電所 遺跡	遺物包含地	福島町字鶴崎587-6.591-591-2-3	縄文(前期・中期)	吉岡川右岸の狭い平坦面	10 m	
32	B.03.032	岩部川右岸 遺跡	遺物包含地	福島町字岩部61-1~6.62.63.64-1-2.65-1~5.66-1-2	縄文	岩部川右岸河口付近の平坦面	10 m	
33	B.03.033	瀬の野遺跡	遺物包含地	福島町字千野73-1~4.74.75-1~4.76-1	縄文(中期・後期)	知内川左岸の河岸段丘上	70 m	土器、石器

### III 調査の方法

#### 1 発掘調査の方法

##### 表土除去・測量杭打設

調査に先立ち、表土除去を行った。表土除去では表土のI層を建設機械により除去した。東西両盛土間のくぼ地に比較的厚く埋め土がなされていて、近現代の生活用品も多数投棄されていたので、この部分に関しては堆土量が多くなったが、下面まで掘削した。盛土の稜線付近は、表土下5cmほどで盛土面が現れたため、表面を薄く削って現生の植物を除去した程度にとどめた。盛土の稜線付近は、畑の耕作等によって、多少削平されている可能性が否定できないものの、表土除去が完了した段階で、調査範囲全域に極めて良好な状態で盛土遺構が残っていることが明らかとなった。

表土除去後に、測量杭の打設を行った。基準杭は、D・I・Nラインと4・8・12ラインが交差する点に9本設定した。D12杭のみ、現代のゴミ穴があり、基準杭の打設位置としては不適切であったため、E12杭に振りかえている。その他の方眼杭は112本を数える。(影浦)

##### 盛土調査

表土（I層）を除去した段階で、地形の凹凸が確認された。盛土遺構の存在は、過去の調査から明らかであったので、土手状に伸びる盛土遺構の尾根部分にトレーニング一本、またそれに直交するように二本のトレーニングを設定した。トレーニングを掘り進めていくと、盛土層は、m1層（暗褐色土、後期前葉、中部Ⅲ層・C盛土・D盛土）・m2層（黄褐色土と黒褐色土の互層、黄褐色土、前期末葉～中期前半、B盛土・C盛土）・m3層（黒褐色土、前期末葉、A盛土）があり、その下に自然堆積の黒色土Ⅲ層（下部Ⅲ層）があることが認識された。ただし、自然堆積のⅢ層黒色土も部分的に擾乱を受けたために、m3層と混乱する部分もあった。また、J～O3～9区の住居跡以外では、下部Ⅲ層黒色土上に数十cmの人が堆積層がみられた。これについては、大型住居の周辺に広がることから掘り上げ土（P盛土・P'盛土）と認識した。

その後、上記の認識で、グリッドごとに掘り下げを行った。調査を進める中で、最終的にはP盛土・P'盛土・A盛土・B盛土・C盛土・C'盛土と整理をし、詳しく記載した。しかし、調査時はこのような区分で取り上げをできていないので、グリッド別に取り上げ土層ごとの対応表を表IV-6で示している。ここでは調査時の取り上げ層の概要を記しておく。

m2層のうち、互層に堆積したB盛土の範囲では、比較的明瞭に層が認識できたため、上位からm2(1)、(2)、(3)……という具合に層名を付した。調査時は、これによって層区分が可能と考えていたが、調査が進むに従い、全ての調査区で同じ堆積をしているとは言えなくなってきた。そのため、上記の層区分は、各グリッド内で完結しているものと考えていただきたい。

そしてm2層のうち、黄褐色土からなるC盛土が堆積した範囲では、おおまかに上下に分け、m2上層・m2下層として遺物を取り上げた。なお、B盛土範囲でも、m2上層・m2下層として取り上げている場合があるが、これについては、そのグリッドの分層の中での上下を示している。

m3層として取り上げたものは、A盛土分布範囲においては下部Ⅲ層も含めて取り上げた可能性がある。A盛土分布範囲外のm3層は、下部Ⅲ層である。

m1層は、当初は全て後期前葉か中期前半の盛土層と考えていたが、地点によって上部Ⅲ層（特にⅢ-2層）、D盛土、C盛土についても命名していた。詳しくは、基本層序、遺構記載で述べてある。

## 遺構調査

堅穴住居跡は、ほとんどが盛土層によって埋没していた。窪みなどで、ある程度プランが確認できたものは、トレントで範囲を確認し、ベルトを残しながら掘り下げる事ができた。しかし、ほとんどの堅穴住居は複雑に切り合っており、数軒が重複していたため、複数のサブトレントを最下部まで掘り下げる、断面で範囲を確認しながら掘り広げるという方法を採用した。特にE～H 5～9区での重複関係は著しく、調査は難航した。ごく一部の床や壁しか残っていない住居もあったとみられ、認識しきれていない可能性がある。また、複数の住居を1軒として調査を進め、中途で気づいた例が複数あり、その場合は（新）・（旧）のように枝番を振ることで対応した。

土坑・小ビットは、検出した時点では半蔵して、確認した。住居の柱穴も含む小ビットについては、単独のものか、住居に伴うか判断に迷うもの多かった。したがって、帰属を明らかにできていないものもある。人骨が検出された土坑が少なからずあったが、断面を必ず記載するようにした。

焼土は、検出した時点では半蔵し、記録したが、焼土ブロックの集合といった異地性焼土の多くは、焼土として認定せず、一般土層と同様に扱った。

集石は、ごく集中して出土したものは記載したが、盛土層中には全般に礫が多く含まれ、必ずしも実態が記録できていないかもしれない。フレイク集中についても、同様なことが言える。（福井）

## 遺物の取り上げ

遺物包含層・盛土遺構の遺物は、遺跡名・発掘区・層位・日付を記録し、適当なまとまりごとに取り上げた。基本的にはグリッド単位で完結するようになつたが、個体の形状を伴つた土器などで、複数のグリッドにまたがつて出土したものに関しては、グリッドを併記した。遺構出土の遺物、ならびに倒立・正立状態、埋設状態で出土した個体土器については、状況に応じて実測図を作成、標高等の記録を取つて取り上げた。また、土偶、土製品、石製品、玉類などに関しては、原則的に他の遺物と分けて1点取り上げの扱いとした。微細遺物の密集部分では遺物を土壤ごと採取して、自然乾燥させた後に、浮遊水洗選別を行つた。

## 個体土器の取り上げ

形状を保つた土器が、盛土遺構の上部から下部に至るまで多数出土した。これらの土器は、個体土器番号を付した上で、位置情報の記録と出土状況の写真撮影をおこない、随時取り上げていくことにした。最終的に3か年で626番までが数えられたが、一つの番号で複数個体が取り上げられたものもあれば、内容的にまったく個体ではないものに個体番号が付されたものもあり、実態として番号は個体数というより土器の位置情報を計測した地点数という意味のほうが強い。また、形状を良好に保つていながら、個体土器として取り上げられなかつた土器も相当数存在する。接合作業の結果、盛土遺構から出土して4割以上が残存する個体土器は1,448個体が数えられた（表X-1）。堅穴住居や土坑等の覆土内から出土した土器で2割以上が残存する個体土器は502個体（4割以上残存では474個体）が数えられている。館崎遺跡における4割以上残存の個体土器実数は1,933個体である。

（影浦）

註1・個体土器の中には、数個体で配列をなしていたものや、倒立・正立のもの、円錐が伴つていたものなどがあった。

註2・盛土出土の個体土器の対象範囲を4割以上にすると、盛土ごとの出土土器型式の傾向が現れた。4割未満を取り込むと、他型式の混在が顕著になってわかりにくくなる。また、堅穴住居跡等、遺構の覆土出土

の土器に関して、2割以上を対象にした理由は、覆土の埋積過程を明らかにする上で個体数が多い方が有効であると判断したことや、覆土内の土器集中層における密閉性を考慮したことである。なお、個体土器の一覧表中では70%残存と記載しているが、復元個体ではなく、破片掲載にとどめたものもいくつかある。これは破片が粉々であるなど状態が悪いため復元には至らなかった個体である。

#### 調査最終面地形測量

遺構調査・包含層調査の終了後、V層上面の精査を行い、遺物・遺構がないことを確認して、調査終了とした。この終了面において測量を行い、調査最終面の地形図を作成した。しかし、2011年度調査範囲のB地区(100 m<sup>2</sup>)に関しては、工事上の理由から、掘削深度は地盤面のレベルまでという制約があり、遺構確認面が調査最終面となっている。

(影浦)

### 3 整理の方法

#### (1) 一次整理作業

遺物は取り上げ後、水洗、乾燥、分類を行い、遺物台帳・遺物カードを作成した。台帳記載は、遺構出土のものは遺構ごと、それ以外のものは土器・石器等に分け、グリッドごとに分けて行った。遺物台帳はパーソナル・コンピューターによりマイクロソフト・エクセルに入力して管理・集計を行った。その後、台帳記載が終わったものから順次注記作業に着手した。注記は、遺跡名「館崎」の略称「タテ」、発掘区・遺構名・遺物番号・出土層位の順に記した。注記対象は主に土器・土製品で、石器については必要に応じて行った。

なお、現場段階で個体土器として番号を付して取上げた土器に関しては、台帳の備考欄に個体土器番号を付し、注記についても出土層位のあとに個体土器番号を記載した。また、遺構名を付して調査したが、精査の結果、盛土遺構の一部として扱うこととした(TH-57・58・63・60・63・65、TP-124)出土遺物については、遺物台帳上は遺構名を維持している。出土遺物一覧においては、発掘区の記載のあるものは発掘区に含め、発掘区の記載のないものは末尾に掲載した。

#### 注記例

##### 1. 遺構出土の場合(遺跡名・遺構名・遺物番号・層位の順)

タテ・TH-5・15・フク1

タテ・TP-20・9・フク2

タテ・TS-6・2・m2(4)

##### 2. 盛土層出土の場合(遺跡名・グリッド・遺物番号・層位の順)

タテ・D4・32・m2(2)

タテ・G9・11・m1a

##### 3. 個体土器の場合(遺跡名・遺構名ないしグリッド・遺物番号・層位・個体土器番号の順)

タテ・TH-14・227・フク1c・コタイ140

タテ・J2・34・m2(6)・コタイ138

原則的に2cm以上の土器に注記を行ったが、パーツが揃っていてすぐに復元可能な個体土器に関しては、個体に対して1、2か所の注記にとどめたケースもある。

#### (2) 二次整理作業

##### 土器の整理

遺物台帳および遺物カードの点検、台帳補正、接合、復元、実測図・拓影図作成、断面実測、属性

の観察および計測を行った。接合作業にあたって、出土した盛土の層位、盛土と遺構出土土器、遺構間、遺物包含層との接合関係に注意して作業を進めた。中でも個体の形状を保って出土した土器の復元について重点的に努めた。個体数が非常に多いため、一次的に、まずは全体の5割以上が揃っているもの、なおかつ口縁から底部まで繋がっている土器を優先的に復元した。復元対象としなかった土器に関しても、同一個体片でまとまっているものについては、後から追加で復元する場合や、盛土内の出土傾向をいつでも見直せるように、同一個体片と袋に記載してまとまりごとで同じ袋に収納した。またその他の破片についても口縁部片、底部片、胴部片を分けて収納した。

調査段階において盛土遺構中や、堅穴住居跡や土坑の覆土中において、土器を中心とした遺物集中層が確認されていたが、接合を通じて、同一型式の土器だけではまとまっているもの、複数の型式が混在しているものなど、内容がまちまちであることが明らかになった。また、個体の形状を良好に保った土器が多数出土する遺物集中層もあれば、まったく個体復元できないバラバラの土器片からなる遺物集中層もあることがわかつた。さらに場所によって下位から上位までの盛土堆積と、出土した個体土器の型式の前後関係が矛盾しないところのあることも確認された（註1）。

また、異なる土器型式が同一盛土層の見た目上の同一面で重なり合って出土していることに関しては、傾斜して堆積した層を水平に掘削して出土した可能性とともに、堅穴住居等の構築過程で既存の盛土遺構を掘削したときに古い型式の土器が掘り出され、それを廃棄したことも想定された。その際に、廃棄時の生活に使用して破損した土器もほぼ同時に投棄したとすれば、同じ面で新旧の土器と一緒に出土することになる。この観点で、既に復元された土器を再度見直していくと、同じ場所で出土した土器について、残存率や摩耗度や器表面の傷のあり方に差があることが認められた。そこで、改めて復元した土器と復元しないで収納した同一個体土器片、およびすべての口縁部破片を再観察した。基本的には出土状況のまとまりから型式細分を進めたが、型式の異なる土器が、ほぼ同時に廃棄されたとみられる出土状況もあったことから、同時期の、なおかつ同タイプと見られる、諸特徴の近似したまとまりを抽出し、共通する属性を一つ一つ整理した。土器のグループ化が進んだところで、今度はグループ間での属性の共通項を検証し、出土した盛土層位とグリッドを同時に照合しながら、それらの前後関係を慎重に勘案していった。掲載土器だけではなく、未掲載のもの、復元対象にしなかった同一個体のまとまりや、特徴の観察できる口縁部片、底部片についても属性記録をとった。細分型式を判断できるものについて、型式名を付けた上で、グリッド、層位とともに一つ一つ属性のメモを取り、必要に応じて一部はデッサンや写真も撮った。また、型式のわからないものでも、属性にある傾向が窺われるものはそのまま書き留めた。たとえば、あるグリッドのある層位で「ケズリ調整で周縁が無文化し、くびれのある底部片が多くみられる」といった記録である。表記した属性の件数は、掲載土器を対象に数え上げたものであるが、その属性が型式判定に有効であるか否かの選別と抽出については、全ての土器観察記録から判断したものである。

さらに属性抽出の作業に際しては、復元土器を計測して極力数値化することにもつとめた。可塑性のある土器を計測することに対しては、計測方法や計測位置によって、数値的な幅が生じることは承知しているが、多くを計測すれば（多少の型式誤認があるとしても）、平均的な傾向が具体的に見出されるはずである。また、属性の抽出や数値化は、第三者が客観的に検証しうる材料を豊富にするという観点においても有意であると考えた。

掲載土器について、口縁部から底部まであり、なおかつ約8割以上が残存しているものについては重量と体積を計った（残存率と併記）。重量は、未破損の完品ならびにほぼ100%が残っているもの以外は、補填材の重量が含まれることになるが、液体を入れる容器ということを考えた時に、属性と

して有意であると判断した。体積は、実測図の正面図を元に、内底面から口唇のもっとも低いラインまでを対象とし、器壁の屈曲点など傾斜角が大きく変化するところで分断、円錐台の体積の総和とした。計算は、[http://www.benricho.org/calculate/Runcated\\_cone.html](http://www.benricho.org/calculate/Runcated_cone.html) の自動算出ソフトを使用し、分断線の半径および高さなど必要な数値を入力した。土器の形状の歪み等を補正しているわけでもなく、あくまで正円の円錐台を積み重ねた単純計算ではあるが、おおよそのものであれ、煮炊きという土器の用途からみて有意であると判断した。

他に、器表面の磨減度合い、古い傷跡等の観察記録も表の項目に加えた（第2分冊・表V-4）。原位置を保っていると判断される個体土器がある一方、複数次の掘り返しと廃棄が繰り返されたと想定される土器もあると考えられる以上、盛土の形成過程を類推する上で有意と判断した。

図面掲載を想定した復元作業に際しては、残存状態の良好なもの、個体土器として取り上げたもの、正立、倒立、埋設状態で出土した土器、遺物集中層等で型式にまとまりがあるもの、確実に構造に伴うもの、本州北部の影響を強く受けたもの（あるいは搬入品）、類似の特徴を持つものが他にないものの等を優先した。次に、盛土の形成過程を説明する上で、副次的に有意と考えられる土器を追加復元して加えた。追加復元した土器については、残存率や磨滅等の状態にまったくこだわっていない。その盛土の形成過程と土器型式の変遷を説明する上で必要かどうかの観点に基づいて抽出した。（影浦）

註1・盛土遺構出土の土器接合に際しては、破片の細かさ、磨滅の度合い、型式の混在状況、接合の割合などが必要不可欠な情報になると考える。接合作業が終了した土器片の状況について、デジタルカメラで記録しておくという方法も有効であろう。

### 石器の整理

器種に分類し、形態や製作方法によって細分類を行った。また、石材、長さ、幅、厚さ、重量、被然の有無、使用痕の有無、付着物の有無などの属性を観察し、遺物台帳に記録した。接合作業は同一器種の破片について行い、剥片集中の接合作業は行っていない。

器種とその細分類を代表するものを選択して図化した。石製品については、形態の分かるものはほぼすべて図化した。実測・トレースの一部は、株式会社トラスト技研・株式会社シン技術コンサルに委託した。なお、掲載番号2001以降の石器は、写真と一覧表のみを掲載したものである。

石材については、全点について肉眼・ルーペでの簡易的な同定を行った。代表的なもの一部については、アースサイエンス株式会社に石材同定を依頼した。また、黒曜石製の代表的な石材の一部について、有限会社 遺物材料研究所に原産地同定を依頼した。礫の円磨度の表記は、『新版地学ハンドブック』（大久保・藤田1984）に拠った。

脆弱であった凝灰岩製の岩偶（掲載番号1325）とコハク製の玉（掲載番号1391）については、強化処理を行った。岩偶はOH-100を、コハク製の玉はパラロイドB-72を含浸した。

礫については、調査段階で遺物として取り上げたものは、台帳に記載し、石質と重量を記録した。その後、形態や石質、出土状況から、有意ではないと判断されたものについては、現地に残置した。代表的な石質のものは一部保管している。

なお、今回の石器の整理については、現地での一次整理から報告書刊行に至るまで、8年の間に複数人が携わることとなった。報告書の取りまとめにあたって、器種分類・石材の確認や細分類を行い、分類基準の統一に努めたが、出土量が膨大なこともあります、すべてを確認することはできなかった。そのため、分類の基準や石材の同定に幅が生じてしまった部分があり、また、実測図の表現にも統一できなかつた部分がある。

（柳瀬）

## 骨角器・動植物遺存体の整理

調査中に目についた骨角器や動物骨、炭化物は直接採取したが、土層中に炭化物や焼骨片が多く含まれる場合は土層ごと取り上げ、土壤サンプルとし、試料Noを2480番まで付した。取り上げた土壤は、浮遊水洗選別及び単純水洗選別を行った。骨混じり土層や個体土器内土層など609試料は、単純水洗選別したが、焼骨が特に多く含まれる場合4mm篩と1mm篩を使用し、微小骨に限られる場合は1mm篩のみを使用した。灰層や炭化物集中、焼土層、フレイク集中など164試料は浮遊水洗選別を行った。選別後は、骨角器、動物骨、炭化材、炭化種実、土器、石器に大別した。

骨角器は、分類を行い、各器種の特徴を残すものについては、ほぼ全点図示し、断片的なものは図化しなかった。ただし、属性については、全てについて記載し、一覧表とした。素材については、ルーペや実体顕微鏡によって詳細に観察したところ、緻密質部分に骨の微細構造を観察することができたため、澤田純明氏に同定を依頼した。

自然遺物は、予備的に同定を行った後、動物遺存体については、金子浩昌氏に最終的な同定を依頼した。動物遺存体については、個別に遺物番号を付してある。また炭化種実について、株式会社古環境研究所に最終的な同定を委託した。種実は、同定依頼したサンプルNoにのみ、試料Noを付してある。

## 人骨の調査・整理

土坑などから検出した人骨については、実測、写真撮影の後、おおまかな部位ごとにブロック状にして取り上げた。当初は石膏によって補強を行ったが、土層が縮まっていたことからブロック状に切り取ったまで取り上げることとした。結果的に、後者の方が取り扱いしやすくなった。取り上げたのちは、クリーニングを行い、土壤ごと屋内で自然乾燥させた。カビはほとんど生えなかつたが、もともと残存状況が悪かつたため、崩壊した部分もあった。なお、歯は、エナメル質がかろうじて残っている状態で、さらにその表面に溶け出したカルシウム分が固着していた。したがって、この部分をクリーニングしようとすると砕けてしまうような残存状況であった。そのような状況であったが、人骨の鑑定を澤田純明氏に行っていただいた。鑑定後は、必要なクリーニングを行い、パラロイドB72によって処理を行った。

(福井)

## 記録類・遺物の収納保管

遺物は、掲載遺物と未掲載遺物に分け、掲載遺物は報告書図版に対応するように収納した。

掲載土器のうち復元個体は、1点ずつエアキャップで梱包し、隙間に緩衝剤や古新聞紙を充填した上で、折り畳み式の大型コンテナに収納した。使用したコンテナは三甲社の135BならびにW95aである。なるべく報告書の掲載順、型式ごとにまとまるように留意したが、一つ一つの土器のサイズや形状がさまざまであるため、前後しているものも多い。入れ子状態で収納したものもある。破片は、1点ずつ小袋に入れて掲載番号を記載し、図版ごとに中袋にまとめた。未掲載土器は、分類ごとに、遺構・発掘区に大別し、遺構ごと・発掘区ごとに収納した。2009・2010年調査分と2011年調査分とで分かれている。また、現場段階で個体と認識されNoが付された「個体土器」、接合作業の結果、個体にまとめた土器に関しては、それらで別にまとめて収納している。なお、部位(口縁部、胴部、底部)、文様で細分している場合がある。

石器・骨角器の収納は、掲載遺物は挿図に対応するように、1点ずつ小袋に入れた後、挿図ごとに中袋に収納した。未掲載の石器については、狭義の石器は1点ずつ遺物カードと共に小袋に入れ、器種ごとに、遺構順・発掘区順にコンテナに収納した。剥片は、遺物番号ごとに遺物カードと共に小袋に入れ、石材ごとに、遺構順・発掘区順にコンテナに収納した。礫は、遺物番号ごとに遺物カードと

共に小袋に入れ、遺構順・発掘区順にコンテナに収納した。なお、大形の石器はコンテナに遺物カードと共に直接収納したものがある。未掲載の骨角器は、1点ずつ小袋に入れた後、発掘区数字ラインごとに中袋に収納した。

動物遺存体の収納は、写真掲載と未掲載に分け、1点ずつ小袋に入れた後、種毎・部位毎に収納した。袋に入らないものについては、小ケースに載せたまま便宜的に収納したものもある。

なお、未掲載土器・石器のうち、盛土遺構の一部として扱った（TH-57・58・63・60・63・65、TP-124）の出土遺物については、発掘区出土遺物の次に収納した。

これらの遺物は、遺跡の所在地である福島町教育委員会に搬送し、保管される。また、現地調査および整理作業で作成した各種図面、写真フィルム、遺物整理台帳は、道立北海道埋蔵文化財センターで保管される。

（影浦・福井・柳瀬）

#### 4 基本層序

調査区は、北西-南東方向へ、緩やかに傾斜した段丘面である。基本的な土層は、調査区全域で大きく変化していないとみられるが、縄文時代前期末葉～中期中葉、後期前葉の人類活動によってほとんどの地点で人為改変を受けており、連続した自然堆積は認められない。土層の記載には、『土壤調査ハンドブック』（日本ペトロジー学会編 2000）を参考にし、土色、土性、粘着性、堅密度、含有物とその含有率について記載した。土色については『新版標準土色帖』（小山・竹原 2004）を用いた。層厚については、削平を受けるなどし、地点によって大きく異なるために、ここに記載しなかった。

I層 表土：現代の耕作による堆積。黒色（10YR 2/1）～黒褐色（10YR 2/2）。ローム粒含む。道路跡部分では、現代の「盛土」もみられた。

II層 Ko-d（駒ヶ岳d降下軽石層）。1640年降下。にぶい黄橙色（10YR 7/3）。道路跡部分の一部で確認された。

III層 黒色土～黒褐色土

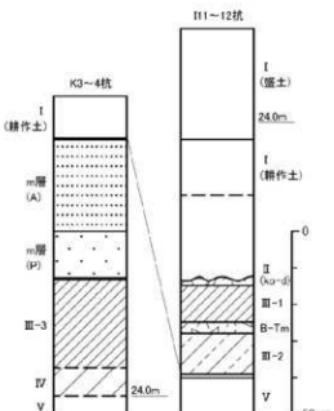
・III-1層（上部III層）：黒色（10YR 1.7/1）。火山ガラス含有。道路跡部分に厚く堆積していた。  
・B-Tm：白頭山苦小牧火山灰層。10世紀降下。上部が褐色（10YR 4/4）。下部がにぶい黄褐色（10YR 5/4）。道路跡部分に厚く堆積していた。ほかは、住居跡の窪みに僅かに堆積していた。

・III-2層（上部III層）：黒褐色（10YR 3/2）。調査時は、m1a層とした。土色が明るかったため、後期の盛土層とも考えたが、精査の結果、自然堆積層と判断した。道路跡部分に厚く堆積していた。ほかは、住居の窪みに僅かに堆積していた。道路跡の一部では、下部でやや黒味が強い部分があった（10YR 3/1）。

m層：主要な遺物包含層。P盛土～C盛土は、縄文時代前期末葉～中期中葉の遺物、D盛土は、縄文時代後期前葉の遺物を包含する。

・P盛土：おもにV層のローム由来土（10YR 3/3）からなる二次堆積土。

・P'盛土：III層より明るい色調の褐色土（10YR 4/4）からなる二次堆積土。

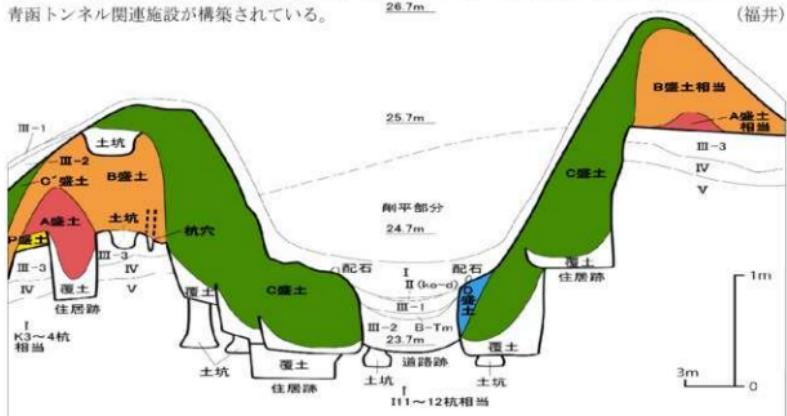


図III-1 土層柱状図

- ・A盛土：主に暗褐色土（10YR 3/3）からなる二次堆積土。
- ・B盛土：にぶい黄褐色土（10YR 4/3）と暗褐色土（10YR 3/4）の互層からなる二次堆積土。
- ・C盛土：主ににぶい黄褐色土（10YR 4/3）からなる二次堆積土。
- ・C'盛土：主に黒褐色土（10YR 3/2）からなる二次堆積土。
- ・D盛土：主に暗褐色土（10YR 3/3）からなる二次堆積土。
- ・III-3層（下部III層）：黒褐色（10YR 2/2）。上部は部分的にローム粒を含んだため、調査時は、一部でm 3層とした。部分的にローム粒を含むのは、人為擾乱を受けた層が存在したためと考えている。このローム粒含有層が斑に分布し、自然堆積層と区別しにくかったので、取り上げ層位としてはIII層に一括している。C盛土分布範囲および道路跡では削平されて残されていなかった。縄文時代早期後葉と前期末葉の遺物包含層。
- IV層 漸移層：暗褐色（10YR 3/3）。C盛土分布範囲および道路跡では削平されて残されていなかった。
- V層 ローム層：明黄褐色（10YR 6/8）。

土層堆積模式図は、K 3杭～E 12杭～1984年調査成果をもとに作成したものである。ほとんどの部分を土層断面①をもとに作成しているので、スケールを付した。土層堆積状況は、地点によって複雑であるが、この断面によって、おおよその堆積順を表現することができている。

III-3層が堆積した段階で、縄文時代早期後葉に土坑が構築された。その後時間をおいて、縄文時代前期後葉から集落が営まれるようになった。前期末葉では、継続して住居が構築され、P盛土・P'盛土が堆積した。その後、中期中葉まで、集落の継続とともに、A盛土、B盛土、C盛土の順で堆積していく。また、盛土の堆積とともに、削平も行われた。最も低いところはV層を1m以上削平し、結果的に道路として利用された。集落は一時断絶し、縄文時代後期前葉に再度営まれ、D盛土が堆積した。その後は、目立った利用はされず、III-2層が道路跡を中心に堆積した。その後、10世紀にB-Tmが降下し、さらにIII-1層が道路跡を中心に堆積した。1640年には、Ko-dが降下し、その上にI層が堆積した。どの時代からかは不明であるが、I層は耕作によって擾乱された。近代には、何らかの軍事施設に利用され、塹壕と防空壕が構築された。第二次大戦後は、畠地に利用されたほか、青函トンネル関連施設が構築されている。



図III-2 土層堆積模式図

## IV 館崎遺跡の遺構

### 1 遺構の概要

平成 21～23 年度の調査で、盛土遺構 2 条 10 種、堅穴住居跡 53 軒、土坑 119 基、T ピット 1 基、焼土 118 か所、集石 27 か所、フレイク集中 48 か所、小ピット 369 基、埋設土器 1 か所、配石列 3 条、杭列 2 条 57 基、道路跡 1 条を検出した。遺構は、縄文時代前期後葉～中期中葉のものが主体で、一部が縄文時代早期後葉、後期前葉に形成されたものである。具体的には、早期後半の遺構は、土坑 7 基、後期前葉の遺構は、盛土遺構（D 盛土）、住居跡 3 軒、土坑 21 基、焼土 12 か所、集石 2 か所、小ピット 1 基、配石列 2 条が確認されている。また、近代の戦争遺構である塹壕跡 1 条、防空壕跡 4 基も確認された（便宜上、この章に含めた）。

館崎遺跡は福島町教育委員会により、過去複数回の調査がなされている。遺跡は、津軽海峡と吉岡川に挟まれるようにある段丘の突出部に形成されたが、そのうち段丘突出部の基部周辺は A 地点とされ、今調査区に隣接した。また、段丘突出部中央は B 地点、段丘突出部北側の一画は、C 地点とされた。

A 地点は、昭和 48 年と昭和 59 年に今調査区の北東側に隣接する部分が調査された。縄文時代前期末葉～中期中葉の盛土遺構（東盛土）が検出されているが、昭和 48 年では「再堆積層・埋め戻し層・土器集積址」とされ、昭和 59 年では「土器塚」とされた。また、堅穴住居跡は縄文時代中期のもの 1 軒、縄文時代後期前葉のもの 2 軒があり、縄文時代後期前葉の土坑 18 基も検出されている。

B 地点は、昭和 59 年に調査された。縄文時代後期前葉の堅穴住居跡 1 軒が検出されている。

C 地点は、昭和 60 年に調査された。縄文時代後期前葉の堅穴住居跡 2 軒、土坑 5 基が検出されている。

なお、段丘突出部東側は、中世の穂内館跡とされる。本体部分は昭和 46 年に調査され、縄文時代中期～後期の土器片も採集されている。また、館崎遺跡 C 地点の東に隣接した地点が昭和 61 年に調査がなされ、縄文時代後期前葉の堅穴住居跡 2 軒、土坑 5 基が検出された。

このように、今調査と既調査の成果を総合すると、段丘突出部には縄文時代後期前葉の遺構群が散在しており、縄文時代前期～中期の遺構群は A 地点周辺に集中したことが推定される。

盛土遺構は土手状に造られており、東西 2 条が並列して確認される。調査区外の北西側にも広がりを持っており、現地表面においても、高まりとして認識できる。西側の盛土は形成時期と堆積土の特徴から、P 盛土（年報などで「掘り上げ土」とした、前期後葉～末葉）、A 盛土（前期末葉）、B 盛土（前期末葉～中期前葉）、C 盛土（中期前葉）、D 盛土（後期前葉）の大きく 5 つに分類された。堆積状態から、P 盛土は橋状盛土、A・B 盛土は土手状盛土、C 盛土は斜面盛土と考えられる（福井 2015）。なお、『調査年報 24』において、「大形廐棄土坑」として報告された部分は、精査の結果 B 盛土の一部と判断された。

堅穴住居跡は、I 類： 楕円形～隅丸方形で、ベンチ状構造をもたないもの、II 類： 楕円形～隅丸方形で、ベンチ状構造をもつものの、III 類： 長楕円形～隅丸長方形で、ベンチ状構造をもたないもの、IV 類： 楕円形で、ベンチ状構造をもたないものの、4 形態に区分できた。I 類は前期後葉～中期初頭、II 類は前期末葉～中期前葉、III 類は中期前葉～中葉、IV 類は後期前葉に、それぞれ顕著な住居型式である。したがって、この住居型式が住居群の変遷を考える基になりうる。な

お、ベンチ状構造については、略してベンチと呼称している場合がある。

また、住居跡は、その長軸方向によって大きく 2 群に分けられた。住居 I 群は、長軸が海岸線に平行する住居群で、縄文時代前期後葉～末葉に構築された。一方、住居 II 群は、長軸が海岸線に直交する住居群で、縄文時代前期末葉～中期中葉に構築された。この長軸の変更は、盛土遺構形成の度合いによって決定づけられたものとみられる。

個々の住居の記載では、他の住居との切り合いを観察できた範囲で述べているが、調査の過程で認識困難であった部分がある。また、自然堆積のローム層を掘り込まないで構築された住居が、建て替えを繰り返すので、その範囲を平面で把握しにくく、複数の住居を 1 軒として調査してしまった例が多くある。さらに重複関係を正確に認識できなかった例もある。しかしながら、極力個々の住居へ分離するよう努めた。

竪穴住居跡の覆土は、大きく覆土上層と覆土下層に区分された。上層は、人為堆積物で盛土遺構に連続している。また、一時期に堆積したというよりは、小単位の堆積物が累積した場合がほとんどとみられる。一方、下層は、比較的短期間に堆積した場合が多いとみられる。床面を平凹レンズ状に覆う、いわゆる三角堆積となっている。ロームブロックの角状偽礫が多く含むのが特徴。状況から、住居を覆っていた屋根土由来の堆積物と考えられる。角状偽礫は、屋根に塗りこめられ、硬化していたロームが、打ち崩されたために形成されたと推測している。角状偽礫と「土」からなるため、屋根土も複層であったことが分かる。また、住居主柱穴とみられる主要な HP の覆土は、住居の覆土下層が入りこむもののほかに、締まりなくソボロ様の覆土が目立った。後者の状況は、樹木の根跡の状況に類似しており、柱がその場で腐朽した結果を示すとみていい。ただし、腐朽のタイミングが住居廃絶後か、それ以前の居住時かは判然としない。

住居跡のうち、TH-5 と TH-9 の床面付近から人骨が検出された。これらは、住居跡覆土に掘り込みが確認できなかつたことから、廃屋葬されたものと考えられる。特に TH-5 では、しまりの極めて弱い覆土が堆積した主柱穴跡に頭が流れ込むように遺体が検出された。埋葬姿勢は、TH-5 は恐らく側臥状態の強屈葬、TH-9 は仰臥状態の膝屈葬であった。

土坑は、フラスコ状土坑と、梢円形土坑があり、ほかに円形、隅丸方形などの形態があった。土坑のうち、人骨が検出された土坑墓は 6 基確認された。平面形態では、フラスコ状土坑が 2 基、梢円形が 4 基ある。梢円形のうち 1 基は小型竪穴住居様で、8 体の多遺体埋葬墓であった。多遺体の埋葬は、人骨の位置が解剖学的位置を保っていない可能性があり、柱穴を持つことから、小屋掛けされた小竪穴に、複数回にわたり埋葬がなされたことが推測される。ほかの土坑墓は、単埋葬。膝を強く曲げ、側臥となる強屈葬例が 2 基、膝を軽く曲げ、仰臥となる膝屈葬例が 2 基、埋葬姿勢の不明なものが 1 基であった。

フラスコ状土坑は 57 基検出され、時期毎では縄文時代前期末葉 23 基、前期末葉～中期前葉 13 基、中期前葉 15 基、後期前葉 6 基となる。梢円形の土坑は 28 基検出され、時期毎では縄文時代前期末葉 8 基、前期末葉～中期前葉 2 基、中期前葉 3 基、後期前葉 8 基、その他 7 基となる。

T ピットは、N・O 9 区で長梢円形のもの 1 基を検出した。縄文前期末葉の住居跡廃絶後、その僅みに盛土層が堆積し、埋まりきった後に掘削されている。しかし、断面観察面で、時期不詳の土坑 2 基に切られており、構築時期は縄文中期前葉～後期前葉と推定される。

焼土は、盛土層や住居跡覆土で検出した例と、III 層黒色土上面で検出した例がある。また、焼成されたまま残された現地性のものと、二次的に移動された異地性のものがある。時期が判明し

ているものでは、前期末葉で異地性 19 基、現地性 11 基、前期末葉～中期前葉で異地性 11 基、現地性 2 基、中期前葉で異地性 9 基、現地性 2 基、中期前葉～中葉で異地性 11 基、現地性 3 基、後期前葉で異地性 3 基、現地性 9 基となる。前期～中期に関しては異地性焼土の方が多く、焼土として認定しなかった例も含めると、膨大な量の焼土ブロック、焼成残渣が盛土層や住居跡覆土に含まれていたとみられる。また、現地性焼土では、上位に灰層が残されるものが目立っていた。

集石は、細礫（0.2～1 cm）、小礫（1～5 cm）、中礫（5～10 cm）、大礫（10～20 cm）、巨礫（20～30 cm）、巨岩（30 cm以上）の各大きさの礫から構成されていたが、細～小礫、中～大礫からなるものが多く、ある程度大きさを揃えている状況が感じられた。集石は、住居跡の覆土上層を含む盛土層で確認されたが、細～小礫からなるものは、中期前葉の C 盛土の範囲に多かった。海岸の砂利をひとまとまりに置いたような印象を受けた。中～大礫は、B 盛土や C 盛土で多く出土したが、所々で集中する状態を TS-17 の出土状況で確認できる。

フレイク集中は、盛土や遺構覆土などで検出した。中期前葉の例は少なく、前期末葉に属するものの方がより多く検出された。ただし、遺構・遺物に追われた調査であったので、全てを記録できていない。なお、集石やフレイク集中は図化したものも僅かで、位置情報と写真で記録したものがほとんどであるので、その場合は全体図にのみ位置を落とした。そして、記載したもの以外にも存在していた可能性はある。

杭列は、Ⅲ層黒色土上面で列をなす柱穴群が 2 列確認されたものについて命名した。「杭穴」は、盛土層中から掘り込まれたもので、杭列 1 は A 盛土、杭列 2 は B 盛土の長軸に沿っていた。このような状況から土留めの機能を持っていたと推定している。また、TH-37 ベンチ状構造床面で検出された柱穴列も、同様なものであったと考えられる。

小ピットは、I 6・7 区とその周辺に集中した。ここでは 1 グリッドあたり 10 基以上、最多 45 基が確認された。一方、ほかでは、各グリッドとも 10 基未満が確認されたに過ぎない。これら小ピットは、6 割以上が自然堆積層で確認されたものであるが、残りは竪穴住居跡の覆土や床面、盛土層などで確認された。後者は、住居との関係を掴むことができなかつたものではあるが、その規模や形状について、住居の柱穴と大きな違いは認められなかつた。

配石列は、3 条認められたが、後述する道路跡を挟むように構築されていた。ほとんど不明瞭であったが、部分的に礫が列状に分布するものがあり、一部は立石とされたようであった。また、配石列の一画では、扁平な凝灰岩礫が列状になるように埋め込まれた部分があった。配石列のうち、1・3 は、共伴した土器から、後期前葉に構築されたものとみている。

道路跡は、東西盛土遺構に挟まれた地点で確認された。道路跡では、V 層が 1 m 前後削られていた。路面は住居跡床面同様に踏み固められ、斑状の汚れた面となり、他の遺構や遺物はほとんど分布していなかつた。盛土遺構形成のための掘削が、結果的に道路状になったのか、意図した結果なのかは、判然としない。

戦跡遺構として、塹壕跡と防空壕跡が確認された。中世の壕跡の可能性も疑つたが、土層観察の結果、ごく新しい時期の構築と判明した。そして、地元の方には、津軽海峡警備のため監視哨が設けられていた、と聞かされた。施設設置にあたっては、繩文時代の盛土遺構によって形成された地形を利用したとみられる。塹壕跡は、ごく僅かにジグザグに掘削され、その排土を海側に盛っていたようであった。北西の調査区外へ延びており、施設を囲うためのものであったとみられる。一方、防空壕跡は 5 基確認されたが、塹壕跡よりも南東側で、間隔を置いて散在してい

た。防空壕跡の一部は、盛土遺構によって形成された斜面部分を利用して構築されていた。

各遺構出土遺物のうち、土器・土製品は第2分冊土器編、石器・石製品は第3分冊石器編、骨角器・動物遺存体・植物遺存体は第4分冊総括編で詳述してある。遺構編では、その記載に基づき、遺構調査時の所見も踏まえて、概要を記した。時期については、円筒土器下層式では、c式が出土した場合は前期後葉、下層d 1・2式では前期末葉とした。また、円筒土器上層式では、a 1・2式が出土した場合は中期初頭とし、上層b式では中期前葉、サイベ沢VII式・見晴町式では中期中葉とした。

mが付された層の出土品は、盛土遺構出土のものである。取り上げ層位と盛土区分の対応関係については、一覧表を作成した。層名と盛土区分がグリッド間で一致していない。これは、グリッドごとに掘り下げる過程で、周辺も水平に堆積していると仮定して、上位から層名を付したためである。しかし、精査した結果、層堆積が複雑であったため、同一層名であっても、グリッドが異なった場合、異なる時期の層である場合が多い。したがって層名は、ごく限られた範囲での遺物のまとまりと前後関係を示しているものである。

遺構覆土として取り上げたものについても、遺構を盛土層が覆っている例が多く、堅穴住居跡の場合、覆土上層ないし覆土1層から出土したものは、実際には盛土遺構に含まれるものである。さらに、各遺構が著しく重複しており、調査時に他の遺構を含めて取り上げてしまった例が多数存在する。住居跡覆土上層の盛土区分についても一覧表にしている。

なお、遺物は、住居跡床面や土坑底面から出土したものはごく少なく、住居跡覆土中位からまとまって出土する状況が多かった。そのため、遺物のまとまりは、廃棄段階でのまとまりを示しており、直接遺構の時期を決定できる遺物やそのまとまりはごく少ないと判断され、遺構と遺物は分けて報告することにした。

以上のように、遺構と遺物の関係には十分な注意が必要であることを明記する。（福井）

## 2 盛土遺構

盛土遺構は、東西2条ある。東盛土は、確認した長さ36m、最大幅37m、最大厚1.4mで、推定長76m。西盛土は、確認できる長さ62m、最大幅30m、最大厚1.9mで、推定長87m。現状では2条が並列していたことが確認される。盛土遺構には、遺物、土壤、焼成残渣などの廃棄物が集積されているが、盛り上げられるだけでなく、窪みを埋める場合もあり、堆積物として両者を区別することはできない。ここでは凸状に土層主体で堆積するものを盛土、凹地を埋める土層主体の堆積を埋土として、記述していく。盛土遺構を構成する土層には、土壤主体の二次堆積土層のほか、遺物主体の遺物集中層、焼成残渣層、混貝土層などがある。堆積状況から西盛土は、P盛土、A盛土、B盛土、C盛土、D盛土に区分した。東盛土は、観察された断面からA盛土相当、B盛土相当、C盛土からなるとみられる。なお、A盛土、B盛土、C盛土には稜線が認められたので、およその位置を・・・で示した。

## 3 堅穴住居跡

堅穴住居跡は、ほぼ盛土層によって覆われていた。したがって、覆土は土層細別とは別に、大きく上層と下層に区分できた。覆土上層は、堅穴住居跡を覆う盛土層で、地点によって、P盛土、A盛土、B盛土、C盛土などが堆積していた。覆土下層については、角状の偽縁（ロームブロック）を多く含むもので、屋根を覆っていた住居構造物（屋根土）が主な由来と考えられる。この上層と下層については、遺物取り上げ時に、覆土1層・覆土2層とした例と、覆土上層・覆土下層とした場合がある。

## 4 竪穴状遺構ほか

調査の過程で、一時的に竪穴住居跡としたが、その後、住居跡と確定できなかったものや、單なる窪みであったものなどについて、ここでまとめて記載する。著しく遺構が重複していたこと、盛土遺構の土層堆積が複雑であったこと、盛土遺構下位の自然堆積層上部に層界不明瞭な人為擾乱がみられたことなどから、竪穴住居跡については欠番が非常に多い。

## V 石器・骨角器・動物遺存体・植物遺存体

### 1. 館崎遺跡の石器・石製品

#### ア. 館崎遺跡出土の岩偶と各種石製品

今回の調査で出土した石製品は、岩偶、块状耳飾・垂飾・玉類、異形石器、鳥帽子形石器、側縁有溝石器、長板状石製品、石棒・軽石製品など、器種・点数共に豊富な出土状況であった。出土層位と形態から、これらは主に前期末葉～中期中葉のものとみられる。

岩偶は、頭部を欠損した大形のものが 1 点、小形のものの破片が 2 点出土した。このほか、岩偶と同様の素材で加工痕のある板状難が 2 点出土しており、岩偶未成品の可能性がある。完形に近い 1325 と小形の破片の 1327 は、円筒土器に伴う「肩パッド型岩偶」（稻野 1997 など）である。1325 は現存長 37.1 cm で、現在のところ類例中最大とみられる。全体形は五角形で、類例と比較して下辺は平坦で幅広い。正面には身体表現とみられる線刻が刻まれ、裏面の中央部には浅い窪みがある。石材は板状で淡緑色の凝灰岩である。出土位置は、前期末葉の竪穴住居跡 TH-54 の覆土中位（J 3 区）であり、同一層準から出土した土器から、前期末葉の円筒土器下層 d 1 式に伴う可能性が高い。

円板状石製品は 18 点出土した。主として凝灰岩など軟質で板状の石材を用いており、有孔のものと無孔のものがある。また、自然の有孔礫を利用したものもみられる。

三脚石器は 4 点、四脚石器は 2 点出土した。東北地方の典型例と比較して大ぶりで調整の粗いものである。

異形石器は 31 点出土した。三日月形の体部につまみの付く形態のものが主体である。器表面や縁辺の摩耗が顕著にみられる。黒曜石製が 21 点と大半を占める。

鳥帽子形石器は 9 点出土した。全体を比較的丁寧に加工したものが 3 点、部分的な加工のものが 4 点、加工を施さないものが 2 点。部分的な加工のものは、扁平へやや扁平な礫の一長辺を研磨して刃部状に整形するもので、底面は平坦に加工するものと、礫の平坦な自然面を利用するものとがある。

側縁有溝石器は 12 点出土した。溝が全周ないしはほぼ全周するものは 5 点。溝は途切れるか、部分的な敲打にとどまるものが多い。ほかに平坦面に窪みがあり、側縁が敲打されるもの 8 点、窪みのみのもの 3 点、溝のみのもの 1 点。窪みの形態・大きさ、溝の長さ・位置の組み合わせが多様である。

長板形石製品と仮称したものは 16 点出土した。2 点接合 2 個体、3 点接合 1 個体があり、個体数は 12 個体である。完形ないしは完形の可能性があるものは 3 点のみで、他はすべて破損している。長い板状の素材を用い、一方の長辺をやや先鋒に整形し、もう一方の長辺はやや平坦に加工する。先鋒な頭頂部と平坦面の対応関係は、鳥帽子形石器にも類似するように思われる。

石棒は 23 点出土した。うち明瞭な加工がなされるものが 7 点、部分的な加工のものが 7 点、

加工が不明瞭ないしは未加工のものが9点である。

鳥帽子形石器・側縁有溝石器は一遺跡の出土点数としては突出して多いといえる。また、長板状石製品は管見の限り類例のないものである。これら多様な「第二の道具」と呼ばれる石製品がまとまって確認され、また、鳥帽子形石器・側縁有溝石器に関係するとみられる長板状石製品を認識することができた。

輕石製品は101点出土した。滑車形、管玉形、北海道式石冠形、ドーム形、扁平～楕円体、直方体状、不製形・加工の不明瞭なものがある。北海道式石冠形が多く、底面の磨滅の状況から、実用品である可能性がある。

このほか、有孔縫の穴の開口部を拡張・製形したものや、軟質の石材に穿孔したもの、線刻を施したもの、研磨ないしは削り痕がみられるもの、側辺を鋸歯状に加工するものなどがある。

(柳瀬)

#### イ. 館崎遺跡出土の玉類

块状耳飾は、56点46個体が出土した。三角形状がほとんどで、縱長のものも少数含まれた。主にB盛土から出土したほか、住居・土坑の覆土などからも検出された。時期は、前期末葉が主体とみられる。長さは、三角形状は4cm台が最も多く、5cm台と3cm台が同数となる。縱長のものは、4cm台が多く、3cm台、2cm台と漸減する。石材は、滑石製が主で、3点がネフライト製とされた。完形品ではなく、破損品、補修品、未成品に分類される。破損品と補修品の判断基準は、二次穿孔の有無による。垂飾転用目的の穿孔との区分は破断面が摩耗し、補修孔同士を繋ぐような光沢ある細溝（紐ズレ）によってされたものもある。

块状耳飾の製作工程は、石材確保→器体粗整形→器面研磨→穿孔→切目作出→最終調整の順に行われたと推定される。

未成品は、一次未成品（製作途中品）と、二次未成品（破損品の再加工途中品）に区分しうる。しかしながら、当遺跡では一次未成品は確認できず、すべて二次未成品であった。この二次未成品は、器体の研磨が不十分で、線状痕を多く残し、光沢を発していない状態で、穿孔や切目作出を行っており、技術的に稚拙である。したがって完成に至らず放棄されたとみられる。なぜなら、製作過程を検討するため、製作実験を行ったところ、切目作出の段階で、少しでも捻じれの力が働くと頭部で破損したためである。つまり、器面研磨を完成させずに、整形後に再度行おうとするならば、破損する確率が増加したと推測され、技術的に熟練していなかったと考えができる。以上の事から、本遺跡は三角形块状耳飾の製作遺跡ではなく、立地的好条件を背景に三角形块状耳飾が搬入・集積され、一部破損品を再加工していたと推定される。

块状耳飾を搬入品と考えた場合、製作遺跡は二つの候補地に絞られる。一つは、松前町大鴨津川周辺である。大鴨津川中流には、滑石産地が存在し、現在でも採取可能である。石材の見かけ上の顔つきは、出土品と酷似している。また、三角形块状耳飾の分布は津軽海峡域を中心に円筒土器分布圏に集中していること（福田2006、阿部・澤田2010）も、単純な分布論からは産地としての解釈を補強するものである。なお、石材分析（IX章9・10節）からも一部は松前産の可能性が指摘されている。

もう一つが、北陸地域である。三内丸山遺跡出土玉類を検討した川崎（2001）は、三角形块状耳飾と笠状垂飾にネフライト製品があり、その分布状況から北海道神居古潭変成帯よりは飛騨変成帯の石材を利用しておらず、北陸から搬入されたものと推定した。館崎遺跡でもネフライト製块状耳飾は3点ある。滑石の分析結果も、松前・神居古潭変成帯・日立変成帯以外の未知の産地

と推定された資料が多い結果となっている。また、福田（2006）は三角形块状耳飾の津軽海峡域における濃密分布は、中期初頭以降の糸魚川産ヒスイの津軽海峡域の濃密分布に先行して現れる事象と指摘しており、そういう観点からも三角形块状耳飾の製作地が北陸であった可能性も高い。いずれにしても、さらなる石材産地分析の進展が必要であろう。

垂飾・玉類には、ネフライ特製緒縫形垂飾1点、ヒスイ特製垂飾1点、滑石製籠状垂飾3点のほか、13点の垂飾・玉類がある。これらは、琥珀製品が3点あるほかは、滑石製品である。块状耳飾の再加工品も複数含まれているが、別に滑石の原石や円盤状の素材、研磨痕のある緑色泥岩も存在することから、単純な形態の玉類は当遺跡でも製作されたと推定される。

ただし、ネフライ特製緒縫形垂飾の穿孔法は、一方向からの長軸穿孔であり、ヒスイの加工技術に繋がるものと推定され、ヒスイ特製垂飾とともに北陸からの搬入である可能性が高い。また、籠状垂飾のうち1点は加工が入念で、これも搬入品とみられる。  
(福井・柳瀬)

#### ウ. 館崎遺跡出土の長野・霧ヶ峰産黒曜石製石器

黒曜石原産地分析によって、長野県霧ヶ峰産黒曜石が石器の石材に使用されていることが確認された。館崎遺跡と霧ヶ峰は直線距離で約620km離れており、平成28年までの確認例として最北に位置するとみられる。出土地点は、前中期葉～中期初頭とみられるB盛土下部（J7区）である。今回確認されるまでは、青森県三内丸山遺跡で確認された製品が最北例であった。

館崎遺跡の調査では、1482点の黒曜石製石器が出土した。内訳は、石鐵87点、石槍又はナイフ12点、石錐7点、つまみ付ナイフ44点、籠状石器1点、スクレイパー7点、両面調整石器6点、楔形石器13点、Rフレイク59点、剥片石器片4点、石核4点、異形石器21点、ブレイク1217点。そのうち任意の20点について原産地分析を行った。任意抽出ではあるものの、石質を肉眼分類し、一定程度の本州産、特に青森県産黒曜石が含まれることを予想して分析を依頼した。結果、18点が北海道産（赤井川13点、置戸所山4点、十勝1点）で、2点が本州産とされた。本州産とされたもののうち、1点はフレイクで森県出来島・鶴ヶ坂産、もう1点が石鐵で長野県親音沢（霧ヶ峰）産とされた。ちなみに、津軽海峡沿岸の遺跡調査で、青森県産黒曜石が確認された遺跡は、ほかに木古内町大平遺跡、北斗市館野6遺跡がある。大平遺跡では、両面調整された石器片に利用されていた。

館崎遺跡で石鐵は1305点出土した。形態は、有茎鐵が主で827点、木葉形鐵178点、無茎平基～弱回基鐵13点、無茎強回基鐵7点などであった。無茎強回基鐵は、側縁が外湾するものが主で、直線的なものは長野県産黒曜石製品1点（0.07%）だけであった。また、石材も、83%が頁岩製で、黒曜石製品は約7%である。無茎回基鐵は、大木式土器文化圏以南で顕著に利用されたとみられるが、地域によって微妙に形態が異なる。の中でも、本例は長野県で出土した石鐵の形態に最も近いと思われる。なお、北海道の円筒土器文化圏で無茎回基鐵が普及しなかったのは、石鐵製作技術や矢柄の素材の問題もあると思うが、それよりも、イノシシが生息していないかったといった狩猟対象の差に依っていると考えている。今後検討ていきたい。

一方、青森県三内丸山遺跡では、1万点以上の石鐵が検出されているが、長野県産黒曜石製無茎回基鐵は33点（1万点中として0.33%）出土している。やはり石材の9割以上が頁岩で、黒曜石は青森県産35点のほか、北海道産（赤井川産19点、置戸3点、豊泉1点）も用いられている。

今回の長野・霧ヶ峰産黒曜石製石器の発見は、石材のみならず、狩猟技術が込められた実用品が広域に流通した事例として貴重である。道具だけが移動したのか、「長野県」人とともに移動

したかは不明であるが、点数の少なさからすると、青森県域まで達した道具の一部が「青森県」人ないし「北海道」人によって持ち込まれたと考える方が自然かもしれない。ネフライ特製块状耳飾、ヒスイ特製垂飾の出土と関連して、本州中部産品の北部方面への流通の実態を示す重要な成果の一つと言える。

(福井)

## エ. 館崎遺跡出土の剥片石器と礫石器

石器の所属時期は、大きくは縄文時代前期後葉～中期中葉（以下「前期～中期」と後期前葉（以下「後期」）で、早期後葉とみられるものも少數含む。前期～中期以外と考えられる石器の比率はわずかであり、大雜把ではあるが、出土総数でみた石器組成はおおむね前期～中期の組成を反映していると判断される。

定形的な石器（Rフレイク・石核・剥片・有意の礫・礫を除くもの）では、スクレイバーが 6,949 点（38.5%）と突出して多く、たたき石 2,037 点（11.3%）、扁平打製石器 1,940 点（10.7%）とで組成の主体をなす。石槍またはナイフ・箇状石器・両面調整石器・北海道式石冠が一定数みられること、石錘・礫器が少數ながら含まれることも特徴であり、円筒土器に伴う石器の一般的な様相を呈しているといえる。また、石核の出土量が多く大形のものが含まれること、礫石器に用いられる石材の多様性は、石材の豊富な立地を反映している。

石鎌は、有茎凸基・平基の側縁が外湾するものが主体で、木葉形～ひし形のものもやや多い。体部の長幅比が 1:2 以下と比較的短く、側縁の外湾が明瞭なものが前期～中期、長身のものは後期の土層から出土する傾向にある。長野県産の黒曜石製のものについては前項に詳述した。

石槍またはナイフは、無茎で幅広・薄手のものが主体。軟質の白色泥岩を他の器種より多用している。粘板岩や白色泥岩製の模造品ともみられるものは、有茎のものがある。

つまみ付きナイフは縦型の周縁加工が主体。長さの短いものやミニチュアが目立ち、ミニチュアは通常サイズの形態・調整の種類をほぼ網羅している。

スクレイバーは外湾刃と直刃が大多数で、内湾刃・抉入石器・鋸齒縁石器が少數含まれる。長辺に刃部のある削器が主体。使用光沢は全体で約 15%、直刃・外湾刃中では約 30% ある。定形的なものとして、D 字形を呈し、全周が調整されるものと、長辺が外湾～直刃で長軸端に抉入部を作り出すものがあり、光沢が前者で 90%、後者で 40% に残る。

石核は 4,269 点と非常に多く、1 kg を超える大形のものや、剥片剥離の進まない状態での廃棄が目立つ。頻繁に打面・作業面を入れ替えることで直方体状となるものが多数を占める。高さの低い円錐形状のものが特徴的である。

石斧は撥形が主体で、短冊形がやや多い。両刃と弱凸強凸片刃が多く、明瞭な片刃は少ない。たたき石は素材の形状や使用位置が多様である。石核や両面調整石器を転用するものが TH-4 中央ビットからまとめて出土している。大形で三角柱状の素材の稜を使用するものは、森町石倉 1 遺跡、北斗市押上 1 遺跡で後期初頭～前葉に伴うものとして注目されている。

すり石は、①扁平～楕円体の礫の平坦～やや凸面を使用するものが主体で、②側面にすり面をもつもの、③側面にすり面をもち長軸端が調整されるものがやや多い。①は後期前葉の土層から出土したものがやや多く、後期初頭の押上 1 遺跡においてすり石の主体をなすことと一致する一方、本遺跡では中期前葉の堅穴住居跡中央ビットからの出土例もある。

扁平打製石器は、典型的な半円状を呈するものは少なく、板状の玄武岩や安山岩の礫を素材とし、刃部調整以外には、側辺に若干の調整を加える程度のものが多数を占める。扁平打製石器とすり石③及び石斧には、半割破片の割れ面に滑らかなすり面が残されるものがある。

北海道式石冠は、全面整形された半円形のものが主体で、ほかに、全面整形の幅広がりで比較的大きなもの、整形部分が限られるものがある。道南部の北海道式石冠については、全面を敲打した大形のものは円筒下層c・d式期にみられ、中期のものは小型化し敲打による溝状加工によって把手を作出しているとされ（小島 1999）、今回の出土例は前期後葉のもの、中期のもの、その中間的なものからなるといえる。

礫器は短辺を刃部とするものが多く、明瞭な使用痕があるものもある。円筒土器下層式主体の木古内町大平遺跡では一定の出土数があり、円筒土器下層式に伴う特徴的な石器と考えられる。

台石石皿は、緩やかな凹面～平坦面をなし、滑らか～ざらついたすり面のものが多い。使用面の一部に楕円形の窪みをもつものがあり、局所的な深い窪みを伴う。前期～中期の住居跡の床面に据え付けられたものは、使用痕の明瞭なものが多いが、わずかなたき痕のみのもの、使用痕の不明瞭なものもみられる。また、いわゆる「脚付き石皿」の破片4点が後期の土層から出土している。

**アスファルトの付着：**石鎚 290点（石鎚のうち 22.2%）、石槍またはナイフ 9点（1.9%）、石錐 25点（5.3%）、つまみ付きナイフ 1点（0.1%）などで確認された。有茎の石鎚では 827点中 278点（34%）、無茎で強い凹基では 7点中 4点（57%）と非常に高い付着率を示す。石鎚における時期ごとの付着率は、前期末葉の9%から中期中葉の41%へ加速度的に増加し、後期前葉は46%とさらに高率となる。

石鎚への付着率が10%を超える遺跡は、アスファルト産地から「50km以内の近距離」あるいは「50～100kmの中距離」に位置する遺跡であることが分かっている（福井 2010）。館崎遺跡では、近～中距離の様相に近い。アスファルトは油田地域で産出し、渡島半島においては木古内・森・八雲に産油地が知られており、知内町小谷石にも湧出の記録がある。また、青森県深浦町と蟹田町石浜地区ではアスファルト露頭が確認されている（福井前掲書）。館崎遺跡からは、最も近い木古内町釜谷で直線距離 38km、近隣の八雲町山越、青森県深浦町で約 90km であり、これらのいざれかから入手したと考えられる。

**石材：**礫を除いた石器の石材を点数でみると、86%が頁岩、10%が珪質砂岩である。他の石材は1%以下で、多種にわたる。剥片石器では黒曜石、珪化岩、玉髓など、礫石器では安山岩、玄武岩、チャート、花崗岩（花崗閃緑岩）、緑色泥岩（アオトラ石）、青色片岩、片麻岩、ホルンフェルス、ドレライト、普通角閃石岩など、石製品では軽石、滑石などがあり、この他ヒスイ、ネフライト、ロジン岩、コハクがごく少数ある。重さでみると、安山岩が55%、頁岩が16%、玄武岩が6%で、他の石材は5%以下である。安山岩と玄武岩は、円磨されたものの他、板状節理の角礫～亜角礫も多い。これらの一部は、次項の通り近隣の河川で入手可能であることがわかった。遠隔地の石材としては、黒曜石・青色片岩・緑色泥岩・ヒスイがある。黒曜石については前項に詳述した。青色片岩は石狩川中流域、緑色泥岩は平取町糠平川流域のものと考えられる。ヒスイは、「糸魚川一青海地域以外の産地の岩石が使われたものとは考えられない」とされており（松原ほか 2004）、今回の岩石学的分析においても、糸魚川産として矛盾はないとの結果が得られた。

**使用痕：**光沢はスクレイパー・つまみ付きナイフ・箇状石器の刃部に顕著にみられ、こうした光沢はイネ科植物の刈取りなどに伴って形成されとされる（坂本 2002）。体部に光沢がみられるのは、石槍またはナイフ・箇状石器・スクレイパー・石斧で、体部の最厚部・稜部にあり、着柄（支持・固定）、鞘の装着などによるものと考えられる。摩耗は、石錐の機能部に顕著にみられ

るほかは、光沢と共に共通の器種・付着位置にみられる。また、異形石器は側縁と体部に摩耗がみられるが、使用によるものかは判然としない。線条痕は、石錐・つまみ付きナイフ・スクレイバー・箇状石器・石斧にみられた。石錐は機能部の摩耗部分に器体長軸に直交してみられる。つまみ付きナイフ・箇状石器は刃縁に直交する。スクレイバーでは刃縁に並行するものと直交するものがある。石斧では刃縁に直交ないしは斜交し、片面に残るもの、両面に残るものがあった。(柳瀬)

#### 才、館崎遺跡周辺の石材

館崎遺跡周辺には、石器に利用できる石材が豊富であるため、主に利用された珪質頁岩や安山岩以外に、砂岩・粘板岩・チャート・泥岩・凝灰岩・玄武岩・玉髓・珪化岩・花崗岩・蛭石・石英岩・閃綠岩・片岩・滑石・ホルンフェルス・ハンレイ岩・角礫岩などの多様な石質の石器が認められた。そこで、福島町福島川以西～松前町大沢川以東及び大鷲津川、代表的な海岸礫浜において石材調査をごく簡単に実施した。松前側は、特に川毎に出現する石質が異なり、詳細な河川礫調査を行えば、礫石器の石材調達の状況が明らかになるものと考えられる。今後の課題としておきたい。

・知内川中流：粘板岩・石灰岩・玄武岩（千軒石）・閃綠岩・花崗閃綠岩・泥岩・チャート・砂岩・蛇紋岩・石英岩など多様な礫からなる。なお、上流のマンガン鉱床に伴って、淡黄褐色の珪化岩が存在することを、山口（1985）が指摘している。

・浦和～岩部海岸：安山岩礫を主とする。

・福島川河口：頁岩・安山岩・ホルンフェルス・チャート・玉髓などの亜円礫～円礫を主とする。珪質頁岩の礫が多く、大きさから考えて、より上流が産地となる可能性が高い。

・白符川河口：チャート・安山岩・頁岩・珪質頁岩・「白色泥岩」・凝灰岩・砂岩・粘板岩・玉髓などの亜角礫～円礫を主とする。凝灰岩は、遺跡から多く出土したものと類似するが、河口では円礫となっている。採取は、上流の露頭周辺で行われたとみなせる。珪質頁岩も、上流に産地があるかもしれない。

・吉岡川上流：玄武岩の角礫を主とし、粘板岩・凝灰岩・頁岩・砂岩などの円礫もある。玄武岩は、この周辺の露頭から採取された可能性がある。なお、産地は不明であるが、多く出土した珪質砂岩も、露頭から採取されたとみられるので、遺跡周辺に産地の存在が想定される。

・吉岡川下流～河口：主に拳大以下の礫からなる。

・松浦展望台・戸谷覆道～松浦覆道間の海岸：粘板岩・チャート・ホルンフェルス・花崗閃綠岩・硬砂岩などの円礫を主とする。チャート円礫や粘板岩製品、ホルンフェルス製品などの産地となる可能性がある。

・白神岬：チャートの岩塊があり、粘板岩・石英岩・珪化岩などの円礫からなる。

・松前町白神の海岸：チャートの岩塊があり、チャート・粘板岩・玄武岩などの円礫～亜角礫を主とする。

・松前町ズスキの沢河口：粘板岩・チャート・花崗閃綠岩・硬砂岩・花崗岩・メノウ・角閃石岩・斑駁岩などの亜角礫～円礫を主とする。

・松前町荒谷川河口：花崗岩・花崗閃綠岩・单斜輝石岩・安山岩・凝灰角礫岩・チャート・斑駁岩などの亜角礫～円礫を主とする。花崗岩製品の石材の由来となる可能性がある。なお、下流にはマンガン鉱床がある。

・松前町橋の下川河口：拳大以下の礫からなる。

・松前町大沢川河口：花崗閃綠岩・硬砂岩・チャート・粘板岩・角閃石岩・斑駁岩などの円礫を

主とする。なお、上流にはマンガン鉱床がある。礫の大きさから斑臘岩製品の石材の由来となる可能性がある。

・松前町大鴨津川：安山岩・チャート・粘板岩・花崗閃緑岩などのほか、滑石の巨礫が中流域で採取できる。玦状耳飾など玉類の石材の由来となる可能性がある。（福井）

#### 4. 館崎遺跡の骨角器と動物遺存体

館崎遺跡からは、297点の骨角器が検出された。内訳は、漁具とみられる刺突具56点、鈎頭34点、釣針43点、工具である骨針27点、骨錐3点、骨箇3点、剥離具1点、装身具である管玉2点、髪針1点、垂飾1点、製作残渣や製作途中とみられる鰐骨製品14点、器種不明25点、未成品33点、残片54点からなる。

鈎頭には、先端が尖頭のものと、鈎先鎌装着のための根ばさみを持つものがあり、後者がやや多い。また、今回の資料からは、根ばさみの作出に、穿孔技法が用いられていることが確認された。玦状耳飾の切目作出と同様な手順で、先に穿孔し、その後に溝切りをすることで、不用意な割れを防いでいたとみられる。さらに、海獸脛骨・橈骨からの材取りを推定することができた。

釣針は、単式と結合式があり、後者がほとんどを占める。縄文時代前期の道内の遺跡でこれほどの点数の釣針が検出された遺跡は初めてである。ただし、結合式釣針の鈎先部ばかり出土しており、軸部は数点しかない。そこで軸部に、オットセイ肋骨をそのまま使用した可能性を想定してみた。

刺突具や骨針は、断片的なものがほとんどであるが、多様なものが存在している。また少ないと、骨錐・骨箇・剥離具も確認された。装身具類も多くはないが、回転による盲孔装飾を加えた髪針・垂飾の存在が注目される。未成品、残片も多く、なかでも棒状の製品が積極的に製作されていた状況がうかがわれる。鰐骨製品は、明瞭な加工痕・使用痕は見いだせなかったが、簡易な台や棒として利用された可能性も考えられる。

ホホジロザメの遊離第2歯5点は、隣接したE1区・E2区のm2(5)層から出土したもので、いずれも歯先1cmにだけエナメル光沢を残していた。また、E1区からは、体部中央に長軸に直交する複数の線状痕が残るものも出土している。この状況から、これらは着柄された可能性が考えられる。着柄されたサメ歯は縄文時代晚期の例であるが宮城県北小松遺跡で確認されている。

北海道円筒土器文化期の骨角器は、福島町豊浜遺跡、木古内町釜谷遺跡、函館市サイベ沢遺跡、函館空港第4遺跡、八木A遺跡、八雲町コタン温泉遺跡、栄浜1遺跡、洞爺湖町入江貝塚、伊達市北黄金貝塚、北黄金2遺跡、若生貝塚、室蘭市ポンナイ遺跡、白老町虎杖浜2遺跡、苦小牧市静川22遺跡で確認されている。しかし、点数が多いものは噴火湾沿岸に集中し、津軽海峡沿岸ではごく限られていた。そのため、今回館崎遺跡で300点近い骨角器が検出されたことは、大変重要な成果と言える。

動物遺存体は、貝類（計数不能）、魚類（7334点）、両生類（10点）、鳥類（1407点）、哺乳類（32563点）が検出された。そのうち、点数のみでみると、魚類のアイナメ科・フサカサゴ科、哺乳類のオットセイが各1000点以上出土している。

貝類は、アワビ・クボガイ類からなる。アワビは、遺跡周辺が産地であったらしく、松浦武四郎の渡島日誌（松浦 1865）に現れ、また大正期にも記録されている（渡島教育会 1918）。また今回確認できたような大形のアワビが生息できる地域は海藻の量が多い海域であったとされる（宮本 2004）。クボガイ類は、遺跡周辺の海岸にも多く生息しており、現在でもよく食べられて

いる。さらに、今回遺体は得られなかつたが、ウニ類やイカ・タコ、昆布などの海藻類も江戸時代には産物として挙げられており、縄文時代も利用されたものと推定される。

魚類は、アイナメ科（アブラコ）・フサカサゴ科（ソイ類）を主体に、タイ科・サメ類・サバ科・ニシン科・カレイ科などがある。ほとんどが地先周辺の磯や沿岸で十分な漁獲があつたと考えられる。近現代の遺跡周辺の漁業は、大正期では、イカを主とし、タコ・ソイ・アイナメ・アワビなども漁獲していたとされる。ただし、当時より30年前まではニシン漁が主であったと記録されている（渡島教育会1918）。昭和初期では、イカ、イワシ、ワカメ、コンブを主に、サバ、タラ、サメ、タイ、サケ、マス、カレイ・ヒラメ、タコ、ナマコ、シラウオ、ホッケ、アブラコ、ソイ、スズキ、イカナゴ、ウミタナゴ、アワビ、ノリ、テングサ、フノリ、ギンナンソウが漁獲されていた（津田1934）。つまり、水産物の利用状況は縄文時代と大きくは変わっていないと考えられる。ただし、近・現代ではイカ、イワシ、ニシン、海藻類が主要な漁獲物になっているのは、乾燥させるなどして商品として移出するためである。

なお、現代での漁期は、アイナメ属（アブラコ）、フサカサゴ科（ソイ類、ガヤ）、カレイ類は通年で、ホッケ・ニシン・ウミタナゴが3～5月、サケが8～12月、サバ10・11月、イワシが10～12月、カジカが12月、アワビ10～3月とされる（北海道みんぞく文化研究会1988）。

鳥類は、中型ウミスズメ科を主体に、中型カモ科、カモメ科、ウ科、ミズナギドリ科などを含む。いずれも福島町域周辺で今でもみられるものであり、地先に群れたものを捕獲したと考えるのが自然である。ただし、ウトウとみられる中型ウミスズメ科が多いので、繁殖地で捕獲された可能性もある。

哺乳類は、オットセイ主体で、ほかにニホンジカ（エゾシカ）・イルカ類・クジラ類・アザラシ類・アシカ類などが得られている。種同定まで至らなかつた骨においても、海獣類が大半を占めた。また、オットセイのなかでも、幼獣、雌の若獣が多く捕獲されていた。これらは越冬のために津軽海峡の湾に集まつた群れを捕獲したものと考えられる。ニホンジカは、オットセイに次ぐ点数があるが、その点数差は著しく、その他多様な獣物の一つという位置づけになる。イルカ類も点数は比較的多く、積極的に捕獲していた可能性もある。焼けていない骨では、アシカ類・クジラ類の出土が目についた。アシカ類は若い個体を主とするようであった。クジラ類は漂着個体を利用したのであろう。

北海道における円筒土器文化期の動物遺存体についても、まとった報告は八雲町コタン温泉遺跡、伊達市北黄金貝塚、白老町虎杖浜2遺跡、苫小牧市静川22遺跡に限られたことから、津軽海峡沿岸の生業を知るうえで、こちらも大変重要な成果と言える。

さらに重要な点は、骨角器、動物遺存体のいずれも盛土構造から焼けた状態で出土したことにある。骨角器や動物遺存体は、一般的に貝塚や砂丘など、カルシウム類が遺存しやすい環境でないと分解してしまう。しかし、焼成すると骨や角の主成分が変化して、他の無機物同様に遺存するようになる。それにしても、焼成の過程で分解される成分があるなどして、3割ほど収縮し、また脆くなるので、細かく破片化する場合がほとんどと言える。また、たいていが偶発的に被熱するために、釧路町天寧1遺跡での被熱率は貝塚出土動物骨及び骨角器で約2割であった。そして、一般的な焼骨の出土傾向は、部位の分かた四肢骨が少なく、指骨や手根骨・足根骨・種子骨などの小さな部位が主体となる。

ところが、館崎遺跡では、焼けていてもよく形態を保持しているものが多く、そのためか点数も多く検出することができた。さらに部位の偏りも少ないので、貝塚出土資料に準じた遺存状況

を示している。ことさらに特殊なのは、頭蓋骨や下頸骨も焼けた状態で、しかも同定可能な遺存状況で確認されたことである。この事は、盛土遺構に含まれる焼成物が、特殊な生成過程、廃棄過程の影響を受けたことを示唆している。つまり、偶然に被熱したわけではなく、目的的に焼成され、丁寧かつ速やかに覆土された状況が想定されるのである。このような状況は、骨角器や動物遺存体の廃棄にあたって、儀礼的な取扱いがなされたことを示していると考えられる。

骨角器の出土状況と動物遺存体の出土状況を合わせてみると、当時の獣・魚が海産物を主対象としていたことが推定される。鋸頭のうち先端が尖頭のものは、オットセイの幼～若齢に対応したものと考えられる。また、釣り上げた魚に対しても用いられたかもしれない。また、石製鋸先端が付されるものは、より皮膚が丈夫なオットセイの雌成獣やニホンアシカの若齢に対応していた可能性がある。釣針では、単式釣針はタイ類などに対応していたとみられる。一方、結合式釣針は、アイナメ類やフサカサゴ類、ヒラメやカレイ類のように、より口の大きな魚類の漁獲で効果を発揮したものと推定される。刺突具は、一概には言えないが、鳥骨製の華奢なものは鳥獣、厚手の頑丈なものは魚類の突き漁などに用いられたのではないかと推定している。

なお、石器類のうち、刺突具系である石鎌や石槍などについても、主に海獣獣、鳥獣、漁撈に用いられたと考えられる。シカがより多く利用された地域と比較することで、石器形態と機能差の関係について明らかにできるかもしれない。今後の課題としておく。

(福井)

##### 5. 館崎遺跡の植生環境

館崎遺跡の堆積物に含まれる、プラントオパール・花粉の分析をし、また炭化種実同定を行った。

・**プラントオパール分析**: B 盛土直下およびB-Tm 下位層において林床ないし開放地環境に生育するクマザサ属型のササ類(チマキザサ・チシマザサ)が非常に多くあり、僅かに明るく開けた環境に生育するネザサ節型のササ類(アズマネザサなど)やウシクサ族(ススキ・チガヤなど)、キビ族(栽培種～雑草類)が含まれる状況が確認された。また、縄文時代前期末葉～中期前葉の盛土層においては、クマザサ属型が大幅に減るだけでなく、ネザサ節型のササ類やウシクサ族も減っていた。さらに、縄文時代中期中葉～B-Tm 下位層にかけては、全体に植生が復元していく状況が推定された。盛土直下及びB-Tm 下位層におけるクマザサ属型プラントオパールの濃集の原因を、分析者は周囲の森林土が供給されたと考察しているが、むしろこの状況が自然な状態で、盛土層で確認されたクマザサ属型のプラントオパールが少ない状態が人為環境であったと考えられる。

・**花粉分析**: 縄文時代前期末葉に堆積したとみられるA 盛土下部土層およびB 盛土直下土層においてクリ花粉が多量に検出された。その地点においてはクリ花粉以外ほとんどみられない状況で、クリの純林が存在していたとみられた。さらに、縄文時代中期中葉ないし後期前葉に堆積したとみられる道路跡直上土層においてもクリ花粉が 50%を占めるため、同様にクリ林の存在がうかがわれた。この状況からすると、縄文時代前期末葉の TH-10 廃絶段階には、すでにクリの純林と集落が重なっていて、中期中葉ないし後期前葉まで維持されたと推定される。なお、中期中葉においては、ハンノキ属、トネリコ属による湿地林、ウコギ属といった低木、シナノキ属などの落葉広葉樹が遺跡周辺に広がっており、イネ科やアブラナ科の草本も生息していたことが分かる。

縄文時代前期中～後葉(円筒土器下層 b ~ d 式期)の花粉分析については、近隣の豊浜遺跡でも行われた(山田 2004)。植生を推定するには不十分な種・点数しか得られていないが、イネ科・

ヨモギ属・タデ科・キンポウゲ科などの草木花粉が多く確認されている。樹木花粉はハンノキ属、コナラ亜属を主に、モミ属・トウヒ属・マツ属・カバノキ属・カエデ属・シナノキ属が確認されている。

後期前葉では、集落内クリ林は減少し、シナノキ属のほかサワグルミ属ークルミ属、クマシデ属ーアサダ属、カバノキ属、ニレーケヤキ属、カエデ属といった多様な落葉広葉樹、ハンノキ属、トネリコ属のほかヤナギ属を含む湿地林、ウコギ属のほかヌルデ属ーウルシ属を含む低木類が拡大していったとみられた。草本もイネ科、アブラナ科のほかヨモギ属、キク亜科が増加していく。

後期前葉の花粉については、過去の館崎遺跡の調査において山田（1986）が報告している。その際はシナノキを主としたハンノキ・ブナ・ミズナラ・ハルニレ・アオダモ・サワシバ・コブシ・イタヤカエデなどからなるシナノキーミズナラ林が分布したと推定された。僅かにオニグルミ・クリも存在し、草地にはオオヨモギ・ススキ・エゾニュウ・チシマアザミ・カラマツソウからなる高草群落が繁るとともに、オオイタドリ・ウド・アカザも生息していたと報告している。また、断片的な豊浜遺跡の結果（山田 2004）も、同様な植生を示していると思われる。

その後、時期ははっきりしないが、縄文時代後期前葉～B-Tm 降灰以前の段階において、クリが僅かになる以外は、花粉の組成は大きくは変わらない。しかし、草本の比率が高まったようである。またソバ属の花粉が確認されたことから、畑地にされたとみられる。なお、スギ花粉が縄文時代中期中葉以降に含まれているが、天然分布を越えて生育していたというよりは、津軽海峡を越えて飛散してきたと考えた方が良いように思われる。

B-Tm 上位の花粉は、過去の館崎遺跡の調査において山田（1986）が報告している。ハンノキ・ブナ・オニグルミ・サワグルミ・ミズナラ・ハルニレ・シナノキを主とし、サワシバ・クリ・コブシ・イタヤカエデ等を交えた落葉広葉樹林が分布したと推定された。

現生の植生については、過去の館崎遺跡の調査において棟方（1985）が報告している。遺跡周辺には杉が植林され、ほかにエゾイタヤ（スギ）林、エゾイタヤーミズナラ林、クリ林、クリー・ミズナラ林、ミズナラーシナノキ林、ミズナラ林が確認されている。また林床植物にクマイザサが存在し、いずれの樹林でもハリギリ、ムラサキシキブ、ガマズミ、オオバクロモジ、キタコブシがみられたことから、ブナーチシマザサ群団であるが、ほとんど二次林となっているとした。

・炭化種実：盛土遺構、竪穴住居の炉跡、土坑覆土、焼土、集石、フレイク集中、小ピット覆土などから採取した土壤を浮遊水洗選別して検出した。樹木種実は、二次林種か人里周辺に生育するもので、草本は雜草種が主体とされ、遺跡周辺の植生が人為的擾乱を著しく受けている状況が推測される。

食用種では、オニグルミの出土量が圧倒的に多い。ほかに、ブナ科、クリ、マタタビ属、マタタビ、ヤマグワ、キイチゴ属があり、栽培種としてヒエ属、栽培可能種としてシソ科がある。

オニグルミは、TH-30（旧）の地床炉の上に厚く堆積した灰に混じって 500 点以上の破片が検出された。ほかに 100 点以上が検出されたのは住居覆土や盛土層があるので、中身を取り出した殻を、燃料としたのちまとめて廃棄された可能性も考えられる。

ヒエ属は、縄文時代早期中葉には函館市中野 B 遺跡で確認されており、前・中期には北海道南部において広く利用されていたとみられる（山田・椿坂 2006）。また、土器圧痕の検討を行った小畠弘己氏によって、胎土中に多量のヒエ属が含まれる土器が見いだされた。この状況から言っても、当時ヒエ属が食用にされていたとみられる。

タデ属、アカザ属、サナエタデ属、イネ科なども多く検出された。これらについても食用にされた可能性は残っているが、TH-24 覆土下部では、これらの炭化種実を多量に含む炭層が薄く堆積していた。この場合は、雑草として繁茂したものを草取りし、集積乾燥させたのちに、焼却処理した可能性も考えられる。ちなみに、スクレイパーやつまみ付ナイフなどには、コーングロスとみられる強い光沢が残されたものがあった。このことも考慮すると、イネ科植物の刈取りが行われていたことが確実視される。

クリについては花粉の項で触れたとおりであるが、種実の点数は少ないものである。集落とクリの純林が重複する状況であれば、遺体で残っている以上に利用されたと推定される。

ニワトコ・マタタビ属・ブドウ属・ヤマグワ・キイチゴ属といった多様な液果も検出された。生食されたであろうが、ニワトコについては、三内丸山遺跡で醸造の可能性が指摘されている。  
・クリの利用について：今回確認されたクリの花粉の増減については、青森県陸奥湾平野南部各地でも確認されており（吉川ほか 2006）、円筒土器文化圏に共通したクリの育成・管理が行われていたことは確実である。また、山田（1993）はクリが人為的に北海道に持ち込まれたと考えており、時期は円筒土器下層 c～d 式期を想定している。まさに、館崎遺跡の形成開始時期と符合している。

クリ林の育成について、門口（2011）は植えてから数年が重要で、雪囲いや下草刈りをしなくてはならないが、一定の成長段階に達すると、下草も生えなくなるので、ほとんど手入れはいらなくなるとする。館崎遺跡の状況では、各盛土遺構が関係していたとも解釈される。P 盛土というロームを貼る楯状盛土の場合、クリ林の下草管理を目的としたとも考えられる。楯状盛土の範囲は、住居 I 群の時期には住居が構築されるものの、その後、盛土行為も、住居構築もされずに推移する。一方、住居 II 群の範囲では上下に数軒重複するように、同一地点で繰り返し住居が構築されていく。この極端ともいえる土地利用の偏りが、その大きな根拠となる。また、A～C 盛土の堆積行為、堆積行為の対となる削平行行為についてもひょっとすると、クリ林の育成には必要だったのかもしれない。

クリの実保管に關係すると考えられる事象として、土器の大量製作と大型化、住居から検出される砂の存在が挙げられる。クリを収穫した後に重要なのは、虫害を防ぐことにある（門口 2011）。そのための技術は、大量に収穫されるクリの育成と同時に必要になり、その後試行錯誤がなされたと考えられる。中でも、砂は保管に際して利用された可能性が考えられる。クリの芽を出さないで生のまま保管するには、水漬けにして虫を殺したものを、よく乾し、砂の中にクリを埋めたという。埋める場所は、土中のほか、桶や甕、かます、箱などの容器の場合もある（和田 2007）。つまり、上記の事象が関係していたと推定されるのである。円筒下層式期の住居床面やピットに砂が存在することは以前から注意されてきた（高橋 2001）。そして館崎遺跡でもいくつかの住居で確認された。この砂は、火山噴出物の流水堆積物である砂（末光 2002）、河川砂（紀藤 1999）といった、遺跡近隣で採取可能な砂と推測される。また機能について、炉に關係するもの（西脇 2012）、礫石器の研磨剤（高橋 2001）、調理に関わる施設など（末光 2002）と推定してきた。いまだ決定的な機能を言い当てるまでに至っていなかったが、生クリの貯蔵に用いられた可能性があることを指摘する。

虫害を克服して、保管した後は、加工・調理が問題になる。磨石・敲石類の大量製作や、住居床据え付け台石の消長といった事象は、クリの大量収穫と、その後の調理のためという可能性も強く残る（上條 2015）。また、館崎遺跡での焼けた大量のチャート円礫の存在は、石蒸調理が確

立していたとみられるが、例えば蒸栗として調理していたのかもしれない。あるいはこれに饗宴（川島 2015）が伴った可能性も否定できない。

最後に、何故集落に重なるようにクリ林が育成・維持されたのか、考えを示しておきたい。ある土地に、新しい植物を持ちこむということは、大きな困難が伴う。自然分布の過程では、周辺環境に適応しながら分布を広げていくが、人間が分布を広げた場合には、人為的な関与が必要になると考えられる。また、クリは、実だけでなく葉を食する虫害も問題であるし、獣害も大きい。本州の場合、山中ではツキノワグマ、イノシシ、サル、アナグマ、ネズミ類などの被害を受ける。北海道においては、上記の大半が生息しないが、恐らく本州で開始されたクリの育成・維持の技術では、獣害防御のために、ムラにクリ林を形成するという選択肢が働いたのではないかと推測される。したがって、北海道に導入された際にも、同様な措置がなされた可能性が大きいのではないか。

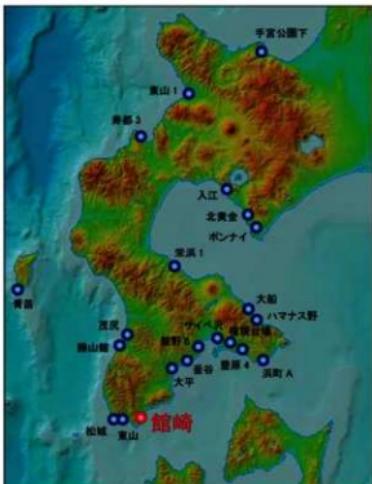
このようにクリ利用という観点から、円筒土器文化を眺めるならば、今までと違った技術複合を想定することができる。他の遺跡での成果ともども検討していくことが課題である。（福井）

## VI 館崎遺跡の遺構変遷

### 1. 拠点集落遺跡としての館崎遺跡

館崎遺跡は、北海道の円筒土器文化圏の中でも松前町域の遺跡とともに、北海道最南部に位置している。また、対岸の童飛岬を間近に臨み、近世では沖之口番所が設置された立地から、本州と密接な関係を持っていたと推定される。

さらに館崎遺跡は、縄文時代前期末葉以降中期中葉までの約500～700年間継続して居住された遺跡である点も注目される。四土器型式以上長期間継続した集落は、相当数の竪穴住居跡が残され、大規模な盛土遺構が伴うことを特徴とするが、その分布をみると、岬などによって区分される中規模地形の範囲に1～2カ所程度存在している。このような状況から、長期安定集落は、当時において拠点的な位置付けがなされていたと考えられる。その位置付けの根拠となるものは、おそらく地勢の優位性と集落の安定性によると考えられるが、館崎遺跡においては、津軽海峡渡海に有利な立地と、豊富な海産資源を基礎とした上で、集落内クリ林を成立・維持できたことが重要であったとみられる。そして、クリなど植物の永続的な育成が、継続居住において主流とみられる数十年単位での回帰的居住から、数百年単位での連続的居住を可能にし、地形を改変してしまうような遺跡を残したのではないかと推定している。



図X-1 主な拠点集落遺跡の分布

（出典：地理院地図色別標高図。海域部は海上保安庁海洋情報部の資料を使用して作成）

## 2. 穫穴住居の型式と変遷

51 軒確認した竪穴住居跡は、形態とベンチ状構造の有無によってⅠ類～Ⅳ類に4区分できた。また縄文時代前・中期の住居跡は、長軸方向によって大きく2群に分けられた。住居Ⅰ群は、長軸が海岸線に平行する住居群で、住居Ⅱ群は、長軸が海岸線に直交する住居群である。以上の住居型式・長軸方向のほか、住居の切り合いを考慮すると、住居の変遷を追うことができた。

ただし、住居Ⅱ群の住居の切り合い関係は複雑で、調査の過程で認識困難であった部分があった。また、自然堆積のローム層を掘り込まないで構築された住居が、建て替えを繰り返すので、その範囲を平面で把握しにくく、複数の住居を1軒として調査してしまった例も多くある。また恐らく、認識できなかった住居跡もまだ数軒存在したものと考えている。これらを前提に、まずは住居型式と長軸方向によって分類し、分類毎の新旧関係を整理する。

・Ⅰ群Ⅰ類：Ⅰ類住居は、楕円形～隅丸方形、ベンチ状構造をもたないもので、時期は前期後葉～末葉。TH-10・11・19・24・54が相当する。切り合い関係はみられないが、中央ピットをもつTH-19・24は脈絡からより新しいとみられる。またTH-11覆土には大量の円筒下層c式土器が含まれたことから、1段階古いとみられる。したがって、1軒1段階→2軒2段階の変遷が想定される。

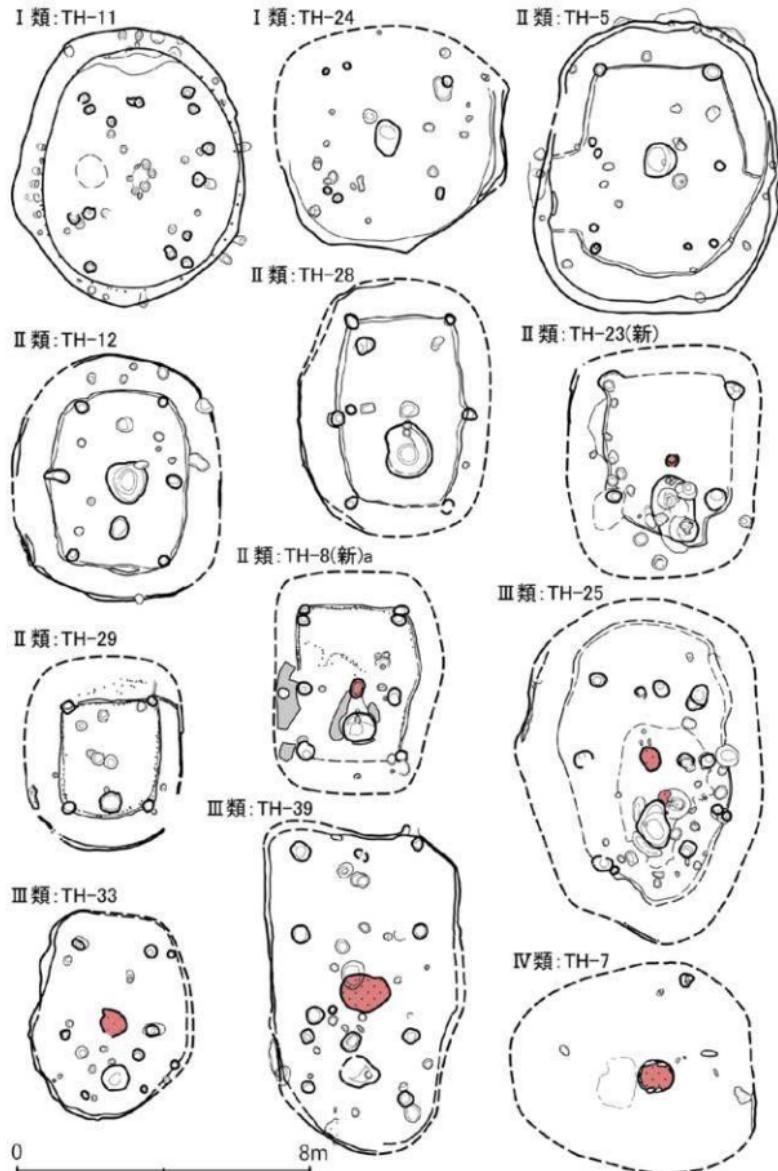
・Ⅰ群Ⅱ類：Ⅱ類住居は楕円形～隅丸方形、ベンチ状構造を持つもので、時期は前期末葉。TH-4・5・14・15が相当する。いずれも長軸長8m以上の大型住居。中央ピットはTH-4・5の中央で確認された。切り合い関係はみられないが、住居間の距離から2軒2段階の変遷が想定される。

・Ⅱ群Ⅱ類：時期は前期末葉～中期前葉。TH-2・3・8(新)a・8(新)b・8(旧)・9・12・18(新)・18(旧)・21・22・23(新)・23(旧)・27・28・29・32・37・49のほかに、過年度調査の3号竪穴が相当する。TH-21は長軸長8m以上の大型住居。中央ピットの位置が、TH-2・8(旧)・9・12・18(旧)・21・22・23(旧)・32では中央にあり、TH-3・8(新)a・18(新)・23(新)・27・28・29・37・49・3号では端部にある。脈絡から後者が新しい傾向がある。ほかに新しさの要素として、TH-8(新)aの中央ピットの周堤、TH-8(新)a・8(新)b・18(新)で確認された地床炉、TH-23(新)・27の埋甕炉がある。なお、TH-3・12の中央ピットでは砂層と砂ピットが検出された。切り合い関係と中央ピットの位置を考慮すると、TH-9→22→8(旧)、TH-18(旧)→21→23(旧)、TH-29→28・8(新)a→8(新)bの新旧関係となる。よって、3軒3段階ないし1~2軒5段階、Ⅱ群Ⅱ類後半は2~3軒4段階の変遷が想定される。

・Ⅲ群Ⅲ類：Ⅲ類住居は、長楕円形～隅丸長方形、ベンチ状構造をもたないか不明瞭になる。時期は中期前葉～中葉。TH-13・25・30(新)・30(旧)・31・33・34(新)・34(旧)・35・39・48が相当する。TH-25・35・39は長軸長8m以上の大型住居。中央ピットは、TH-13・25・33・34(新)・34(旧)・35・39・48にあり、端部に位置する。TH-13・25の中央ピットには周堤がある。地床炉はTH-31以外で確認され、炉に伴う砂層がTH-25・34(旧)で検出された。TH-25は不明瞭なベンチ状構造を持つため、Ⅱ類からⅢ類への過渡的状況を示していると考えている。切り合い関係は、TH-34(旧)・39→34(新)、TH-25→31→30(旧)→30(新)となるので、3軒4段階ないし3~4軒3段階の変遷が想定される。

・Ⅰ群Ⅲ類：TH-17・45は、住居型式はⅢ類とみられるが、長軸方向はⅠ群となる。このことは、集落の最終段階に近づいて、長軸の方向規制が緩んだためと推定している。

・Ⅳ類住居：楕円形、ベンチ状構造をもたないもので、石圍炉がある。時期は後期前葉。TH-7・16・61のほか、過年度調査のA地区1・2号、B地区竪穴、C地点1号、穂内館1・2号が相当する。北斗市押上1遺跡などで確認されたように、分散居住していたとみられる（福井2015）。



図X-2 堅穴住居の型式



図X-3 積穴住居の分布変遷

・中央ピット：I～III類住居のうち、中央にある例では、炭化物が集中する場合がある。しかし、焼土は残されない。また、かなり深く掘った後、すぐに埋めている例が多い。端部にある例も、中央に

ある例と同様であるが、土手状の周堤が形成されるものがあり、この場合住居中央には地床炉が別に存在している。最終的に中期末葉～後期初頭の「先端ピット」との関わりも想定されることから、出入口構造の可能性が考えられる。なお、位置に関係なく、中央ピットには大小の礫や礫石器が含まれている例も多かった。

・同時存在住居数と集落構造：住居の長軸方向と住居型式、付属施設の位置によって区分される時期毎の住居の切り合い関係を検討した結果からは、調査区内には同時に 2～3 軒が存在したことが推定された。また、2～3 軒の住居の組み合わせが、最低 15 段階あることも想定された。

また、道路跡を挟んだ北東側、B・C 10～13 区のほか過去の調査区で竪穴住居跡が確認されている。その部分にも同数の住居が構築されたと仮定した場合、2～3 軒のまとまりが対となり、一時期 6 軒前後の集落であったと想定される。なお、居住域が対になる例は、三内丸山遺跡など同時期において確認できる集落構造である。

さらに住居 II 群の構造分布図をみると、盛土遺構、住居群、土坑群が各々長楕円形状範囲を形成し、それらが並行することによって、直線的配置にみえる。特に II 群 II 類前半（前期末葉）においては、顕著であったとみられる。しかし、全ての段階で直線的な並行配置であった訳ではない。つまり計画的な集落構造というよりは、土手状盛土に沿った住居構築、繰り返される建て替え、長方形という住居形態、偏った土地利用があいまって、一時的に直線的配置に至ったが、長くは継続されなかつたというのが、館崎遺跡での集落構造の実情とみられる。

### 3. 多様な墓と土坑の変遷

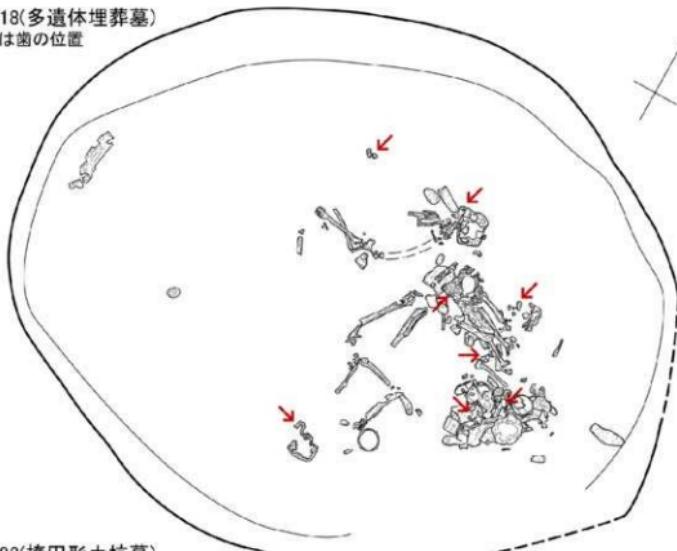
土坑 TP-18、TP-26、TP-33、TP-53、TP-73、TP-82、住居 TH-9 のベンチ状構造床面、TH-4 の床面の合計 8 か所から人骨が確認された。また、葬制としては、一般的な土坑墓、プラスコ状土坑墓、多道体埋葬、廃屋葬、乳児埋葬とされる「埋設土器」という多様なものを確認することができた。

・楕円形土坑墓（前期末葉～中期前葉）：楕円形土坑墓は、TP-33、TP-73、TP-82 で、黒色土Ⅲ層に掘り込まれた。TP-33 には、仰臥屈葬遺体が埋葬されていた。両足の大腿部が坑底から斜め上方 45° の傾きを持って出土した。両大腿の間には角柱状の安山岩礫が覆土中位に含まれていた。左腕は滅失していたが、右腕は肘を直角に曲げ、腹部に置かれた状態であった。TP-73 も仰臥屈葬遺体が埋葬されていたが、両膝は左側に傾いて、坑底に接していた。左腕横にベンガラが確認されたほか、腰左側につまみ付ナイフ、左腹部・右肩上・胸中央等に礫が置かれていた。TP-82 には、左側を下面とした側臥強屈葬遺体が埋葬されていた。人骨は土圧で潰れていたが、ミイラ様の遺存状況であった。

楕円形土坑は全部で 28 基検出され、時期毎では繩文時代前期末葉 8 基、前期末葉～中期前葉 2 基、中期前葉 3 基、後期前葉 8 基、その他 7 基となる。覆土は、①均質で、ロームブロック（以下 LB）を含む褐色土（TP-16・18・23・29・33・34・35・43・44）、②均質で、LB を含む黒褐色土（TP-73・82）、③黒褐色土を主とするもの（TP-10・49・121）、④褐色土を主体とするもの（TP-5・7・19・39・42）、⑤埋没時に空間が保持されていたものが崩れ落ちたもの（TP-51）などが認められた。なお、人骨が遺存した土坑の覆土は①と②であった。したがって、楕円形土坑は、墓だけではなく、多様な利用のされ方をしていたとみられる。

・プラスコ状土坑墓（前期末葉～中期中葉、後期前葉）：プラスコ状土坑墓は、TP-26、TP-53 がある。TP-26 は埋没した住居跡の上から土坑を掘り込んだもので、TH-21 の貼ベンチ状構造を掘りぬき、その下位の TH-24 の床面に達した面に遺体を安置していた。姿勢は、左側を下面とした側臥強屈葬。右腕は、肘を直角に曲げる。足は強く屈曲している。TP-53 は TH-31 によって壊され

TP-18(多遺体埋葬墓)  
矢印は歯の位置



TP-82(楕円形土坑墓)



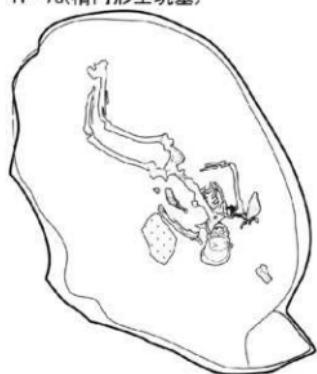
TP-33(楕円形土坑墓)



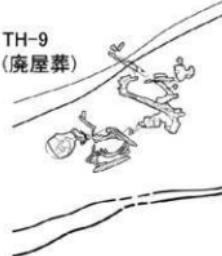
TP-26  
(フラスコ状土坑墓)



TP-73(楕円形土坑墓)



TH-9  
(廐屋葬)



TH-4(廐屋葬)



0 2m

図X-4 埋葬姿勢の集成

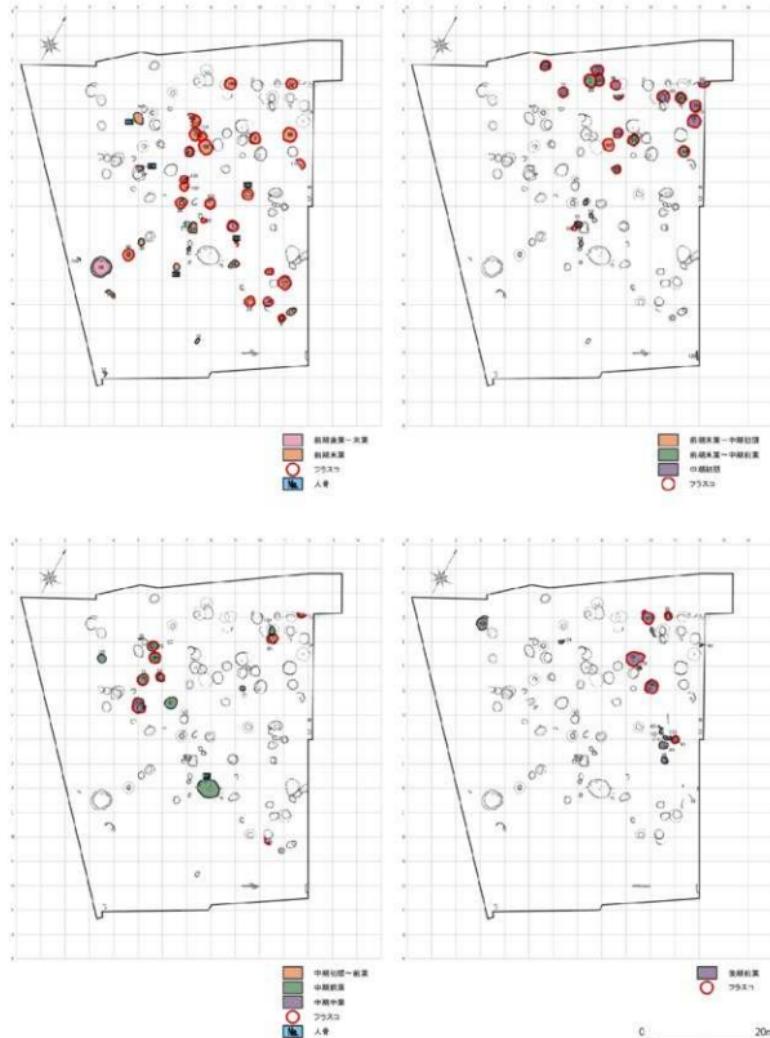
た土坑で、土坑中位を貼床が覆っている。遺体は頭部と四肢骨が確認された。埋葬姿勢は確認できなかつた。

・ フラスコ状土坑は全部で 57 基検出され、時期毎では縄文時代前期末葉 23 基、前期末葉～中期前葉 13 基、中期前葉 15 基、後期前葉 6 基となる。覆土は、①均質で、LB を含む褐色土 (TP- 1・6・9・26・38・40・46・55・59・65・66・71・80・92・103)、②均質で、LB を含む黒褐色土 (TP- 17・21・28・30・48・53・58・60・81)、③均質で、ほとんど純粹なロームに、炭化材小片を少量含むもの (TP- 41・47・78)、④覆土下半で複数の層が山状に堆積するもの (TP- 2・32・56・68・76・116)、⑤覆土下半に複数の層が水平に堆積するもの (TP- 8・64・67・72・75・89)、⑥壁の崩落による大きな LB を含むもの (TP- 6・8・89)、などが認められた。①～③は埋め戻しで、④～⑥は壁の崩落や土坑外からの流れ込みによる自然堆積とみられる。なお、人骨が遺存した土坑の覆土はいずれも①であった。また、一部のフラスコ状土坑には底部中央付近に小土坑が掘り込まれるものがあり、小屋掛けの支柱であったと推定される。このように覆土の状況と人骨の有無から、フラスコ状土坑は、墓に利用されたものもあれば、構築・利用後放置されたものがあると考えられ、多様な利用のされ方をしていたとみられる。

・ 多遺体埋葬墓（中期前葉）：TP-18 では複数の人骨が検出され、8 体分の歯を確認した。鑑定の結果、成人のほか、幼児も含まれていた。墓坑は小堅穴状、梢円形を呈する。B 盛土上位から掘り込まれており、時期は円筒土器上層 b 式期とみている。埋葬状態が明瞭なのは、1 体のみで右側を下面にした側臥膝屈葬。腕は強く屈曲させ、足は膝を直角に曲げている。他の 7 体は、解剖学的位置を保っているかどうか、遺存状態の悪さから判断できなかつた。ただ部分的に四肢骨や頸骨がまとめられているようにもみられる部分があった。副葬品と考えられるものには、石鎌、石斧、鯨骨製品？があつた。また、柱穴も確認されたので、上屋があった可能性が高い。

・ 废屋葬（前期末葉～中期前葉）：堅穴住居跡から人骨が検出された例に TH-9 のベンチ状構造床面例と、TH-4 の覆土例とがある。TH-9 ではベンチ状構造床面で仰臥膝屈葬状態の遺体が検出され、両膝は左側に傾いて、床面に接していた。その上を、覆土 2 層としたロームブロックを多量に含む住居覆土に覆われていた。この土層は、住居廃絶時に屋根土が堆積したものと考えられるので、間違いなく废屋葬といえる。一方、TH-4 例（幼児）は、覆土 2 層中で確認したこと、頭部が TH-4 HP-4 の半ばまで落ち込んでいたことから、上位から土坑が掘り込まれて埋葬された可能性も捨てきれない。

・ 「埋設土器」（前期末葉～中期中葉）：乳児墓ともされる「埋設土器」は 79 個体確認された。ただし、今回の調査では埋設したというよりは、設置されたものが埋没したという状況が考えられ、これらが乳児墓である確証は得られなかつた。「埋設土器」の内訳は、正立状態 27 個体、倒立状態 52 個体。下層式が 24 個体、上層式が 55 個体。特に前期末葉～中期初頭は倒立土器が主体のようである。出土地点は、盛土遺構中が主体であるが、住居覆土でも少なくない。倒立土器の内部は、中空状態であることが確認され、その下部にはミミズの糞が堆積していたので、内部に有機物が納められていた可能性もある。

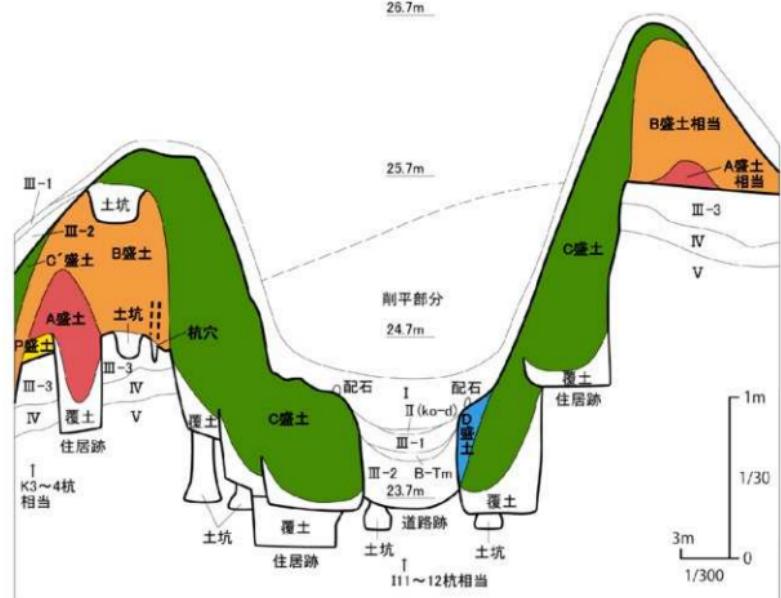


図X-5 墓・土坑の分布変遷

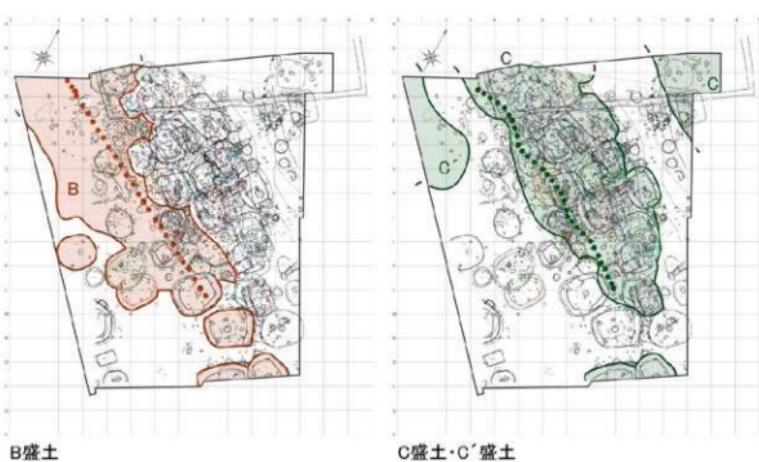
#### 4. 頗著な盛土遺構の諸相

館崎遺跡の盛土遺構は、二条並行してあり、土質や堆積状況、遺物包含状況から、大きく5区分された。P盛土は、数十cmのやや均質な厚さで、面的に堆積する。時期は、前期後葉～末葉。土質は、黄褐色土で、目立った混入物はない。なお、P盛土のうち黒褐色土となる範囲はP'盛土として区別している。A盛土は、内外の傾斜はほぼ同一の断面山形状で、平面は帯状となる。時期は、前期末葉。土質は暗褐色土で、遺物や焼土などの含有物が少ない。B盛土は、内側が急斜面、外側が緩斜面の断面山形状で、平面は帯状を呈する。時期は前期末葉～中期前葉。土質は黒褐色土と黄褐色土の互層からなる。特に黒褐色土には、遺物、焼土、炭化物、焼骨などが多く含まれており、有機物の集積によつて形成されたと考えられる。C盛土は、土手状のB盛土の肩から裾へかけて、逆への字の凹みを埋めるように堆積している。時期は、中期前葉～中葉。土質は黄褐色土で、遺物はやや少なく、炭化物層や貝層、獸骨などを含む。なお、C盛土のうち黒褐色土となる範囲はC'盛土として区別している。D盛土は、暗褐色土からなり、遺物はやや少ない。時期は、後期前葉。厚さ30cm前後あるが、單一層のようにみえる。

1985年の館崎遺跡の報告では、今回の報告でいうところの盛土遺構は、「土器塚」と捉えられた。しかしながら、盛土遺構には大量の土器だけではなく、見えるものだけでも土壤、石器、骨角器、礫、貝、骨、炭、焼土、灰といった多様なものが含まれている。また、堆積の仕方としては、貝塚と同様なパターンをみることができるし、なによりも盛土層中に貝層が構成要素として存在する。つまり、貝塚と盛土遺構との分けがたい存在であることを示している。このような状況であるから、貝塚と盛土遺構（土器塚・土塚）を合わせた累積性人為堆積物を「もの塚」（福井2014）とする考えを示した。



図X-6 盛土遺構堆積模式図



図X-7 盛土造構の分布変遷

0 20m

また、盛土遺構について、北海道各遺跡の事例（福田ほか 2014）を含めて検討した結果、四パターンに分類された（福井 2015）。以下に概要を示す。

- ・**凹地埋土（廃絶住居埋土）**：住居廃絶後の庭みに堆積するもので、館崎 A～C 盛土の一部が相当する。一般に単独では盛土遺構とは認識されない。また、盛る行為と埋める行為は、一見別な行為と捉えられるがちであるが、盛土遺構の起点に、凹地埋土がみられる例は非常に多い。むしろ、これを分離してしまうと、盛土遺構の本質を見失うことになると思われる。つまり、凹みや穴、沢、斜面などが人為堆積の起点に選ばれ、累積していくのが盛土遺構の実態と考えられる。
- ・**壠状盛土**：地表面に廃棄行為を行い、その上位に平盤状に盛土するもので、その平面形は面状となる。館崎 P・P' 盛土が相当する。北海道の円筒土器文化期では、前期中～後葉に特徴的に現れ、顕著な例が、木古内町釜谷遺跡にある。住居掘削土をその周囲に円環状に盛り上げる「掘り上げ土」との区別が困難な面もあるが、その平面的な広がりによって区分できる。
- ・**斜面盛土**：遺物が多く含まれることから、一般的には「捨て場」として認識される。この場合、遺物の量に注目している訳であるが、包含土層は人為堆積によるとみられる。館崎 B 盛土の一部、館崎 C・C' 盛土が相当する。各時期で確認されるが、円筒土器文化期では、前期後～末葉に特徴的に現れる。
- ・**土手状盛土**：一般的に盛土遺構として認識されるものであるが、例は少ない。館崎 A・B 盛土が相当する。円筒土器文化期のうち、前期中葉には道央部～噴火湾沿岸で確認される。この時期の特徴は一型式程度の期間で堆積される点である。一方、館崎遺跡が含まれる前期末葉～中期中葉では、主に北海道南西部に集中しており、数型式の期間をかけて、継続的に堆積される。

盛土遺構は、このように多様な堆積状態、包含物からなるため、複雑で、重層的な意図・効果があつたものと考えられる。また、堆積行為の対になる掘削地点もあるが、人為堆積を目的とした場合がほとんどであったとみられる。これについても複雑な意味があつたとみられる。しかしながら、盛土遺構が様々なモノを、儀礼的な扱いをした上で、葬るための場であったということは、土器や石器、骨角器の出土状況や各種残渣の包含状況から明言してよいと思われる。ただし、儀礼的に葬るという行為のためだけに、盛土遺構が形成されたわけではなく、複雑な堆積行為が継続・累積したことによって、盛土遺構として顕現したということもまた明らかである。つまり、盛土遺構・貝塚・廃絶住居埋土・捨て場・遺物包含層・掘上土は統合的に検討しないと、理解できない遺構・土層と考えられる。

## 5. 館崎遺跡における遺構群の変遷

竪穴住居跡、墓を含む土坑、盛土遺構、「個体土器」出土状況の各変遷を検討した結果、想定される館崎遺跡の変遷過程を大きく P 期・M 期・L 期に分け、さらに細分して記す。

- ・**P 期**：縄文時代早期末葉東側路 IV 式期。土坑が構築された。小集落が形成された可能性がある。
- ・**M-I-a 期（凹地埋土・P 盛土？・住居 I 群 I 類）**：縄文時代前期後葉（円筒土器下層 c 式期）。住居長軸が海岸線に平行し（住居 I 群）、楕円形で掘り込みの深い I 類住居（TH-11）が構築される。住居の掘上土によって P 盛土が形成され始めたかもしれない。住居廃絶後に生じた凹地には、大量の土器を廃棄する。プラスコ状土坑の TP-6・30 はこの時期の可能性がある。
- ・**M-I-b 期（P・P' 盛土・住居 I 群 I 類）**：縄文時代前期末葉（円筒土器下層 d 1 式期）。厚さ約 20 cm の黄褐色のローム質土で、廃絶住居（TH-11）上部を埋土し、さらに周囲の黒色土上（H～N 1～8）へ壠状に盛土する（P 盛土・P' 盛土）。住居長軸が海岸線に平行し、楕円形で掘り込みが深い I 類住居（TH-19・24）、やや浅い I 類住居（TH-10・54）が構築される。プラスコ状土坑は、次の I-c 期と明瞭に分けられないが、TP-40 は TH-11 覆土中位から掘り込まれており、こ

の時期のものかもしれない。また、大型土坑 TP-15 も確認されている。

・M-I-c期（A盛土・住居I群II類）：縄文時代前期末葉（円筒土器下層d 1～d 2式期）。廃絶住居（TH-10）の凹地を埋土し、さらにC～J 0～5区の黒色土上に盛土する（A盛土）。また、TH-11・54などの廃絶住居凹地への埋土にも関わる。住居は、長軸が海岸線に平行し、かつベンチ状構造をもつII類住居（TH-4・5・14・15）がA盛土の延長に沿うように構築される。プラスコ状土坑は、後の住居II群範囲に構築されたとみられる。楕円形～円形の土坑は、後にB盛土が堆積する範囲に構築される。一部、住居に重複するプラスコ状土坑もあるが、基本的には居住域と土坑域を分け、プラスコ状土坑域と楕円形・円形土坑域も分けていたと考えられる。プラスコ状土坑2基・楕円形土坑3基からは人骨が確認されたことから、土坑の一部は墓として機能したことは間違いない。

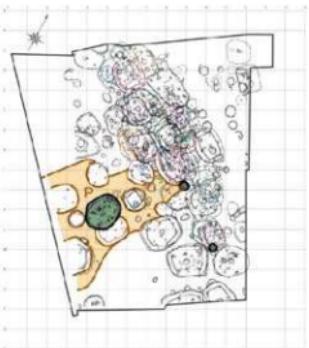
・M-II-a期（B盛土・住居II群II類）：縄文時代前期末葉～中期前葉（円筒土器下層d 2～上層b式期）。廃絶住居（TH-4・5など）の凹地を埋土し、B～O 0～11区の黒色土～A盛土上へ盛土する（B盛土）。なお、上層a 1式期までは廃絶住居埋土に関わるが、上層a 2式期以降は南西斜面に盛土する。住居は、長軸が海岸線に直交するようになり（住居II群）、ベンチ状構造をもつII類住居（TH-2・3・8（旧）・9・12・18（新）・18（旧）・21・22・23（新）・23（旧）・27・28・29・32・37・49）がB盛土に沿うように構築される。プラスコ状土坑は、居住域と道路跡の間の空間に構築されたとみられる。また、楕円形～不整方形の土坑は、H～J 6・7区に集中する。一部、例外もあるが、基本的には居住域と土坑域を分け、プラスコ状土坑域と楕円形・円形土坑域も分けていたと考えられる。また、掘削によって低みとなった道路跡は、この頃成立した可能性がある。

・M-II-b期（C・C'盛土・住居II群III類）：縄文時代中期前葉（円筒土器上層b式期）。G～L 5～10区に盛土したとみられる（C盛土）。下位には自然堆積の黒色土が存在せず、盛土層内及び下には竪穴住居の床が複数面確認されている。繰り返し同一地点で竪穴住居の構築、廃絶後の埋戻しを行い、さらにその上位に盛土が堆積するため、覆土との区別が困難な状況。なおC～H 0～2区のB盛土南西部斜面上には土器の完形品を多く含む斜面盛土（C'盛土）も形成されている。住居は、長軸が海岸線に直交し、ベンチ状構造がないか不明瞭なIII類住居（TH-25・30（旧）・31・33）が構築される。また、B盛土上に構築された大型土坑TP-18があるが、ここからは8体の人骨が検出された。同じくB盛土上に構築されたTH-44も類似したものだったかもしれない。ほかに、4基のプラスコ状土坑、3基の楕円～円形土坑が確認されたが、TH-33周辺のE～G 5・6区に集中している。なお、杭列は、B盛土の崩落を防ぐための土留め杭と推定しているが、遺構の分布からこの時期以降と推定される。

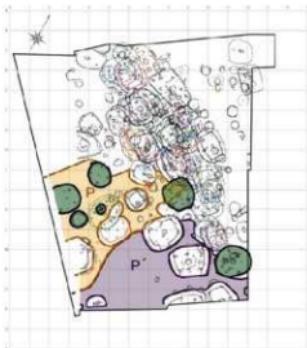
・M-II-c期（C盛土・住居II群III類・I群III類？）：縄文時代中期中葉（サイベ沢VII・見晴町式期）。廃絶住居の凹地を中心B～I 2～13区に盛土したと推定される（C盛土）。住居は、長軸が海岸線に直交し、ベンチ状構造をもたず、掘り込みがやや浅いIII類（TH-13・30（新）・34（旧）・34（新）・35・39・48）が構築される。また、住居長軸が海岸線に平行するIII類住居（TH-17・45）は、長軸規制が緩んだと推定されるこの時期の最終段階の可能性を考えている（この仮説は成立しないかもしれない）。プラスコ状土坑は、B盛土上から構築されたTP-1が確認された。

・M-II-d期：縄文時代中期後半。土器が散発的に出土している。

・M-III期（D盛土・住居IV類）：縄文時代後期前葉（涌元1・2式期）。住居3軒、プラスコ状土坑6基が確認される。中期以前にできた人為地形を活かし、凹凸を左右対称にするためにB～E 10～11区に盛土する（D盛土）。盛土後、配石列を構築し、道路跡を区画することで、道路跡（広場）一配石列・プラスコ状土坑一（盛土）一住居という重層構成を、道路跡を挟んで線対称に形成したと推



M-I-a期



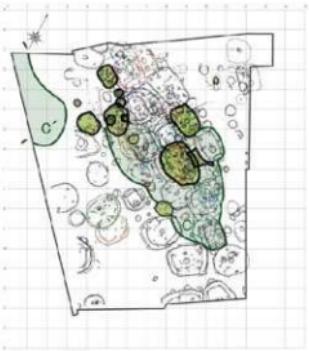
M-I-b期



M-I-c期



M-II-a期



M-II-b期



M-II-c期

図X-8 集落の変遷想定

定される。この重層構成は北斗市館野遺跡と共に通する。なお、遺跡のある段丘面には広く後期前葉の遺構・遺物が確認されている。Tピットは、この時期の集落廃絶後のものかもしれない。

- ・L-1期：縄文時代後期後半～晚期。土器が散発的に出土している。
- ・L-2期：擦文化期。土器が僅かに出土している。縄文時代後期前葉以降B-Tm堆積以前の土壤は、クロボク土化していないので、人為的な関与がなかった可能性がある。一軒、B-Tm降灰後は、クロボク土が堆積し始めるので、吉野遺跡に居住した人々の畑地とされた可能性も考えられる。
- ・L-3期：中世。穀内館の後背に位置。凹凸ある人為地形は、土里的役割を果たしたかもしれない。
- ・L-4期：近世～近代。陶磁器が散発的に出土している。畑地として利用されていたが、太平洋戦争時、盛土遺構による人為地形を活かして監視哨が造られたとみられる。恐らく建物を巡るように塹壕が方形に掘られ、防空壕がその外側に作られたと考えられる。

## 6. 偏った土地利用の意味

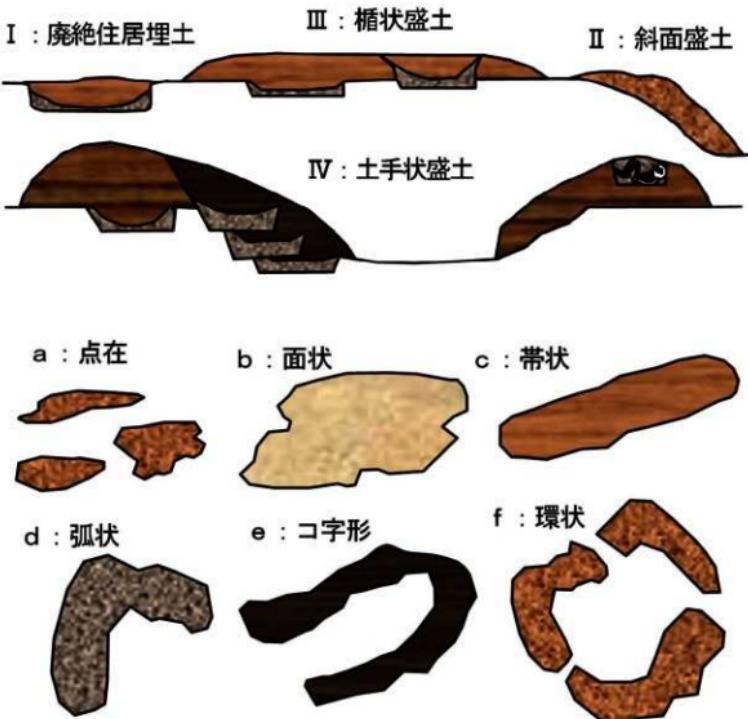
館崎遺跡に遺された縄文時代前・中期の遺構の分布をみると、土地利用期間が長いのに対して、居住域が狭まっていくという反比例現象がおきていたとみられる。このように、居住利用範囲が限定されたということは、むしろそれ以外の土地に、重要な価値があったと考えることができる。その重要な価値の源は、クリ林であった可能性が推測された。根拠は、花粉分析結果に基づくしかないが、その結果を最大限に評価するならば、集落が安定した時点から断絶するまで、クリ林が集落とともに維持されたことが推定される。そして、このクリ林の存在を前提とするならば、集落の連続的居住の背景や、土地利用限定化の結果としての偏った遺構分布がよく理解される。

なお、この土地利用の状況と、盛土遺構の特徴、分布の変遷からは、攝状盛土であるP盛土がクリ林の成立に関係していた可能性がある。具体的には、人為的にロームを貼ることで、下草繁茂予防といった効果が期待されたのではないかと、考えるものである。

館崎遺跡の遺構分布は、一時期に切り分けると、盛土遺構・住居群・土坑群を隣接させたまとまりが掘削域（道路跡）を挟んで対で存在する以外、共通性がみられなかつた。むしろ、植生・地形・廃棄傾向に規制されながら、その位置関係が変遷していくと考えられる。しかし、各種の規制によつてできあがつた、二本の土手と、その谷間の道路からなる人為地形は、長期安定集落という意識もあいまつて、ある時期を境に、なにがしかの意味性を持った可能性は否定しきれない。少なくとも後期前葉の段階で、新たに盛土で人為地形を補正し、かつ配石することで、谷間を墓域とし、土手上に数軒の住居を配置することは、聖地として「縄文後期人」が認識していたからかもしれない。（福井）

## おわりに

平成の福島町館崎遺跡発掘調査報告書は6分冊で、第1分冊が遺構編で553頁、第2分冊が土器編で594頁、第3分冊が石器編で400頁、第4分冊が骨角器・分析・総括編で316頁、第5分冊が写真図版編で474頁となり、総ページ数2337頁ある。北海道における円筒土器文化の遺跡として、顕著な一例を示せたと自負している。今回の要旨は、そのうち影浦が別に示す土器以外の部分のダイジェスト版である。各遺構・石器・骨角器・動物遺存体の個別記載、分析結果、写真図版は報告書を見ていただく必要があるが、本要旨を通過すれば、平成の館崎遺跡発掘調査成果の輪郭を得ることができるを考えている。館崎遺跡の発掘調査終了から12年、調査報告書刊行からは6年が経過した、発掘成果をますますご活用いただければ幸いである。



追加図1 「盛土遺構」の類型（上：断面、下：平面）

## 福島町館崎遺跡出土の円筒土器—その型式学的変遷について

(公財) 北海道理蔵文化財センター

(公財) かながわ考古学財団（令和元年度から出向中）

影浦 覚

### 館崎遺跡から出土した円筒土器の概観とその学術的価値

2009（平成21）年～2011（平成23）年にかけて、（公財）北海道理蔵文化財センターが調査を行った福島町館崎遺跡から出土した土器の総数は91万7,571点であった。うち縄文時代前期後半の円筒土器下層式が33万8,942点（37.0%）、中期前半の円筒土器上層式が40万1,604点（43.8%）。円筒土器で出土土器全体の8割強を占めており、検出された大型盛土遺構（物塚・もの塚 福井2013・2020）もその大部分が円筒土器文化期の造成であった。

円筒土器は下層c式から上層式の末までの各型式が間断なくあり、中でも多いのは円筒下層d1式～上層a2式であった。円筒土器の系統だった変遷、とりわけ下層式から上層式へと移り変わる過程を、数百個体の復元土器によって観察できる点において、館崎遺跡から出土した土器は学術的にきわめて良好な資料群であると言えよう。

### 改めて円筒土器とは

東北地方北部から渡島半島を中心として、縄文時代前期後半から中期前半にかけて盛行した一連の土器群を、その系統だった器形から円筒土器という。前期後半と中期前半とで土器の形態や、文様、胎土など視覚的な印象が大きく異なることから、下位の古い地層から出土した前期後半の土器について円筒土器下層式、上位の新しい地層から出土した中期前半の土器については円筒土器上層式として大別されている。

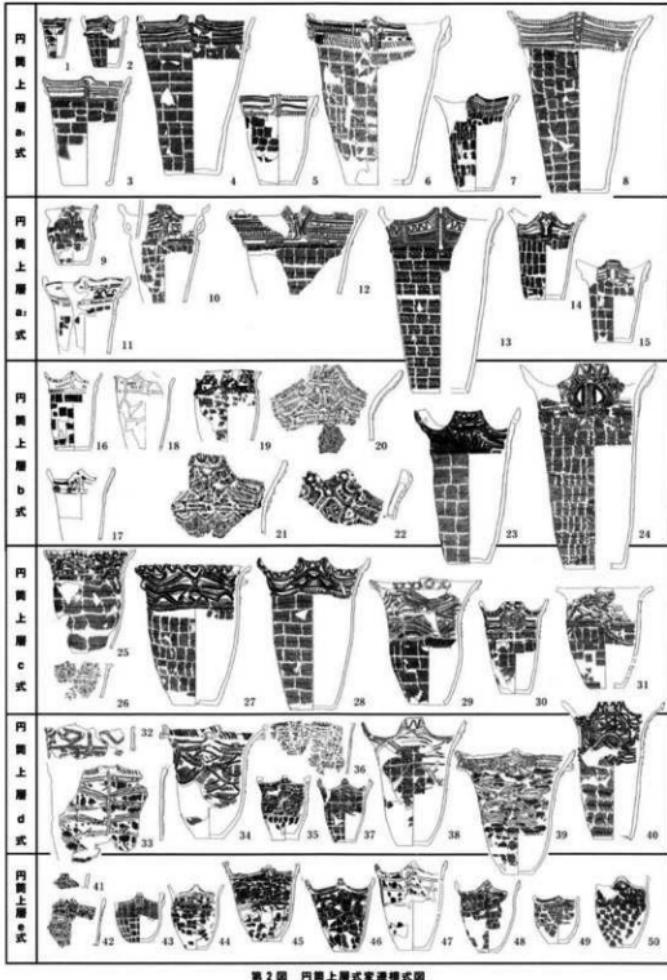
円筒土器下層式	円筒土器上層式
胎土に植物纖維を多く含む。	胎土に植物纖維をほとんど含まない。
口縁部はあまり開かない。	口縁部が大きく開く。
大型突起を持たない。	大型の突起を持つ。 (突起を持たない平底土器もある)。
口縁部文様帯を粘土紐の貼付で区画しない。 (d2式ではアクセント的に粘土紐を貼付したものがある)	口縁部文様帯を粘土紐の貼付で区画するものが多い。
地文は縦条文（縦位施文）が多い。 (下層a式を除く)	地文は縦文（横位施文）が多い。

### 円筒土器下層式と上層式の大きな違い

その細分案は諸説あるが下層式はa～d式、上層式はa～d式ないし e式に細分されていることが多い。そして今日では、下層b式を下層b1式とb2式、下層d式をd1式と d2式、上層a式をa1式とa2式というように、最初期から終末までを10数段階に細分することが通例になっている。ただし、後述するように細分案や型式判定の定義は様々であり、細分化が進むその一方で、今なお各型式の定義が研究者により流動的であるという問題を抱えている。



円筒土器下層式編年図（茅野 2008 より抜粋）



第2図 円筒土器上層式変遷模式図

1~18：三内丸山287住第3層 9~13：三内丸山508住第2層 14~15：三内丸山144住床面 16~18：三内丸山6次第8層 20~22：三内丸山213住堆積土 23：三内丸山334層 25~26：三内丸山43住床面 27：三内丸山481層 28：三内丸山160層 29：三内丸山304住炉 30：三内丸山145住堆積土 31：三内丸山141層 32~33：三内丸山266住炉 34~35：三内丸山609上 36~37：三内丸山404住床 38：三内丸山362層 39：三内丸山598住 40：三内丸山388住 41~42：三内丸山226住炉 43：三内丸山447住炉 44：三内丸山641住4層 45~46：三内丸山（赤）2住堆積土 47：堆積土20管6解 48：三内丸山995上2解 49：三内丸山道標外 50：三内丸山71住炉  
（縮尺：1/12.5）

円筒土器上層式縲年図（小笠原 2008 より抜粋）

## 円筒土器研究歴史

円筒土器研究の歴史は約 100 年に及ぶ。その嚆矢は、1925（大正 14）年、青森県のオセドウ貝塚における山内清男の採取資料、翌 1926（大正 15）年の是川の一王子貝塚で山内清男と長谷部言人が発掘した資料に端を発する。

これらの出土資料を受けて長谷部言人は「円筒土器文化」（長谷部 1927）を発表、はじめて「円筒土器」と命名した。この段階すでに「突起及び外反」は上層の土器に著明で、下層のには目立たぬなどと円筒土器が上層と下層で大別できる可能性について言及している。また円筒土器が「土器塚」より発見されたとした青森の佐藤茂の報告や、円筒土器が直立状態で埋没してみつかると指摘した武藤一郎の報告も紹介<sup>註 1</sup>している。

次いで 1929（昭和 4）年に山内清男は「関東北に於ける織維土器」（山内 1929）を発表する。ここで山内は是川一王子貝塚で出土した円筒土器を上層式と下層式に大別。上層式を中期、下層式を前期に位置づけるとともに、下層式を a・b・c・d に四細分、上層式については a・b に二細分した。

戦後の研究も、基本的には山内清男の細分案をベースにしながら出土事例の増加に伴って、その都度に定義や細分案が付加されていったが、各研究者の細分基準、各型式の定義が二転三転したため、判断材料であるはずの土器の類例や層位の成果が増えるに従い、解釈をめぐる混乱も深まっていく状況になった。先学の層位の成果や、定義についての十分な検証がなされぬまま、新資料が増加するたびに継ぎ足し的に定義を付加し、新しい細分案を提示したことによって、絡まった糸のような袋小路に陥ったものと思われる。特にアルファベットによる細分記号の示すものが研究者によって異なっていた点などは、その最たるところであろう。円筒土器上層式の型式観を巡る混沌の実際<sup>註 2</sup>について少し触れる。

たとえば、円筒土器を細分した山内清男は、後年になって円筒土器の終わりについて、「円筒上層 c 式としてもよい。ただし d 式という区分はない」などと言及した（山内 1964）。これは沈線を施したものは大木式系土器の影響を受けているから円筒土器には含められないという意味合いでの発言であったが、そうであれば今日広く上層 d 式と認識されている貼付による文様体を持つ土器が山内のいう c 式であり、沈線で文様帶を構成する上層 e 式が、円筒土器の区分にないとした山内の d 式であったことになるであろう。山内が 1920 年代に円筒土器の最初の細分案を示した時、上層式は a 式・b 式の 2 細分であり、その後、新資料の増加で他者により上層 c 式以降が追加された経緯からすると、決して山内自身の発言に齟齬はないが、ここで山内が言っている上層 d 式と今日の研究者が語る上層 d 式とは明らかに異なる型式である。

事実、この問題について、鈴木克彦が「円筒上層 e 式の沈線文による技法は円筒土器に含まれない」（鈴木 1982）との発言をしているが、山内の d 式が e 式に置き変わっただけであり、言っていること自体は山内とほぼ同じことであろう。山内清男や鈴木克彦が沈線文によって文様帶を描くものは円筒土器に含まないという見解を示した一方、三宅徹也は円筒土器の文様についての属性分析をおこない、e 式も円筒土器の系統にあるとの見解を示した（三宅 1978）<sup>註 3</sup>。



鶴崎から出土した直立状態で埋納した可能性がある土器

一方、石神遺跡を報告した江坂輝弥は山内とは異なる再定義で円筒上層式土器を a～f 式まで細分し、それぞれをさらに算用数字を付す形で細分した（江坂 1970）。村越潔は江坂の細分案をおおむね踏襲したが江坂が上層 f 式 1 類とした土器については上層 e 式とした（村越 1974）。この江坂輝弥の上層 f 式 1 類=村越の上層 e 式は貼付文に代わって沈線文で文様帯を構成するものであり、江坂、村越も三宅同様、これを円筒土器として認めている立場である。

こうした動きの中でも発掘調査に伴う類例の増加により、円筒土器の様々な細分案が断続的に提示されていく。1960（昭和 35）年に大和久震平は、秋田県内の出土資料をもとに上層 a 式を 2 類、b 式を 3 類に細分する案を提示した。ここで新たに案出された上層 b 3 式は、隆線が沈線文に置き換わったものであり、山内の d 式、江坂の f 式 1 類、村越の e 式に相当すると考えられるものである。

1971 年、三宅徹也は青森県野木和遺跡の調査成果から円筒上層 a 式について 3 細分の可能性を示した。この細分案を受けてのことか、鈴木克彦は中の平遺跡の報告（1975）において上層 a1 式～a3 式という細分名を使用し、上層 c 式についても新たな細分を案出した。

しかし、上層 c 式について鈴木が細分案を示したのとほぼ同じころ、大島直行は知内町森越遺跡（1975）の調査結果から上層 b 式と c 式は共存すると報告している（大島 1976）。

その北海道では、函館市サイベ沢遺跡での層位的な調査（児玉・大場 1958）から、その層位的な成果として、円筒土器についてサイベ沢式という独自の型式名が冠せられていた（吉崎 1965）。円筒下層 b 式相当がサイベ沢 I 式、下層 c 式相当がサイベ沢 II 式あるいは森川式というように別個の型式名が充てられたのである。今日でも円筒土器上層式後半段階の土器についてサイベ沢 VII 式という型式名が用いられてはいるが、それ以外については東北地方北部に足並みをそろえて円筒土器の型式名を使うことが一般的である。

サイベ沢 VII 式は 2 種 2 対の突起を持つか、結節、綾織の縄文を地文にもつ古手と想定されるものをサイベ沢 VII a 式とし、それ以外のものをサイベ沢 VII b 式と新旧細分する案が示されていた（高橋 1972 b）が、函館市石川 1 遺跡の調査（道理文 1988）においてサイベ沢 VI 式と VII a 式とが混在して出土する状況があったことなどを受けて、円筒上層 b 式の後について、サイベ沢 VII 式古段階、サイベ沢 VII 式新段階とした新たな細分案が提起されてもいる（立田 2006）。

館崎遺跡での型式名もこれに依拠した形で上層 b 式の後についてサイベ沢 VII 式古段階・サイベ沢 VII 式新段階という細分名を採用したが、後述するように整理を進めていく中で、型式を特徴づける属性の多寡、計測と数値化によって、型式間の線引きを行う分類方針（セリエーション）を探ったため、立田が案出したサイベ沢 VII 式古段階・新段階の概念、その前段のサイベ沢 VII a、VII b 式とも必ずしも合致する内容にはなっていない。

サイベ沢式に関しては、「本州の所謂「円筒土器」編年は研究者によって認識のずれがある中で、同様に認識のずれのある北海道独自の編年を用いることによってさらに混乱を来しているように見受けられる。学史は学史として尊重すべきであるが、少ない資料を基にした型式に対して膨大な資料が掘り起こされた今日、改めて見直す必要性を感じているのは（略）筆者だけではないだろう」（福田 2005）と指摘されているとおり、再考の余地があるであろう。

このサイベ沢遺跡の標識資料について、高橋正勝も「発掘地点が傾斜地であることによる層位の擾乱と、資料の十分な吟味不足による細分不足は否定できないであろう」（高橋 1972a）と、半世紀前には別の観点から型式設定の不備を指摘している。ただ、そう指摘しておきながら、同文献で「東北と北海道との円筒土器は、このサイベ沢 VI 式（円筒土器上層 c 式相当 筆者註）か

ら変化を始めるのではなかろうか。その根拠は大木式土器の北上に伴う東北地方の円筒土器の変化があげられる」云々と続けており、このあたりがサイベ沢VII式という型式名が道内型式として浸透定着するに至った淵源かともみられるのだが、「北海道においても、サイベ沢VI式土器以後の円筒文化の急激とも思われる後退により—これは北筒・余市両式土器の発生によるものであるが—わずかに地方的な特徴を強めた円筒土器（智東B式 筆者註）が存在する」（高橋同上）と、筆者の誤解でなければ、サイベ沢VI式すなわち円筒土器c式以降、北筒・余市両式土器の発生により、道内の円筒土器上層に東北地方の円筒土器とは異なる変化が生じ、それがサイベ沢VI・VII式や智東B式の成因になったというような説明が続いている。仮にそういう解釈であったならば、今日的に「北筒・余市両式土器の発生」は中期の終末段階になっているので、ますますサイベ沢VII式の成因について（そもそも型式として円筒土器上層d式・e式と分かつほどの明確な違いがあるのかどうかも含めて）、再検討の余地はあると言えるのではないだろうか。

つい、人は、俗説をもう一べん疑って見ようとはせず、簡便な意見として、うっかりそのままを信じて了しまうものである。  
宇野千代『行動することが生きることである』P.30・集英社文庫

懷疑の課題がないなら、真理の探究はできない。

倉田百三『絶対的生活』

信じてしまえばそれでそのことについての探求は、確かに止まってしまいます。既成の考えを、定説であれ、偉大な先生の学説であれ、ともかく疑ってみる。それでこそ、学問は前進するのです。

佐原真『発掘を科学する』岩波新書

何かの真価を本気で見極めようと思うなら、信じるのではなく疑わなければならない。

ヤマザキマリ『国境のない生き方 私をつくった本と旅』小学館新書215

しかし、ときに前提を疑うということが大切なのです。前提を考えるということは、自分で骨組みを作り、ということにもつながります。  
養老孟司『自分の壁』新潮新書

以上、円筒土器の研究史とその現在地を上層式を中心に概観したが、「(この円筒土器について 筆者註)十分に研究されてきたとは言いがたい。(略)編年の問題は発掘を通して語ることが原点だと考えるならその責任は重く、21世紀には問題意識のある発掘を心掛ける必要がある。(略)編年研究の基本は、相互補完の関係にある層位の発掘と型式学(分類)にあるが、相互に援用してこそ有意義なものとなり、在地研究としては当然前者に比重が求められ、その資料が共有化されることによって編年の問題だけでなく、編年学のもう一つの大きな課題である地域性研究などの裾野の広い充実した研究が行われよう」(鈴木 1999)と、こうした状況を踏まえた上で今後の方向性を示した鈴木克彦による発言が改めて注目される。

「発掘を通して語ることが原点」「当然前者に比重が求められ」とし、「層位的調査とその結果が正当なもののかは判断しなければならないが、型式学的方法は論者の主觀に基づいて構成されるがために、異論が生じやすく見解の相違を来すことが多いから」(鈴木 同上)とし、型式学的方法の主觀性を問題視している。なぜ、この発言が注目されるのかと言えば、同様の考え方には、鈴木克彦に言われるまでもなく考古学の研究者、発掘調査員の中に常識知として広く浸透し

ているものであり、同時に私自身はそこに疑問を感じるところが大であるからに他ならない。

実際、研究史を概観すれば明らかであるように、円筒土器ほど発掘調査による層位の成果や共伴事例に基づいて研究が進展してきた土器様式は他にそう多くはないであろう。それは下層式・上層式と型式名に層位が冠せられていることからも明白である。要するに新旧の判断材料に恵まれた土器型式であると言つても過言ではない。

では、それにもかかわらず、いまだに型式的変遷が一貫せず「十分に研究されてきたとは言いたい」現状にとどまっているのは一体なぜなのか。むしろ層位的成果重視・共伴事例重視（型式学的方法軽視）でやってきたからこそ、いつまでも型式觀が一致しないでいるのではないか、と考えざるを得ないのである。

改めて「客観的である」とはどういうことであるか、から問いかねたい。それは発掘に携わっていない第三者でも真偽を判定・評価できる内容のことには他ならないであろう。すなわち論拠の整合性と、論拠とするもののデータ化・数値化の度合いこそが、客観の深度を示すものである。

したがって、もし報告書における掲載土器の表の項目が、型式を確証させるには不十分である場合が多い（土器が持つ豊富な判断材料が数値化されなき過ぎである）、という意味においての発言であれば、「型式学的方法は論者の主觀に基づいて構成されるがために、異論が生じやすく見解の相違を来すことが多い」という鈴木克彦の指摘は、確かに間違ってはいないであろう。

だが、たとえ型式学的なデータや数値が乏しく主觀の域を出ないものであるにせよ、そのことによって、相対的に層位的発掘・共伴出土事例に対する認定の客觀性が高まるというものではない。むしろ冷静に考えれば、そんな保証などどこにもないということが問題なのである。

引用した鈴木克彦の指摘は、型式学的方法が主觀に基づいていると指摘することによって、層位的調査（共伴事例）こそが客觀であり信頼できる、と暗に読み取れるような、いささか誘導的なくなりになっているが、もし一緒に出土したもの（共伴資料）が本当に同じ型式の土器かどうかについて型式学的な検証をすることなく、発掘調査者がプロ意識・経験値・キャリアその他によって、即座に、直観的に、現場で認定・結論しているようなことがあると仮定するならば、それもまた主觀に基づいた所見に他ならないのではなかろうか<sup>注4</sup>、と思う。

発掘した人間が「共伴した」「層位的に前後関係が確認された」と記載した言葉のみを信じる以外にないような調査報告も、おおよそ主觀の域を出るものではなく、それを客觀的であるなどと疑いなくその無謬性を信じ込むルーチン化した姿勢、それ自体もすでに主觀（思い込み）そのものなのではないかと、内省的に自問せざるを得ない。

「文献史学は記録を残した人間が嘘をついている可能性があるが、発掘調査による遺構の検出状況、出土遺物の産状は決して嘘をつかない」というまとしやかな言葉が、昔からこの世界の人口に膾炙しているが、そうしたことが「あえて言われることの本当の理由」を改めて虚心に考えてみるならば、それは考古学で生きる人間が抱えている文献史学への認め難いコンプレックスの表れではないかと思われるを得ない。だからこそ、とりわけ発掘調査に従事する人は、フィールド・ワーカーの矜持として発掘調査の眞実性・無謬性を過信するバイアスにとらわれがちになっているのではないかと思う。舉句、発掘調査が無条件に客觀であるなどと錯覚めいた心地よい思い込み（独善）に心ならずも飲み込まれてしまうのではないか、と危ぶまれもする<sup>注5</sup>。

調査者が調査成果というフィールド・ワーカーの客觀的な無謬性を当然のこととして主觀的に信じ込んでいる限り、遺構・遺物が眞実を語ることはない、ということについて自覺的であることが非常に重要であると、あえて研究史の末尾に自戒を込めて吐露する所以である。



分類はⅡ群 b - 1 類と記載されているが、それがなぜⅡ群 b - 1 類なのか第三者にも理解できるデータは乏しい。地文と内面条痕の有無だけ。実測図と写真を見ればわざることは記載しない（する必要がない）ということかもわからないが、それでは研究者は使いづらいであろう。研究に利用される具体的な視点が決定的に欠落していると言わざるを得ない。報告書の掲載土器一覧表はやはり利用が想定される人の視点・立場に立って、徹底的に「知りたい情報」が引き出せる内容にこだわらねばならないのではないだろうか。

表VI-4 造構出土掲載復元土器一覧

目録号	号	銘文	長さ	幅さ	厚さ	内面	外側	直徑	腹深さ	縦横比	形状	分類	大きさ		備考		
													横幅	縦幅	高さ	備考	
二二二一	1	土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二二二一	2	土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二二二一	3	土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二二二一	4	土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二二二一	5	土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

表VI-5 造構出土掲載拓本土器一覧

目録号	号	銘文	長さ	幅さ	厚さ	内面	外側	直徑	腹深さ	縦横比	形状	分類	大きさ		備考		
													横幅	縦幅	高さ	備考	
二二二一	1	土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二二二一	2	土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二二二一	3	土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二二二一	4	土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二二二一	5	土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

## 八雲町 山越2遺跡

表V-3 造構出土の掲載復元土器一覧(1)

目録番号	発見場所	遺物名	記号	基準	寸法	形状	材質	表面	底部	内側	外側	縦横比	形態	大きさ	内径	外径	備考
Y-1-1	山越2	土器	—	I	34.7	—	土器	—	—	—	—	—	—	丸底	17.0	33.7	—
Y-1-2	山越2	土器	—	II	35.0	16.0	土器	—	—	—	—	—	—	丸底	17.0	34.7	内面凹凸部有
Y-1-3	山越2	土器	—	III	36.0	16.0	土器	—	—	—	—	—	—	丸底	17.0	34.7	内面凹凸部有
Y-1-4	山越2	土器	—	IV	37.0	16.0	土器	—	—	—	—	—	—	丸底	17.0	34.7	内面凹凸部有
Y-1-5	山越2	土器	—	V	38.0	16.0	土器	—	—	—	—	—	—	丸底	17.0	34.7	内面凹凸部有
Y-1-6	山越2	土器	—	VI	39.0	16.0	土器	—	—	—	—	—	—	丸底	17.0	34.7	内面凹凸部有
Y-1-7	山越2	土器	—	VI	40.0	16.0	土器	—	—	—	—	—	—	丸底	17.0	34.7	内面凹凸部有

## 木古内町 幸連遺跡

たとえ表中に文様がこまかく記載されていても、出土した同一型式の個体全体の中、それぞれの文様、属性が何個体（何%）であったかについて具体的に示されなければ、研究する人間には非常に扱いにくいのではないか。報告書の表記に際しては、土器に限らず、利用（研究）する側の目線に立ってみた場合において、データをどのように提示すればもっと使いやすいか、基礎的データとしての有意性が最大限反映されるにはどのようにすれば良いか等々にとことん配慮することが大切に思える。

目録 番号	形態	高さ mm	縦幅 mm	横幅 mm	厚さ mm	式名	直徑 mm	底径 mm	縫合	上縁	底縁	縦横比	形態	大きさ	内径 mm	外径 mm	備考
Y-1	—	22.0	—	16.0	2.4	下鉢	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Y-1	—	22.0	—	16.0	2.4	下鉢	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Y-1	—	22.0	—	16.0	2.4	下鉢	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

館崎遺跡掲載土器一覧表(1ページ目)

大きさ	複数 種類	印文 横幅 (mm)	印文 縦幅 (mm)	印文 底面 横幅 (mm)	印文 底面 縦幅 (mm)	印文 底面 厚さ (mm)	印文 底面 直徑 (mm)	印文 底面 底径 (mm)	印文 底面 縦横比	印文 底面 縫合	印文 底面 上縁	印文 底面 底縁	印文 底面 縦横比	印文 底面 縫合	印文 底面 上縁	印文 底面 底縁	印文 底面 縦横比	
W	—	20.0	16.0	14.0	10.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
*	W-1	22.0	16.0	16.0	11.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
*	W-2	22.0	16.0	16.0	11.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

館崎遺跡掲載土器一覧表(2ページ目)

館崎遺跡ではA4見開き2ページ（実質A3横位置サイズ）を使って基本データ53項目について記載したが、後述しているように突起や文様等の諸属性については、さらに別途表（本テキスト後掲）を設け、徹底的な数値化に努めた。

## 館崎遺跡の調査から—盛土遺構における層位性と共伴事例の認定、その本質的問題点—

館崎遺跡の調査に際しては、山内清男や長谷部言人の円筒土器に関する最初期の論文、それから『サイベ沢遺跡』や『中の平遺跡』、『三内丸山遺跡』等、円筒土器の層位的成果として知られる報告書として代表的なもの、つまり前項で示したような学史について事前に目を通した。町教委による過去の館崎遺跡の報告書から、館崎が上述の遺跡と同様に盛土遺構を擁し、正立状態や倒立状態の土器が多数出土する遺跡であることも想定されていた。

学史や過去の調査事例を踏まえたことにより、「盛土遺構の遺跡においては、正立ないし倒立状態の土器をすみやかに盛土するために共伴遺物の同時性が保たれる。だからこそ、型式ごとの文化層が形成され、各文化層の上下に型式の前後関係も現れるのだろう」と期待されもした。自分が担当として携わる館崎遺跡の調査においても、当然そのような層位的成果が得られると想定していたのである。

調査を始めてほどなく予想どおりに正立や倒立状態を含む個体形状を保った円筒土器が陸続と検出されたため、これらの出土地点の記録に努めた。しかし、盛土遺構の下部が円筒土器下層式でまとまり、上部が円筒土器上層式でまとまるという層位性の反映は認められなかった。齊一的に下から均一に積み上げて土手状の盛土を形成したものではなく、小規模な盛土を無数に不規則に積み上げていった結果、最終的に土手状を呈する巨大な盛土（物塚・もの塚 福井 2013・2020）に至った<sup>註6</sup>から、個体土器の出土位置の上下が必ずしも土器型式の新旧を反映していないのであった。

さらに館崎遺跡ではそうした土器を無数に包含している盛土を掘削して、堅穴住居や土坑をいくつも構築しており、それらの構築によって生じた掘り上げ土が不規則かつ無数に盛土中に嵌入していたことも、層位的序列を妨げる要因になっていると考えられた。

現場での実際的な土器の出土状況や盛土の堆積状況を受け、円筒土器にまつわる層位的成果として学史的に知られる遺跡の多くは、記述や土層図を見る限り、ほとんどが今日的観点でいえば、館崎のような盛土遺構、あるいは貝塚と考えられる遺跡であり、自然堆積層（地山）ではないと確信された。そして、同時に一つの疑惑も浮上してきた。もし、円筒土器の複数型式の新旧（序列）が層位的に確認されたというのであれば、数百年という長期にわたってその周辺で盛んな人間活動があったことになる。そうなると、各層ごとにほぼ一型式がまとまって出土する状況が本当にあったのかどうか、数百年に及ぶ人間活動を成因とする土壤の擾乱や遺物の混在が盛土堆積物に反映されないほうがむしろ不自然ではないか、ということが推考されたのである。

このことは層位的成果として知られる過去の調査報告において、層ごとに同一型式でまとまっていたと記載されてはいるものの、具体的にどの程度の割合で同一型式の土器が占めていたか、あるいはどの程度の割合で他型式の混在があったか、というもっとも重要な点について、具体的に記載されている例が希薄であったことからも考えられていた疑問であった。学史上の研究者たちがライバル同士で競うようにしのぎを削り、層位的な調査に基づいた型式設定という華々しい成果に「はやる」余り、混在等の不都合については具体的に触れなかったという心理的バイアスがいささかなりともそこに作用していなかったか、という不遜極まりない疑惑さえ胸中に満々いていた。

別の言い方に置き換えると、「偉大な諸先学の業績」という名の学史を後生大事に尊重することによって、後続の研究者たちは「同一型式でまとまっていた」「層位的に前後関係が確認された」とある事実記載を、無批判に尊重し、信じ込む以外になくなり、礼儀知らずとのそしりを受

けたくない一心で過度にわきまえ、神聖不可侵な領域には踏み込めない—踏み込もうと思えば踏み込めるのに、あえて保留然として踏み込まないでいること—が、学問の進展、真理の解明を妨げているのではないか、という疑念と懸念でもあった。

どれも各研究者が自分でたずさわった発掘調査の成果であり、それぞれ層位的調査であるとか共伴事例であったとかを元にして、円筒土器をそれぞれに細分定義していること。その結果、同じ土器に対して、研究者・調査報告者の解釈の違いによって細分されたりされなかつたり、円筒土器に含めたり含めなかつたりしていること。さらには、それら先学によるたくさんの異なる成果を受ける後続の立場としては、調査に携わった人間がそれぞれ「層位的に確認された」「共伴した」と断定するものに対して、批判的に評価し難いこと。ましてや学史上のレジェンド、鉢々たる研究者による分類案、定義となれば、なおのことであるだろうと痛感された次第である。

調査の最終年、2011 年度の調査では、調査区の西側を流れている小沢に面した斜面部が調査範囲であった。そこには、広く廃棄層が形成されていて、おびただしい数の土器が累々と積み重なって出土した。この時、円筒土器下層 d 1 式から上層 a 2 式までが同一面で重なり合うようにして共伴するという出土状況が確認された。いったいなぜこのような出土状況になったのか。

正立土器や倒立土器をはじめ個体形状を保った無数の円筒土器が埋められている盛土を掘り返して新たに竪穴住居や土坑を掘れば、当然、過去の埋設土器が掘り出されるであろう。それを沢に面した斜面の捨て場に投棄した際、自分たちが使って破損した土器と一緒に投棄していたと仮定すれば、廃棄の同時性という新旧土器の共伴は成立する。

すなわち型式が異なるこれらの土器の「使用の同時性」を表す共伴事例ではなく、人間関与を成因とする「廃棄の同時性」を表す共伴事例であると考えられた。

復元後に、廃棄場から出土したこれらの土器を改めて確認したところ、予想したとおり掘り棒で突いたとみられる不規則な無数の傷跡が多く土器の器面で確認された。

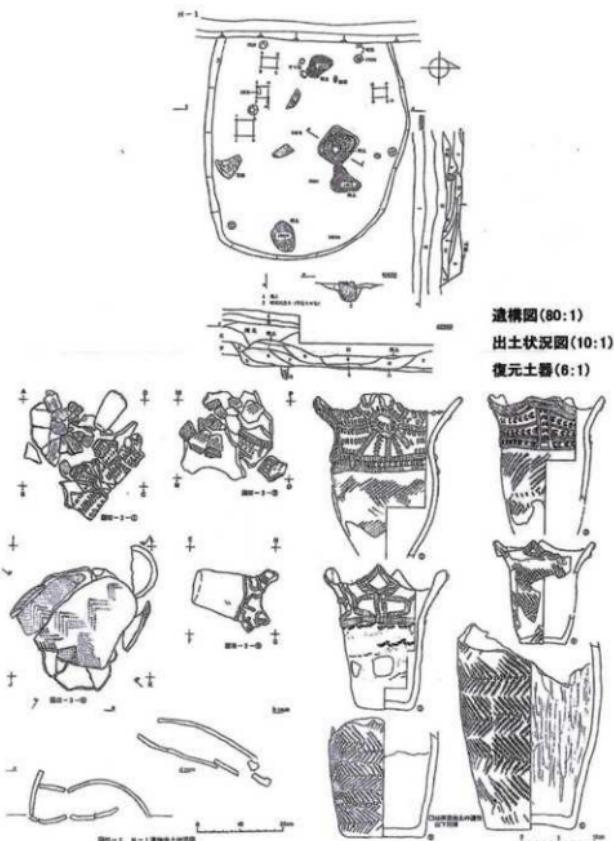
円筒土器の共伴事例ということについて言えば、昨今では、円筒上層式の複数型式が道内遺跡において共伴した事例が相次いで注目されており、「北海道の調査事例では、6(編年 筆者註)で述べた編年案とは異なる出土状況を示す場合がある。たとえば、尻屋内町(現函館市 筆者註)中浜 E 遺跡や木古内町虹内遺跡では、円筒上層 b 式から d 式が住居跡床面で共伴する例がある(北海道埋セ 1985、木古内町教委 2004)」「一つの可能性として、三内丸山遺跡などの土器の出土と、それに合わない北海道の事例の存在は、土器の変化のスピードとして考えられるのではないか。つまり、青森では土器の変化に敏感で、北海道は新旧の要素が入り混じるような状況があったのではないかと思われる。これは、土器変化の情報の伝達スピードの違いを示しているものと考えたい」(小笠原 2008)などと大胆に解釈したものさえある。



西斜面（廃棄場）における土器出土状況

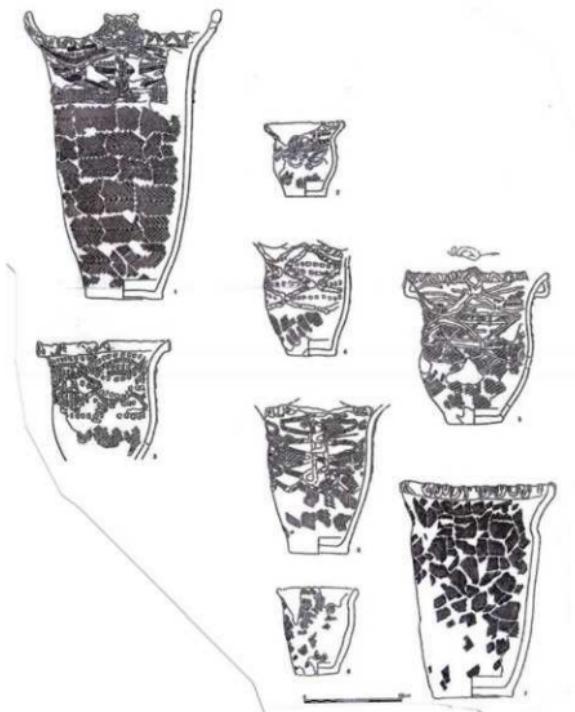


掘り棒によるとみられる突き傷



尻岸内町（現函館市）中浜E遺跡H-1

※ 小笠原氏がいう（小笠原 2008）中浜E遺跡での共伴事例は、H-1住居床面出土土器のことである。復元土器6個体が掲載されている（うち2個体は下半部のみの復元）。馬蹄形圧痕が施された②が円筒土器上層b式に近いもの。①③④は円筒土器上層c式に相当するもの。と施文具の違いで二型式に分けられている。口縁部の開き具合、径が不均一で歪んだ貼付、胴の膨らみ、底部にくびれがなく底面が浮き上がっている点。器壁のゆがみ加減等、掲載図を見る限り、相互に共通する要素を多く持っているように看取される。筆者にはこれらがすべて同時期のもの、上層b式の終末段階のまとまりであるようにも映る。



木古内町蛇内遺跡 7号住居址出土土器

※ 報告書遺構調査の項では「床面近くの覆土」、出土遺物の項では「床面直上」と記載されており、微妙に出土位置の表現が異なる。床面そのものではなく、やや埋没しかけた状態での廃棄層かと思える。これらの土器はⅢ群2・3類であると記載されている。Ⅲ群2類はサイベ沢V式、VI式相当、すなわち円筒土器上層b式・c式相当。Ⅲ群3類はサイベ沢VII式、見附町式に相当するとあるので、円筒土器上層d式、e式相当となり、小笠原氏が言う3型式共存はおそらくここから引かれたものであろう。また、生活面としての床面ではなく、廃絶後の廃棄層であれば、館崎遺跡の廃棄エリア同様に新旧の土器が一緒に廃棄された可能性はあり得ると考えられる。掲載図でみていくと、馬蹄形圧痕が施された1と刺突が充填された2~4がⅢ群2類、5~8がⅢ群3類かと考えられる。だが、これらについてもほぼ同型式である可能性があるよう映る。口縁部をみると蛇行の貼付の横櫛が1~7でみられるが、これは上層b式の後半期からみられる特徴である。蛇行の間隔が不均一であることから、上層b式末~サイベ沢VII式(古)相当と思われる。2~6は貼付による文様帶が胴中位の膨らんだところまで及んでいる点が共通している。1は羽状繩文が地文であるので、一応この中では一段階古い資料。円筒土器上層b式に相当する可能性がある。しかし、他については同一型式(サイベ沢VII式古段階)の可能性が廢される内容で、これによって新旧の土器型式が入り混じっているとは言い難いのではないか。

同様の問題意識は、「長万部町オバルベツ 2 遺跡 H-19 の出土状態は報告者も「円筒上層 b ~d 式が（中略）が一括して出土した」と記載されており、鳴川右岸遺跡において出土した複数の土器型式の混交状況について、明言しなかったが同時期の一括資料を提示したことがある」（立田 2006）等、道内研究者からもいくつかの具体的な事例に即した形で指摘されている。

型式の異なる土器が複数共伴したことから、（まずは）「同時期の一括資料」という評価になるのであろうが、これが円筒土器下層式と上層式の共伴出土であった場合もはたして同様の見解に落ち着くものであるかどうか。学史の末尾において取り上げた鈴木克彦の提言同様、層位的な前後関係や共伴事例が、型式的同一性と合致しない場合において、型式的な違和感よりも共伴出土という「動かし難い事例そのもの」の方を優先視するという目に見えない大原則は、ここにおいても貫かれているが、仮に、上述のような上層式の複数型式共伴であれば「同時期並存の一括資料」の可能性が考えられ、下層式と上層式の共伴であれば「混在」といささかの迷いもなく判定されるのであれば、それもやはりフィールド・ワーカーである調査者の「主観に基づいた」共伴認定ではないか、と言わざるを得ない。

なぜ、層位的調査、共伴事例が考古学においてことさらに重視されるかといえば、地質学、化石等の調査から援用された地層累重の法則と、地層同定の法則が、考古学的調査の基本的手法とされてきたからであろう。発掘調査の理念として浸透しているわけだが、この不可侵の原理原則についても今は再考のメスを入れることが迫られているように思われる。

第一に地層同定の法則などと一口に言っても、地質年代におけるある種の化石、アンモナイト等の数万年、数十万年という単位の存続年代と一土器型式の存続年代はまったく時間的なスケールの異なるものであり、一つの層にまとまる同定度合いを化石と土器とで同じに評価することはできないということ。第二には、化石年代においては地層や化石の産状に対して人間活動が影響し得る可能性は無に等しいが、考古学が対象とする過去の人間活動の痕跡（遺跡）においては、いくらでも遺物の出土状況や地山の形成および堆積に対して人間活動が影響した可能性は想定される、ということである。

原理原則として、これらの法則を援用すること自体を否定するものではないのだが、そもそもそうした根本的な条件の違いについて個々の調査者が自覚的かつほど意識的でなければ、出土状況のみを手掛かりに真の共伴か否かを正しく判断することなど不可能ではないだろうか。層位的な前後関係や共伴事例を踏まえつつも、それのみをして即時盲信するのではなく、やはり出土物の型式学的な検証という裏付け、そのための型式属性の数値化・記録化（客觀化）が不可欠ではないかと痛感される。

誤解のないように申し添えるが、このことは層位的調査や共伴事例等、出土状況の観察と記録を軽視している話ではない。層位的発掘や共伴事例は客觀的だから主で、型式学的な共通性は主觀に左右されるから従だと決めこんでかかる姿勢を改め、両者を対等に重視し、真に相補的・双向的に検証・評価することの必要性を提起するものである。

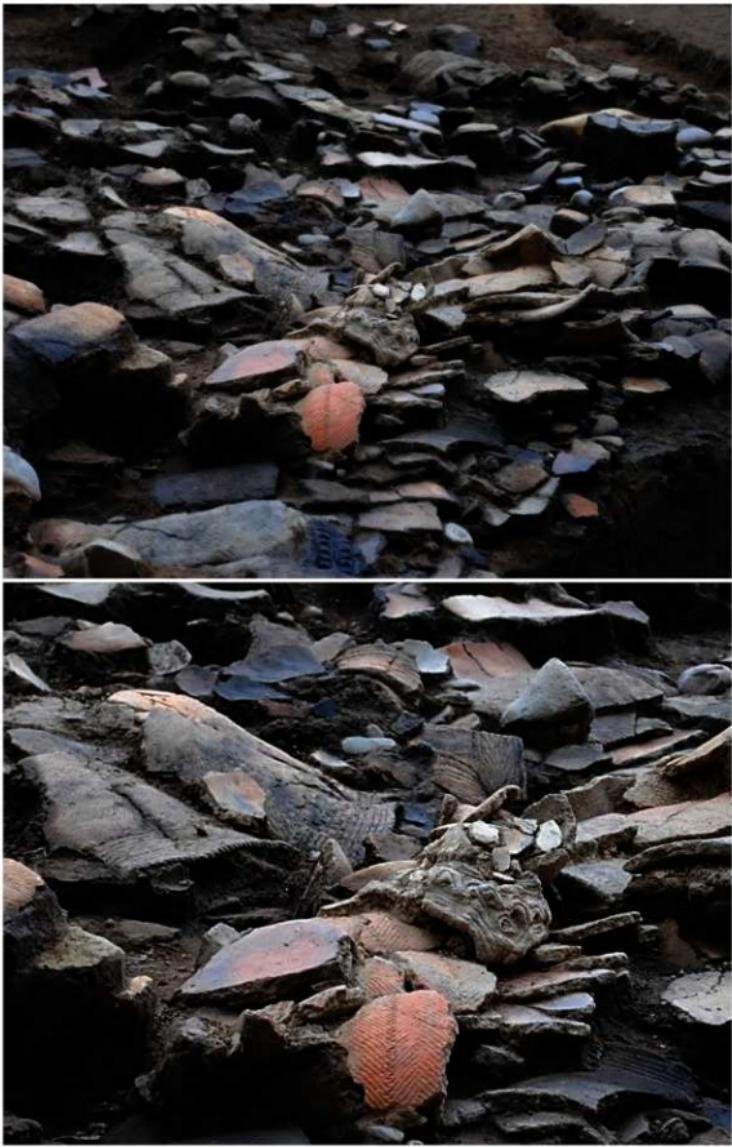
実のところ、こうした共伴出土した遺物が、必ずしも使用の同時性を保証するものではないという問題については、すでに 50 年以上も前、私の生年である 1969（昭和 44）年に鈴木公雄が「土器型式における時間の問題」（鈴木 1969）と題して警鐘を鳴らしている。館崎遺跡における新旧土器（下層式と上層式）の共伴は、まさにこの論文が注意喚起している（しかし、あるいは多くの研究者には見過ごされてしまったのかもしれない）卓見と同じ状況であった。非常に重要な指摘であるので、以下にその核心部を引用しておきたい。

〔前略〕編年体系の一単位としての土器型式は、他の土器型式との間に型式總体としての時間差を有するものとして規定されており、その根本は、製作の同時性というべきものによっているのだが、土器型式の時間的な理解については、いま一つ別の觀点が存在している。つまり土器の製作から使用を経てそれが廃棄ないし埋設の状態で化石化した場合の問題である。換言すれば一つの層位の一括出土遺物、一括埋設物などといわれるものがそれにあたる訳だが、このような出土状態の中では、先の製作の同時性ということは必ずしも完徹されてはいない。ある單一の層から出土する土器が、全て同一の型式のものであるという例はむしろ稀であり、発掘方法のミスなどを考慮した上でも、その点は明らかである。また故意に埋設されたような一括出土資料の中には、明らかに別型式に属するものが存在することもある。このような場合遺物相互間をむすびつけるものは、製作の同時性ではなく、むしろ、そこに廃棄された、或は埋設された時間が同時であったことを示しているにすぎない。

ところが、我々がある一群の考古学的資料に対して、一定の時間的秩序を与えようとする場合、基本的なものとしてまずとりあげるものは、この層位の一括出土遺物であることも明らかである。従って編年的な目的をもって型式設定を行おうとすることは、このような「廃棄の同時性」によって律せられている一群の資料の中から、ある「製作の同時性」をもった一群を規定し、それらと異なった発生の時間を有する資料をとり除く作業であるといえる。このことからまた、われわれが一般的に用いる所の「層位的検証」ということは、「廃棄の同時性」の中から抽出された「製作の同時性」を持った型式を、再び他の「廃棄の同時性」によって律せられた資料の中で検討する、という作業であるといえ、このような検証をくり返すことによって、ある土器型式の内容がタイムユニットとして固定していくことになる訳である。それ故、この場合には、数多くの事例によって検証がなされるという、蓋然性のつみ重ねがその検証の正当性を高めていくことに他ならない。

〔中略〕このように土器型式を設定する作業の中には、「製作の同時性」と「廃棄の同時性」という二つの異なる時間認識が存在している訳であり、「製作の同時性」はある程度によるタイムユニットの作成という目的によって想定された概念であるといえ、その限りで型式とは一つの抽象化がなされたものである。これに対して「廃棄の同時性」は、ある一括の遺物が、作為的にせよ無作為的にせよ、一つの社会的機能を停止した状態で化石化したとみられるものであり、それは、それらの遺物がある社会の中で生産され使用される過程を経てきた状態を何らかの形で反映するものであるといえる。われわれの日常生活用具を例にとっても、それが全て生産の同時性によって律せられている訳でないことは、われわれ自身経験していることであって、それを生活の実際的な姿としてむしろ矛盾なく受け入れているといえる。むしろ、異なった「製作の同時性」をもった種々の資料が、ある層位の中で「廃棄の同時性」に律せられて化石化するまでの経過が、それらの資料を作り、使用してきたその社会の実態を理解する手がかりになるものといえるだろう。従って、「廃棄の同時性」というものは「製作の同時性」があるタイムユニットの作成という目的の中で生まれてきたのに対して、かなり異なった側面を持っていることが知られる。もちろん、「製作の同時性」と「廃棄の同時性」が一致しているような事例が全くない訳ではないが、むしろそれは特異なケースといるべきであろう。

このような土器型式の中にある二つの異なる時間認識が、実は土器の型式的理解を混乱させる要因になっているのではないかと思われるふしがある。よく「層位は型式に優先する」ということがいわれるが、これなどはそのよい例である。この場合問題となるのは、いかなるケース



において、<sup>55)</sup>或はどのような目的にてらして、層位は型式に優先するのかという点にあるのであって、一般論として常にこのことばが通用することではないだろう。今ここでとりあげている土器型式をタイムユニットとしてとらえる考え方からみれば層位は必ずしも型式に優先するとはいはず、むしろ、その逆である場合がつよい。何故ならば層位の一括出土遺物が、全て製作時の同時性を保証しているものではないからであり、ある層位の一括出土遺物としてまとまつたものでさえ、その時代性を云々する場合には、そこにつらぬかれている「廃棄の同時性」をくずして処理しなくてはならないといえる。またこれと反対に、明らかに製作年代を異にするものどうしが、ある一括出土の状態で「廃棄の同時性」につらぬかれている場合には、そのようなことが何故に生じてしまったのかを改めて問題とする立場がある。そのような場合には、まさにそのような形で遺物が存在すること自体の中に、その遺物を製作し、あるいは使用した社会の状況が反映されていると考えられるからであり、それを通じて、その社会の様相を復元することが可能となるのである。従って、前者のような場合には、層位は型式に優先するとはいはず、又後者のようなケースでは、層位の一括というものを型式によってくずすことはできなくなる。これは二律背反でもなく、そこでそれらの資料をいかにあつかおうとするかという、問題关心のおき所が異なっているからにすぎない。それ故、土器型式の編年学的研究ということを中心にして土器を扱おうとする立場からすれば、その中における時間の概念は、あくまで「製作の同時性」でありその限りにおいて層位は型式に優先するとは概にいえない。このように土器型式をあつかう中で考えられる「時間」には、二つの異なるものがあり、それぞれは、研究の目的とするところによって実は使いわけられねばならず両者の無意識的な混同をさけるように注意しなければならない」

(鈴木 1969)

土器の共伴事例の認識については、さらにもう一つ注意しておかなくてはならない重要な観点がある。それは古い型式の製品が新しい型式の製品へと移り変わる時に、具体的にどのような経過が考えられるかという問題である。その一つは少しづつ形状や諸特徴が移り変わって、やがて全く新しい型式に移行しているという「漸変」。もう一つは、古い型式が主体のうちに、新型が登場し、徐々にその数を増やしていく、その一方で古い型式は数を減らしていくという「入れ替わり」である。

たとえば携帯電話。ほとんどの人がフィーチャーホン（いわゆるガラケー）を使用していた2008年、流通したてのスマートフォンの日本国内での保有率はほんの4%程度であった。それが早くも5年後の2013年には逆転し、現在はスマートフォンの方が90%を超える保有率である。こうした新旧製品の入れ替わりをみると、土器型式の移行期にも同様な新旧共存状況がなかったとは断言し得ないであろう。しかし、仮に2008年の廃棄層を発掘して100個近くのガラケーと3、4個のスマホが出土したとしても、ガラケーのほうは圧倒的に多く出土したからといって、一緒に出土した3、4個のスマホもみんなガラケーである、ということには絶対にならないであろう。型式学的にスマホとガラケーは明らかに別物であり、型式学的認定は「共伴の多数決」により確定されるものではないからである。たとえ同時期に併行して使用されたもの同士の共伴であったとしても、両者が備え持つ型式学的属性が多くの点で異なるのであれば、同一型式（名）には絶対にならない。未来永劫、ガラケーはガラケー、スマホはスマホである。

つまり、道南地方で下層 d2 式が主体的に使われていた時期に新しい上層 a1 式が渡来してきて一部の集落では使用されていたかもしれないし、上層 a1 式が多く使われるようになっても下層 d2 式の属性の土器を引き続き使っている人がいたかもしれない、という状況が普通に考えられるであろうということ。さらにもう一つ言えば、レトロブームというように、数十年のブランクにおいて昔の流行（デザイン）が再び繰り返されるということも、人間活動の普遍的な現実として視界の端に意識しておく必要があるだろう。

そうした新旧の共伴状況が古今東西の人間活動にいくらでも認められる以上、たとえ同一の場に新旧の土器が共伴とみなされる状況で出土したからといって、多数決的な観点ですべてを同一型式の共伴事例にしてしまうような野蛮な判断があつてはならない（いやしくも型式学であるのなら諸属性の違いに即して正しく弁別することを試みるのが道理である）。

こうした共伴事例に起つたのがちな誤認を回避するためにも、土器型式を、眞の意味での時間尺（数値化・客觀化）とする必要性が痛感されている。そこを考えれば、全国の報告書に掲載されている復元土器に関する型式学的属性を数値化した表項目は、ほとんどの場合において、やはり貧弱すぎるのではないか、と指摘せざるを得ない。型式を型式として帰属させている諸属性について、可能な限り抽出して数値化することこそは、もっとも有効かつ必要不可欠な基礎的作業であるとあえて提起をする所以である。

### 館崎遺跡出土土器一分類整理の実際

上述のように円筒土器に関する学史や調査事例を調べていった結果、大まかな型式観や変遷こそはイメージできたものの、型式を型式としている諸属性（諸特徴）の細部や、型式と型式を分かつ線引きをどこに持つて来るかは必ずしも一致するには至っていないとの所感を持った。学史を尊重し、情報が蓄積されればされるほど、混乱の度は深まる一方であり、数ある型式観（案）のどれが正解であるかを見出すことは、どれほど論考や報告書を読み込んでも不可能なことに思われた。さらには自分が現実に掘つて、眼前にしている館崎遺跡の出土状況（主に共伴）からも正解を見出すのははなはだ困難なことに映つた。しかし、数百個体の個体資料が出土している中で、既存の通説のどれかにすり合わせて当たり障りなく報告するようなことだけは絶対に避けねばならない。共伴らしい出土状況と、混在らしい出土状況があり、さらには混在の共伴であろうと推測される出土状況もある中、それらが眞の共伴か、混在か、それとも廃棄行為による混在の共伴であるかを、誰が検証してもそうであると認められるような客觀的な根拠に基づいた分類、蓋然性のある分類と報告にするにはどうすれば良いかということが、土器の整理担当になって以来、ずっと考えさせられ続けた自分の中の命題であった。

そこで、数百個体に及ぶ復元土器を中心に、とにかく徹底的に観察し、見出された諸属性の数値化（セリエーション）を行なうことを考えた。土器型式というものが、諸属性の共通によって確立されているのに、その定義や線引きが一致していない状況の本質的な理由を突き詰めて考えた結果、型式を型式として説明づける諸属性がほとんどの調査報告において積極的に数値化（客觀化）されておらず、概念的な印象の説明（主觀の領域）に終始しているからではないか、と考えられたためである。型式学的手法そのものが主觀なのではなく、個々の土器が持っている諸属性を必要十分に数値化していないから、データ不在のままだから、いつまでたっても客觀にならないのであって、属性の数値化を徹底し、型式観を漠然としたものではなく具体的なものにすれば、逆にその出土状況が共伴か混在か、あるいは混在の共伴であるか、ということも主觀で

はなく客観的に説明できると考えられた<sup>注7</sup>。

方法はシンプルである。土器を復元するたびに1個体ごと復元番号付きで写真を撮り、A4用紙に1枚1個体でプリントアウト、数百個体=数百枚を用意した。写真を見比べ、視覚的にそっくりなものの同士をまとめていき、実物も同時に見比べて、数十単位のグループに分けた。どれにも帰属しないものや、折衷的なものなどグレーゾーンの個体は無理にグループに含めず、保留としてひとまず横に置いた。次にグループごとに共通している諸属性を抽出した。実物観察により器形、突起形状、施文パターン、貼付、地文、底部形状等、とにかくそれらが視覚的に同一グループとして認識し得る要素を徹底的に洗い出し、それぞれがグループの中で何個体何%を占めているか等の数値化に努めた。それら属性の多寡の推移・変動によって共通する諸属性を持つグループの中でも、さらに古い属性を多く持つものから新しい属性を持つものへの序列化を行った。

館崎遺跡の復元土器に関して数値化・表化した諸属性は合計131項目に及ぶ。その詳細は以下のとおりである。

#### 基本データ（12項目 報告書第2分冊表V-4 第4分冊表18~23）

推定遺存率（復元土器を見て目分量での推定。5分の1程度欠失していると見たら80%という具合。しかし、3Dソフト等を用いれば正確に求められるようになっていくであろう）。

器高（突起も含んだ高さ）。

体積高（突起部を除いた容器高）。

文様帶幅（器高に対する文様帶幅の割合を%表記・型式ごとに平均%を算出）。

口径。

頭屈曲部径（もっともくびれている位置の径）。

頭屈曲指数（口径を頭屈曲部径で割ったもの=口縁が頭部の何倍であるかを表すもの）。

径較差（頭屈曲指数1.00超過1.15以下を小、1.15超過1.30以下を中、1.30超過を大。屈曲指数が1.00未満である場合を内傾として分けたもの）。

屈曲範囲幅（口縁部屈曲範囲の幅。突起、高台部を含む器高から、頭部=頭屈曲部径を計測した位置以下の高さを引いたもの）。

底径。

重さ（補填材込みの計量となったが、これは復元前の破片段階で計量すべきものであった）。

推定容量（実測図の正面を元に、内底面から口唇のもっとも低いラインまでを対象とし、器壁の屈曲点など傾斜角が変化するところ毎に分断、ソフトを用いた円錐台の容積の総和によって算出したが、プラスチック・ビーズ等を復元土器に実際に充填して計量カップで量る方が、簡便で正確である。デジタル操作などで最新技術で何ができるかがよくわかっていないが、おそらく3D計測等を行えばより正確に算出できるのであろう。いずれにせよ土器がウツワである以上、復元土器の容量は掲載必須項目であろう）。

これら基本的なデータのうち体積高（第4分冊以下同じ・表X-18）、推定容量（表X-19）、推定平均重量（表X-20）、口径比（表X-21）、径較差（表X-22）、文様帶幅（表X-23）についてはサイズごとに個体数を出して、その型式ごとの推移と傾向も表にした。

手作りで部位ごとに不均一である土器を計測してもあまり意味がないとする見方もあるかもしれないが、そうした土器の性質を加味した上で、極力平均的な部位で計測するよう心掛け、数百、数千単位で計測データが蓄積されていけば、型式ごとの平均値として傾向が具体化・有意化

し、最終的には型式内の新旧段階ごとの変化さえも数値として顕在化することが予想される。

#### 口縁形状・突起等の属性

26項目（報告書第4分冊・図X-35）に分けて数値化、型式ごと段階ごとの多寡や消長を表（報告書第4分冊・表X-7・8）にした。

#### 貼付の属性

18項目（報告書第4分冊・図X-36上段）に分けて数値化、型式ごと段階ごとの多寡や消長を表（報告書第4分冊・表X-8）にした。

#### 文様帯の基調文様

22項目に分けて数値化、型式ごと段階ごとの多寡や消長を表（報告書第4分冊・表X-9）にした。

#### 文様帯の基調構成

7項目に分けて数値化、型式ごと段階ごとの多寡や消長を表（報告書第4分冊・表X-9）にした。

#### 突起下の区画

15項目（報告書第4分冊・図X-36下段）に分けて数値化、型式ごと段階ごとの多寡や消長を表（報告書第4分冊・表X-10）にした。

#### 口唇上に付した縄や縞線、刺突

27項目に分けて数値化、型式ごと段階ごとの多寡や消長を表（報告書第4分冊・表X-16）にした。

#### 基調地文等

大きく4項目に分けて数値化、型式ごと段階ごとの多寡や消長を表（報告書第4分冊・表X-17）にした。併せて縦方向の綾縞文や、複節縞文の使用など特徴的なものについても補足的に数値化している。

グループごとの共通属性について数値化したところで、各グループを、既存の円筒土器の各型式に振り分けた。明らかに下層d1式に収まるグループ、明らかに下層d2式に収まるグループ、明らかに上層a1式のグループという具合である。そして各型式の中に入れた複数のグループを対象に、グループが共通項として持っている諸属性の新旧から型式内での新旧を序列化した。この時も過渡的なものや、型式の帰属先に迷いが生じるものは保留として横に置いた。

次いで、どれにも帰属しないものや、折衷的なものなど保留状態にしたグレーボーンの個体についても属性の数値化を進め、その土器が持つ属性内容から、どの型式と型式の間、どのグループとグループの間、すなわちどの段階に配置するのが適切であるか一つ一つ検討していった。

グループの属性によって新旧を序列させる検証作業では、器形や突起形状、文様帯の構成等、

型式的な本質性が高いとみなしうる要素を上位属性として優先させ、個々の施文内容や施文具の違い等は下位属性とすることを意識した。つまり、型式判定のメルクマールとして注目されてきた、馬蹄形の繩圧痕か半截竹管状工具による刺突かの違いであるとか、文様帶の構成（デザイン）がほぼ同じである場合での貼付文か沈線文かの別は、施文具等を代用し得る可能性が高いと判断されたため、下位属性の扱いとした次第である。無文地に貼付で文様帶を区画したか、地文として繩文を全面に施文後に貼付で文様帶を区画したかという、サイベ沢VII式かそれ以前かを分ける指標についても、無文地に文様帶を構成するものが古く、繩文を施文後に貼付で文様帶を構成するものが後出であることは確かにそうであるとしても、後述するようにほぼ同一の文様帶構成が両者でみられる（818と819、882と883等）ことから、ほぼ同時期に作られていた可能性もあるとみて、ことさらその要素のみで新旧を分かつことはあえてしなかった。

そしてほぼそこまで作業が進んだ段階で、改めてそれぞれの型式（グループ）に属する個々の土器の出土遺構や盛土について、位置や層位、共伴状況の確認を行った。これは出土土器が同一型式同一段階による共伴であるか、時間的共時性が認められない混在であるか、あるいは廃棄行為の同時性を意味する共伴であるか、共伴事例を最優先させて、そこから型式を確定させる方法とは逆に、型式としての諸属性から認められる個々の土器の共通性と出土状況が矛盾しないかどうかを確かめ、そこから出土状況の成因を一つ一つ検証するという方法である。

## 突起下の区画



言葉だけではイメージするものが千差万別になるため、模式的に図を示してみた。報告書の事実記載が読んだ人によって異なるものにならないよう、「共通認識」になるための工夫は必要不可欠であるだろう。

大属性	小属性	Ⅱb			Ⅲa						見積町
		下c	下d1	下d2	上a1	上a2	上b	上b末～サイベ茨 語(古)	サイベ茨 語(古)	サイベ茨 語(新)	
突起 形状等	通常	2	26	6							1
	二段			4							
	波状		4	20	4	13		1	10	1	10
	二段		4	15	1	3					
	片流れ		1	7	10	8	?				2
	貼付隆起			3							
	二段				8	1					
	小隆起		?	15	15	5	2	2	2	6	
	二段			1	11	1					2
	三角形(純)		1	4	1	11	?				1
	二段				2	6					
	山形			2	10	8					
	二段		?	16	23						
	圓状(アーチ状)				?	8	4	1			1
	冠状(巻きつけ跡等)				?	10	2				
	二段				?	8	15				
	台形				?	7	25		!		
	平				?	6	17	6	14	8	1
	棒状ほか		?	7	22	4	2		11	1	
実底痕部が直並に凹む(登呂実底に多い)				3	28	4		1	1		
実底頂部に刺突等が加えられる									8	2	
2種2列の突起・貼付等		1	4	7	17	1			6	1	

円筒土器属性一覧 (1) 報告書第4分冊 総括篇 表X-7

大属性	小属性	Ⅱb			Ⅲa						見積町
		下c	下d1	下d2	上a1	上a2	上b	上b末～サイベ茨 語(古)	サイベ茨 語(古)	サイベ茨 語(新)	
文様帶 (形状等)	口縁部帯状肥厚	?	16	27	14	2					
	二段口縁(断面クランク状)	1	20	3	1						
	口唇部の肥厚が斷面			8	68	10	?				
	実底痕 耳状凹		?	13	37	8	1		3	1	
	透かし孔・側面・縦長・側縫部の孔	6	7								
	実底痕穿孔		1	?	8	11	2	3	3	1	
	透T字状		3	11	1						
	6字・二字状	2	6	?	1	1					
	J字状あるいは斜位の彫線	1	10	9							
	C字状		5	2							
文様帶 (貼付等)	網點付	3	3	5							
	點點狀		2	4							
	透葉状		1	7	1						
	網状	6	11	18	8	5	1	2			
	透状貼付(網状貼付)	1	14	28	7	5	10	6			
	彫紋あるいはボタン状の貼付	5	15	33	2	1	2	2	6		
	口唇フック状		23	32	17						
	貼付上の巻状隆起	?	8	51	3						
	口縁を挖りこない貼付が締まる			11	18						
	縦位透行		?	16							
	太粒透行貼付模様		?	15	2						
	細粒透行貼付の模様				33	20	13	13			
	組束貼付	2	20	1							
	連續貼付		?	6	18	5	2				

円筒土器属性一覧 (2) 報告書第4分冊 総括篇 表X-8

大属性	中属性	小属性	Ⅱb				Ⅲa				
			下c	下d1	下d2	上a1	上a2	上b	上b～ サイベ茨 (吉)	サイベ茨 (吉)	サイベ茨 (斯)
文様帶 (基調文様)	口腹部に沿状縞文や絞繩がり～3段模様		5	27	9						
	綱各体	幾何的モチーフ基調	1	8	15		1				
	圧痕	平行多段基調		22	18	25	11				
	斜突等	平行多段基調		4	10	11	2				
	壓・圧痕 (卓)	幾何的モチーフ基調	3	44	22	1	1				
		平行多段基調		15	62	29	27	17			
	縞繩	幾何的モチーフ基調		?	2	1					
		平行多段基調		?	2	1	5				
		幾何的モチーフ			6						
		縦状		3	1	2		25	?		
		蛇行状						27	?		
		縱位・斜位						?	10		
		平行多段		9	20	42	103	82	1		
		點付縞取り			1	4	34	42			
		縦状・横状圧痕			2	11	50	7			
	縦位・斜位の 対照基調圧痕 (基調体)	サンダッチ状の模様	17	19	21	19	4				
		非サンダッチ状	21	12	8	15	7				
		圓形帶内		2	16	40	42				
	地虫状模様圧痕 (馬蹄形圧痕)	連續線形的			1	21	72				
		區画実境的				1	22				
	刺突	半段中空工具 刺突					?	16	5	1	1
		棒・ヘラ 刺突			1	5	31	17	12	3	1
文様帶 (構成)	サンダッチ状の構成		27	34	31	64	90				
	口縫部と側部の後を點付模様で囲む			3	35	198	124	20	25	1	
	網状點付(レンズ形対称)						3	6	10		
	網状點付(菱形網)						1	3	1	1	
	網状點付(不規則非対称)							22	11	14	2
	ソーン文							5	10	8	2
	沈模文								5	1	
	地文を施文後に、點付文を付す						1	1	15	10	

円筒土器属性一覧 (3) 報告書第4分冊 総括篇 表X-9

大属性	小属性	Ⅱb				Ⅲa				見晴町
		下c	下d1	下d2	上a1	上a2	上b	上b～ サイベ茨 (吉)	サイベ茨 (吉)	
区画 (刺突等)	刺点文		20	28	13	1				
	半圓中空工具等の刺突・押し引き		20	32	1					
	ハの字			1	2					
	細繩円形				3	10	?			
	凧状		1?	7	8	25	5			
	V字状			1	21	11				
	Y字状			1	10	9				
	くびれ・X字状				14	?	1?			
	半円形				4					
	ハート形				1					
	馬蹄形(後狀)				6					
	蛇行				8	3				
	三角形				11	4				
	台形				3	2				
	四角形				2	17				
	不整円形複合				9	6				
	菱形				8					
	区画、點付、縞状圧痕等が側面に及ぶ			3	23	4	1	1		

円筒土器属性一覧 (4) 報告書第4分冊 総括篇 表X-10

**表X-13 円筒土器属性掲載土器対応表（文様帯貼付等）（1）**

属性	分類	型番	開幕番号	小計	合計
透丁字貼付	II b	下層a2	2907-299-2907	3	15
		III a	221-2407-346-(3497)-363-(3487)-389-402-(4027)-421-422	1	
4字+二字状貼付	II b	下層a2	236-236	2	10
		III a	341-363-(3197)-372-380-(4197)	1	
J字状あるいは斜位の弧形状貼付	II b	上層a1	264 → 265-316-(314)-(327)-(3284)-298	10	28
		III a	470-474-476-478 → 480-501-508-522	9	
C字状貼付	III a	上層a1	471 → 473-475-477	2	7
縦貼付	II b	上層a1	333-343	3	11
		III a	353-349-(3497)	5	
独脚状貼付	III a	上層a1	(3497)-393-399	2	6
		上層a2	444-485-502-518	4	
逆張状貼付	III a	上層a1	469-480-(3487)	1	8
		上層a2	(409-424-4287)-(609-3147)-480-591(人面)	7	
横状貼付	II b	上層a2	458	1	51
		下層a2	(1797)-(180-18177) → ベート法螺・下唇式の頭頂かしわもない、	6	
横状貼付(透)	II b	下層a2	341-352-354-355(小型)・350(高身)・310(小型)	6	71
		上層a1	345-347-351-353(3497)-368-392-394-412(通螺)・413(透螺)	11	
透状貼付	III a	上層a1	481-492-(493)-(494-515)(透螺)	18	71
		上層a2	468-469-493(透螺)・(3497)-607(参考) - 705-768 → 782	9	
透状貼付(透抜)	III a	上層a1	780-791(馬頭)・798(小面)・787-800	5	71
		上層a2	サイバ(透抜)・798	1	
透状貼付(透抜)	III a	上層a1	812	2	71
		上層a2	透抜・802-814-822-836-837-838-842-843	6	
透状あるいはボタン状貼付	II b	下層a2	377	1	15
		上層a1	340-364-378(381)-(383) → 385-(387) → 401-(404-40977)-408	14	
透状あるいはボタン状貼付	III a	上層a1	(405-408-411-414-416-417-419-421-423-424) → 425-427-(337) → 339-340-352(透)・582-588-587-588(人面)・571(人面)	28	86
		上層a2	(409-417-419-421-423-424-427-428)	7	
口縁	II b	上層a1	781-787-789-797-797	5	33
		上層a2	サイバ(透)・798	10	
口縁	III a	上層a1	807-809-810-811-812-813-814-815-816-817-818-819	16	33
		上層a2	透抜・819-820-821-822	2	
口縁フック	III a	上層a1	238-265(279)-(281)-(283)-(287)-(289)-(291)-(293)-(295)-(297)-(299)	15	33
		上層a2	(440-445-460)-(460-462)-(269)-(313)-315-316-321-325-326-327-328)-1320-334-542-560(人面)・541-549-567(透)	33	
縫付上の背脂塊起	III a	上層a1	(390-394-395)(透)	2	33
		上層a2	透・391-392-393-394	1	
口縁を吹き付ける粘土が異なる	III a	上層a1	387-391-391-392-393-394	8	51
		上層a2	532-537-540(人面)・541-543-543(透)・547-548-572(透)・582-584-594(文)・585-594-539-537(人面)・585-595	51	
縫付現行貼付	III a	上層a1	649-650-706	3	79
		上層a2	549-549-548-558 → 560-569-581-593	11	
縫付現行貼付	III a	上層a1	646-648-676-677-678-677-687-690(透)	16	79
		上層a2	747-750-719(239)-584-584-584-588-592-597 → 513-517(239)-526	16	

**表X-13 円筒土器属性掲載土器対応表（文様帯貼付等）（2）**

属性	分類	型番	開幕番号	小計	合計
透丁字現行	III a	上層a2	522-535 → 536-582-526(透半周に集中)	15	17
		上層a1	(700-707-710-715-717-787)(参考) → 798	2	
縫付現行	III a	上層a1	(5087)-(5186)(透)・72-722-724-729-730-732 → 750-753-(7577)-760-761-763-770-771(後半周に集中)	33	79
		上層a2	781-789-793(透)・721-722-724-729-730-732 → 750-753-(7577)-760-761-763-770-771(後半周に集中)	20	
縫付現行	III a	上層a2	781-816-817-817(透)・818-823(透)・824-836-837-849-850(透)	13	79
		上層a1	857-858(透)・859-859(透)・860-861-863-865-866-867(透) → 868(透)・7197(透)・7147(透)	13	
縫付現行	III a	上層a2	391-392	2	23
		上層a1	(4417)-444-445-470-472-475-477-478-489-503-(507) → 480-482-489-508(透)・507-509-510-512-519-521-522-523(透)・527-528(透)	32	
縫付現行	III a	上層a2	532-537-540(人面)・541-543-543(透)・547-548-572(透)・582-584-594(文)・585-594-539-537(人面)・585-595	51	
		上層a1	649-650-706	3	
縫付現行	III a	上層a2	549-549-548-558 → 560-569-581-593	11	27
		上層a1	646-648-676-677-678-677-687-690(透) → 708-710-712-714-720-725-727-729	16	
縫付現行	III a	上層a2	477-500-519(239)-584-584-584-588-592-597 → 513-517(239)-526	16	

数値化したすべての属性について、該当する掲載土器を検索するための表も別途作成した。

番号はすべて掲載土器番号。報告書の利用者目録に立った時に、その属性項目を持つ土器がどれであるか、すぐに検索できる表は必須であると考えたものである。ページ数を取るので、ここでは一部の掲載ととどめる。

	下層c	下層d1	下層d2	上層a1	上層a2	上層b	上層c～サイベック W(右)	サイベック W(左)	サイベック W(額)	見晴町
固着式主体 (直角固着・滑脱式式)	19 (76.0%)	66 (42.0%)	27 (21.3%)	—	1 (0.5%)	—	—	—	—	—
多轴式固体主体	4 (16.0%)	82 (52.2%)	95 (74.8%)	2 (2.0%)	2 (1.0%)	—	—	—	—	—
航行関係主体 (直角固着・滑脱式)	2 (8.0%)	8 (5.1%)	5 (3.9%)	11 (8.8%)	11 (8.8%)	42 (32.4%)	18 (41.1%)	21 (51.3%)	19 (48.7%)	12 (80.0%)
滑脱式主体	—	—	—	5 (3.1%)	80 (40.2%)	90 (88.2%)	22 (57.9%)	20 (48.8%)	20 (51.3%)	3 (20.0%)
基礎地盤の種類・結果羽状	—	1	4	8	7	7	—	—	—	—
当機関式	—	1 (0.8%)	—	7 (7.1%)	9 (4.5%)	1 (0.8%)	—	3 (7.3%)	1 (2.6%)	—
被覆対象個体数	25	157	127	98	199	132	38	41	38	15

※ 値は該当する優先個体数。()内%は型式別<被>の割合を示す。多軸式主体が少ないので入れてない。

基調地文の割合 報告書第4分冊 総括篇 表X-17

	下層c	下層d1	下層d2	上層a1	上層a2	上層b
20.0cm超距～25.0cm以下	2 (13.3%)	9 (12.6%)	6 (7.1%)	2 (4.3%)	9 (10.3%)	12 (24.9%)
25.0cm超距～30.0cm以下	4 (26.8%)	14 (19.7%)	14 (18.7%)	5 (10.9%)	13 (14.9%)	10 (20.0%)
30.0cm超距～35.0cm以下	3 (20.0%)	5 (7.0%)	5 (6.0%)	10 (21.7%)	15 (17.2%)	13 (26.9%)
35.0cm超距～40.0cm以下	3 (20.0%)	23 (32.4%)	16 (19.0%)	9 (19.6%)	22 (25.3%)	5 (510.0%)
40.0cm超距～45.0cm以下	3 (20.0%)	17 (23.9%)	30 (35.7%)	7 (15.2%)	11 (12.8%)	7 (14.9%)
45.0cm超距～50.0cm以下	—	— (4.2%)	11 (13.1%)	10 (21.7%)	11 (12.8%)	1 (2.0%)
50.0cm超距	—	— (2.3%)	2 (6.5%)	3 (6.5%)	6 (8.9%)	2 (4.0%)
対象個体数	15	71	84	46	87	50
対象個体体積高計(cm)	490.0	2471.4	3199.4	1766.1	3180.4	1599.3
平均(cm)	32.666	34.808	38.088	38.393	36.556	31.986
前型式比	—	106.60%	109.40%	100.80%	95.20%	87.50%

※ 体積高は突起部、高さ等を抜いた高さ、口端から底部までつながっているもので推定標準率80%以上、25.0cm超距土器を対象とした。

※ 値は該当する優先個体数。()内%は型式別<被>の割合を示す。

※ サイベック式は基部が様々で傾向が変わるので除外。見晴町式は個体数が少ないため対象外とした。

体積高の割合 報告書第4分冊 総括篇 表X-18

	下層c	下層d1	下層d2	上層a1	上層a2	上層b
5.0L超距～10.0L以下	5 (71.4%)	23 (45.1%)	8 (16.9%)	13 (42.4%)	25 (34.2%)	14 (56.0%)
10.0L超距～15.0L以下	2 (28.6%)	20 (39.2%)	24 (50.0%)	8 (24.2%)	19 (26.0%)	8 (32.0%)
15.0L超距～20.0L以下	—	— (11.8%)	9 (18.9%)	7 (24.2%)	16 (21.9%)	—
20.0L超距～25.0L以下	—	— (2.0%)	5 (10.4%)	4 (9.1%)	3 (4.1%)	3 (12.0%)
25.0L超距～30.0L以下	—	— (2.0%)	1 (2.1%)	1 (2.1%)	5 (6.9%)	—
30.0L超距	—	— (2.1%)	—	— (6.9%)	5 (6.9%)	—
対象個体数	7	51	48	33	73	25
5.0L超距の平均容量	9.06L	11.04L	14.51L	13.39L	14.58L	10.79L
直前型式に対する 5.0L超距の 平均容量比(%)	—	121.8%	130.0%	92.3%	108.7%	74.1%
下層式に対する 5.0L超距の 平均容量比	1.000	1.218	1.602	1.478	1.607	1.191

※ 復元率90%以上、容量高20.0cm、容量5.0L超距土器を対象とした。容量は国際標準に従って大文字(L)で表記。

※ 値は該当する優先個体数。()内%は型式別<被>の割合を示す。

※ サイベック式は基部が様々で傾向が変わるので除外。見晴町式は個体数が少ないため対象外とした。

推定容量比 報告書第4分冊 総括篇 表X-19

	下限a	下限d1	下限d2	上层e1	上层e2	上层f	上層g サイバ(右)
1kg以上耳棒 の平均重量(g)	2.13	3.00	3.75	3.70	4.06	2.90	2.35
直角型式に対する 直角度測定(%)	—	140.9%	125.0%	98.7%	109.8%	71.4%	81.0%
下層式(1)式による 1kg以上耳棒の 1kg以上耳棒	1.000	1.408	1.781	1.736	1.906	1.361	1.103
片側耳棒重量(g)	27.87	212.23	229.03	186.42	385.82	153.82	32.84
片側耳棒個数	13	71	61	45	85	53	14

注 口幅から耳棒までの距離が1cm以上であるので確定度実率60%以上。基点10mm距離、被験耳品中の割合で1kg以上耳棒を算出した。

※ サイバ(右)耳棒は耳棒外側とした。

推定平均重量比 報告書第4分冊 総括篇 表X-20

	下限a	下限d1	下限d2	上層e1	上層e2	上層f	上層g サイバ(右)
10mm超過～25mm以下	7 (77.8%)	38 (48.4%)	19 (17.2%)	12 (20.3%)	37 (28.8%)	36 (41.9%)	—
25mm超過～30mm以下	2 (22.2%)	34 (40.5%)	43 (49.4%)	24 (40.7%)	35 (35.4%)	32 (37.2%)	—
30mm超過～35mm以下	—	10 (11.8%)	19 (21.9%)	14 (25.7%)	27 (28.8%)	12 (15.1%)	—
35mm超過～40mm以下	—	1 (1.2%)	9 (10.2%)	8 (12.0%)	23 (16.7%)	5 (5.8%)	—
40mm超過	—	—	1 (1.1%)	1 (1.7%)	6 (4.3%)	—	—
片側耳棒	8	84	87	59	138	88	—

注 片側耳棒は耳棒外側とした。

※ 被験耳棒は耳棒外側。(内)内の場合は内側とした。

※ 被験耳棒は耳棒外側。(内)内の場合は内側とした。

※ 直角型式は耳棒外側とした。

※ 斜角型式は耳棒外側とした。

口径比 報告書第4分冊 総括篇 表X-21

	下限a	下限d1	下限d2	上層e1	上層e2	上層f	上層g サイバ(右)	サイバ(左) サイバ(右)	異端
少(1.00超過)(154.7)	8 (100%)	37 (86.0%)	42 (48.2%)	2 (0.0%)	18 (14.2%)	18 (18.2%)	1 (0.6%)	3 (12.0%)	2 (3.7%)
中(1.10超過)(206.7)	—	6 (14.0%)	42 (48.3%)	30 (60.0%)	58 (45.7%)	34 (34.3%)	10 (41.7%)	6 (24.0%)	6 (26.1%)
大(1.30超過)	—	—	3 (3.4%)	17 (36.0%)	61 (40.2%)	47 (47.3%)	13 (34.2%)	16 (64.0%)	15 (65.2%)
片側耳棒	8	43	87	50	127	99	24	25	23

注 口幅が全耳棒を耳棒外側とした。

※ 被験耳棒は耳棒外側。(内)内の場合は内側とした。

径較差 報告書第4分冊 総括篇 表X-22

※ もっともせばまったく頭部径を口径で割った数値。

	下限a	下限d1	下限d2	上層e1	上層e2	上層f	上層g サイバ(右)	サイバ(左) サイバ(右)
5%以下	9 (56.3%)	3 (2.4%)	—	—	—	—	—	—
5%超過～10%以下	1 (27.9%)	35 (41.7%)	5 (6.2%)	—	—	2 (22.9%)	—	—
10%超過～15%以下	3 (18.8%)	64 (50.0%)	28 (30.2%)	14 (20.6%)	8 (5.7%)	4 (4.9%)	—	1 (4.2%)
15%超過～20%以下	3 (18.8%)	20 (19.9%)	40 (41.0%)	16 (26.0%)	17 (12.1%)	11 (13.6%)	3 (25.0%)	—
20%超過～25%以下	2 (1.8%)	16 (18.7%)	16 (23.5%)	16 (24.8%)	15 (18.5%)	15 (18.5%)	1 (4.3%)	1 (4.3%)
25%超過～30%以下	—	1 (0.8%)	4 (4.2%)	11 (16.2%)	25 (17.7%)	15 (16.6%)	13 (8.3%)	1 (4.3%)
30%超過～35%以下	—	—	1 (1.0%)	5 (5.9%)	22 (22.9%)	15 (16.0%)	1 (8.3%)	—
35%超過～40%以下	—	—	—	1 (1.5%)	4 (5.0%)	7 (4.9%)	3 (12.3%)	—
40%超過～45%以下	—	—	—	—	1 (1.5%)	4 (4.9%)	3 (25.0%)	3 (13.0%)
45%超過～50%以下	—	—	—	1 (1.0%)	1 (1.9%)	3 (2.1%)	2 (4.8%)	2 (16.7%)
50%超過～55%以下	—	—	—	—	—	2 (1.4%)	1 (8.3%)	5 (21.7%)
55%超過～60%以下	—	—	—	—	—	—	3 (2.1%)	8 (28.6%)
60%超過	—	—	—	—	—	—	—	3 (12.0%)
片側耳棒	16	126	96	68	141	81	12	23

注 50%以上の径較差で、支撑側を除し、口幅から耳棒までの距離が2cm以上である。

※ 被験耳棒は耳棒外側。(内)内の場合は内側とした。

※ 被験耳棒は耳棒外側。(内)内の場合は内側とした。

※ 被験耳棒は耳棒外側。(内)内の場合は内側とした。

文様帶範囲幅(器高比) 報告書第4分冊 総括篇 表X-23

次に上述の整理方法によって明らかになった成果、館崎遺跡出土の円筒土器の序列一型式学的な変遷過程の具体について記す。

#### 館崎遺跡から出土した円筒土器の型式学的変遷過程

##### 各型式の指標属性 円筒土器下層c式～円筒土器上層式末まで

以下、土器を示す番号はすべて『福島町 館崎遺跡』北埋調報 333・第二分冊中の掲載土器番号である。膨大な数に及ぶため、本テキストでは一部の図示にとどめる。なお、ここに掲載する実測図は、型式学的属性を確認することに主眼を置いているため、スケールは統一していない。また、口縁部文様帶だけの掲載にしたものや、文中に記載した番号で一部掲載していないものもある。その旨、悪しからずご了承願いたい。

#### 円筒土器下層c式（報告書内掲載番号1～26）の判断属性

主に住居跡 TH-11 覆土における土器集中層の一括資料の一部を下層c式のまとまりとし、18個体を復元、掲載した。館崎遺跡出土の円筒土器の中では最古段階であるが、復元個体数は下層d1式以降の土器に比べると少ない。ただし、下層d1式と比較しても相当薄手で脆弱な胎土のため粉々に破碎したものが多いと考えられ、この復元個体の数は実数をあまり反映していないのかもしれない。

器形その他で下層d1式と共通する点が多いが、胎土中に含入する纖維の多さから、下層d1式とした土器とは胎土の質感・重量感が異なる。

器壁は薄く厚さが不均一なもの（3・4・6・8～11等）が目につくが、一方で一定程度の厚みがあり、厚さが均一なもの（1・2・5・12等）もみられた。前者は脆弱である。

平口縁が多いが、わずかに波状口縁もあり、その場合は波状の高まりが四つものが多い。これは下層d式、円筒土器上層式へと発展的に受け継がれていく。

口縁部文様帶は狭いもの（8～18等）が多いが、広いもの（1～4等）もある（『青森県史 別編三内丸山遺跡』（青森県 2002）によると口縁部の文様帶幅の広いものは日本海側では出土例が少ないと）。口縁部文様帶は繩文原体を1～4条程度、横位に巡らせる間隔の密な平行縄線、あるいは結束第一種の羽状縄文を1、2条巡らせるものなど。文様帶幅が広いものでは縄線を斜位に押捺して菱形や鋸歯状文を呈するものがある。

口縁部文様帶と胴部を分けるしきりとしての隆帯のないものが多い<sup>218</sup>。

胴部地文は、単軸絡条件1類による綱位撚糸文や綫走縄文が多い。結束羽状縄文との組み合せでスダレ状を呈するものも多い。

館崎遺跡出土の復元土器を見る限り、底部はわずかに上げ底気味を呈する。

#### 円筒土器下層d1式（報告書内掲載番号27～192）の判断属性

堅穴住居跡や土坑内の廃棄層中から出土したものが3分の1を占めており、これらの一括出土物の復元個体を中心に諸属性を検証した。下層d2式以降の土器では堅穴住居跡等の覆土中に数十個単位で集中廃棄する例があまりみられないで、この廃棄パターンはあるいは下層d1式期の特徴であるのかもしれない（上層a式段階では主に沢に面した盛土の西斜面に集中投棄しているようである。また、数個体単位・複数型式混在での堅穴住居跡や土坑への散発的投棄は円筒土器上層式の末期まで続いていると考えられる）。

メルクマールとして、つとに指摘されているように文様帶幅の狭いものが多い。「文様帶幅は3 cm以内である」「2 cm以下がほとんど」等、具体的かつ断定的に記載されているものもあるが、5 cm近くに及ぶものがある<sup>註9</sup>。

文様帶幅については、土器の大小によっても変わるために、一律に幅何cm以下とするより器高比何%以内という見方の方がより実態を反映するであろう。

文様帶は、古手のものでは前段の下層c式を引き継いで細い原体による繩線文(27~29等)、あるいは縦条体圧痕文を平行多段横環させたもの(40・41等)、繩線を斜位に押捺して菱形を構成するもの(45~49等)がある。ごく初期には入れ子状にした菱形の連続(47~49・54等)であるようだが、ほどなく間隔をあけて横環する(多くは2本組)3段の平行繩線と菱形文の両者が組み合わさり(50・53・55・56)、菱形が上下に分断されて、横環する繩線間を2段の三角文が巡るようなもの(58等)が登場する。

話は少し逸れるが、この横環する三角文の連続が、あるいは斜位の短繩線による鋸歯状文になり、上層a2式で盛行する蛇行繩線になっていくのではないかとも思われる。上下に横環する繩線間に縦位の短繩線を充填的に付したもの(342・343・366・379~381・393~396等)が上層a1式、斜位の短繩線を付して鋸歯状文や蛇行繩線を巡らせたものを上層a2式の指標属性とする定義が有力視されており、傾向としては確かにそうであるが、上層a1式においても鋸歯状ないし蛇行繩線を施したものが多くはないものの存在していた(375・390・392)と想定した所以である。ただ、上層a1式において横走する繩線間に縦位の短繩線が充填的に付されたものは一定数があり、それを上層a1式の指標属性の一つとみなすこと自体は間違っていない。

ほか、これに連動するかのように同じく間隔をあけて横環する(多くは2本組)3段の平行繩線間を斜位・縦位の連続繩線、あるいは刺突が巡るものも、登場する。このようないわばサンドウイッチ状の多層的構成はバリエーションを抜けながら最終的には上層b式ないしc式まで統していくとみられる(上層b式では三本組の平行繩線間を馬蹄形圧痕(地虫状の繩圧痕)が連続的に付される)。

また、間隔をおいて短繩線を縦位に施し、横走する平行繩線を画するもの(69~73等)がみられるようになる。細い繩線によるものがあることから、下層d1式になってごく初期のうちに現われる属性と考えられる。これは縦位の隆帯やその隆帶上に縦に付される繩線へと強調化され、突起の発達と連動する形で下層d2式、上層式へと発展的に引き継がれていくと考えられる。

口唇上、あるいは口縁部文様帶と胸部を画する微隆線上に斜位に縦や縦条体圧痕を連続押捺するものが徐々に多くなっていく(c式にも少数が散見される)。初期のもの(118・119・129・171・172等)では原体を押捺する間隔はまばらでやや間が開くが、やがてその間隔が密になつていく傾向(133・134・137→150・162・166・167)が窺われる。この施文間隔の粗密は文様帶の中の平行繩線間を埋める斜位・縦位の短繩線の粗密と連動しているもの(49・61~63等)も散見され、関連性が窺われる。ただし、施文間隔がまばらなものも一定数が残る。

文様帶と胸部との境に微隆線が本格的に巡るようになり、微隆線上に刺突列を加えたもの(36)もみられる。文様帶との境に微隆線のしきりを設けないもの(27・28・42~46等)もいくつかあるが、下層c式に近いd1式初頭の資料であろう。文様帶と胸部との境に短い原体による羽状繩文を1条ないし2条巡らせているもの(45・46・53等)もある。

胸部地文は縦条体を縦位に回転施文させた撚糸文が主流で、短い原体による羽状繩文の横環との組み合せでスダレ状を呈するものや、木目状撚糸文、多軸縦条体の縦位回転施文などがみ

られる。とりわけ多軸絡条体が一定数の割合で施文されるのは下層 d1 式～d2 式に限定できる特徴と言えよう（例外的には上層 a2 式に類例があり、下層 c 式にもある）。

器形は胴部がやや膨らんだ器形とまっすぐ立ち上がるものがある。「しきり」としての微隆線の有無に関わらず初期のものでは胴上部から口縁にかけて直線的であるが、やがて幅狭い口縁部文様帯が屈曲する、あるいはバンド状に隆起した低凸帯（153・167～170）等、文様以外でも口縁部を際立たせようとする意識性が様々に顕在化する。そうして口縁部の屈曲の度が強まり、下層 d2 式、上層 a 式へと口縁部が大きく開く器形へと変化していく。

底面は上げ底気味のものと、ほとんど平らのものがある。またごくまれに高台をもったものも存在する。

土器内面は非常によく研磨され、鈍い光沢を呈するものが多い。

#### 円筒土器下層 d2 式（報告書内掲載番号 193～220・222～323・325・326）の判断属性

口縁部が明瞭に屈曲して外反、大きく開き始める段階である。一方で文様帯が帶状に隆起した低凸帯も d1 式に引き続いて少数が認められる。また、口縁部文様帯に段状のくびれが巡る特徴的なもの（233～237・239・240・309 等）もみられる。

文様帯幅については下層 d1 式から上層式にかけて口縁部の外反と連動してひろがっていくと説明されるものが多いが、館崎遺跡の復元土器を観察した限りでは下層 d2 式後半期から上層 a1 式前半期にかけてはむしろ狭いものが優勢である。上層 a1 式の項で後述する。

器形的には全体に径が拡がり、徐々に寸胴化・大型化する傾向が窺われる。また、比較的小さい底部から口縁に向けて直線的に開く器形のものもある。胎土中の繊維が減ってきて、ほとんど含まないものも存在する。

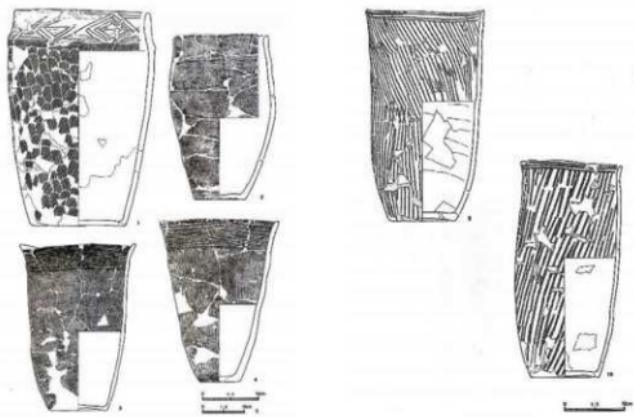
文様帯の基本的な施文モチーフは d1 式段階から大きく変わらないが、原体は総じて太くなる。粘土紐を継位・斜位に区画的に貼りつけるものや、平行繩線間や隆带上に刺突するなど新たな要素が加わり、装飾的要素は d1 式より高まっている。貼付に関しては区画的なもの他、主に山形突起下に 6 字・9 字、瘤状・ボタン状、鼓状などアクセント的に配したものもみられる。

文様帯の装飾性が増してゆくに伴って波状口縁、山形突起についても徐々に大きくなる傾向が窺われる。山形突起には左右非対称の、傾斜が片流れになった特徴的なもの（239・254・274・288・289 等）が一定数現れるようになる（上層 a 式で盛行する）。山形の小突起が二股に割れたり、肥厚したりするものもある。肥厚した山形小突起の側面が浅くくぼむものも少數ながら確認されている。この浅いくぼみは、突起上に一方向へ押し引いたような浅いくぼみのヴァリエーションであり、円筒土器 d 式期、サイベズⅧ式期まで属性として存続している。

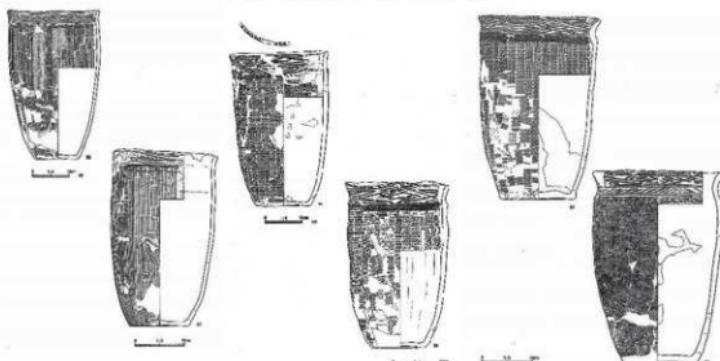
また、胴部に縦位の綾繩文を施すものが出現する。口縁部に山形突起を持つものではその波頂部の直下に縦位の綾繩文が垂下する（254・255・288・308 等）。これは上層 a 式に引き継がれ、特に上層 a1 式で盛行する。

胴部地文は多軸絡条体が全体の 4 分の 3 を占めた。これは地域性もあるのかもわからないが、過去に津軽半島の下層 d2 式について三宅徹也氏が調べており、館崎同様の傾向を指摘している（三宅 1981）。

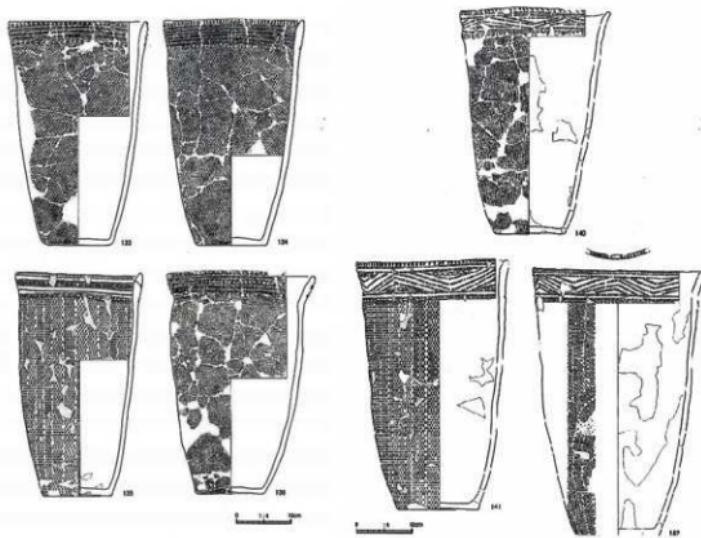
底部下端に 1～2 cm ほどの無文帯のあるものが下層 d2 式の特徴とされる（茅野 2008）が、館崎遺跡の土器では特徴と言えるほど顕著には認められなかった。



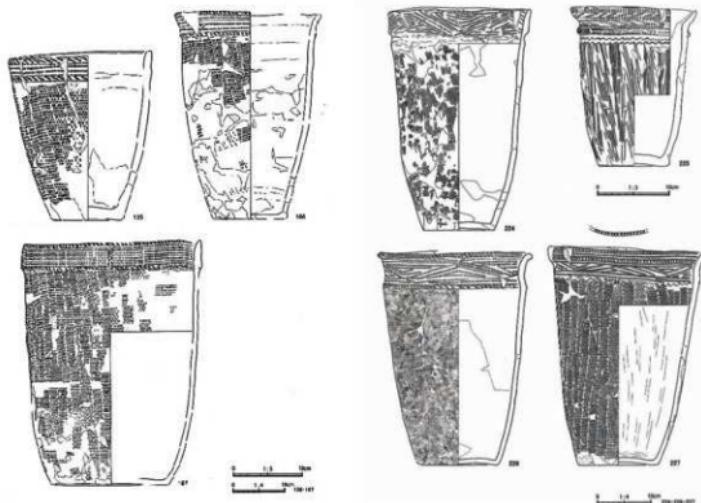
円筒土器下層c式 (1~4・9・10)



円筒土器下層d1式前半 (50・51・53・54・57・58・67・118・119)



下 d1 後半 (133~136・140~142)



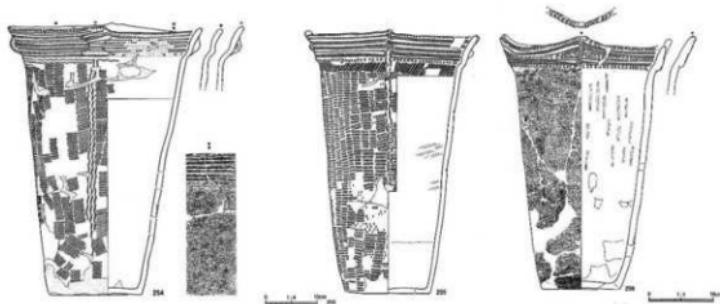
下 d1 後半 (165~167・224~227)



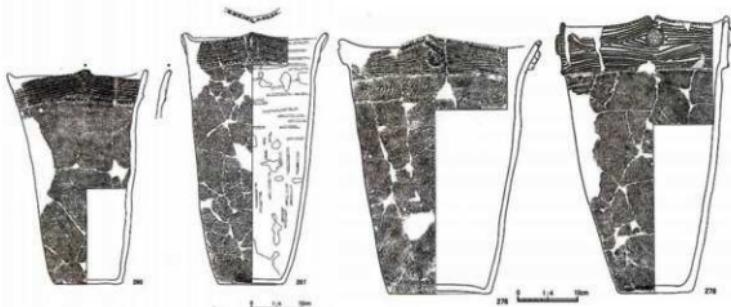
下 d2 前半 (230~233・238・239)



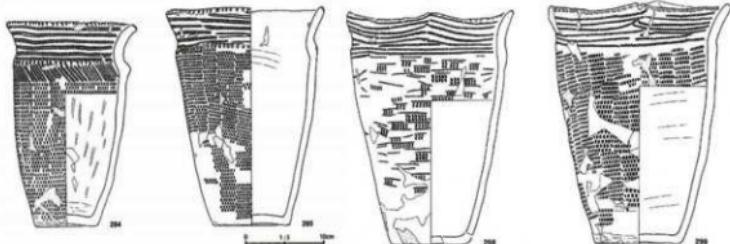
下 d2 前半 (243~251)



下 d2 後半・末? (254~256)



下 d2 後半・末? (266・267・276・278)



下 d2 後半・末? (284・285)

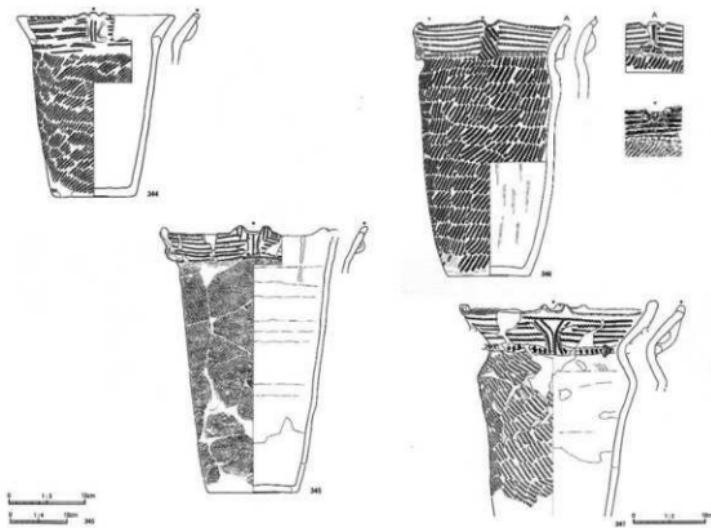
下 d2 後半・末? (298・299)



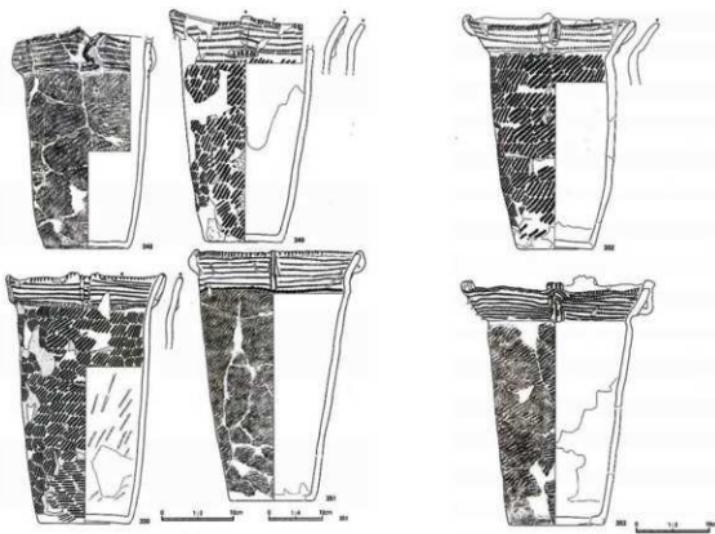
円筒土器上層 a1 式初頭 (327~333) 文様帯幅が狭い 文様帶と頸部の境に横環貼付がない。



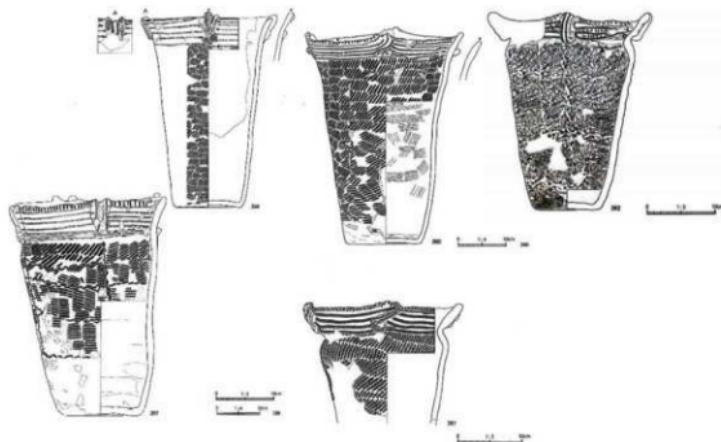
上 a1 前半 (334~337・340~343) 文様帶と頸部の境に横環貼付がない



上 a1 前半 (344~347) 文様帶と胴部の境に横理貼付がほとんどない。 (347はある)



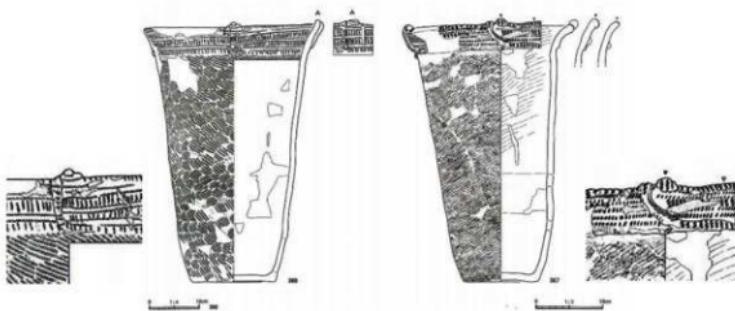
上 a1 前半 (348~353) 文様帶と胴部の境に横理貼付がほとんどない。



上 a1 中頃 (356・357・360～362)



上 a1 中頃 (363・364)



上 a1 後半 (366・367)

### 円筒土器下層 d2 式と上層 a1 式の境界 下層式と上層式を分かつ判断属性

下層式と上層式の違いとしては、胎土中の植物繊維の有無、口縁部文様帶の開き、突起の大型化、貼付による文様帶の盛行等が挙げられるが、これらはいずれも下層式の終末段階から上層式の初頭にかけて徐々に変化・発達していくものであり、それぞれ下層式・上層式の違いを表す象徴的な指標属性でありながら、線引きの基準としては扱い難い側面があったように思う。

こうしたことを念頭に置きながら館崎遺跡出土の土器を観察した結果、上層 a1 式の初頭期、下層 d2 式にみられた三角形ないし鋸歯状のモチーフ（224～227・230・231・236）が一時的に用いられなかつたとみられる点が、指標属性として着目された。三角形のモチーフが漸減していく過程は下層 d2 式の後半～末期とみられる土器においても窺われている（243～251）。

上層 a1 式最初頭とみられる段階において平行縄線（絡条体压痕）の横環するもの（327・329～336・344～361）が多いが、バリエーションとして平行縄線の縦と横が組み合わさり格子状になったもの（341）や縦位の縄線が口縁に連続的に施されたもの（363）もみられる。そしておそらくは、こうしたモチーフが上層 a1 式のメルクマールとしてよく言われる、横走する縄線間に縦位の短縄線を密に施した多層的（サンドウイッチ状）な構成（342・343、366・379～381・386・387・393・394～396）へ発展していくものと推考される。なお、上層 a1 式においては横走する縄線間に刺突列を巡らせたもの（339・340・362・368・369・371・372・373）も一定数がある。

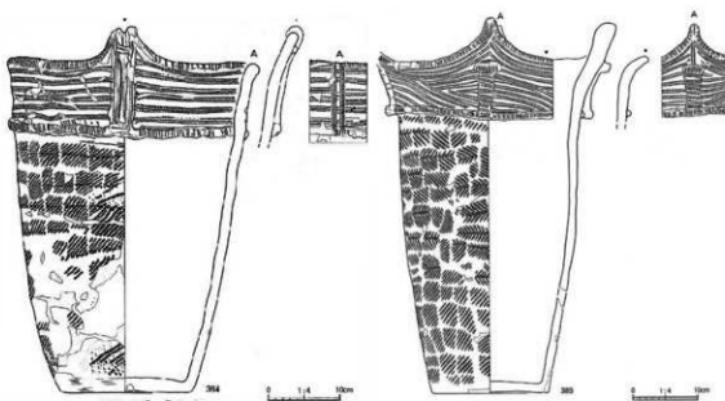
また、古くから下層式と上層式の違いとして指摘されてきた属性であるが、胴部地文が絡条体による縦位回転施文（撚糸文系）主体から縄原体による横位回転施文（縄文系）主体への変換（三宅 1978）について、その原則的な妥当性が再確認された。上層 a1 式の 9 割以上が斜行縄文を地文としている。下層 d2 式でも斜行縄文を地文とするもの、上層 a 式でも撚糸文系が用いられるものがまったくないわけではないが、自分の感触としては、かなり少ない、例外的なものである。上層 a2 式にも撚糸文（510・588）や多軸絡条体（481）など縦位回転施文によるものが少数あるが、これはまた別の成因によると考えられる（拙稿 2020）。胴部地文については、比較的短期間での変換と看取され、下層式と上層式を分かつ指標として有力であるよう考えられる。

胴部地文は 8 割強が LR の単節斜行縄文であった。複節の斜行縄文は 5 個体が確認され、うち 4 個体が RLR、右撚り系であった。単節と複節で原体の撚りを使い分けしている可能性が窺われる。また下層 d2 式に引き続き、縦位の綾縄文を施したものがある（221・329・357・362・400 等）。縦位の綾縄文は突起の直下に垂下するため、突起と連動した施文属性と言えるであろう。

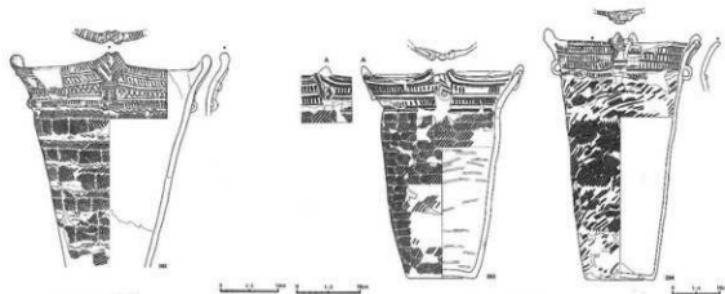
また、下層 d1 式から下層 d2 式そして上層 a 式へと「文様帯幅が拡がる過程」という文脈に沿って説明されるものが大半であるが、館崎遺跡で出土した資料を観察した限りでは、下層 d2 式の後半段階から上層 a1 式の前半段階において文様帯幅の狭いもの（下層 d2 式後半 229～232・243～276・290・295～299）（上層 a1 式前半 327・329～333・338・339・341・344～357・360～374・400・402・408・409）が優勢である。下層 d1 式のような極端に文様帯幅の狭いものではないが、下層 d1 式から上層式に向けての「文様帯幅の拡がり」が多くの研究者に繰り返し指摘されているような直線的なものでないことは明らかである。大まかには、下層 d1 式（狭い） < d2 式前半（広い） > d2 式後半（狭い）・a1 式前半（狭い） < a1 式後半（広い） という変遷であろう（さらにいえば上層 a2 式後半段階から b 式にかけては文様帯幅が狭まり<sup>11, 12</sup>、上層 b 式後半からは再び拡がり出す。文様帯幅は円筒土器を通じて交互に拡がりと狭まりをゆるやかに繰り返しているのである）。

下層 d2 式末～上層 a1 式前半の範囲と類推する一つの判断指標（属性）として、この「文様帯幅の狭まり」は有効である。ただし、下層 d2 式後半には文様帯幅の広いものも狭いものと共通する施文モチーフで確認されており（233～240・277～280・283～285・301・302・304）、上層 a1 式前半段階でも同様に文様帯幅のあるもの（334・335・340・342・343・358・359・398・401）が一定数共存しているため、これだけで判断することは危険である。

なお、太い貼付の横環によって口縁部文様帶と胴部の境を明瞭に画する土器については、上層 a1 式の後半段階から徐々に普遍化する。逆を言えば、口縁部と胴部の境を画する横環貼付がほとんどみられない点が、上層 a1 式の前半段階を示す判断属性の一つとして挙げられるであろう。



上 a1 末・あるいは上 a2 式前半？（384・385）突起が急角度に突き出る。口唇と隆帯の肥厚。



上 a1 末・あるいは上 a2 式前半？（392～394）

上層 a1 式（掲載番号 327～433・221・324・904）から上層 a2 式（掲載番号 434～639・810・811）にかけて—指標属性の漸変過程と脈絡—

下層 d2 式段階では口径と底径差が少ない「筒に近い寸胴器形」が多いが、上層 a1 式では底径が小さくなり、底部から頸部・口縁部にむけて開く器形が多くなる。前半段階の傾向として、文様帶幅が狭いものは頸部で大きく屈曲して口縁部（文様帶範囲）がさらに開くものが多く、文様帶幅が広いものでは底部から口縁部まで直線的に開く。これは、文様帶幅が短いものしか開いた口縁を支えられる技術的耐性が備わっていなかったからと考えられる。逆に言うと、下層 d2 式の末から上層 a1 式の前半期において、文様帶幅の狭い土器が盛行したのは、口縁部（文様帶）を大きく開かせたいという志向があったために、狭くせざるを得なかつたのかもしれない。上層 a1 式においては開いた口縁部の文様帶幅が拡がっていく過程で、屈曲した頸部の直下が横に大きく膨らんだもの（346・347・361・362・390・395・433）が一定数みられるが、これも大きく開く口縁部を支えるためにそう作らざるを得なかつたからであろう。

口縁部は波状・山形小突起を持つものと平縁のものとがあるが、波頂部を持つものはもちろん平縁でも縦に付した縄線（340・343 等）や隆帯（338 等）によって 4 単位を意識しているものが目につく。

波頂部を持つものでは先端が小さく割れたもの（330～332・345～347 等）も一定数ある。先端が割れた谷部の下に小ぶりの把手状突起・橋状把手（344～347・351・354）、隆帯・貼付（352・353）、縄線（345）を縦位に付すものが多く目につく。さらにその小突起直下の胴部地文には、前述のとおり、縦の綾織文を施すもの（221・329・357・362・400 等）がある。

把手状突起・橋状把手など幅があるものでは、その上に縦位の縄線を付したもの（344・347・350～353）もある（上層 a2 式では横位に付される）。次いで先端が小さく割れた山形突起の左右波頂部から縦位の隆帯（貼付）が垂下するもの（357）や、山形突起の波頂部を挟み左右それぞれに縦位の隆帯（貼付）を付すもの（356）も登場してくる。また、上面観が四角形の土器で、それぞれの角部に太い隆帯を垂下させたもの（221）もみられた。

こうして当該期、特に上層 a1 式前半の諸属性を俯瞰すると、縦位（上下を貫く意識性）の施文が非常に顕著であったことが理解される。

上層 a1 式後半段階になると徐々に山形突起が大型化し、それに連動するかのように口唇の肥厚化、口縁部文様帶と胴部とを分かつ横環隆帯が太く厚く、視覚的に立体感が増すようになる（382・384～388）。

そして大型化した山形突起によって文様体内を複数段横走する平行縄線にも変化が生じる。急角度に突き出した突起の頂部に向けて斜位に付しているため、平行施文が随所で崩れ、縄線と縄線が重なり合ったもの、空いてしまったスペースを埋めるための施文等、雑然としたもの（387～389）が現れるのである。そして、この傾向は上層 a2 式になると指標属性としてもよいくらいに増える（436・438・439・465・466・478・479・505・506・511・512・514・548 等）。これは前述した波頂部（割れたものでは谷部）から弧線状の貼付を斜位に付すものと同一文脈のモチーフとして理解される。すなわち鋭角に突き出た突起を起点（依代）とし、蛇体状の觀念が螺旋状に巻きついでいく「蛇局（トグロ）」のモチーフの表徵・発現である。さらに踏み込んでいえば、土器が輪積みによる製作物であることとも『類感呪術』の同一線上において結びついていた可能性が窺われる。

いずれにせよ、下層 d 式では波状・山形小突起を持つものでも三角形のモチーフの組み合せ

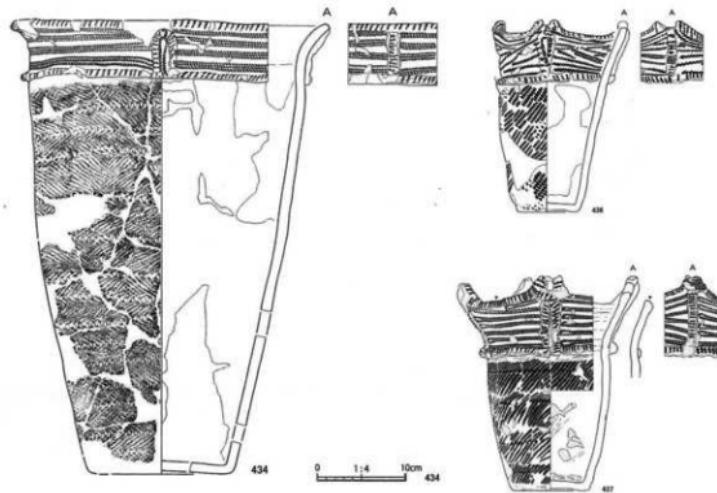
などで、文様が極力かぶらないように意識されていたもの（236・243・244・249・257・258 等）が、上層 a2 式前半段階では対照的である。そして大きな山形突起をもたないものであっても、文様体内の文様が不規則・不均一なもの（518・526・528・549・581 等）がみられるようになる。

#### 上層 a2 式の属性（報告書内掲載番号 434～639・810・811）

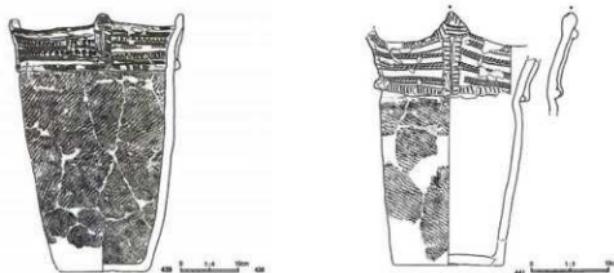
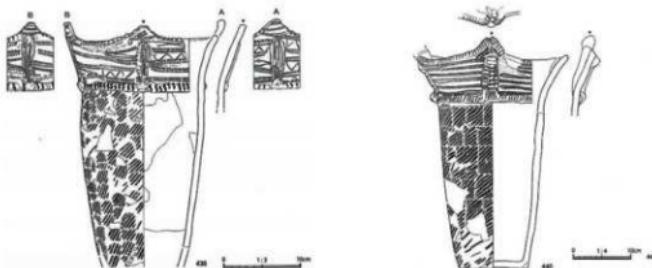
館崎遺跡の整理報告段階で上層 a2 式は、従来言わわれているとおり文様帶を鋸歯状ないし波状繩線が巡るものその他、突起の大型化、山形突起の下に隆帶により区画を形成するもの、貼付の肥厚化等を主な指標属性とした。観察結果から推考される諸属性の変遷過程を以下に紹介する。

口縁部文様帶が幅広になり、4 単位の突起を持つものと平縁のものとがあるが突起を持つものはより大型化する。突起は初期のものでは山形（三角形気味）のものが多い。口縁部文様帶を強調的に縁取るかのように口唇及び口縁部と脣部を画する横環貼付の肥厚（肉厚）化が顕著になる。突起を持つものも持たない平縁のものも、いずれともこれらの肥厚化に連動して反り返りながら開く形状（434・446～452・454・456～459・462・464 等）が目立つようになる。この基準で上層 a2 式の属性とみるとならば、報告書内で上層 a1 式の末とした 357・382・384～388・392あたりは上層 a2 式に組み込むべきであったかもしれない。同様に上層 b 式としたものについても、703・706・707あたりは、この段階のものを誤認している可能性がある。

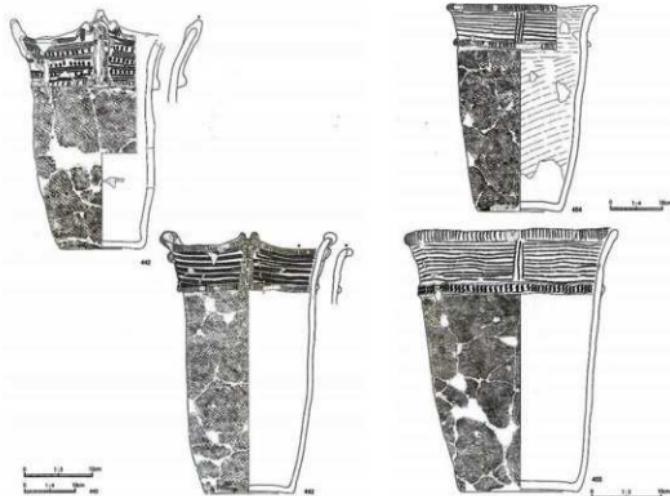
山形の突起を有するものでは、上層 a1 式の末期段階で先端が浅く割れ左右の波頂部から縦位隆帶が並列垂下するもの（382～385・388・391・392 等）が現れている。突起直下に 2 本の隆帶が隙間なく並んでいるもので、隆帶で区画したスペースが発生していないこと、加えて縦位短繩線の充填施文があることなどから報文中では上層 a1 式としたが、これについても隆帶や口唇の肥厚に着目するなら、あるいは a2 式とすべきものかもしれない。



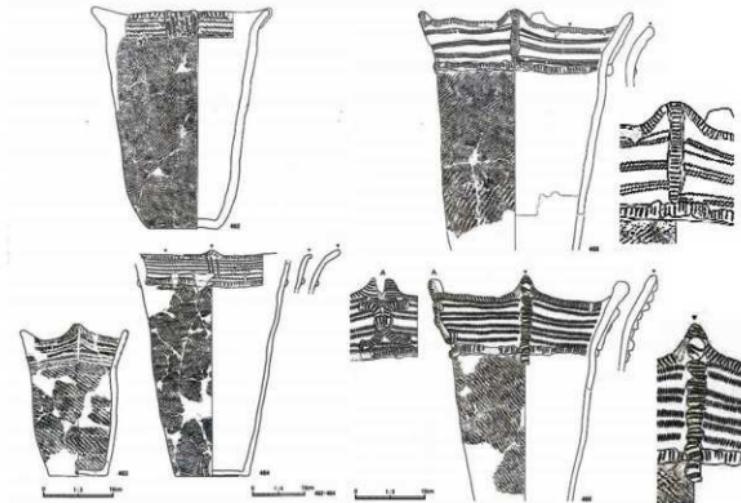
円筒土器上層 a2 式初頭？（434・436・437）



上 a2 初頭 (438~441)



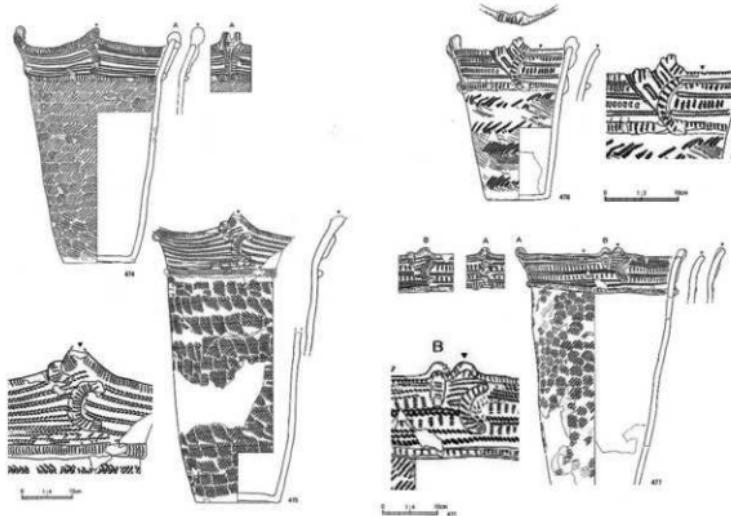
上 a2 初頭 (442・443・454・455)



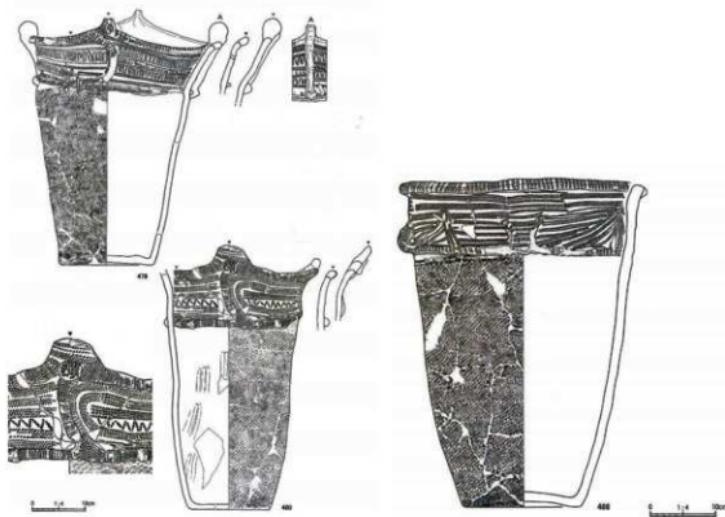
上 a2 前半 (462~464・468・469)



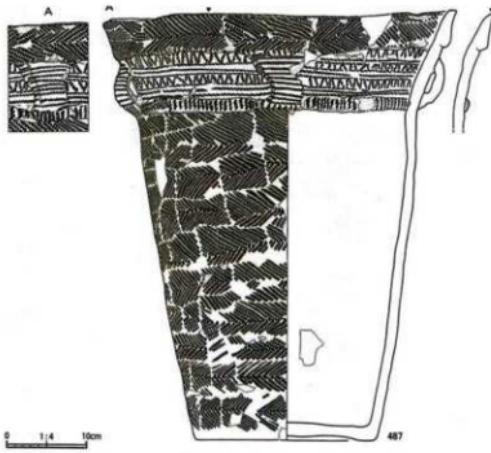
上 a2 前半 (470~473)



上 a2 前半 (474~477)



上 a2 前半 (479・480・486)



上 a2 前半 (487)

上層 a1 式は縦位縄線、上層 a2 式は鉈齒状あるいは波状（蛇行）縄線という属性は、視覚的にとてもわかりやすく、判断指標として大きさは間違っていないと思えるが、文様的要素より造形的要素の方が型式を判断する属性としては常に優先すべきであろう。馬蹄形の縄圧痕を半截竹管状工具による刺突で代用することや、貼付による胸骨文のモチーフを沈線で代用するようなことはあり得ることであり、そうした可能性がある要素を、型式差（時間差）を示す指標属性にすることは危ういと考える。

また、先端が左右に割れた山形突起の谷部下には上層 a1 式末期から a2 式初頭にかけて幅狭の梢円径・逆 U 字状の貼付が寄せられたもの（395・434・435～440・442・443 等）も目につく。いずれとも上述したような平行垂下する縦位貼付から派生的に変化したものと考えられるが、a2 式前半段階では 2 本の縦位貼付も引き続き併存している（444・445・499・500 等）ようである。いずれにせよ『閉じ』た状態を示すもので、上層 a2 式後半段階で盛行する区画帯という『開き』には至っていない。

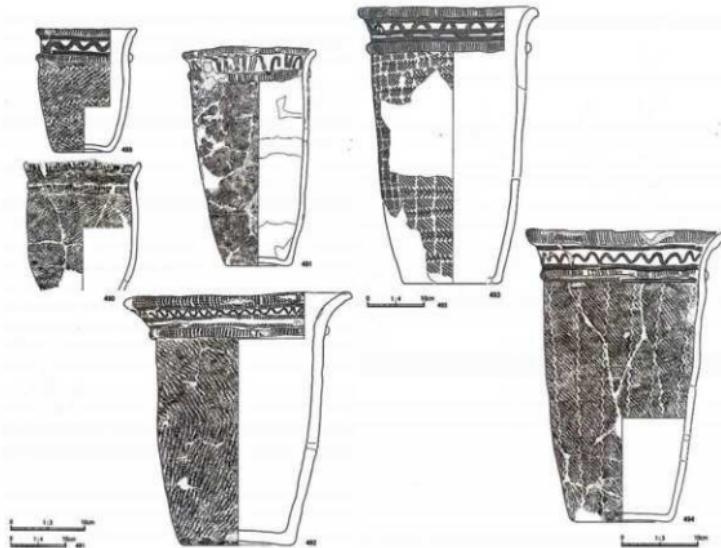
波状・山形小突起を持つものについては、上層 a1 式の後半段階で波頂部（割れたものでは谷部）から J 字（弧線状）の貼付を斜位に付するもの（364・368）と、波頂部ではなくその横を起点としたもの（366・367）が現れているわけだが、上層 a2 式で文様帶幅が拡がり突起が発達するに従い後者のほうが主流化していることが窺われる。

すなわち上層 a2 式段階になると、まず、口唇と頸部の横環貼付が弧線状の貼付で連結するもの（478～480）があり、連結だけでなく上端が口唇内側にかかるもの（503・505・506）がある。これに関して上端部が口唇にかからない C 字状の貼付（471～477）、下層 d 2 式段階から上層 a1 式にかけて散見される 6 字状・9 字状貼付（276・296・下層 d2 式 361・362・373・393 等-上層 a1 式）についても、おそらくはすべて同じ文脈上の指標記号、すなわち一連の「蠶局（トグロ）」のモチーフの省略形と解される。

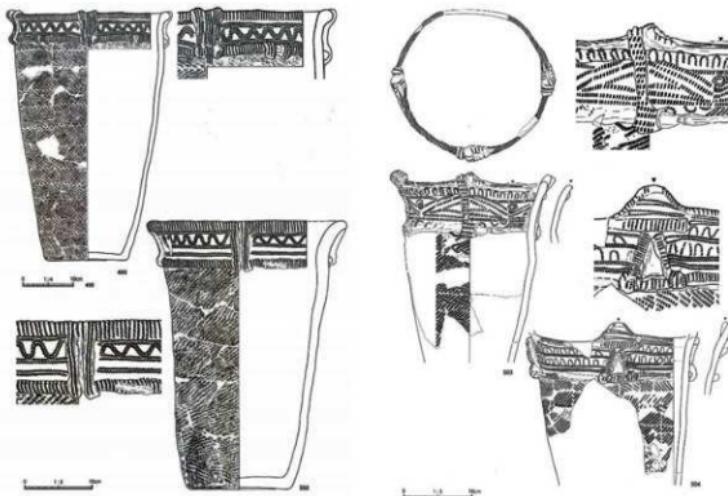
弧線状の貼付の上端が突起横に口唇内面に掛かるようフック状に施され、突起下を斜位に横切り、下端が口縁部文様帶と胴部を分かつ横環貼付に結びつくものが顕在化しているわけだが、これが上述したような、巻きついていく「鰐局（トグロ）」のモチーフの延長線上の造形ではないかと推考されるときに、上層 a1 式の末期段階から上層 a2 式の前半段階（一部後半段階に及ぶ）にかけて貼付同士の交点が瘤状に肥厚する（383・391・392・396=上層 a1、437・438・440～442・468～470・478～480・504～507・513～519 等=上層 a2）ものが多くみられていることについて、改めて着目されてくる。

この貼付交点における瘤状貼付が指標記号として意味するもの。それは、蛇体状觀念の交合と妊娠ではないかと個人的にはみている。突起から一本垂下する縦位の貼付文で横環貼付との交点だけでなく、瘤状隆起が連続（8個？）するもの（469）、肥厚した口唇と頸部を横環する貼付が瘤状に連続隆起しているもの（552・553）もみられるが、多産を暗示する指標記号的な造形の可能性が想定される。他には横環貼付との交点だけでなく口唇との交点で肥厚するもの（517）もあるが、意味的には同様のものとして受け止められる。上層 a2 式の後半段階においては、突起が鏡餅状ないし冠状を呈するもの（512・541・576・592・593 等）が散見されるようになるが、これらも「鰐局（トグロ）」のモチーフの造形が省略記号的に造形されたものと考えられる。

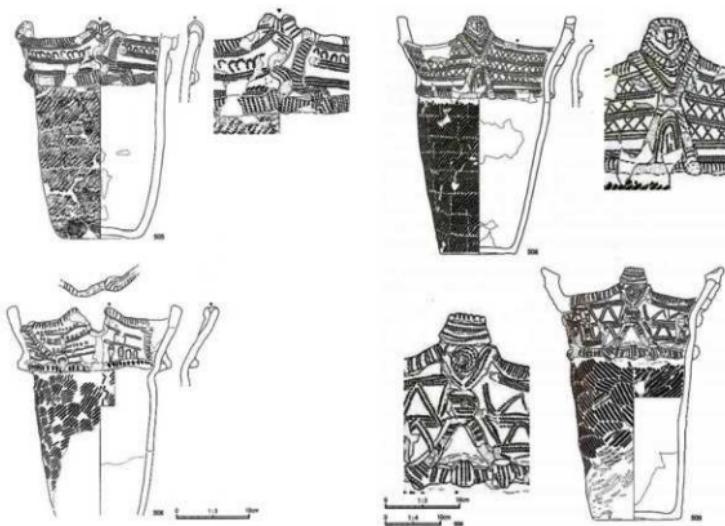
上層 a2 式後半段階においては、ほかに文様帶内を縁取り画する太い貼付が 2 本並列するもの（544・546～548・559・592）も散見されているが、同様に蛇体状觀念の交合を抽象記号的に表現した可能性が考えられることをも併せて付記したい。平縁の土器でも直線的に垂下する縦位貼付として同様のもの（499）がある。



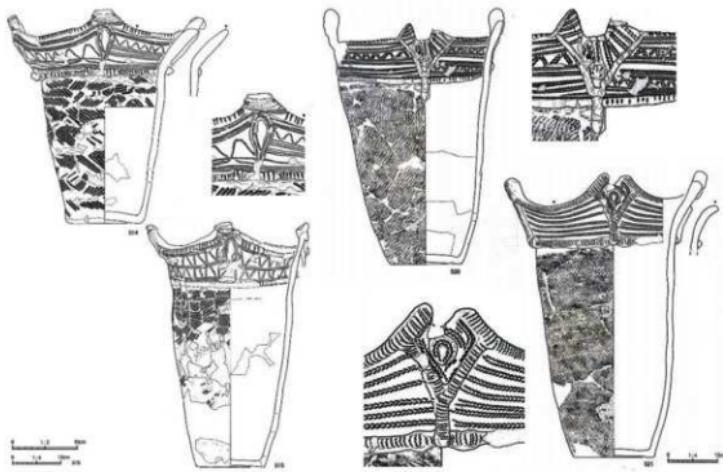
上 a2 後半 (489～494)



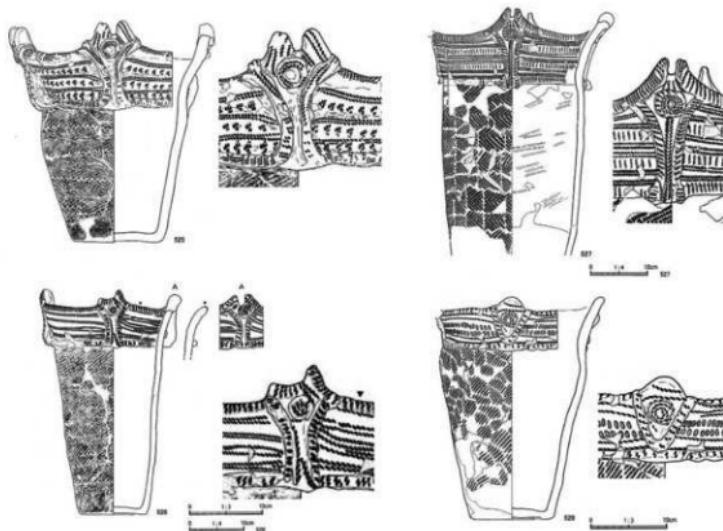
上 a2 後半 (499・500・503・504)



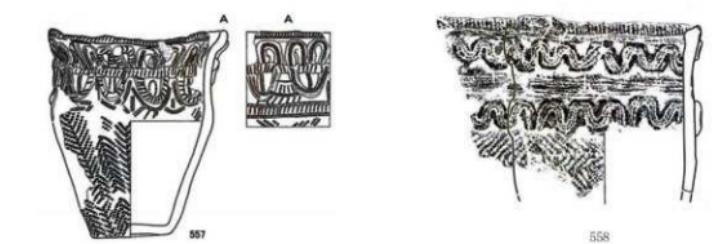
上 a2 後半 (505・506・508・509)



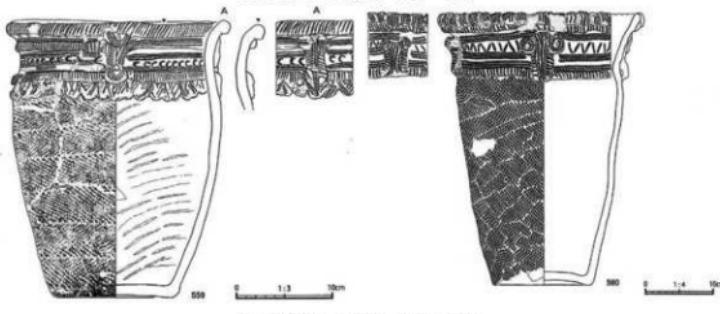
上 a2 後半 (514・515・520・521)



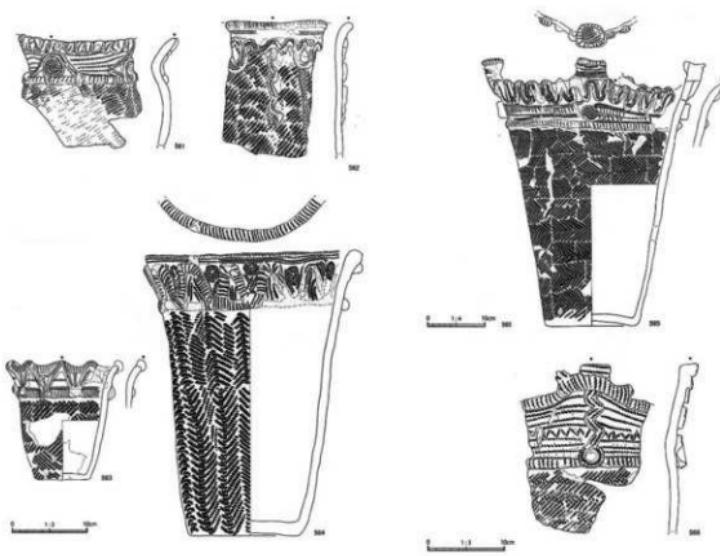
上 a2 後半 (525~528)



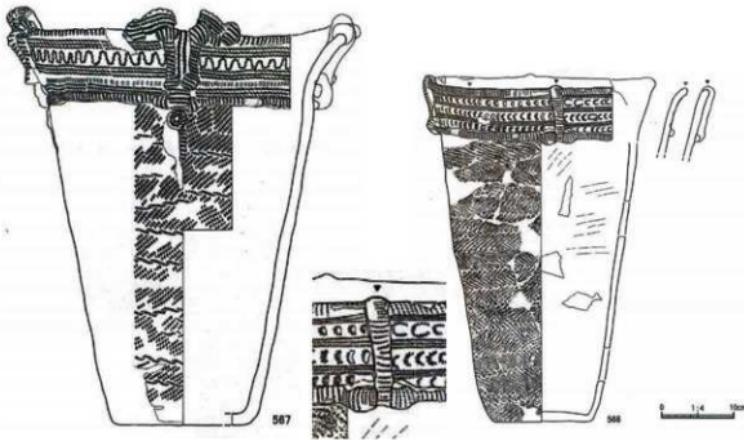
上 a2 後半・末期? (557・558)



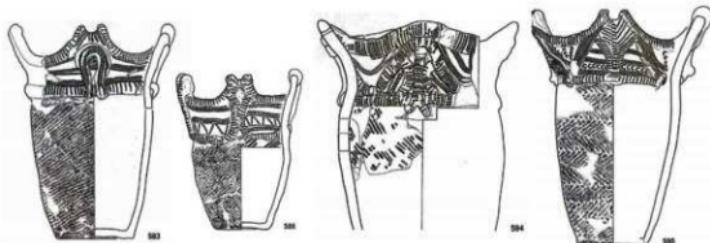
上 a2 後半・末期? (559・560)



上 a2 後半・末期？ (561~565)



上 a2 後半・末期？ (567・568)

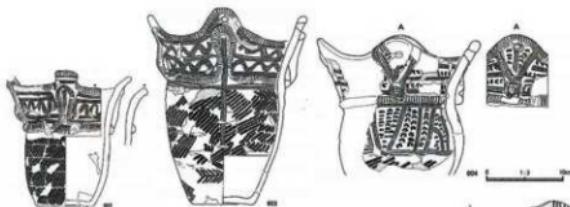


上 a2 後半・末期？ (594 区画内の貼付が男根状) ・末期 (583・586・595)



上 a2 後半 (592・平たい蛇行貼付)

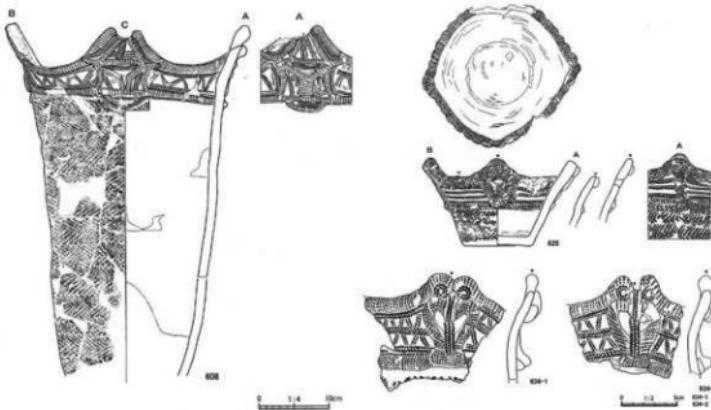
上 a2 末期 (598~600)



上 a2 末期 (602~604)



上 a2 末期 (605~607)



上 a2 末期 (608・634) 上 a2 後半・末期? (628)

このような口唇部と頸部の横環貼付を結ぶ連結貼付については上層 a2 式後半段階で様々なバリエーションが派生し、突起下に貼付による区画を生み出していく。

突起を挟む形で交差する X 字の貼付 (508・509・517・524~526) や Y 字 (516・518~522)、V 字 (510・528~535 等) の貼付も発展的なバリエーションで、意味的には同様のものであると理解される。注目されるのは V 字、Y 字、X 字状に区画された中央に、円環状あるいはボタン状の貼付、縄を満巻状 (ツムジ状) に付したもの等 (509・518・520~537・539・541・542・561・564・569・571・575・576・583・584・587~589・597・600・625) がセット的に組み込まれたものが顕著化している点である (上層 b 式前半期にも少数例みられる—653・656~658・669・693)。突起下に貼付で区画した中に男根状の貼付を付したもの (594) があることから類推すると、上層 a2 式の後半に盛行する突起下の区画が生殖観念の表徴空間として位置づけられていた可能性は高く、開いた円環や満 (ツムジ) 状のモチーフは出産ないし誕生を抽象的に示唆する記号ではないかと考えられる。

いずれにせよ、上層 a2 式後半段階に突起の大型化が進むにつれて、山形突起が台形状 (弁状) に幅広化するとの連動し、平行垂下した 2 本の継位貼付や幅狭の梢円径・逆 U 字状の貼付が徐々に横に開いていく、突起下に隆帶による様々な区画を形成するもの (510・514・516・520・521・525~542・569~595・597・601~604・608・610~623・628・634・637 等) が上層 a2 式～上層 b 式初頭の主流的な属性になっていく。

肥厚した口唇や太い横環貼付により区画された口縁部文様帶の内部施文は、1~3 本の縄線が複数段横環し、間を鋸歯状ないし蛇行縄線文が巡ったり、刺突が充填されるなど、多層構造を持つようになる。上層 a2 式の前半段階においては、横走縄線の本数が 1 本のもの (462・464)、2 本組 (457・473)、3 本組 (468)、4 本組 (480)、本数違いの混在 (479) と様々みられるが、後半段階に向けて徐々に 3 本組へと収束し (560・567・568、605~607、622、628 等)、次の上層 b 式ではほとんどの場合において 3 本組の縄線になる (例外も少数ある)。

口縁部文様帶に施される縄線に関してもう一つ言及すると、3 本組に収束する以前のものでは、

個々の縄線のところどころに歪み（459・525・526・528・543・550等）が認められるもの、縄線同士の縫目が目立つもの（459・542・545等）、縄線間に若干の隙間があるもの（459・512・514・525・526等）が傾向として多く見受けられる。総じて施文が適当で雰囲なのである。それが、上層a2式の終盤段階で3本組縄線が主流化されるようになると、直線的に施文・縄線同士に若干の隙間があつても隙間の幅がほぼ一定（551～553・556・560・567・568等）になり、やがて隙間なく密に施文し、縄線同士の施文の縫目も目立たないもの（556・575・590・591・602・614）が次の上層b式に向けて多くみられるようになっていく。より美しく丁寧に装飾しようという意識性は明らかであり、これもまた上層a2式の新旧を判断する上で有効な属性であろう。3本組縄線については平行に複数段巡る縄線間に鎖齒状ないし蛇行の縄線を挟む多層的な構成（560・567・569～571・588・591・598・599・602・603・605～608）が多くなっていく。

ここまでを整理すると、上層a2式の後半から末期にかけての特徴としては、上層b式前半の特徴との兼ね合いから、大型土器の減少、文様帶幅が狭くなる傾向（489～502・543・567・568・596・605～623・634等）、急角度に突き出た突起（437～442・444・463～465・468・469・471・473・475・479・510・511）が徐々に幅を持つ台形状（466・467・480・504・514～516・528～531）へ漸変、次いで中央が割れて両角が丸みを帯びて突き出す上層b式に典型的な突起（520・521・525・527・574・580・582～584・595・600・605・608・614・615・618・619等）へと変化すること。突起上が肥厚し皿状にくぼませたもの（534・541・542・565・571・572・575・577・579・591～593・609・610・616等）や、一方に向押し引いた耳状の浅いくぼみ（435・443・469・470・474・476・478・503・505～507等々多数 報告書・表X-12）の盛行<sup>11)</sup>。突起の幅広化に連動しての突起下における区画の形成（504・508～510・514・516～542・547・548・567・569～595・597・598・601～604・608～622・628・629・634・637）、等が挙げられよう。

さらに当該期の短期間を示す属性として蛇行貼付の横環（555～565・628）がある。蛇行貼付については上層b式の前半段階でまったくみられず、b式後半から盛行する属性であるわけだが、他の諸属性から上層a2式の後半期にごく短期間を示すものである。肉厚で蛇行というより瘤と谷が連続するような貼付（560・561・628）と、扁平に押し潰れた比較的幅広の蛇行貼付（555～559・562～565・592）と2種があるが、このように特徴的な形状の蛇行貼付は上層b式後半以降に盛行する蛇行貼付にはみられないものであり、その点でも時期の違いを表していると言えそうである。いずれとも口唇部あるいは口縁部文様帶と胴部を分かつ境界線を横環するように施文されている（この特徴と、区画帶の形状から改めて見直せば、上層b式として掲載した750、さらには753・754・766についても上層a2式のこの段階の誤認であったと思う）。

なお、館崎遺跡出土の掲載土器で上層a2式の地文は約6割が斜行縄文、約4割が羽状縄文であったが、上層b式に近くなるほど、羽状縄文の傾向は強まっている。

#### 上層b式の属性（報告書内掲載番号 642～775・777・778）

上層a2式における文様帶造形の多彩さと比較する限り、一転して定型化、簡素化した印象が強い段階である。弁状突起を持つものと平縁のものがある。ほとんどの場合、弁状突起は4つで、両角が丸みをもって突き出し、中央が軽く回む傾向がある（すべてではない）。突起下は引き続き貼付による区画帯が形成されるが、上層a2式と比べると総じて簡素化している。

口縁部文様帶は、無文地に三本組の縄線を上下に横環させ、その間をいわゆる馬蹄形圧痕文（地虫状の縄圧痕）、ないしその代用としての半截竹管状工具による連続施文が巡るサンドイッ

チ状の構成を基調としている。一段巡るもの（644・645・647・649・661・662等）と二段巡るもの（642・643・646・648・651～659等）が大半であるが、長身の器形などでは3段以上、多段が横環するもの（650・688・690・708）もある。

口縁部文様帶と胴部地文の境は貼付の横環で仕切られる。胴部地文は結束羽状繩文の多段横環である場合が大半である。

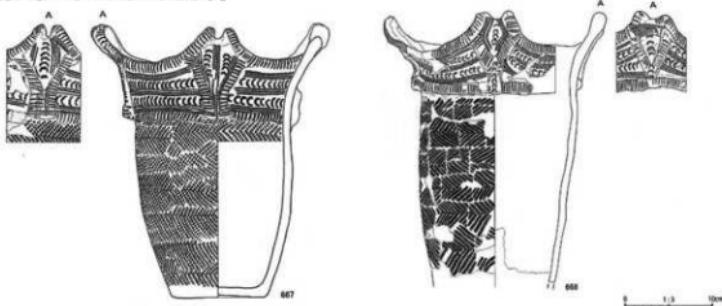
メルクマールとしていわゆる馬蹄形圧痕文（地虫状の繩圧痕）というわかりやすい属性を有することもさりながら、そもそも全体に諸特徴（属性）の定型的なものが多いことも型式誤認が比較的少ない理由かと考えられる。

上層b式について、さらに前半と後半とを見分ける指標属性を以下に記す。

前半段階では口唇部ならびに口縁と胴部の境を横環する貼付上に撲糸を連続して密に施文するものが大半である。口縁と胴部を画する横環貼付は原則的に1条。文様帶内の貼付は突起下に限られる。

後半段階では、まず弁状突起の上辺にのみ蛇行貼付が施されるもの（708～714・720・723等）が現れ、やがて口唇を一周横環するもの（721・722・724・728～747等）へと変化する。口縁と胴部を画する横環貼付は2条のもの（708・709・711～714・716・718・720～724・726・727・729～733・735・737～739・742・743・746・747等）が主流化する。文様帶内の貼付は、突起下以外にも施文するようになり（709・710・717～719・726・727・729）、新しい段階になるにつれ、口縁部文様帶全体に及んで網状化する（712・721～724・730・731・733～746・748等）。貼付幅は一定程度の太さを有し、器壁に密着するものがほとんどだが、末期になるにつれ、細く、未着性の弱いものが増えてくるようである。貼付を網の目状に細かくするものが流行したため、必然的に一本一本の貼付の幅を細いものにせざるを得なくなり、個々の貼付の器面に対する密着性も弱くなつたのではないかと推考される。

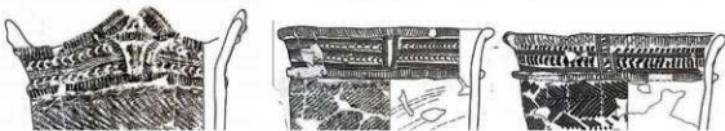
貼付で細かく区画された網の目の中にも引き続き馬蹄形の繩圧痕（まれに刺突文）は施されるが、横環するスペースが寸断されるのに伴うように3本組の繩線の方は施されなくなっていく（718・721～724・729～731・733～735等）。上層b式前半段階まで維持されていたサンドイッチ状の多層構成が後半段階で崩壊していくと言える。おそらく、網の目状の狭いスペースに施文するのがわざらわしくなったために、地文の繩文を全面に施文後に貼付を施すものが徐々に優勢になつていったのであろう。



円筒土器上層b式初頭（667・668）



上 b 式初頭 (672~674・683)



上 b 式初頭～前半 (684・685)

上 b 式前半 (697~700)



上 b 式後半 (708~ 710)

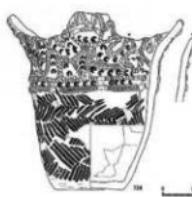
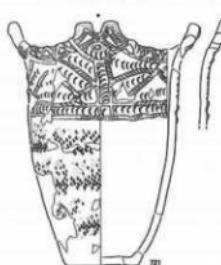


上 b 式後半 (716・717)



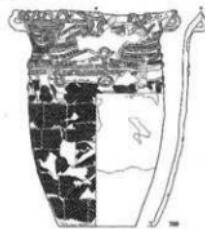
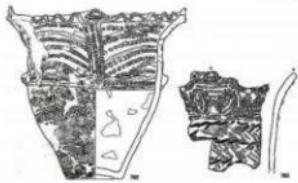
上 b 式後半 (718・719)

0 1/3 10cm

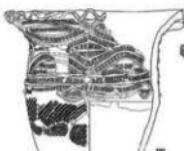
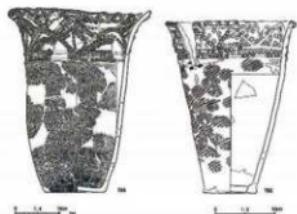


上 b 式後半 (721・723・724)

0 1/3 10cm



0 1/3 10cm



0 1/3 10cm



サイベ沢Ⅶ式古段階・上層○式 (782~785・789~791)

### サイベ沢VII式（掲載番号 779～797・799～809・812～903）・見晴町式（906～920）の属性

冒頭で述べたとおり、館崎遺跡出土の円筒土器は、縄文時代前期後半の円筒土器下層c式～中期中葉のサイベ沢式・見晴町式までがあるが、出土数が多いのは下層d1式～上層a2式であり、上層b式段階には減少傾向が現れている。掲載した復元土器の数が示しているように、サイベ沢VII式・見晴町式は少ない。観察個体数が少ない中でも属性の数値化に基づいた時系列の復元を試みたが、正直なところ十分に検討し得ない中で時間切れとなり、消化不十分なまでの報告になってしまっている点は否めない。反省点を交えつつ問題点や今後の課題等を記すにとどめたい。

上層b式後半段階で文様体内の貼付が網状化して全体に及ぶようになることを述べたが、文様帯幅が胴中央部付近まで広がり、貼付の幅が細く密着性の弱いもの（あるいはソーメン文）が主流化した段階、さらにはいわゆる馬蹄形圧痕（縄圧痕）より刺突文が優勢になった段階として、上層b式末からサイベ沢VII式古段階として分けた（779～797・799～809）。刺突文が施されているものでは連続的で密なものが多い。上述の要素を総合し、上層b式の次の段階としたものであり、中には文様帯幅が広くないものもある（783～785）。底部付近がくびれるものがみられるようになっていく。

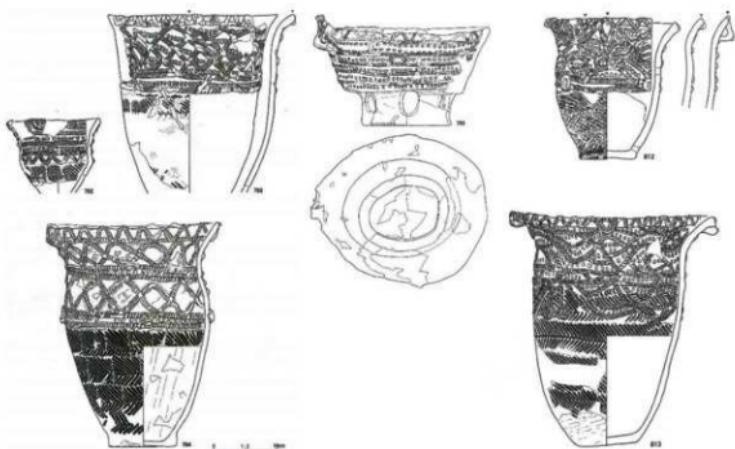
この中で口縁が横に特徴的に突き出しているもの（789～791・797・803）は後出の属性と考えられる。809までとしたが、812・813もこの段階に含めるべきであったろう（810・811は上層a2式の誤認と報告書中に記載）。

なお、文様帯を持たない807～809については、突起形状が整っていること。さらに底部にくびれがないことから、円筒上層b式前半段階相當に置くべきであったかと思う。また、823～826は円筒上層c式相当で、やはり配置を間違えている。

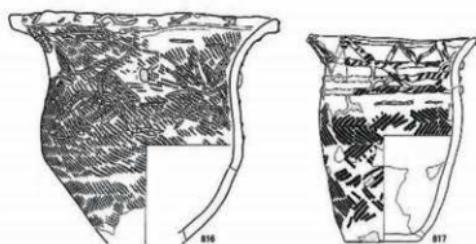
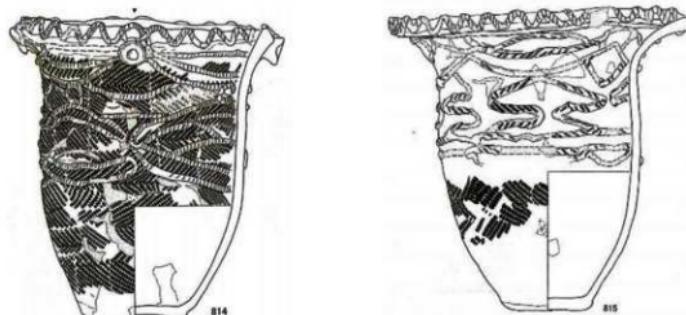
サイベ沢VII式段階の報告について未消化であることは否めず、多くの語る材料を持ち合わせていないわけだが、全体的な流れとしては胴部中央まで広がった文様帯が突起周辺まで範囲を縮小・局限化し、簡素化していく過程であり、それと連動して突起も小型化していくものとさえられる。また地文は多くの研究者に指摘されているように結束羽状縄文がなくなり、斜行縄文か縫織文のある縄文に切り替わっていく。

ほぼ同じ文様帯の構成で貼付によるもの（842）と沈線によるもの（881）があること、文様帯が縮小化し、突起付近に局限化された段階にあっても貼付によるもの（855・856・906・909～911・915 見晴町式）があることからすれば、一概に貼付による文様帯が古く（円筒土器上層d式）、沈線による文様帯が新しい（円筒土器上層e式）という型式差は、成り立たない可能性も考えられる。これらについては並べて掲載すべきであったと反省しているが、単に貼付のほうが多く採用される傾向があったというだけで、同一モチーフを沈線で施文することも併行して行われていた可能性が推考される。

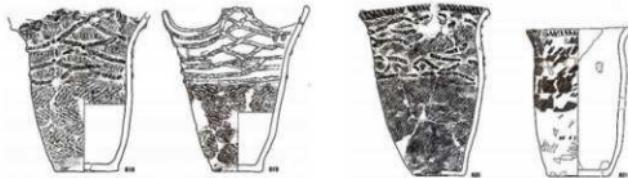
また、無文地に貼付で文様帯を構成していたものが、サイベ沢VII式段階になると縄文を全面に施文後に貼付をするようになると定義化されてはいるが、818と819、882と883のように似通った文様構成の土器で両者がみられることを踏まえると、これらについても傾向の域を出るものではないのかもしれない。とりわけ882は無文地に円筒上層e式相当の属性とされる沈線文で文様帯を描いている土器である。そうなると、地文の縄文を施文後に文様帯を構成するものが優勢であるとしても、無文地に文様帯を施すものも、円筒土器上層式の終り近くまで一定数残っていたという可能性は十分に考えられるのではないだろうか。



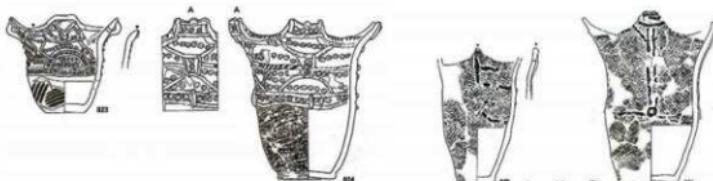
サイベ沢VII式古段階・円筒土器上層c式相当 (792~795・812・813)



サイベ沢VII式古段階・  
円筒土器上層d式相当  
(814~817)



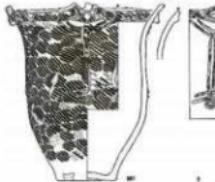
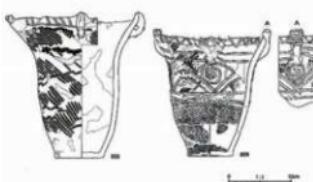
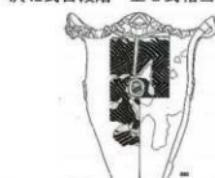
サイベ沢VII式古段階・上d式相当 (818~821)



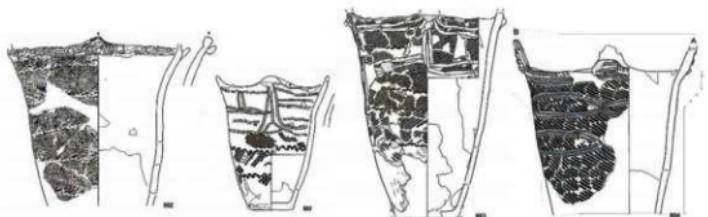
サイベ沢VII式古段階・上c式相当 (823~826)



サイベ沢VII式古段階・上d式相当 (840~843)



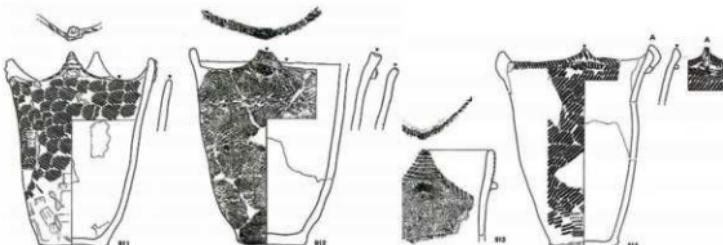
サイベ沢VII式古段階・上d式相当 (857~859) サイベ沢VII式古段階・上d式相当 (860~861)



サイベ沢Ⅶ式新段階・円筒土器上層e式相当? (862・882~884)



サイベ沢VII式 (885・886・888)



見晴町式 (911~914)

北海道最南端域という遺跡の立地によるものかもわからないが、正直なところ、館崎遺跡出土のサイベ沢VII式相当土器と青森県で報告されている円筒土器上層d式とe式（上述のとおり、両者は同時の可能性があるが）では、ほとんど違いを見出すことはできなかった。

サイベ沢式を設定した資料は福田裕二が既に指摘しているように、すべて破片掲載である（福田 2005）。現在でも道南～道央部にかけてサイベ沢VII式だけは用いられているが、冒頭でも触れたように高橋正勝氏によるサイベ沢VII式設定に関する証言（高橋 1972a）、すなわち、北筒・余市両式土器の発生により、サイベ沢VI式すなわち円筒土器e式以降の道内の円筒土器上層式に東北地方の円筒土器とは異なる変化が生じたという型式成因に関する説明が型式設定当时に有効視されていたならば、今一度、サイベ沢VII式について、本当に円筒土器d式との違いがあるのかどうか、問い合わせる必要性は「ある」ように考えられる。

### 改めてメルクマールの問題—属性の優先序列について

かつて上層 b 式のメルクマールについては、いわゆる馬蹄形压痕（地虫状の繩圧痕）、上層 c 式のメルクマールについては半截竹管状工具による充填刺突であるとしていたが、その後、知内町森越遺跡で両者が共伴することが大島直行により指摘された。

実は館崎遺跡では、すでにその前段である円筒上層 a2 式においても両者、すなわち馬蹄形压痕（542・559・568・591・595 等）と充填刺突（476・506・528・609・615～619）と両者の併用（622）がみられている。

同じ意味合いの記号的な文様について、他の施文具で代用することは普通に行われていたと考えざるを得ず、胸骨文が貼付によるか沈線によるかの違いで新旧の型式を分かつように、判定の指標として、単独の要素（属性）を過度に信頼することは非常に危険であると思われる。

型式認定において特徴を表わす諸属性をできるだけ抽出し、それが誰にでも客観的に検証できるように数値化することが大切だということを提起しているが、上述のような混乱に陥らなければ、型式判定するに際しては、さらにそれら諸属性の優先序列（着目すべき属性の順位）というものを意識しなくてはならないであろう。

第一には全体的な器形や胎土、突起形状や文様帯幅、胴部が膨らむとか底部周辺がくびれるといった造形上のタセ。第二には文様帶の構成とパターン。次に地文の共通性であるとか、地文の施文方向等が来て、最後に個々の文様の施文具、すなわち刺突か纏の押捺か、貼付か沈線かの観察結果になるのが、重視すべき指標属性の序列として妥当であると個人的には考えている。

もちろん全属性を比較した上で総合的に型式判断するべきであるが、たとえば胸骨文という文様構成が共通しているながら、一方が貼付でもう一方が沈線だから沈線を用いた土器が新しく、両者の型式は異なるというように、施文要素一つで連断してしまうことなどは、その属性が視覚的にわかりやすいものであればあるほどに誤認を招きやすいものであると懸念される。

「かねてより土器型式は、土器のもつ諸要素の組合せで設定すべきであると主張されてきた。しかし、実際には、諸要素の詳細な分析を踏まえて土器型式を設定した例は少ない。さらに、後述するように土器の諸要素は種々のあり方を示し、単純なまとまりを示さないという現実がある。したがって、どのような要素を土器型式設定の基準にするかによって、土器型式の示す時間的・空間的な幅に差が生ずることになる」

（岡村・吉岡 1981）

### 土器型式の諸属性を数値化する方法（セリエーション）の有効性について

館崎遺跡の整理報告については、上述のとおり、個体復元した土器の諸属性について可能な限り、最大限、計測・数値化することに努めてみた。数百個体掲載した土器のいくつかについては型式誤認をしているし、気づいていない間違いは他にもあるかもわからない。属性分析の結果に基づく諸型式の再定義や型式間の線引きについてもあくまで暫定なものであり、修正される余地があることは言うまでもない（数百個体の観察で正解を導き出せるほど生易しいものでないことは、トライした自分自身が深く痛感しているところである）。

しかし、一方で、館崎遺跡の報告で試したセリエーションの方法と方向性そのものは、間違っていないと確信している。属性の数値化に基づくデータが蓄積されれば蓄積されるとほどに、土器型式の具体性・客觀性も必ずや高まると言をして予見されるからである。土器型式について漠然と「こういう文様が多い傾向がある」「こういうものもみられる」と言うのではなく、個々人の型式

観によって「認識の差」が必然的に起こり得るだろうが、たとえば「円筒上層b式2,000個体のうち地文が結束羽状縄文のものは1,900個体ある」というように数値化・具体化が進めば、たとえ数個体の型式認証があったとしても、はるかに型式観が共通化・客觀化（具体的なものとして可視化）し、出土層位や共伴事例に対する主觀的な誤謬も相当に回避解消できると考えられる。

実際、館崎遺跡の復元土器については一度序列した後で、バラバラにして、もう一度序列してもほぼ同じものになるかどうか、つまり誰が組んでもだいたい同じ変遷になるかどうかを検証してもらっている（サイベ沢VII式を除く）。その数百個体のデータが、やがて数千個体、数万個体になれば、個々の土器型式の真の諸特徴は平均値としておのずから浮き彫りになり、時間尺としての土器型式の確度・信頼性も飛躍的に高められるであろう。その型式の中での細かい変遷過程、諸段階さえ解明し得ると期待される。

数値化・データ化の作業については、その遺跡の整理において行われ、報告書に記載されるのが望ましいであろうが、すでに報告済のものであっても、掲載実測図から相当数の属性を抽出し数値化することは可能である。例えばサイベ沢VII式として報告されているもの、円筒土器上層d式、e式として報告されているものについても復元土器の実測図から数百個体分の属性を数値的に起こして比較検討を行えば、今回の館崎遺跡の整理報告で明らかにし得なかつたことも、必ずや具体的に解明されるであろう。

繰り返すが、数値化されたデータが蓄積されればされるほど、型式の定義・条件は自ずと定まってくるし、豊富にデータ化されれば誰でもそれを元に具体的な検証やアプローチを試みることが可能になる<sup>註12</sup>。その結果、間違った型式名で報告された土器についても、客觀的に修正することが可能になる。そしてネットを介すれば、検証材料として膨大に蓄積された数値データを研究者の誰もが共有できるようになるであろう。

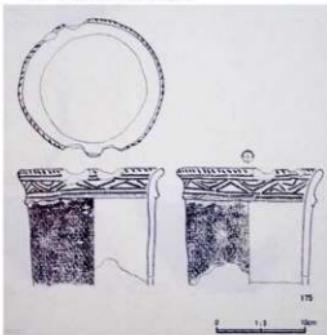
少なくとも、個々の担当者が、共伴等の出土状況や型式的諸特徴および各自の型式観から、既存の定義の土器型式の中に位置づけていく作業よりは、型式認証のリスクを大幅に低減できる合理的かつ有効な方法（真理解明への着実な近道）と言えるのではないだろうか。

土器の研究に取り組まれてきた方の中には、本発表の内容について、不愉快に感じている方も少なくないのではないかと思う。実際、報告書刊行後に、私の報告内容について相当批判的な声が上がっている噂も人づてではあるが伺つてもいる。しかし、土器研究の進展ということを考えれば、自分が明確に認識している問題点を、（ひるますに）今この機会にこそ問わねばならないと思われた。何とぞ真意を汲み取ってご海容いただきたい。

私は北海道で発掘調査に従事するようになり約30年になるが、長万部町の臨職調査員として、佐藤稔さんの御指導を受けたのがはじまりであった（何の戦力にもならず佐藤さんはご迷惑のかけ通しがあった）。また、実家が苫小牧市であった縁で、今年9月に亡くなられた佐藤一夫先生からは学生時代以来多大なる薰陶を賜った。不肖の弟子であり、この場で師として先生の御名前を挙げることは、あるいははばかるべきことなのかもわからないが、佐藤一夫先生と、当時の苫小牧市埋蔵文化財センターの職員諸氏から考古学的な手ほどきをいただいたおかげで、何とかここまで勤めてこられたのだと思う。これまでに御指導・御鞭撻をしていただいた諸先学の御厚情・御恩に改めて深謝いたすとともに、今回、道南考古学会からこのような発表の機会をいただいたこと、さらには準備段階から厚沢部町教委の石井様からお世話を受したことに対し、心よりの御礼を述べて、本報告の終わりの御挨拶としたい。ご清聴ありがとうございました。

さらに広い視点で館崎遺跡出土の土器を見渡すと 神奈川県出向の成果（ごく一部）

1. 口縁部の打ち欠き

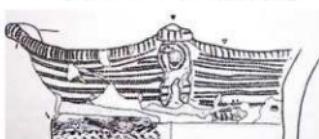


下層 d1 式土器 (175)

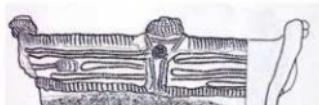


相模原市橋本遺跡第 122 号土坑出土 壺被りが想定される縄文時代中期の土器

2. 蟠局（トグロ）状・鏡餅状突起



上層 a2 式土器 (512)



上層 a2 式土器 (576)



相模原市勝坂遺跡 D 区南集落出土  
加曾利 E 式（中期後半）

### 3. 突起横から斜めに渡す貼付



上層 a1 式土器 (361)



上層 a1 式土器 (366)



相模原市磯部宮沢遺跡出土  
勝坂式初頭・新道式？(縄文時代中期前半)



上層 a1 式土器 (367)



上層 a2 式土器 (470)

下端両サイドが瘤状に膨らみ男根状にも映る



相模原市宮ヶ瀬遺跡群北原 (No.9) 遺跡出土  
堀之内式土器 (縄文時代後期前葉)



これまでの出向中にこちら（関東地方）で撮った写真の大半が未整理で、文献等での確認も進んでいないので、ほんのごく一部の紹介にとどめざるを得ないが、ここまで4年3ヶ月（51ヶ月）出向した成果として、円筒土器を含む北海道の土器と何らかのつながりが窺われる属性について、地域も時期も異なる土器から様々に見出されている。

土器を観察し、個体同士を比べることで、違いを見極めて型式細分する。「分類作業」に没頭していると、つい「違い」にばかり意識が取られがちになるが、時期や地域を超えて共通しているもの、表徴している記号としての意味において共通性が窺われるもの一本質において変わらないものについても同様の意識を向けることの重要性が痛感される<sup>註13</sup>。

#### 註

註1 ただし、この円筒土器の直立事例について長谷部は武藤の思い過ごしだと、確認もせずに一蹴した。

註2 ほんのごく一部である。円筒土器下層式は下層式で型式設定を巡るより複雑な混乱があったことは承知しているが、非常に長くなるので割愛した。（石岡 1999・茅野 2008）等に詳述されている。

註3 沈線文が大木式土器の影響であるにせよ、器形が円筒土器上層式の形状を踏襲している以上、山内清男が何を言おうと、円筒上層e式も後続する見晴町式も円筒土器上層式の様式のうちにあると見なして良いであろう。見晴町

式のあと、道南地方では榎林式等、大木式土器の影響を受けた土器型式が並がり、円筒土器上層式が終焉するようであるが、渡島半島から押し出された円筒土器様式が道央圏に移動して、萩ヶ岡式、天神山式、北簡式等の在地化した円筒土器の母体となった可能性がゼロではないことを考へるならば、なおさらそうである。貼付か弦線かなどという些末な（しかしながら、わかりやすく人目につきやすい）文様要素の属性ひとつより、器形的特徴の共通性および（前後が繋がりそうだという意味において）系統だった型式学的脈絡の窺われる器形的特徴の方が本質性は高く、はるかに重要であると言えるだろう。

註4 「しかしながら、セリエーションのみによる編年は、やはり層位学的な検証抜きでは、その妥当性は保証されないのである。逆にいえば、層位的なデータが十分に得られる場合には、あえてセリエーションを用いる必要性はなくなるという理屈になる。したがって、わが国の縄文土器編年が、層序の発達している貝塚遺跡の層位のデータを基本にして進められてきたことから、日本考古学にはセリエーションはついに積極的に採用されるところとはならなかつたのである」（小林 1989）のことであるが、筆者には貝塚遺跡や盛土遺構、捨て場遺構ほど、人為的な成因によって新旧の遺物が混在して共伴する（複数の同時性の）リスクが高い場所はないと考えられる。それを疑いもなく同一型式の共伴とみなし、出土した土器の型式学的な属性検証を行なう必要などはないという考え方、発掘担当者や土器の研究者に原理主義的に根強く浸透しているのだとするならば、どれほど層位的成果が蓄積されようとも一致した型式観など見いだされるはずもないであろう。その考え方を根本的に見直さない限り、型式認定をめぐる混乱と停滞は今後も続いていくのではないだろうか。

註5 そうした心情・性向に対する自覺性・意識性が失われた延長線上に、（出土状況を重視するあまり型式学を軽視したという意味における）同根の問題としてあの旧石器捏造事件も起つたのではないか、ということをいま改めて思わないわけにはいかない。

註6 ただし、沢に面して傾斜している地形への意識性は、働いていたであろう。

註7 セリエーションについては小林達雄が述べている（小林 1989）ように日本考古学においては邪道とみなされ忌避されたようであるが、北米西南部からペルーの考古学研究では標準的かつ支配的な方法となり、目覚ましい成果を挙げたことも同時に紹介されている。しつこいようだが、考古学家が物に事実を語らしめる學問であることを標榜するのであれば、調査報告書や研究者の側で要不要を勝手に決めつけてかかるのではなく、最大限数値化できる情報は引き出して記録化すべきではないのだろうか。得来的に真理の解明に結びつく可能性がある情報であれば、なおさらのことである。「（日本のように：筆者著）層位的なデータが十分に得られる場合には、あえてセリエーションを用いる必要性はなくなるという理屈」（小林 同上）によって、その気になればいくらでも引き出せるはずのデータ（研究材料）を引き出さずとも良しとして何となく決め込んでしまっている姿勢などは（そうした状況に何ら疑問を感じないで容認・追従してしまう空氣も含めて）、ある種の油断、他国と自国、両方の発掘調査に対して高をくくっているようにしか映らない。その層位的なデータ、出土状況に対する客觀性・眞実性を過信し過ぎた單句、（型式学的にデタラメな石器）捏造に気づかなかつたのではなかつたか。まったく同根の慢性的宿疾であるにも関わらず、今もなおあまり変わっていない（のかもしれない）この状況について、自戒を込めて虚心に翻意する必要性を痛感するものである。

註8 報告書掲載番号 11 のように微隆帯のあるものについて下層 d1 式の可能性が考えられたが、出土状況、器形や胎土、器壁の厚みの不均一などを考慮して下層 c 式とした。館崎遺跡出土の下層 c 式は後半期ないし末期のもので、下層 d1 式に近い要素が現れていると考えられる。

註9 下層 c 式に文様帶幅の広いもののが存在することや、下層 d2 式に文様帶幅が狭がること等を考えても十分あり得ることと考えたい。

註10 この観点で改めて報告書を見直すならば、489~502 は、上層 a2 式の中でも後半段階、上層 b 式にずっと近い段階と考えられるもので、605~607 の土器の前後に配置すべきものであった。

- 註 11 突起上のくぼみや孔については様々なバリエーションがあるものの時期や地域を超えて、すなわち長期間、広域で普遍化している可能性が窺われているが、意味的には通底したものではないかと考えている。
- 註 12 土器属性を数値化するに際し、整理期間や予算等の制約がある場合には、何を数値化・表記（掲載）するか優先順位をつけねばならないであろうが、基本的には、整理報告者でなければ数値化できない情報、なおかつ利用者目線に立って優先順位を考え、そこに限られた時間と労力を傾注することが正しいように思える。一見、重要そうに思える情報であっても、「胎土中に小石を含む」等、ほとんどすべての土器に該当する情報を備考欄に羅列するなど、利用される可能性が「ほほない」と予見されるものであれば、それを記録して掲載することの意義について再考吟味することも必要であろう。
- 註 13 あくまで理想ではあるが、細かいことに気がつく観察の目、時間も空間も超えた俯瞰的な想像力の目、そして日常感覚のごく普通の目、どれにも偏ることなく（常識というものにとらわれることなく）3種類の目で同時に並行的に「見ること」を意識的に心掛けたい—そんな目で物事や世界を見ることができたら、とは思う。

### 主要引用参考文献

- 青森県教育委員会 1975『中の平遺跡調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 第25集
- 青森県教育委員会 2004『三内丸山遺跡25』青森県埋蔵文化財調査報告書 第383集
- 青森県教育委員会 2012『三内丸山遺跡39』青森県埋蔵文化財調査報告書 第520集
- 青森県教育委員会 2014『三内丸山遺跡41』青森県埋蔵文化財調査報告書 第546集
- 青森県史編さん考古部会 2002『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県史友の会
- 石岡憲雄 1999「東北地方 前期（円筒下層式）」『縄文時代』第10号・第1分冊 縄文時代文化研究会
- 江坂輝弥 1970『石神遺跡』ニューサイエンス社
- 大島直行 1976「円筒土器上層式土器の認識に関する2・3の問題」『北海道考古学』第12輯 北海道考古学会
- 小笠原雅行 2005「三内丸山遺跡周辺の縄文時代前期末から中期初頭の諸問題」『東北・北海道の縄文時代前期末葉～中期初頭土器の課題－資料集－』海咲土器編年研究会
- 小笠原雅行 2008「円筒上層式土器」『絶賛！縄文土器』
- 岡村道雄・吉岡恭平 1981「土器型式の設定と聖山遺跡の土器群」『信濃』第33巻第4号・信濃史学会
- 長万部町教育委員会 2001『オバルベツ2遺跡（1）』長万部町埋蔵文化財調査報告書6
- 影浦覚 2020「円筒土器下層c式から上層a2式への形状変化とその背景」『北海道考古学』第56輯
- 影浦覚 2021「共伴神話は諸刃の剣—今、鈴木公雄論考を読み直すことの意義—」『泥人形』第11号・泥人形刊行会
- 鹿児島県埋蔵文化財センター 2002『上野原遺跡（第3分冊）』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（41）
- 木古内町教育委員会 2004『蛇内遺跡』
- 児玉作左衛門・大堀利夫ほか 1958『サイベ沢遺跡』市立函館博物館
- 小林達雄 1989「縄文土器の編年」『縄文土器大観1 草創期 早期 前期』小学館
- 知内町教育委員会 1975『森越』
- 鈴木克彦 1982「円筒土器に後続する土器の編年」『考古風土記』7
- 鈴木克彦 1999「東北地方 中期（円筒上層式）」『縄文時代』第10号・第1分冊 縄文時代文化研究会
- 鈴木公雄 1969「土器型式における時間の問題」『上代文化』第38輯・国学院大学考古学会
- 高橋正勝 1972a「北海道における縄文時代中期の終末（1）」『北海道青年人類科学研究会会誌』No.9
- 高橋正勝 1972b「北海道における縄文時代中期の終末（2）」『北海道青年人類科学研究会会誌』No.10
- 高橋正勝 1981「北海道南部の土器」『縄文文化の研究（2. 後期の土器）』4 雄山閣
- 立田理 2002「山越3遺跡のⅢ群a-3類土器の編年的位置と放射性炭素年代」『八雲町 山越3・山越4遺跡』 北

- 埋調報 166 (財) 北海道埋蔵文化財センター
- 立田理 2006 「円筒土器上層 b式からサイベ沢Ⅷ式土器の編年方法について」『北海道考古学』第 42 号
- (株) 玉川文化財研究所 2014 『下北原遺跡 III』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書 27
- 茅野嘉維 2008 「円筒下層式土器」『絶観 繩文土器』『絶観 繩文土器』刊行委員会
- デカルト (ルネ・) 1997 (初出 1637 )『方法序説』谷川多佳子訳・岩波文庫
- 函館市教育委員会 1979 『見晴町 B 遺跡発掘調査報告書』
- 函館市教育委員会 NPO 法人函館市埋蔵文化財事業団 2014 『函館市 サイベ沢遺跡』
- 長谷部言人 1927 「円筒土器文化」『人類学雑誌』第 42 卷第 1 号 東京人類学会
- 福井純一 2013 「北海道の「盛土遺構」とは何か」『盛土遺構を語る オホミ集』北海道考古学会 2014 年度研究大会資料  
※2014 年度は 2013 年度の認記。タイトルも本文では「北海道における「盛土遺構」とは何か」である。
- 福井純一 2020 「北海道の「盛土遺構」と「もの塚」」『芙蓉峰の考古学 II 池上悟先生古稀記念論文集』
- 福島町教育委員会 1985 『鮮崎遺跡 一円筒土器文化における「土器塚の調査」』
- 福田裕二 2005 「亀田半島における前期末葉～中期初頭の様相」『東北・北海道の繩文時代前期末葉～中期初頭土器の課題－資料集－』海峽土器編年研究会
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 1985 『尻岸内町 中浜 E 遺跡』北埋調報 22
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 1988 『函館市 石川 I 遺跡』北埋調報 45
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 1994 『七飯町 喜川右岸遺跡』北埋調報 87
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 1997 『七飯町 喜川右岸遺跡・桜町遺跡』北埋調報 112
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 2000 『八雲町 シラリカ 2 遺跡』北埋調報 142
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 2001 『八雲町 山越 2 遺跡』北埋調報 163
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 2002 『八雲町 野田生 2 遺跡』北埋調報 167
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 2003 『八雲町 落部 1 遺跡』北埋調報 181
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 2005 『森町 森川 3 遺跡』北埋調報 222
- (公財) 北海道埋蔵文化財センター 2014 『木古内町 木古内遺跡』北埋調報 304
- (公財) 北海道埋蔵文化財センター 2015 『木古内町 新道 4 遺跡 (4)』北埋調報 320
- (公財) 北海道埋蔵文化財センター 2016 『木古内町 大平遺跡 (2)』北埋調報 321
- (公財) 北海道埋蔵文化財センター 2017 『福島町 館崎遺跡』北埋調報 333
- (公財) 北海道埋蔵文化財センター 2022 『木古内町 幸連遺跡』北埋調報 369
- 三宅徹也ほか 1971 『野木と遺跡調査報告書』青森市の埋蔵文化財 5 青森市教育委員会
- 三宅徹也 1978 「円筒土器の概念とその崩壊」『青森県立郷土館調査研究年報』3
- 三宅徹也 1981 「円筒土器」『繩文文化の研究』3 雄山閣
- 三宅徹也 1986 「円筒土器下層式様式」『繩文土器大観』 小学館
- 村越潔 1974 「円筒土器文化」雄山閣(初出は上記であるが、本稿では、村越潔 1984 『増補 円筒土器文化』に拠った)
- 森町教育委員会 1977 『森町 オニウシ遺跡発掘調査報告』
- 大和久寛平 1960 「円筒上層式の細分」秋田考古学 16 号
- 山内清男 1929 「関東北に於ける織維土器」『史前学雑誌』第 1 卷第 2 号・史前学研究所
- 山内清男 1964 「繩紋式土器・総論 図版解説」『日本原始美術 I』講談社
- 山梨県教育委員会・日本道路公团 1987 『駿遊堂 III』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 22 集
- 山梨県教育委員会・山梨県土整備部 2014 「上コブケ遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 296 集
- 吉崎昌一 1965 「北海道」『日本の考古学』II



## 第Ⅱ部

### 情報交換 2

## 渡島・檜山地域の発掘調査



はこだてしおおみいーいせき  
**函館市大船E遺跡** (登載番号 B-01-303)

**調査理由**：開発事業（道路）

**調査地**：函館市大船町513-1, 513-2

**調査主体**：函館市教育委員会（調査担当者 吉田 力, 野村祐一）

**調査実施**：一般財団法人 道南歴史文化振興財団（調査担当者 萩野幸男）

**調査期間**：令和5年5月9日～令和5年5月26日

**調査面積**：130m<sup>2</sup> (III層), 130m<sup>2</sup> (V層)

### 調査の概要

遺跡は、函館市南茅部地域の大船川から北西へ約600mの大船中村川と約800mの位置にある佐藤川に挟まれた、海岸段丘上に位置する。調査区の標高は約53～56mである（図2）。遺跡の東側は200mほど緩斜面が続いた後、急傾斜をなし更に50mほどで海岸に至る。西側は背後の丘陵へ続き、約3.5kmで泣面山（標高835m）へと繋がっている。遺跡の北側は佐藤川を挟んで大船J遺跡、南東の同じ段丘上にはそれぞれ小河川を挟んで大船G遺跡、大船I遺跡、大船H遺跡、史跡大船遺跡が位置している（図1）。

調査は、縄文時代前期～統縄文時代の遺物包含層であるIII層と、IV層（駒ヶ岳f・g火山灰）下位の縄文時代早期遺物包含層であるV層について行った。

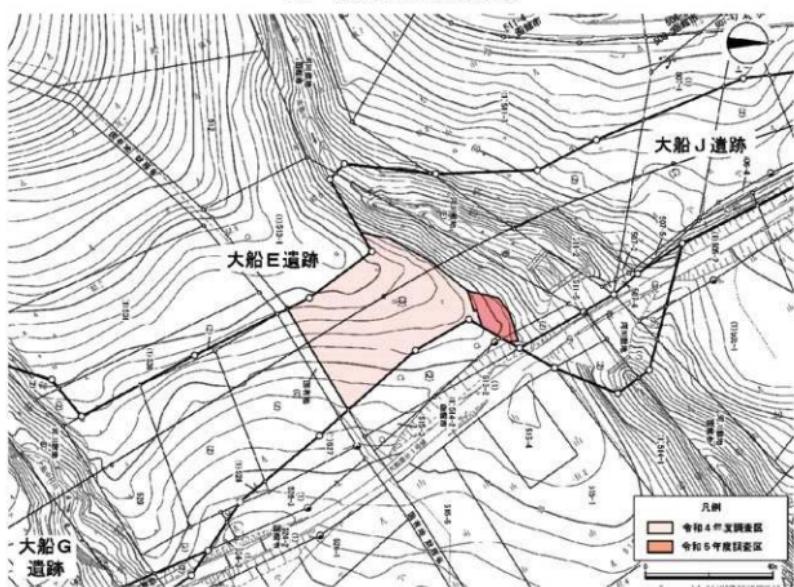
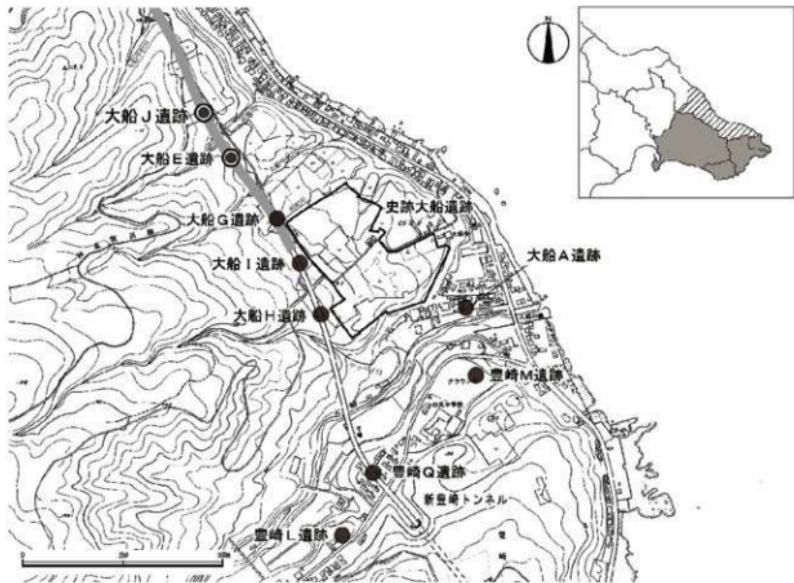
本遺跡は、令和4年度に1,630m<sup>2</sup>の調査を実施し、調査報告書を刊行している。III層調査では、堅穴建物跡7軒、土坑墓1基、土坑6基など縄文時代中期・後期を主体とする遺構を検出している。V層調査では、早期中葉の爪形刺突列・貝殻文・沈線文・絡条体圧痕文が施された尖底土器が出土した。この調査で、調査区北西端の遺構が調査区外へ広がることが確認されたため、今年度130m<sup>2</sup>について調査した。

### 遺構と遺物

**III層調査** 遺構は、堅穴建物跡1軒（PD-7；昨年度一部を除き調査済み）、これとは別の堅穴（PD-4）構築時の掘り上げ土範囲（掘4）、柱穴状土坑2基（PH-19・20）、炭化したクリ子葉を主体とする炭化物範囲1カ所（炭化物集中2）を確認した。PD-7は、昨年度の調査で床面出土の炭化種実を試料に年代測定しており、4400±20yBPという数値が得られている。堅穴内から土器の出土はないが、今年度の調査で堅穴周辺からサイベ沢VI式土器（円筒上層C式相当）が一括で出土している。

遺物は、縄文時代中期・後期の土器を確認した。中期はサイベ沢VI式・VII式相当、後期は大津式である。石器類では、R・フレイク、敲石、石皿などが出土し、総数は236点である。

**V層調査** V層の遺構は確認されなかった。遺物は、U・フレイク1点、礫1点の計2点が出土した。





遺跡全景（北上空から）



III層完掘（南東上空から）



堅穴建物跡 PD-7 完掘（北西から）



柱穴状土坑 PH-19 土層断面（東から）



柱穴状土坑 PH-20 完掘（東から）



炭化物集中 2クリ子葉出土状況（北から）



III層土器出土状況（縄文中期）



V層調査風景（南から）

はこだてしおおぶねじゅいせき  
函館市大船 J 遺跡（登載番号 B-01-325）

調査理由：開発事業（道路）

調査地：函館市大船町498-4, 502-2, 506-1・4, 507-1・5, 511-3

調査主体：函館市教育委員会（調査担当者 吉田 力, 野村祐一）

調査実施：一般財団法人 道南歴史文化振興財団（調査担当者 萩野幸男）

調査期間：令和5年6月1日～令和5年9月27日

調査面積：1,667m<sup>2</sup>（III層），1,667m<sup>2</sup>（V層）

#### 調査の概要

遺跡は、函館市南茅部地域の大船川から北西へ約700mの佐藤川左岸海岸段丘上に位置する。調査区は、標高約59～67mの東緩斜面である。調査区の西側は、背後の丘陵へやや急傾斜で続いている。東側は、市道大船高台1号線の法面によって一部が切られ、緩斜面が150mほど続いた後、急傾斜をなし更に100mほどで海岸に至る。調査区南側の佐藤川右岸には大船E遺跡が位置し、令和4年度に1,630m<sup>2</sup>、令和5年度に130m<sup>2</sup>の調査を実施している。また、大船中村川を挟み大船G遺跡（令和元年度964m<sup>2</sup>、令和4年度2,890m<sup>2</sup>調査）、木田川を挟み大船I遺跡（令和元年度4,881m<sup>2</sup>調査）や大船H遺跡（平成30年度3,950m<sup>2</sup>、令和2年328m<sup>2</sup>調査）が位置している。大船I・H遺跡の東側は史跡大船遺跡が広がり、同じ段丘面上に密集して遺跡が分布している。

調査は、駒ヶ岳d火山灰（1640年降灰）・白頭山-苦小牧火山灰（947年降灰）下層のIII層（縄文時代前期以降-統縄文時代の遺物包含層）と、駒ヶ岳f・g火山灰（約6,300～6,500年前降灰）下層のV層（縄文時代早期の遺物包含層）について実施している。なお、調査前の調査区現況は杉林で、近現代の畠として利用された痕跡もみられ、一部で畠跡を確認している。また、畠跡からは埋設された甕（近代の石見焼か？）が1個体出土している。

#### 遺構と遺物

**III層調査** III層の遺構は、土坑4基、柱穴状土坑4基、落し穴1基、集石2基、焼土6ヵ所、剥片集中1ヵ所を検出した。遺構は、調査区の北西側に集中してみられ、落し穴を除く大半は統縄文時代の構築と考えられる。遺物は、縄文時代中期、晩期、統縄文時代の土器を確認した。統縄文時代の恵山式土器が主体である。石器類は、石鏟、石鋸、スクレイパー、石核、石斧、敲石などが出土し、総数約600点である。

**V層調査** 遺構は検出されなかった。遺物は、縄文時代早期前葉の川汲式（日計式）に相当する尖底土器（胴下半部）が出土した。結束によらない羽状縄文が施されている。石器類は、スクレイパー、石斧、敲石、凹石、擦石、磨石、石錘、砥石などが出土し、総計約70点である。

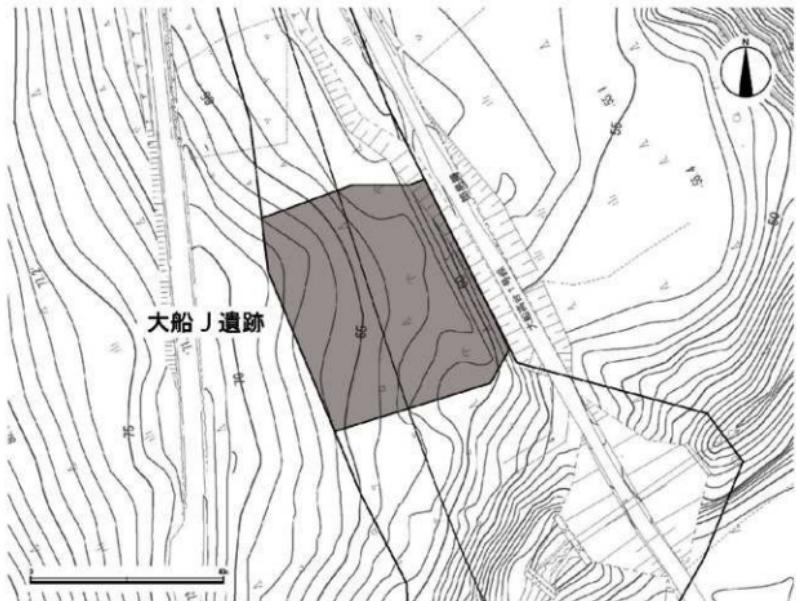


図2 調査区の位置と周辺の地形



遺跡全景（南上空から）



調査区全景（III層調査開始前 写真上は南西）



土坑 P-1 土層断面（南西から）



落し穴 TP-1 完掘（東から）



焼土 F S-2 焼土断面（南東から）



III層土器出土状況（縄文中期後葉 大安在B式）



IIIa 層土器出土状況（統縄文時代 恵山式）



III層石銛出土状況



V層調査風景（北上空から）



V層土器出土状況（北東から）



V層土器出土状況（縄文早期前葉 川汲式）



V層石斧出土状況

はこだてしうすじりしょうがっこういせき  
函館市白尻小学校遺跡（登載番号 B-01-257）

調査理由：開発事業（道路）

調査地：函館市白尻町340-4

調査主体：函館市教育委員会（調査担当者 吉田 力，野村祐一）

調査実施：一般財団法人 道南歴史文化振興財団（調査担当者 黒沢健明）

調査期間：令和5年7月18日～令和5年11月27日

調査面積：384m<sup>2</sup>（Ⅲ層），384m<sup>2</sup>（V層）

### 調査の概要

遺跡は、函館市白尻町に所在する白尻漁港西隣へと注ぐ無名小河川の上流、海岸線からの直線距離約300m、標高約30～35mの小河川左岸の海岸段丘上緩傾斜地に位置する。昭和44年に白尻小学校改築中にストーンサークルが発見・調査された場所は本調査区から約200m山側に離れた標高約50mの旧白尻小学校校舎のある地点で、そこからさらに山側の国道278号の通る標高約60～70mの地点が平成16・17・19年に調査されている。今年度調査区は令和3年度調査区と令和4年度調査区の間である市道白尻小学校1号線の直下にあたる。白尻漁港臨港道路工事に伴う調査では本遺跡を3年間でⅢ層1,967m<sup>2</sup>、V層1,545m<sup>2</sup>を調査したことになる。

調査は、並行して行われる地盤改良工事との兼ね合いから1・2区と分割し、それぞれ駒ヶ岳d火山灰（1640年降灰）・白頭山－苦小牧火山灰（947年降灰）下層のⅢ層（縄文時代前期以降－統縄文時代の遺物包含層）と、駒ヶ岳f・g火山灰（約6,300～6,500年前降灰）下層のV層（縄文時代早期の遺物包含層）について実施している。

### 遺構と遺物

Ⅲ層調査 遺構は、土坑22基、焼土1カ所、礫集中1カ所を検出した。土坑は貯蔵穴とみられるフラスコ状土坑や、副葬品とみられる遺物を伴う土坑墓と考えられるものも確認している。土坑墓とみられるものには晩期の土器を伴うものや、紐状の漆塗り製品を伴い周溝が巡る中期と考えられるものがあった。

遺物は土器が縄文後期（鰐洞式）、晩期（大洞C2式古段階）が主体的に出土しており、これまでと同様の傾向であった。石器類は石鏃、スクレイパー、石錐石斧、擦石、砥石などが出土しており、遺物総数は約10,000点である。

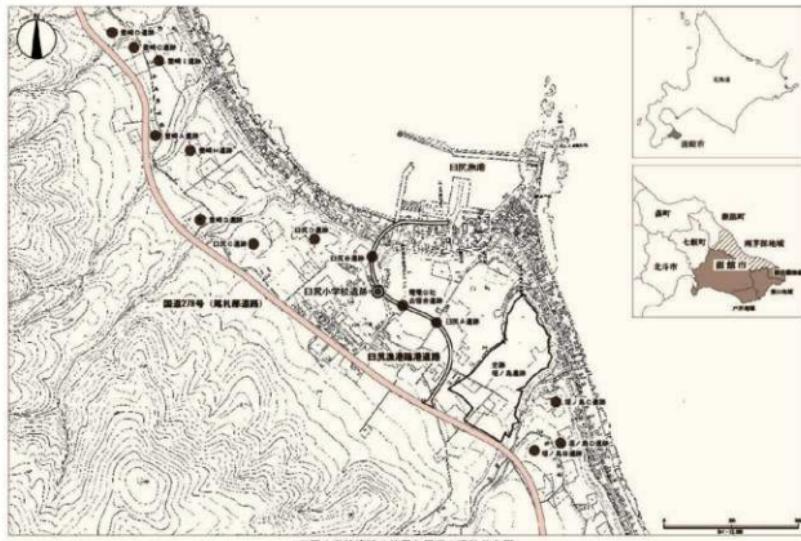
3年間の調査を合計すると、遺構は竪穴建物跡15軒、竪穴状遺構1基、土坑81基、焼土14カ所、屋外炉2基、埋設土器4基、剥片集中2カ所、礫集中1カ所

で、遺物は土器・石器が約120,000点、その他に骨・貝の自然遺物が出土している。

#### V層調査 遺構は土坑1基、焼土1カ所を検出した。

土器は縄文早期のムシリI式や東釧路IV式が出土している。石器は石鎌、つまみ付ナイフ、石斧、石錘、石製品などが出土しており、遺物総数は約500点である。

3年間の調査を合計すると、遺構は竪穴状遺構1基、土坑2基、焼土11カ所、剥片集中2カ所で、遺物は約6,000点出土している。





調査区遠景（南から）



1区Ⅲ層完掘状況（右が北）

北）



2区Ⅲ層完掘状況（右が北）

1区V層完掘状況（右が北）

北）



2区V層完掘状況（右が北）



III層P-7 1 遺物出土状況

III層P-8 0 遺物出土状況



III層P-8 0 出土漆塗製品（拡大）

III層石鏹出土状況





III層土器（晚期）出土状況

V層調査風景



V層石斧出土状況

V層つまみ付ナイフ出土状況

## 江差町 開陽丸遺跡 (C-01-062)

調査理由

保存活用

調査地

開陽丸遺跡 B 地区

調査主体

江差町教育委員会

調査期間

モニタリング調査：令和5年5月13日～14日、11月14日～15日

状態確認調査：令和5年8月28日～30日

調査面積

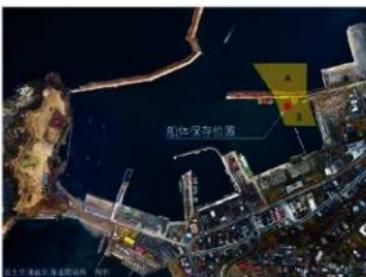
216m<sup>2</sup>

### (1) 開陽丸遺跡の概要

開陽丸遺跡は、江差港東外防波堤の内外の海底に位置する。江戸幕府の軍艦であった開陽丸は、明治元年、箱館戦争のさなか暴風雪に遭い座礁・沈没した。昭和49年に遺跡の所在が確認されてから、昭和58年までに海底の発掘調査が行われ、約33,000点の遺物を引き揚げ、国内で例のない潜水による発掘調査として成果を挙げた。

平成元年には、18×12mの木造船体の一部を海底で現地保存することとし、木材の食害対策として銅網が被覆した。

令和4年度調査では、船体を被覆する銅網が剥離している箇所やフナクイムシによる食害、バクテリアによる腐食を確認している。



1. 江差港湾内位置図



2. 浮標で示す遺跡範

図

### (2) 令和5年度 現状確認調査

#### 2-1 遺跡範囲の確認

昭和50年代の発掘調査で設定された遺跡の範囲だが、再確認及び再設定のためSBASと光波測量を行い、現地保存船体周辺に今後の調査で使用する基準点を設置した。

## 2-2 モニタリング調査

令和4年度より取り進めている海水中の溶存酸素量を計測するデータロガーの交換作業である。溶存酸素量計計測する背景には、船体の保存方法の再検討にあたり、現状の船体の保存環境を把握するもので、データロガーは銅網内外に各1ヵ所、計2ヶ所で計測している。計測期間は半年間で、5月に設置したロガーを11月に回収すると同時に、新たなロガーを設置する作業を行った。

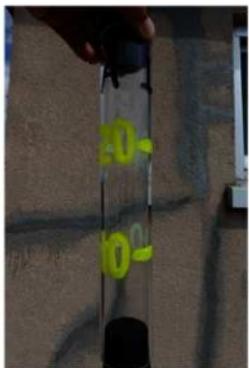


## 2-3 状態確認調査

「令和5年度日本における水中遺跡保護体制の整備充実に関する調査研究事業」の補助を受け、船体の保存環境を科学的に示すための分析サンプルを採取した。

銅網が被覆した船体には、これまでに自然堆積したシルトに覆われている。そのシルトを採取し、銅イオンの定量から銅網による保存方法の有効性を確認する。シルトの堆

積は、数cmの少量で堆積する範囲もあれば、数m単位で多量に堆積する範囲もあった。サンプルは、銅網が被覆している箇所から3点、比較サンプルとして船体や銅網から離れた箇所から1点、20cm程度の柱状で採取した。採取したサンプルの上層と下層で間隙水を作製後、ICP-MSを用いた銅イオン定量分析を行う。現在は分析結果待ちである。



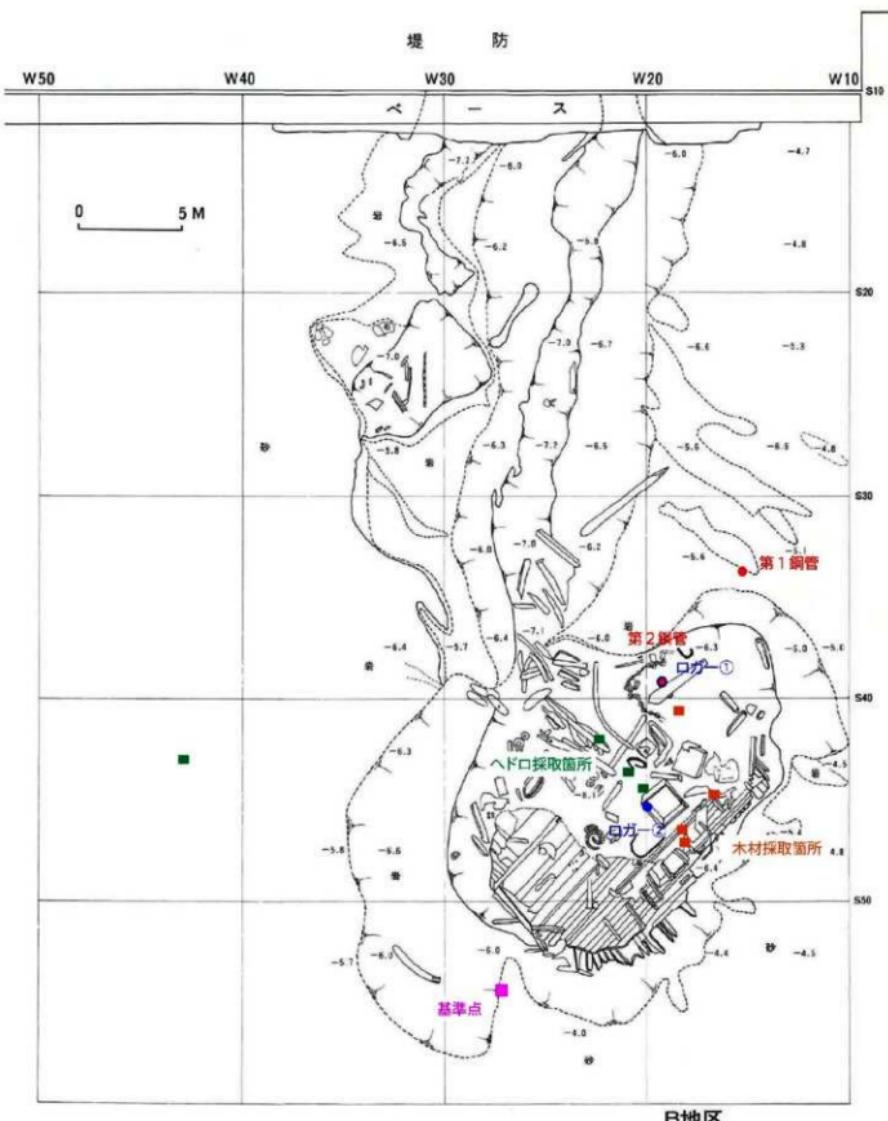
7.シルト採取に使用したアクリルパイプ  
(径 50mm/厚 3mm/長 300mm)



8.採取したシルト

シルトの他、船体自体の劣化状態を確認するため、木造船体の一部を採取した。木材サンプルは、銅網が被覆している2箇所、銅網が剥離した2箇所から各1点づつ、計4点を採取した。本来、5cm角の立方体で採取予定だったが、船体の状態からこの大きさであると脆く崩れてしまう点や、水中における作業では難易度が高い点から10cm角程度の採取となった。比較として、昭和50年代の発掘調査で引き揚げ、現在は収蔵庫で保管している木材を2点採取した。採取したサンプルは、容積密度や最大含水率測定などの物理試験の他、成分分析及び組織観察を行う。現在は分析結果を待つ。





# 令和 5 年度館城跡の発掘調査

厚沢部町教育委員会 石井淳平

令和 5 年 12 月 2 日

## 1 平成 21 年の礎石確認調査

平成 21 年に地表面調査による礎石の検出作業を行い、3 棟の礎石建物を発見しました。このうち、南側の 2 棟は増田家文書『館築城圖』に描かれた館城の御殿とされる建物と一致する部分が多いことが明らかになりました。一方、築城圖の建物は「L」字形の 1 棟の建物として描かれていますが、現地の礎石配置からは 2 棟の建物が想定されました。このことから、もともと 1 棟として予定されていた建物が、設計変更により 2 棟の建物として建設されたと推測しました。



図 1 平成 21 年に行った地表面での礎石確認調査

## 2 レーダーが突き止めた地下構造

しかし、令和元年及び令和 3 年に、札幌学院大学白杵勲教授の実施したレーダー探査により、平成 21 年調査では礎石が検出されなかった建物と建物の間に何らかの地下構造があることが確認されました。

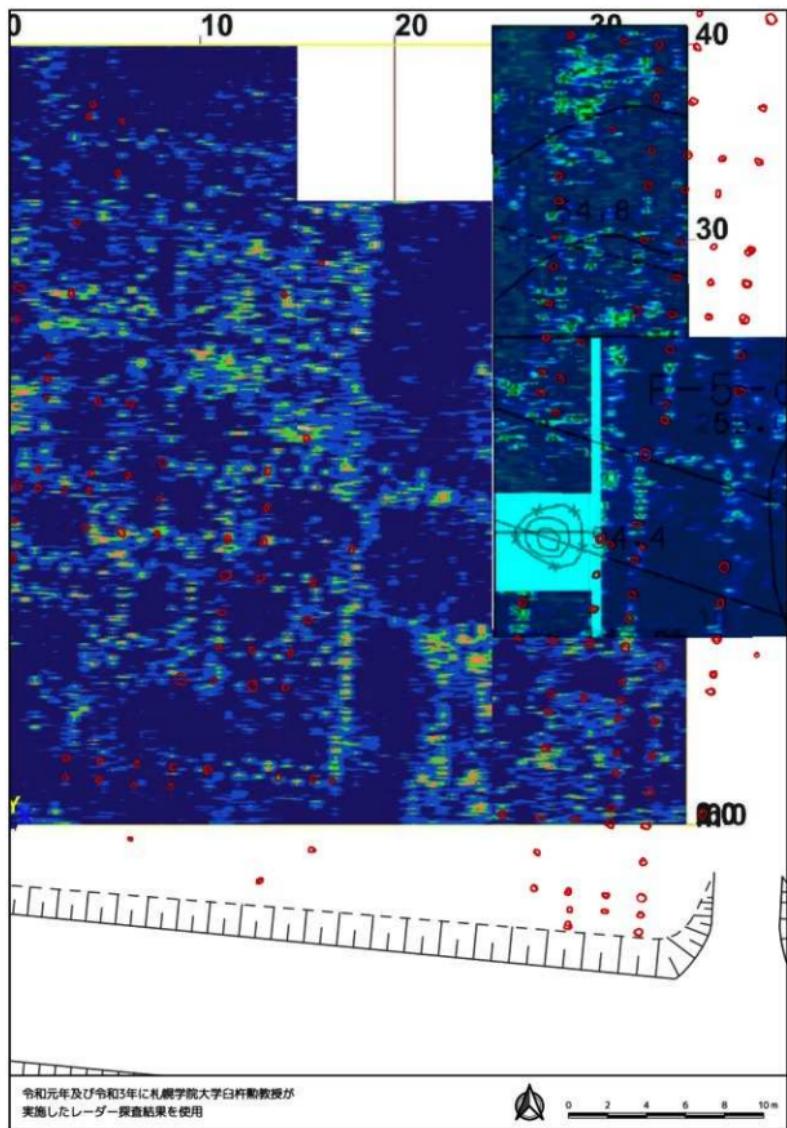


図2 レーダー探査結果

### 3 調査区の設置

以上の調査結果をもとに、館城御殿が築城圖どおりの1棟として建設されたのか、今までの理解のように2棟として建設されたのかを明らかにするとともに、レーダー探査で検出された反応の実態を確認することとしました（図3）。

### 4 調査の成果

#### 4.1 検出遺構

**盛土層** 調査前現況地表面は調査区中央が谷状の地形となっていました。このことは地形測量によっても確認できます（図3）。調査の結果、調査区の東西に厚さ約20cmの盛土層が確認できました（図4・5・6）。調査区中央の谷状地形は旧地表面であり、東西に盛土がなされた結果谷状になったことがわかりました。盛土層はロームを主体としてつき固められており地表面付近には小礫が散布しています。東西建物の建設に際して盛土による平坦地の造成が行われたことが明らかとなりました。

**布掘り状の地業** 盛土層の上から掘り込まれた布掘り状の溝がみつかりました（図4・5）。溝には礫が充填されており、検出面での溝の幅は30cm～50cm、深さは20cm～40cmでした。溝の上面では礎石や礎石抜取痕と思われる浅い掘り込みが確認されていることから、建物の基礎に相当するに伴う「地業<sup>1)</sup>」と判断しました。

**盛土層下の礎石** 盛土層直下の旧地表面から礎石を検出しました（図6）。これらの直上にはいずれも礎石や礎石の抜き取り痕が確認されました。旧地表面に礎石を据えた後、何らかの事情で整地が必要な事態が生じたため、設置した礎石を抜き取ることなく整地した上で新たな礎石を設置した可能性が考えられます。

別の可能性として、軟弱な地盤で行われる「ローソク地業」があります。これは、縦方向に石を数段重ねたり、縦長の石を地面に深く埋設して建物の沈下を防ぐ地業です。

1) 地業とは地盤に施される土木工事のことです。この場合、礎石が基礎にあたり、礎石を据えるために地下に固くつき固めた布掘り状の溝を構築することが地業にあたります。

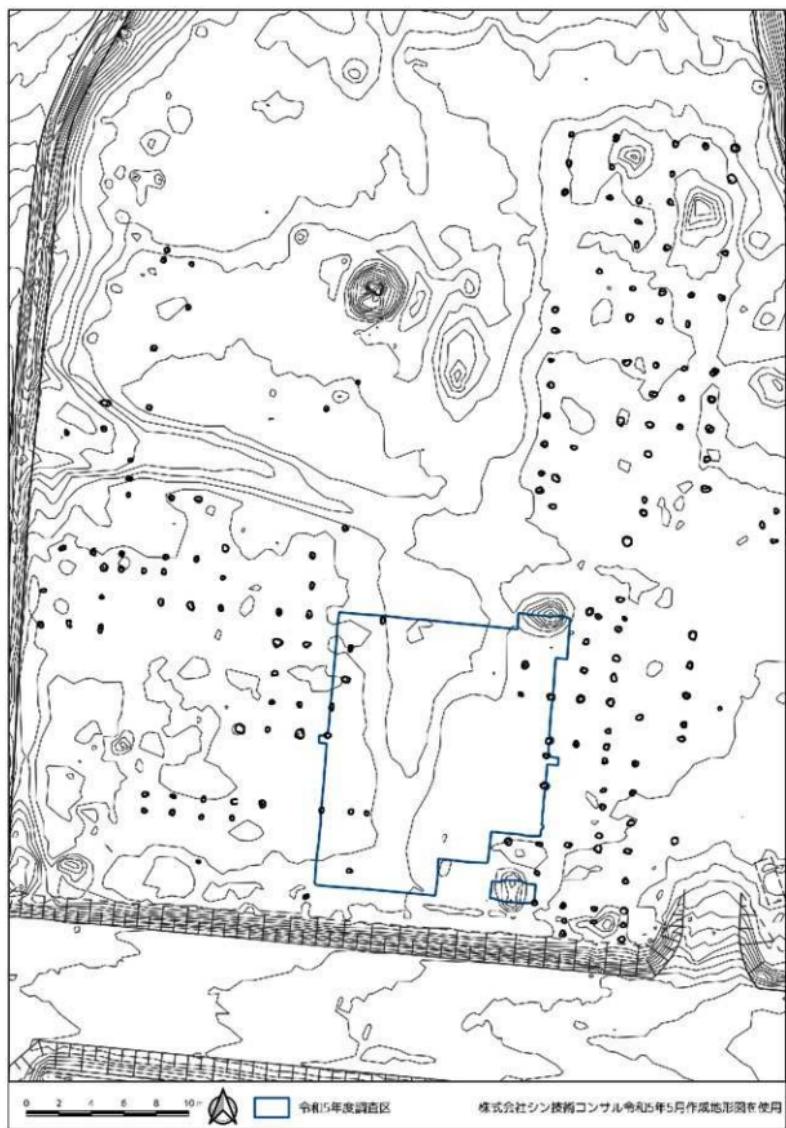


図3 令和5年度館城跡発掘調査区と礎石配置



図4 令和5年度発掘調査区全景



調査区西壁断面と盛土層



調査区西壁断面オルソ画像



中央トレンチ西側断面と盛土層



中央トレンチ西側断面オルソ画像

図5 発掘調査状況写真1



調査区東壁断面オルソ画像



布堀状の地業断面（東壁沿い）



布堀状の地業断面（調査区北東）



盛土層の上下で検出された礎石

図 6 発掘調査状況写真 2

#### 4.2 レーダー反応と地下遺構

令和元年及び3年に行われたレーダー探査での反応は、地業の痕跡とよく一致します（図7）。布堀状の地業は建物の柱筋を表すことから、レーダー反応は建物の柱配列を示すと考えられます。

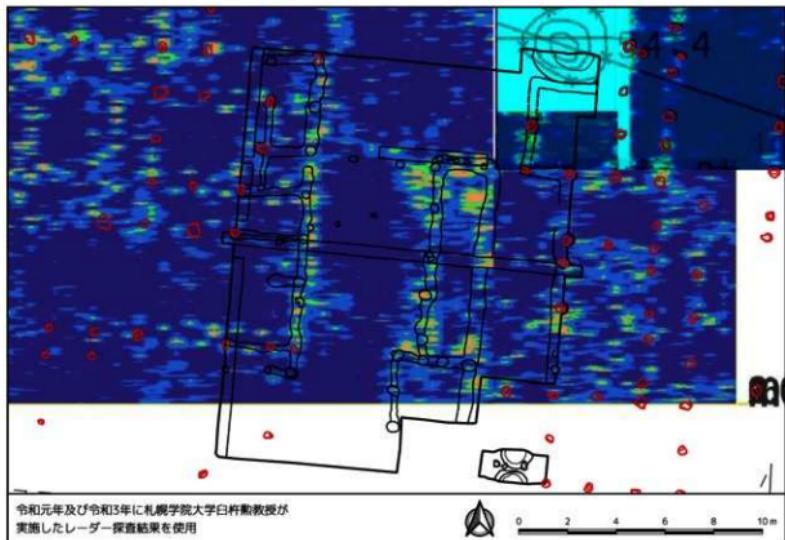


図 7 レーダー反応と地下構造

#### 4.3 増田家文書『館築城圖』との比較

増田家文書『館築城圖』は館城御殿の設計図と考えられています。平成21年の地表面調査の結果、東側の礎石群については一致点が多いものの、西側の礎石群は抜き取られたと考えられるものも多く、一致箇所を見出すことは困難でした。また、1棟の建物として描かれる『築城圖』に対して現地の礎石配置は東西の2群に分かれることからも、現地の礎石配置と整合しない可能性が高いと考えられていました。

調査の結果、東西の礎石群は盛土層によって明瞭に2分され、東西の礎石群は最短距離で3間(5.4m)離れることがわかりました(図4)。『築城圖』では、この空間に「御達之間」や「御台子之間」など、藩主の日中の居所や中級以上の藩士が詰める部屋が描かれています(図8)。この空間は館城の中核とも言える空間であり、整地や地業、礎石の設置がされていないことは考えられません。以上のことから、増田家文書に描かれた1棟の建物は成立し難いと判断します。

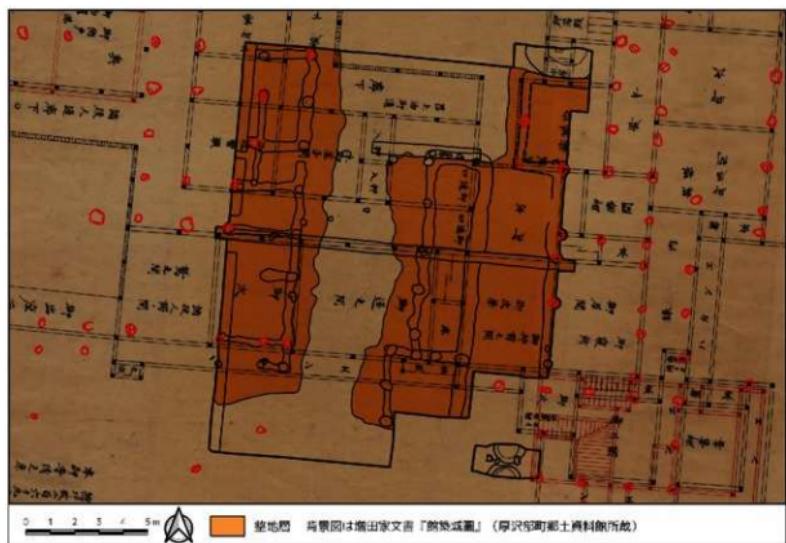


図8 増田家文書『館築城圖』と造構配置

## 今金町 町内遺跡詳細分布調査（令和4・5年度）

調査目的：町内遺跡および遺跡可能性地の所在確認

発掘期間：令和4年8月（実働日数7日）、令和5年7月～9月（実働日数13日）

調査地：今金町字住吉、中里、花石、宮島、美利河地区

試掘面積：2か年計62m<sup>2</sup>

調査主体：今金町教育委員会

### 1. 調査の目的と概要

これまでの分布調査等で確認した遺跡および可能性地のうち、町教委が重要遺跡と位置付けるものについて、遺跡の存否や範囲を確認し、今後の保存方策の基礎資料とする目的とする。大きくは次の3種について調査を実施した。

- (1) 写真測量により認識されたチャシ跡のような地形について、試掘により存否を調査
- (2) 神丘5遺跡について、地下探査により地下遺構の残存状況を調査
- (3) 後志利別川流域の砂金採掘跡・カニカン岳金山跡について、現地踏査により分布を調査

### 2. 調査方法と結果

#### (1) チャシ跡可能性地

国土地理院がインターネット上で公開する航空写真（主に米軍撮影）をもとに写真測量の技術を活用し、チャシ地形が認められる箇所を踏査して試掘候補地を選定した（宮本・宮塚 2021）。計6箇所について調査区を設定し、堆積土層の状態や人為的痕跡を調査した結果、いずれの調査区でも人為的痕跡を確認することができず、自然地形と判断した。

#### (2) 神丘5遺跡（C・10・18）

町教委の分布調査で土器片、石器が採集され、縄文時代の遺跡として包蔵地登載（今金町教育委員会 1989）後、土地所有者から大形石棒2点、大形磨製石斧2点の寄贈があり、付近一帯が集落遺跡であることが推定されている。すでに農地として地形改変を受けているため、地下遺構の残存状況を把握することを目的に帯磁率計による地下探査を行った。その結果、比較的東側（沢頭に近いエリア）に地下遺構もしくは礫が多く所在する可能性が高いことが明らかとなった。

#### (3) 砂金採掘跡・カニカン岳金山跡（C・10・12）

既往の民間調査組織（日本ナショナルトラスト編 1996）の調査で把握しながら、包蔵地登載していない箇所や、地形の特徴から砂金採掘跡の分布が予想される箇所を中心に現地踏査を行った。カニカン岳金山跡については、作業場と目される鉱山臼の散布箇所を特定するための踏査を行った。

その結果、GおよびHでは既往調査時と比べ、遺跡の分布範囲をより明確に把握した。またEおよびFで砂金採掘跡を新たに確認した。それぞれ登載準備を進めている。これにより、後志利別川流域に所在する砂金採掘跡の分布南限を約4km更新することになった。別の調査（矢野 1988）では、さらに下流の奥種川地区でも所在が指摘されており、今後も継続的な分布調査が必要である。カニカン岳金山跡については、既往調査での確認地付近まで到達したものの、人為的な遺構や鉱山臼は発見できなかった。今後も継続的な調査が必要である。

## 参考文献

宮本雅通・宮塚義人 2021 年「空中写真を利用した地形測量による遺跡探査の試み」『南北海道考古学情報』15 号

今金町教育委員会 1989 年『今金町の遺跡』

日本ナショナルトラスト編 1996 年『美利河・花石の砂金採掘跡』

矢野牧夫 1988 年『黄金郷への旅』北海道新聞社

表 1 町内遺跡詳細分布調査区一覧

年度	調査区	所在地	現況	要因	調査方法	面積	成果
R5	A	住吉 神社境内		航空写真でチャシ地形あり	試掘	11.6 m <sup>2</sup>	
	B	中里 雜木林		文献（幕末の踏査記）から推定	試掘	3.0 m <sup>2</sup>	
	C	花石 雜木林		航空写真でチャシ地形あり	試掘	3.5 m <sup>2</sup>	
	D	花石 雜木林		航空写真でチャシ地形あり	試掘	17.4 m <sup>2</sup>	
	E	中里 雜木林	現況地形	砂金採掘跡あり	踏査		中里 1 砂金採掘跡
	F	宮島 雜木林	現況地形	砂金採掘跡あり	踏査		宮島 3 砂金採掘跡
	G	花石 雜木林	既往調査で砂金採掘跡（未登載）		踏査		花石 2 砂金採掘跡
	H	宮島 雜木林	既往調査で砂金採掘跡（未登載）		踏査		宮島 2 砂金採掘跡
R4	W	中里 雜木林		航空写真でチャシ地形あり	試掘	6.1 m <sup>2</sup>	
	X	中里 農地跡		航空写真でチャシ地形あり	試掘	8.8 m <sup>2</sup>	
	Y	(A と同じ)		航空写真でチャシ地形あり	試掘	11.9 m <sup>2</sup>	
	Z	神丘 農地		採集遺物に石棒、磨製石斧あり	地下探査		分布傾向を把握

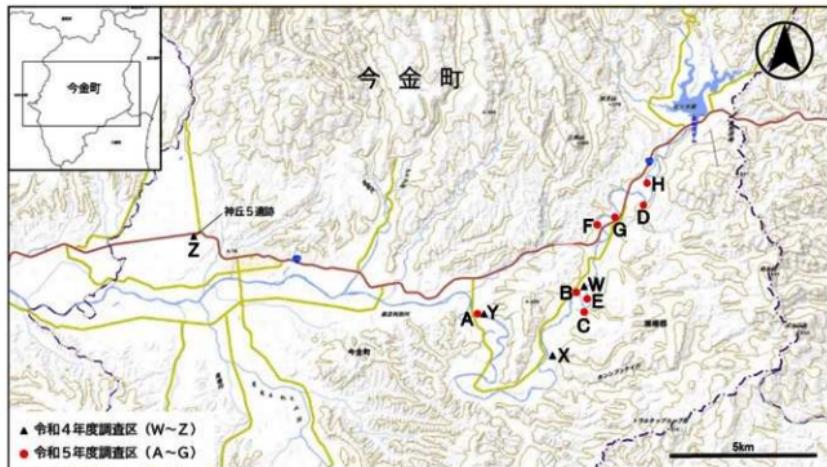


図 1 町内遺跡詳細分布調査 調査区位置図 (国土地理院より転載)

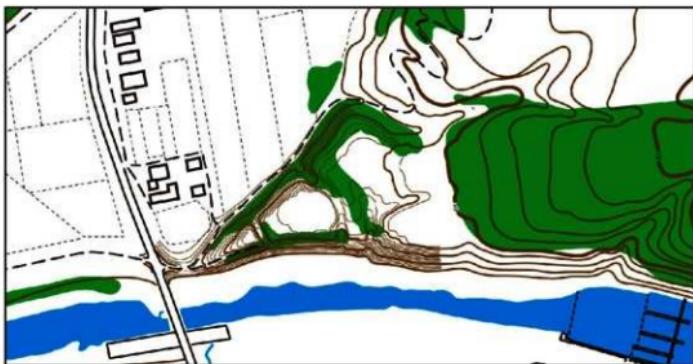


図2 調査区A(Y) 写真測量による古地形

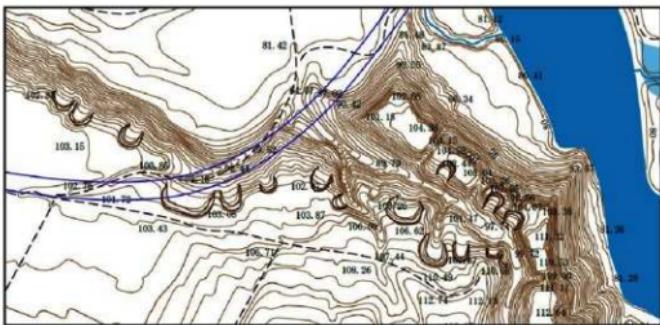


図3 調査区D 写真測量による古地形

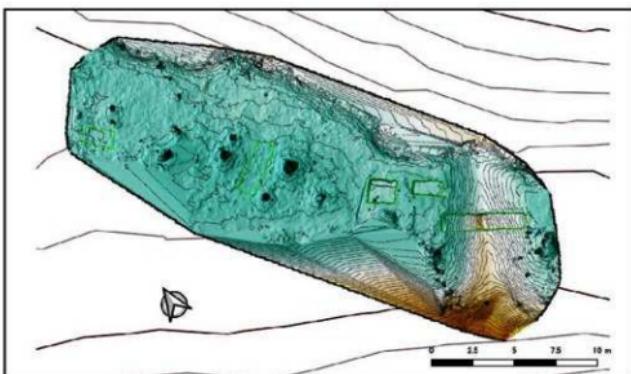


図4 調査区D 現地形と調査区位置図

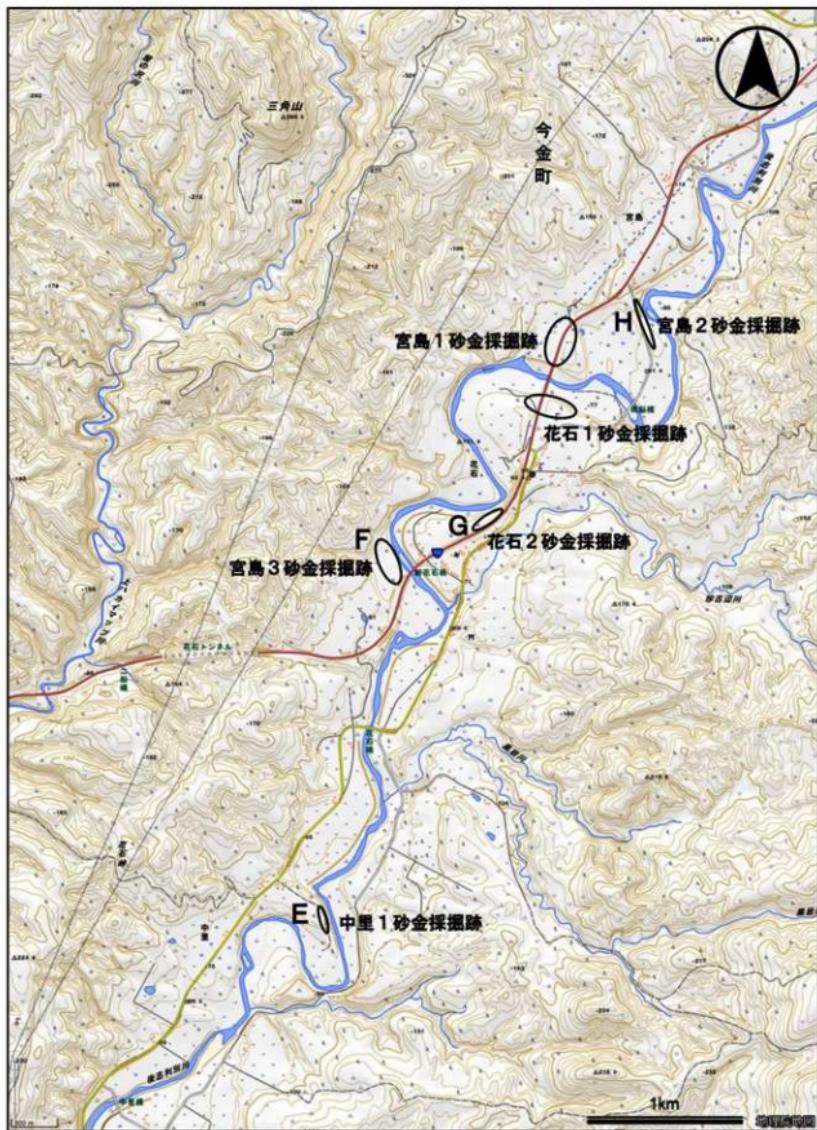


図5 宮島・花石・中里地区における砂金探掘跡の分布（国土地理院より転載）



調査区 E 中里 1 砂金採掘跡



調査区 F 宮島 3 砂金採掘跡



調査区 F 宮島 3 砂金採掘跡



調査区 H 宮島 2 砂金採掘跡

## 2023年度奥尻町青苗遺跡発掘調査概要

### 1. 調査の趣旨と目的

福島大学・菊地芳朗が代表者となり推進している日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）「北からの視点・考古科学分析・広域比較に基づく日本古墳築造の総合的研究」のプロジェクトの一環として、かつての発掘で墳墓からヒスイ製大型丁字頭勾玉等が出土した青苗遺跡の学術発掘調査を実施し、古墳時代・奈良時代併行期における本州島と北海道島の地域間交流の実態解明を目指した。

### 2. 調査期間

2023年8月4日（水）～8月10日（木）

### 3. 対象遺跡

青苗遺跡（北海道奥尻郡奥尻町字青苗435番地3地先）

### 4. 調査主体

福島大学行政政策学類考古学研究室（調査担当者：教授 菊地芳朗）

### 5. 調査参加者

科学研究費プロジェクト研究メンバー（菊地芳朗教授ほか）、稻垣森太（奥尻町教育委員会主任学芸員）、福島大学考古学研究室所属学生5名

### 6. 調査結果

#### ・概要

青苗遺跡「山本台地 懸崖地点」における遺構・遺物の分布状況を把握することを目的に、同地区に試掘トレンチを設定し、遺構・遺物の分布状況・性格・年代等を確認するため掘削を行った。なお、今調査地はすべて国有地内にある。

試掘トレンチは、南北約20m×東西約10m の不整長方形である（位置図参照）。この場所にトレンチを設定したのは、1977年に検出された、ヒスイ製大型丁字頭勾玉副葬墳墓（道路拡幅工事により現存せず）のすぐ西側に位置し、同様の墳墓の存在が期待されたためである。

掘削は、表土および近現代の層は重機で除去し、近世以後の層を手掘りで行った。また、掘り上げた土壤に対するウォーターフローテーション調査を実施し、炭化種実等の検出・分析から同遺跡で行われた生業活動の復元を目指した（別メンバーが整理中）。

#### ・層序

調査地で10層の土層を確認した。第1層～第4層は近現代の整地土等で、これらが比較的厚く堆積するとともに、現代のごみ穴や池跡等が分布し、必ずしも良好に

近世以前の文化層は残存していなかった。

トレーニング東側の比較的良好な残存部分では、地表下約50cmに1640年噴火の駒ヶ岳火山灰（Ko-d）とみられる第5層が約10cmの厚さで堆積し、その直下に擦文文化期に相当する第6層が厚さ10cm前後で堆積していた。調査区内で確認された擦文文化期の層はこの層のみである。第7層からは縄文時代前期と思われる土器（円筒土器か）が出土し、第10層は遺物が出土しない地山層である。

#### ・擦文文化期の遺構・遺物

調査区内では、明確な擦文文化期の遺構は検出されなかった。調査区の西10～20m付近では1980年の発掘調査によって比較的多くの遺構・遺物が検出されているが、今調査区付近では、近現代に擦文文化期の層が大きく破壊されたことが、遺構が確認されなかつた理由の一つと考えられる。したがって、今調査区内における擦文文化期の遺物出土量は少なく、その出土も散発的であった。

一方、擦文文化期の層が比較的良好に残るトレーニング東壁では、壁面に複数の擦文土器が顔をのぞかせており、調査終了時にそれらを回収したところ、比較的多数の土器片が得られた。これらは接合作業の結果、ほぼ全体が復元される甕2点（年代観：10世紀前葉～11世紀中葉）となり、この付近では擦文土器を含む文化相が良好に残存していることが推定された（土器写真はスライド掲載のみ）。このことは、来年度に計画している次回調査にあたり、大きな目標となるものである。

#### 7. 2024年度調査に向けて

以上のように、今調査では、1970～80年代に行われた発掘調査の結果を検証するとともに、層序、擦文期文化層の厚さ、その年代、遺構・遺物の広がり等を明確に把握し、記録に残すことができた。

調査区西側では、近現代の開発により遺構・遺物がほとんど残っていないことを確認した一方、調査区東側では、擦文文化期を含む層が良好に残存していることが推定された。調査を行っていない北側も、近現代の建物等が存在したとの記録がないことから、文化層が残存している可能性がある。

以上の所見と検討をもとに、2024年度調査に向け、地権者、奥尻町教育委員会、関係機関等との協議を今後行っていきたい。

#### 参考文献

- 1979佐藤忠雄ほか『奥尻島青苗遺跡 図版編』函館土木現業所 奥尻町教育委員会  
1981佐藤忠雄ほか『奥尻島青苗遺跡』奥尻町教育委員会  
2023稻垣森太ほか『青苗遺跡重要資料総括報告書』奥尻町教育委員会



遺跡調査区全景 北西→



遺跡調査区全景 南→

※注意事項（以下は掲載時はカットしてください）  
位置図 別添PDF参照 当日配布、リポジトリ掲載OK

調査区の写真 2枚→当日配布、リポジトリ掲載 OK 体裁はお任せします。

出土土器復元品 2点 別添 JPEG 当日スライド投影のみ リポジトリ掲載不可

セクション 別添 PDF 当日スライド投影のみ リポジトリ掲載不可 ※制作中

### 松前町 福山城下町遺跡 (B-02-029)

事業名：松前港線改良工事埋蔵文化財発掘調査委託

委託者：北海道渡島総合振興局

所在地：松前郡松前町字唐津 10-5・11-6・11-7・11-8・12・13-2・14-3・15-3・15-4・17-2・18-4・19-2・88-2・89-2・90-2・91-2・92-2・92-4

調査面積：854 m<sup>2</sup>

調査期間：令和5年7月3日～9月29日

調査員：中山昭大、山中文雄、菊池慈人

#### 調査の概要

福山城下町は、松前藩の福山館（福山城）を中心に建設された近世城下町である。このうち、松前町字唐津、字松城、字福山の海岸沿いや河川沿いの低平地が、福山城下町遺跡として周知されている。

今回の発掘調査は、字唐津で実施される一般道道松前港線の改良工事に伴うものである。調査範囲は、町道唐津ヶ丘線との交差点西側から町道海岸通り4号線との交差点東側までの区間で、延長124mを測る。標高は7m前後で、唐津ヶ丘線との交差点から海岸までの距離は約90mである。国指定史跡の松前氏城跡福山城跡は、同交差点から北東へ約400m、標高約20mの海岸段丘に立地する。昨年度に調査した松前港線の歩道部分531 m<sup>2</sup>（A～E地区）に続き、今年度は同線の車道・歩道部分、町道唐津ヶ丘線の一部、町道海岸通り4号線の一部、合わせて854 m<sup>2</sup>（①～⑥地区）の調査を実施した。掘削深度は大部分が80cmであるが、集水樹等の設置予定箇所は190cmである。

字唐津の海岸部は、近世に唐津内町とよばれた町入地で、宝曆年間（1751～1763）に制作された『松前屏風』には、松前港線の前身である福山街道の両脇に町屋の立ち並ぶ様子が描かれている。昨年度の調



遺跡位置図

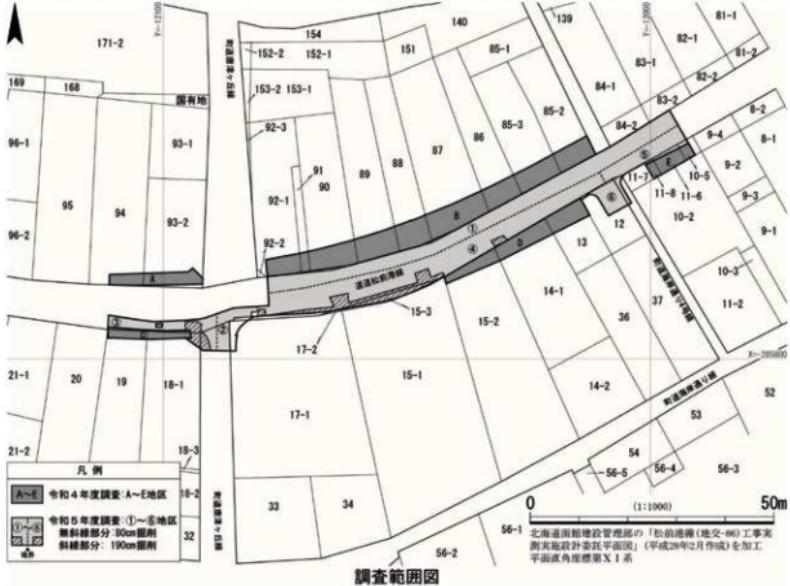
査では、建物の礎石、石積、炉、土坑等の遺構を約 50 か所検出し、陶磁器、金属製品、木製品、石製品、骨角製品、ガラス玉等の遺物が約 2 万 7,000 点出土した。主な成果として、沢状や凹地状の地形から得られた木製品を中心とする遺物、炉、輪羽口、埴堀、鉄滓といった金属製品の生産に関連する資料、まとまって出土した 16 世紀後葉の中国産磁器(漳州窯系)などが挙げられる。木製品は 16 世紀後半～17 世紀初頭のものとみられ、漆塗椀、曲物把手、桶側板、下駄等の和産物や、アイヌ文化に特徴的な板縦舟の舟敷、捧酒箸等が見られる。また、17 世紀代の炉から出土した埴堀には、金の微粒子が付着していた。

なお、松前港線改良工事に伴う福山城下町遺跡の発掘調査は、松前町教育委員会によって、平成 17 ～19 年度に宇松城の旧小松前町、同 18・26 年度に宇松城の旧大松前町、同 18 年度に宇唐津の旧唐津内町、同 26 年度に宇福山の旧枝ヶ崎町で実施されている。また、町道朝日豊岡線代行事業改良工事に伴い、同 22 年度に当センターが宇福山の旧藏町で調査を行った。このほか、弘前大学による学術目的調査が、同 29 年度に宇豊岡の正行寺北側で、同 30 年度に宇松城の旧小松前町で行われている。

#### 遺構と遺物

松前港線の車道部分(①・④・⑤地区と②・③地区的北部)は、一部をのぞき深度 80 cmまで掘削した。アスファルト舗装の下は、路盤(碎石等)、路床(暗褐色土)によって構成されており、通信ケーブルや配水管が帶状に敷設されている部分もあった。路床の暗褐色土には近世の陶磁器等も含まれるが、近現代のガラス片も散見される。

同線の地番 14-1 地先にある 190 cm 剥削部分では、標高約 5m 以下に堆積する黒色土から、刀子の鞘、曲物、箸、杭等の木製品が出土した。この部分は、昨年度に舟敷等が出土した沢状地形の北西側にあたる。木製品のほかには、唐津焼、中国産磁器、小刀、骨角製の矢中柄、馬の頭骨、鯨の尾椎骨等が得ら

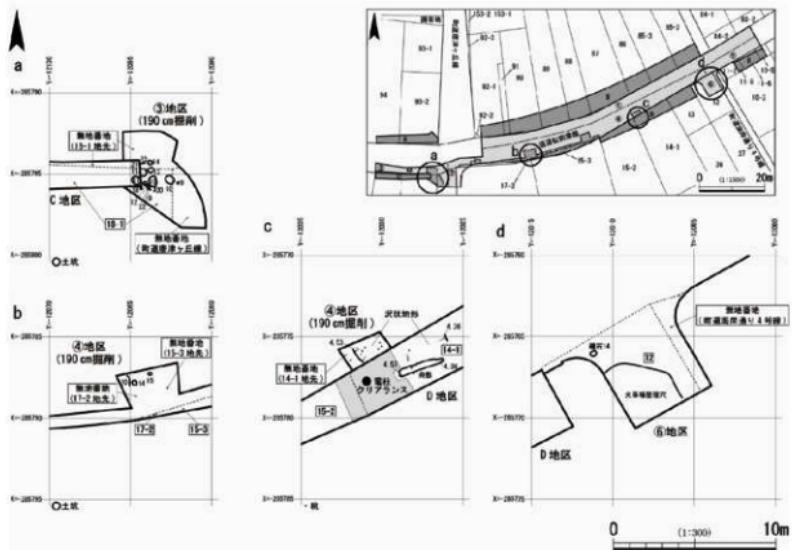


れている。また、地番 15-3・17-2 地先にある 190 cm 挖削部分では、旧福山街道の造成土や、かつての路面と考えられる黒色土を確認した。前者は標高 4.8m 付近を上面とする自然堆積層の上にのる。礫を多量に含み、厚さ 30~40 cm を測る。後者は標高 5.2m と 5.5m 付近に見られる 2 枚の黒色土で、厚さは 10 cm 未満である。このほか地番 17-2 地先等で、街道造成以前の土坑 3 基を検出した。

唐津ヶ丘線の 80 cm 挖削部分(②地区の南部)では、標高 5.2m 付近に広がる焼土粒や炭の混じる土層から、陶磁器、寛永通宝等が出土している。同線と松前港線との交差点南西側にある 190 cm 挖削部分(③地区の主に南東部)では、地番 18-1 を中心に土坑 15 基を検出した。土坑には長径 50~60 cm の橢円形や、長径 20 cm 以下の柱穴状・杭状のものなどがあり、覆土から珠洲焼の破片が出土している。

海岸通り 4 号線の地番 12(⑥地区)では、黄褐色ローム層の上下で火災の痕跡を検出した。ローム層は上面の標高が 5.6~5.8m で、厚さは約 10 cm を測る。同層の直下では、直径 5m を超える掘込から陶磁器、瓦、金属製品、石製品、礫等が大量に得られている。遺物の多くが焼けていることから、この掘込は火事場整理の穴であろう。穴の南～西部は調査範囲外にのびる。掘削時期は出土した陶磁器等から 19 世紀後半と推測される。なお、海岸通り 4 号線部分は掘削深度が 80 cm であるため、調査は穴の上面付近にとどまる。

今年度の調査で出土した遺物は、陶磁器・土器・土陶磁製品約 8,000 点、金属(鉄・非鉄)製品約 40 点、木製品約 400 点、石製品 5 点、骨角製品約 10 点、ガラス玉 2 点等を数える。陶磁器は肥前系を中心、瀬戸・美濃系、中国産磁器等、土器は少数であるが擦文土器が主体で、土陶磁製品は瓦、輪羽口、土人形等がある。鉄製品は小刀、鉄鍋、釘等、非鉄製品は寛永通宝、煙管等、石製品は石臼、硯等、ガラス玉は青色の小玉で、木製品・骨角製品は上述したとおりである。



遺構分布図



調査状況（地番 14-1 地先） 東から



80cm 挖削状況（地番 15-2 地先） 北西から



馬頭骨出土状況（地番 14-1 地先） 東から



杭出土状況（地番 14-1 地先） 南西から



旧福山街道土層断面（地番 15-3 地先） 東から



土坑群確認状況（地番 18-1） 南から



ローム層検出状況（地番 12） 北東から

# 福島町茶屋峠台場及び七飯町峠下台場の調査

箱館戦争戦跡調査プロジェクト 石井淳平

令和5年12月2日

## 1 遺跡の位置と環境

茶屋峠台場は松前半島南西部、松前城の北東約17km、五稜郭から南西に約50kmのところに位置する。五稜郭から松前へ抜ける交通路上である。

峠下台場は龜田半島の付け根付近、大沼の南1kmの山中、五稜郭から北へ約19kmのところに位置する。森町から五稜郭へ抜ける交通路上である。



図1 箱館戦争関係遺跡と調査地点

## 2 調査の方法

iPad を利用した LiDAR 計測を行った。使用した LiDAR アプリケーションは Scaniverse である。調査対象領域の中央にメジャーを張ってこれを基準線とし、メジャーの 0m を基準点とし、スマートフォンの GPS を使用して位置計測した（図 2）。オリエンテーリングコンパスを用いて基準線の方位角を計測し、磁北は西偏 9 度で補正した。計測領域内に標識を設置し、基準線を利用して位置計測及び基準点標高からの水準測量を行った。基準点標高は、国土地理院発行基盤地図情報数値標高モデル（10m メッシュ）の代表点の値を使用した。



図 2 標識の位置計測



図 3 茶屋峰台場全景（北東から）

Scaniverse から OBJ 形式で計測データを出し、CloudCompare (version2.11) で幾何補正を行った。CloudCompare から GeoTIFF 形式の DEM をエクスポートし、QGIS (version3.28) 上で地形図作成を行った。なお、段彩図は 1cm メッシュ DEM を使用し、等高線生成には 10cm メッシュ DEM を使用した。等高線生成用の DEM は平滑化処理<sup>1)</sup>を 2 回行った。

断面図作成には QGIS の Profile Tool を利用した。

## 3 福島町茶屋峰台場

### 3.1 台場の概要

明治元年 10 月に旧幕府軍の松前侵攻を防ぐために松前藩が築造したとされる（福島町史編集室 1995, p533）。松前藩は茶屋峰頂上付近に胸壁を築き、300 缸砲 2 門を備え付けたという（松前町史編集室 1992）。11 月 2 日に旧幕府軍と松前藩の戦闘が行われ、松前藩は蠣崎民部ほか 300 人あまりの兵力を配備して旧幕府軍を待ち受けていたが、まともな抵抗もなく退却した（須藤 1996: p285、大山 1968: : pp. 708-709）。

### 3.2 周辺の地形

茶屋峰台場は福島町の知内川中流から兵舞川へ抜ける標高約 220m の尾根の鞍部に位置する。松前と函館を繋ぐ旧道で、松前街道として知られるルートである。尾根の左右は急峻な崖である。

1) 平滑化処理は GRASS GIS (version7.8) の r.mapcalc コマンドを利用して任意のメッシュとその周囲合計 9 メッシュの平均を算出した。

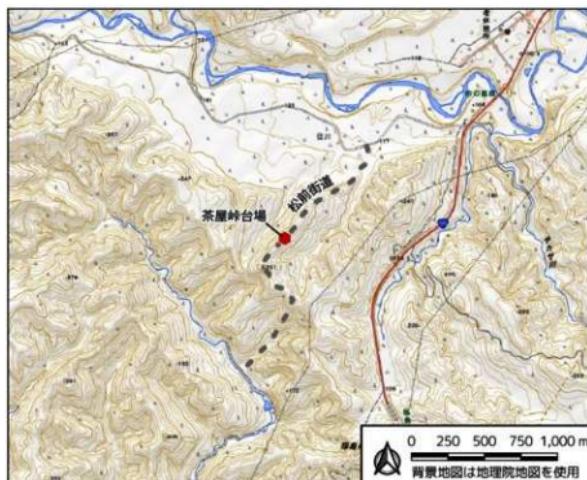


図4 茶屋跡と松前街道

### 3.3 遺構の状況

砲台跡とされる地点は松前街道の通る尾根上である。尾根の南側に両側を溝状に掘りくぼめた高まりがある（図3・5）。性格は不明であるものの、人為的な所産である。溝の底面から高まり頂部までは約1.5mである。土塁などの構造物は確認できない。

### 3.4 まとめ

茶屋跡は明治元年に旧幕府軍の攻撃に備えて松前藩が胸壁を築いたとされ、地元においてもそのように伝承されている。松前藩が旧幕府軍の侵攻に先立ちこの周辺に兵力を集めていたことは複数の記録によって確認できるが、今回の調査では明確な野戦陣地の痕跡を確認することはできなかった。唯一人為的な構造物と判断した高まりと溝についても箱館戦争との関わりは不明である。

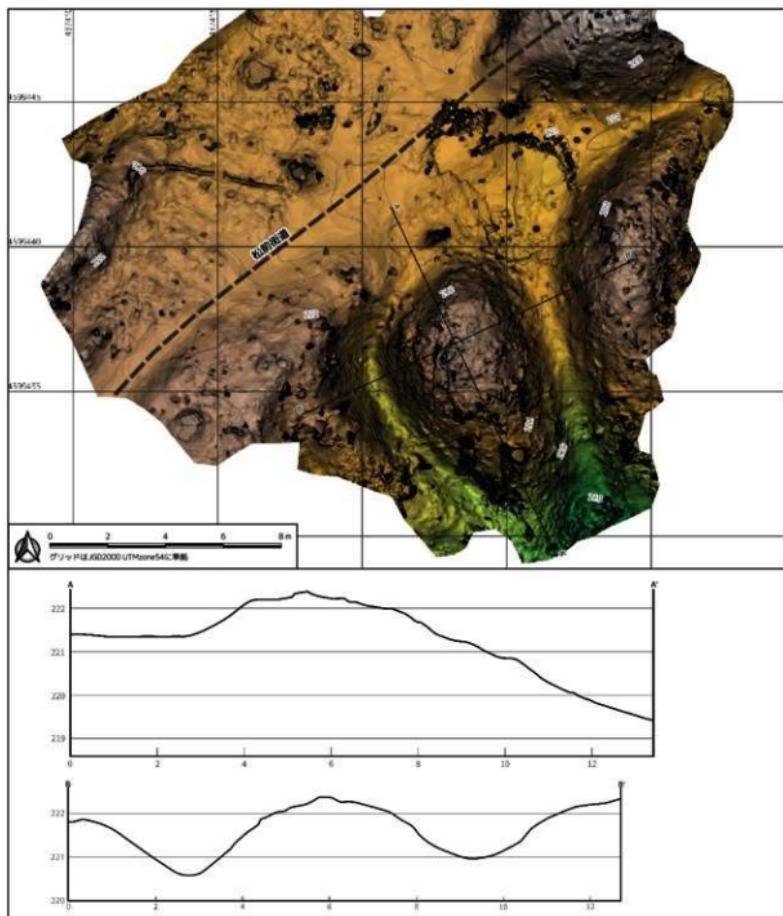


図 5 福島町茶屋峠台場測量図

## 4 七飯町峠下台場

### 4.1 台場の概要

峠下台場は長川清悦によって昭和48年に発見され、簡易な測量図が作成された（長川 1993）。その後、八巻孝夫により縄張り図が作成された（八巻 2017）。八巻は弘前藩士の残した『楠見日記』を引き、ブリュネが直接指導して構築した可能性が高いとともに、この南西の峠や東側の363峰にも防衛施設が存在する可能性を指摘している（八巻前掲: p115）。

### 4.2 周辺の地形

峠下台場は大沼の南側、横津岳や七飯岳から北西に延びる尾根上の345m峰山頂に所在する（図6）。台場のある尾根を西側に回り込むように七飯古道が通る。台場は七飯古道及び大沼方面に対して良好な視界を有する。



図6 七飯町峠下台場の位置



図7 調査風景

### 4.3 遺構の状況

東西約29m、南北約20mで周囲に土塁がめぐる（図8）。残存する土塁の頂部から内部平坦面の比高は約1mである。土塁外に溝状の遺構が確認できないことから、土塁内を掘削し、掘り上げ土を盛土して土塁としたものと想定される。南北軸に線対称な形状で、北側に3つ、南側に4つ、合計7つの突出部を有する。aとcの突出部は土塁内部の平坦面よりも一段高くなっている。また、hにはL字形の土塁（断面C-C'）がある。

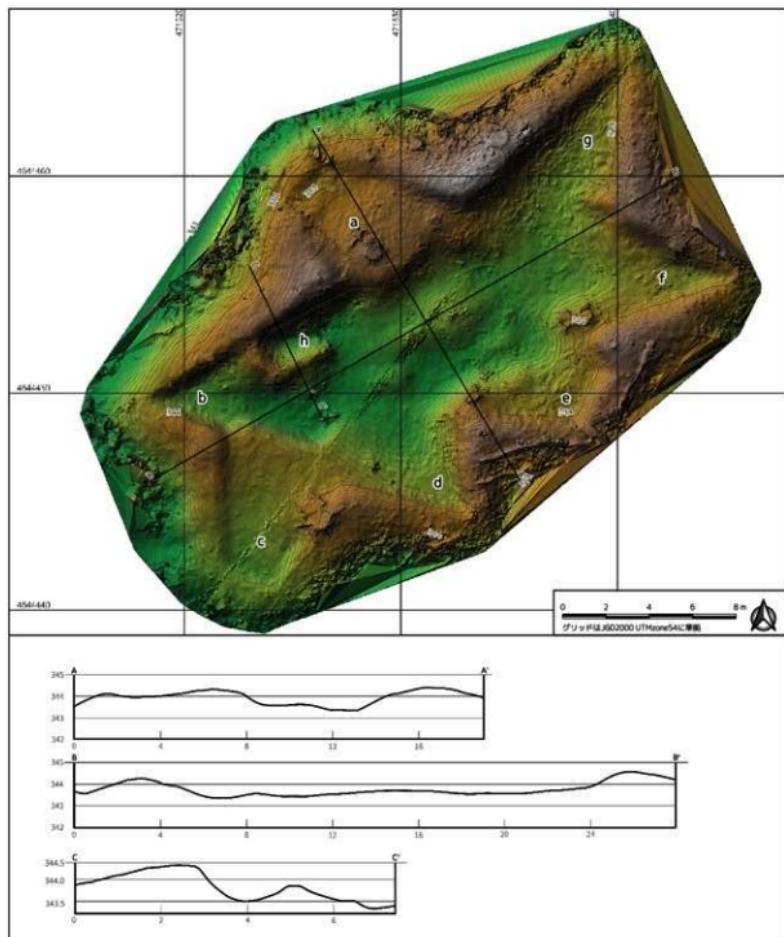


図8 七飯町峠下台場測量図

#### 4.4まとめ

峠下台場の平面形状は長川や八巻の作図によって知られているものと大きな違いはない。aとcは土塁内部の平坦面よりも高く構築されていることから、砲の設置を想定していた可能性もある。

## 参考文献

- 大山柏 1968『戊辰役戦史』下巻, 時事通信社  
須藤隆仙 1996『箱館戦争史料集』新人物往来社  
長川清悦 1993「旧古峠台場発見と開墾土壁 その歴史と意義について」『長川研究』第6号, pp. 1-8  
西山洋 2017『北海道道南の陣屋と台場』茨城城郭研究会  
福島町史編集室 1995『福島町史(第二巻)通説編』上巻, 福島町  
松前町史編集室 1992「北門史綱 卷之九」『松前藩と松前 松前町史研究紀要』第34号, pp. 54-93  
八巻孝夫 2017「箱館戦争の台場一道南・東部と函館周辺の野戦築城を中心に一」『中世城郭研究』第31号, 中世城郭研究, pp. 102-126

石井淳平(箱館戦争戦跡調査プロジェクト)

---

---

第44回南北海道考古学情報交換会発表資料集

2023年12月2日発行

発行 南北海道考古学情報交換会

---